

踏み台転生したらなん
かバグってた

泥人形

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

は？ もしかしてこれ、全部俺が転生したせいなのか？

小説家になろう様、カクヨム様とのマルチ投稿となっております。

目次

第一章	バグった世界で何をする	
	転生したら踏み台だった	1
	嫌われイベントはお約束	17
	ファンタジーにお嬢様はつきもの	
33	英雄／天才	48
	二人は転生者様	64
	宣戦布告、あるいは焔の女	82
	隠しキャラは鉄板	100
	空の戦い	116
133	秩序は崩れ始め、女は求婚をした。	
	第一の破滅、来たれり	152
	至りし者	170
	バグった世界で何をする	186
	ここまでの登場人物まとめ(挿絵あり)	203
	第二章 ダンジョン・ブレイキング	
	フライング・リスタート	217
	デビル・シークレット	234
	ニュー・ヒロイン	251
	ヒロインズ・デュエル	267
	クール・タイム	284
	オンリー・ヒーロー	299
	ティーエスツ・ダンジョン!	315

デイスタービング・サイン	334
セカンド・ルイン	352
ターニング・ポイント	368
ダンジョン・ブレイキング	396
ネクスト・ステージ	414
ここまでの登場人物まとめ2 (挿絵あり)	434
第三章 わーるどウォーゲーム	
みくプロフィット	443
ひかりファイアンセ	459
あてなプロフェッサー	474
みらきゆりおラバー	497
あいらセカンド	514

まおうオマーージュ	530
ひまりガール	545
ひろいんずアピール	560
りおんフレンド	580
はめつクレーム	595
りおんバディ	611
じゅじゅつビトレイアー	628
りつかヒロイン	650
なたりあストロングゲスト	669
れあコネクター	690
あいらペネトレイター	706
ひまりアウェイキング	725
かんらフラート	749

第一章 バグった世界で何をする

転生したら踏み台だった

ひのもりかんら
日之守甘楽という少年は、『蒼天に咲く徒花』にて登場する踏み台キャラである。

恵まれた家庭、恵まれた血筋、恵まれた才能、恵まれた容姿を持つて生まれ落ち、それゆえに高慢に育った彼は、魔法の学校で出会う主人公に、それはそれはボコボコのボコにされ、好きだった女の子には嫌われ、事あるごとに突っかかるようになるものの、その度に軽くあしらわれ、どのルートでも必ず殺される。

そういった、いわゆる主人公の引き立て役である運命を背負った少年であった。

そして、うっかり死んだらそんな踏み台に転生させられていた！

馬鹿!! どうしてこいつに転生させる!!?

いやっ、確かにファンタジー世界に行きたいな☆とかいう要望は出したけれど……

!

「チヨイスに悪意がありすぎるだろ！」

絶叫と共に姿見を確認したら、そこには黒髪のイケメン少年がいた。

どう見ても日之守甘楽くんである。見間違えすら許さないぜ、と言わんばかりのオツドアイ（右が青で左が赤）がキラキラと激しく自己主張していた。

クソツ、ふざけやがって。

誰がこんな、人生ハードモードにしろつつつたんだよ。

これまでの日之守甘楽くんの人生と思われる記憶を脳に流し込まれ、のたうち回りながら呪詛を吐く。

そうして薄れていく意識の中で、俺はこれからマジでどうすれば良いんだろう、という切実な悩みを抱えるのだった。

『蒼天に咲く徒花』とは、転生前の世界でそこそこ有名だったゲームである。

育成要素があるものの、基本としては恋愛シミュレーションゲームであり、豊富な分岐がありながら、濃密かつ長いシナリオと、それに付随したフルボイス。

当然ながら魅力的な複数のヒロインと、彼女らを描いたたくさんのおしゃれな衣装によって、神ゲーと評されたゲーム。

そんな『蒼天に咲く徒花』の世界観を一言で言うのなら、近未来ファンタジー……だろうか。

近未来らしく、発達した科学を持って振るわれる超常現象：魔法が身近にあり、ファンタジーらしく、魔獣と呼ばれる未知の怪物が蔓延るヤバい世界。

そんな世界で勇者の血を引く主人公は、アルティス魔法魔術学園に入学することで、様々な出会いや陰謀に巻き込まれていく——というのが、大雑把なストーリーだ。

なあんだ、全然普通に夢がある感じの世界観じゃん、と思う方もいるだろう。

その意見は真つ当なものであり、普通であれば俺も頷いているところであるのだが、こればかりは話が違った。

というのもこのゲーム、滅茶苦茶メインキャラが死ぬ。それはもう、マジで死ぬ。本当に死にまくる。祭で取れる金魚より容易く死ぬ。

ヒロインとの会話選択肢をミスれば、病んだヒロインに刺し殺され。

好感度を上限まで上げたヒロインを放置して、他のヒロインにかまけたりすると、監禁からの殺害にまで発展し。

育成を怠るとその辺の魔獣や、犯罪者に全滅させられ。

かといって、育成にばかりかまけて関係性を広げなければ、知らない内に他のメインキャラが死んでおり。

運が悪いと馬鹿クソレベルの高い魔獣や犯罪者とエンカウントしたりする。

そう、豊富な分岐とは言ったが、『蒼天に咲く徒花』とは、その多くがバッドエンドなゲームなのである。

近未来といつても、まあまあ殺伐としている世界観であり、そもそも学園自体が犯罪者に狙われている感じなので、ギリギリ仕方ないと言ったところではあるのだが……。

とにかくこれは、恋愛シミュレーションゲームの皮を被った死にゲーであるのだ。た。

死んで覚える恋と愛、がキャッチコピーである。なめとんのか。まず殺すなよ。

「ちよつと大人げなかったんじゃない？ キミが短気なのはもう今更だけど、あんな言いはなかったんじゃないのかなって、わたし思うな」

しかしながら、転生前はそこそこやり込んでいたゲームであったこともあり、条件が何もかも最悪ではあるものの、意外と上手く立ち回れたりするんじゃないだろうか、なんてことを考えていたのだけれども、こうして実際に入学してみると、それは本当に、樂觀視の極みみたいな緩い思考であったことを思い知らされる。

何せ俺は、この校舎の間取りすらちゃんと把握できていなかった。

生徒はどれほどいて、どんな先生がいるのかも、全ては把握できていなかったのである——いや、もちろん、メインキャラからサブキャラくらいまでは、確りと記憶してい

るのだが……。

流石にモブでしかなかったキャラについては、全くの無知であったことに気付き、ため息が出そうになる。

そんな俺と、向かい合って座る女性が

「もう、甘楽くん？　ちゃんと聞いてる？　おっ、起きてる〜？」

と、目の前で手を振りながら言った。

ヒロインNo.01、月ヶ瀬^{つきがせ}ひかり。

ロングな白髪に、藍色の瞳を輝かせる十六歳の美少女。

一年生である俺と比べ、三つ上——つまり、四年生の先輩である彼女は、甘^お楽^れの年上の幼馴染だ。

基本的に優しく温厚であり、誰とでも仲良くできる女性であるのだが、誰かを助ける為であれば迷うことなく己を犠牲に出来る、作品が作品ならお前が主人公だったろ、みたいな性格をしているメインヒロインの一人。

主に空戦を得意とする天才魔法使いであり、最序盤から中盤でも通用するステータスを保持しているというのに、序盤からパーティに入ってくれるという、良心の塊みたいなキャラクターだ。

取り敢えず彼女さえ入れておけば、最初の内は事故りづらいので、大変お世話になっ

たものである。

……まあ、お陰で親密度調整をミスリやすい為、ヤンデレ化するヒロイン筆頭みたいなところがあるのだが。

四年生でありながら、既に八年生（アルティス魔法魔術学園は八年制である）並みの実力を誇っており、その人柄ゆえか、多くの人に頼られる彼女はその反動なのか、強烈な甘えたがりである。

あるいは、もつとぎつくりと、依存癖があると云っても良いだろう。

一度甘えさせ、甘えられる関係にまで発展した後には、他のヒロインと関わろうものなら爆速で監禁ルートに入る。

『蒼天に咲く徒花』は基本的に、多くのキャラと多様な関係を結び、力を合わせてメインシナリオを進めていくゲームだ。

要するに、この月ヶ瀬ひかりという女は、滅茶苦茶強くて頼りになるが、上手く調整できずに頼り過ぎたら、自動的にバッドエンドに引きずり込んでくるヒロインなのであった。

デストラップの擬人化みたいな女である。

因みに甘^{おれ}樂^れが好きだった女の子が彼女であり、主人公に寝取られる（寝てから言えよという話だが）女の子も彼女であった。

「聞いてるし、起きてますよ……俺も、今更になって後悔してるところです」

「え!？」

「いや、何驚いてるんですか……」

「だ、だつて甘楽くんが、自分の非を認めるなんて思わなかったから……本当に甘楽くん？ 幽霊にでも乗り移られた？」

「失礼過ぎない？」

とはいえ、かなり鋭いところを突いてきてはいるのだが……。

実際、乗り移ったようなもんだしな——まあ、正確なことを言うと「転生したという事実を思い出した」な気がするので、やはり転生したと言うのが正解なのだろうが。

とにかく、あまり掘り下げられると、冷や冷やすることが多そうな話題だった。

いや、冷や冷やすると言うのなら、こんな話題に入る前からもうずっと冷や冷やしているのだが……なにせ、今日の放課後——というか、あと十分もしたら俺は、決闘をしなければならぬのだから。

誰と、と言われればもちろん、主人公と、である。

先日の甘^{おれ}楽——つまり、転生する前日の甘^{おれ}楽が一方的に主人公に突っかった結果、行われることになった決闘だ。

察しの良い方なら分かるかもしれないが、これは『蒼天に咲く徒花』のチュートリア

ルバトルだ。つまり、俺からしたところの負けイベント。

まあ、そうでなくとも、才能が盛り沢山な上に、努力家である主人公に勝てるわけがないのだが。

ゲーム的なことを言えば、俺はレベル3なのに、主人公はレベル15くらいなのである。

一撃で倒されるどころか、ワンチャン死ぬ可能性すらあった。事実、ゲーム内でも低い確率ではあるが、ここで死ぬパターンもあるのだし……。制作陣、甘^{おれ}樂のことが嫌いすぎである。

かといって、今更撤回を言い出せるような雰囲気では既に無く、冤罪なのに処刑が決まっちゃった囚人のような気持ちも味わっていた。

「露骨に顔色悪くなってる……後悔するくらいならやらなきゃ良いのに……」

「正論は時として人を傷つけるんですよ」

「今まで正論を聞いてこなかった報いだよ」

「クソツ、反論できない!」

俺は出来るけど甘^{おれ}樂が出来なかった。

難儀なものである、不本意とは言え、どっちも俺なのに……。

あくあ、何か上手いこと良い感じに、決闘がお流れになつたりしないかな、と現実逃

避を始めれば、月ヶ瀬先輩は面白そうに微笑んだ。

「でも、わたしが知らない内に、結構成長してたんだねえ、甘楽くん」
「成長？」

「うん、わたしの知ってる甘楽くんはその、本当に嫌な子だったから……。だから昨日、決闘叩きつけてた時なんて「うわ、何にも成長してない……」って落胆しちゃってたくらいなんだ」

「ううん、何も言い返せない……」

「正直、立華^{りっか}くんを応援しようって思ってたくらいだもん」

「当然と言えば当然ですが、直接言われたら普通に泣けてきましたね」

直球で辛辣なことを言う月ヶ瀬先輩だった。

実際ゲームでも、月ヶ瀬先輩は主人公^{りっか}を応援していた訳だしな……。

まあ、それこそが、甘楽^{おれ}が執着することになった理由の大部分でもあるのだが。

「けど、この感じなら、甘楽くんを応援してあげても良いかなあ」

「いや結構です。むしろ立華の応援、よろしくお願いします」

「あれー!? そういう感じなの!？」

「当たり前でしょうが……!」

むしろここで俺が応援されても困る。どうせ負けるのに、めっちゃ惨めになっちゃう

だろ、俺が。

それに、このイベントで初めて、月ヶ瀬先輩にフラグが立つのである。

立華は最終的に世界を救う戦いに身を投じたりするので、そこに月ヶ瀬先輩がいないと、まあまあ厳しいことになってしまうのだ。

仮に俺が死亡イベントを奇跡的に回避できたとしても、世界が滅んじやつたら意味ないんだよね。

だから頼む、マジで。

「せ、切実な眼だ……」

「本気ですからね」

「……ふふっ、変な甘楽くん」

それじゃあせめて、怪我だけはしないようにって、祈るくらいはしてあげるよ——と
言って、月ヶ瀬先輩が席を立つ。

時間である。

決闘の時が来たことを告げる鐘の音が、緩やかに耳朶を打ち、俺は心底からどでかい
ため息を吐いた。

あゝあ、まだ死にたくねえなあ……。

決闘会場は、底冷えるほどに静まり返っていた。

決闘をするという新入生の内、片方はあの空城立華くじょうりっかであるというのだ。

上級生から下級生まで、多くの野次馬が来ていたにもかかわらず——そこは、痛いほどの静寂に包まれていて。

たった一人の少年の声が、驚くほど響いていた。

「射撃魔法：重複展開」

『Magia di tiro：Distribuzione duplicata』

空を融かしたような、澄み渡る蒼の魔力光が視界を焼く。

「弾種：貫通×雷」

『Proiettile：Penetrazione×Tuono』

少年の声に呼応して、機械製の杖が魔法を呼び起こす。

「目標、捕捉——3, 2, 1」

『Sparrare!』

——そして、災害は巻き起こる。

青空には似つかわしくない人工の雷が、さながら銃弾のように降り注ぎ——もう一人の少年は、意識を保つことすら出来なかった。

格の差を——あるいは、次元の差を、否が応でも理解する。させられる。

一年生から八年生までの、その場にいた全ての生徒が、このただの新入生にすぎない、たった一人の少年が最強であるのだと。

「こんなものか？」

ただ一つ、投げかけられた問いに、誰もが恐れを為した。

こんなものは、まだ序の口に過ぎないのだということを、そのたった一言だけで物語っていたがゆえに。

「演技はいらない。立てよ、主人公」

かつて世界を救ったという、勇者の血を引く少年がいた——誰もが、勝つのは彼だと信じていた。思い込んでいた。

そんな共通認識が、一人の少年にひっくり返される。

「——こんなものじゃあ、ないはずだろう」

名を、日之守甘楽。

後に、伝説となった救世の英雄である。

——絶対死ぬと思っていたのに、勝ってしまった。

……は？ あれ？

勝ってしまったな……あん!?

「勝っちゃったんだけど!!!?」

負けイベント、ひっくり返しちやっただけど!!!

まずい、まずいまずいまずい!

これはまずい——何がまずいって、なんか俺が強すぎたという以前に、
空城立華くうじょうりつかが弱すぎた!

あれじゃあマジで、その辺の野良魔獣に、サクツと殺されちゃうぞ!!!?

おいおいおいおい。

どーすんだよ、これ……。

原作が崩壊する以前に、このままだと主人公、死ぬんだけど……。

「俺が、守護らなければならぬ、のか……う?」

もしかしたら、俺が転生したせいなのかもしれないし……。

突然出てきた謎の罪悪感に屈し、俺は小さく呟いた。

《left》ご神託チャット▼《/left》

《left》

◇名無しの神様 は？

◇名無しの神様 は？

◇名無しの神様 は？

◇名無しの神様 なになになになに

◇名無しの神様 日之守戦ってチュートリアルだよな!?

◇名無しの神様 チュートリアルでいきなりバグっちゃったあ……

☆転生主人公 聞いてた話と違うんだが???

◇名無しの神様 ごめんで

◇名無しの神様 俺達も困惑してんだよ今

◇名無しの神様 こんなバグ知らないんだけど

◇名無しの神様 いやつ、そりゃこんなRTAしてるんだから、立華が弱いのは当たり前なんだが……

◇名無しの神様 だからってここまで戦力差出てるのはありえねーだろ

◇名無しの神様 まあ実際レベル1でも倒せるはずだからな、日之守……

◇名無しの神様 あの日之守くん何者だよ

◇名無しの神様 明らかにレベル50は越えてんだよな、あれ……

◇名無しの神様 飛行魔法も使ってたよな。あれ、二年からじゃないと覚えれない魔法だろ

◇名無しの神様 なに……何なの？

◇名無しの神様 怖い怖い怖い

◇名無しの神様 ゲーム世界に転生させた上に、こんなカス極まったRTAさせてるだけでも倫理観壊れてるのにメインシナリオまで壊れるとかどうなってんだ

◇イカした神様 二人も転生させると世界って壊れるんだな。ちい覚えた

◇名無しの神様 あ!!?

◇名無しの神様 二人!?

◇名無しの神様 レギュ違反過ぎて草

◇名無しの神様 倫理はどうなってんだ倫理は

◇名無しの神様 まあ、言うてしよせんチュートリアルバトルやしな。月ヶ瀬フラグ折っとけば取り敢えず問題ないだろ。

◇名無しの神様 それは……そうなのですが……

◇名無しの神様 あの日之守くんがこの先どう動くかが問題すぎるんだよなあ

☆転生主人公 とりま関わらない方向でいくわ……

《left》

《left》

【やっちまった】蒼天に咲く徒花 ヒロイン全滅世界滅亡ルートRTA【生身の転生者】

《left》

嫌われイベントはお約束

「はつきり言つて、僕は君のことが嫌いだ！ 二度と僕の前に顔を出さないで欲しい!!」
朝食時、どう見ても主人公ですよみたいな顔をした金髪碧眼の少年が、如何にも三下ですよみたいな顔をした黒髪の少年に、台パンしながらクソでけえ声でそう言った。

とうか立華くんだった。もちろん、相手は俺である。

ザワザワと騒がしかった食堂が、しん……と静まり返り、俺達に注目の視線を送る。
端的に言つて、最悪の空気だった。

そんな中、俺は向けられている、滅茶苦茶剣呑な目つきに震えながら天を仰いだ。
なるほど、ね……。

どうやら俺は、主人公に嫌われてしまったらしい。

おいおいおい……。

どうすんだよ、これ……。

決闘が終わった、その翌日のことである。俺は食堂に足を運んでいた。

寮制であるアルティス魔法魔術学園は、基本的に一年から八年、全員が一緒の時間に食堂で朝食を摂る。

何なら先生方も一緒に食べるくらいであり、何というか……小学中学時代の給食時間のスケールを、物凄くデカくしてみたみたいな風景が練成されていた。

ゲームだとスチル一枚で済まされていたところであり、雰囲気くらいしか分かっていなかったのだが……。

(いや、マジで凄いなこれ。人多すぎて酔いそう)

学年ごとに部屋は別けられているのだが、それはそれとして大量の生徒でゴった返していた。

クソツ、先生だけ特等席で優雅に飯食いやがって。

最奥でモグモグと美味そうに食事している、新条先生（眼鏡が似合う、守護魔法担当の女性教諭。滅茶苦茶存在するサブヒロインの内の一人である）を睨みながらも、無理矢理席についたところ、向かいが立華くんだったのだ。

ぶっちゃけ、気まずいなんてレベルの話ではない。

ただでさえ昨日、一方的に喧嘩を売った挙句、ボッコボコにしまったのだ。

話しかけるにしても、もう数日は置くべきだろう——なんてことを考えていただけ

に、思わず苦い顔をしてしまう。

しかし、まあ、こうなってしまう以上は仕方あるまい。

仲直りするなら早い方が良いに決まってるしな。

明らかに拗れちやつたであろう、俺達の関係を修復し、何とか友達くらいにはなって、彼のレベリングをしなくては……と思案し始めたところ、

「何ですか、わざわざ僕の前に座って。当てつけですか？」

という、明らかな拒絶の意思を示してくる立華くんであった。

マジかよ。

思ってたより全然嫌われていたことが発覚してしまい、ちよつと泣きそうになってしまった。

ぶつちやけもう帰りたいのだが、流石にそうする訳にはいかない。

懸かっているからね、命とか、世界とか。

なるべく友好的にいかなければ、何もかも失われてしまう可能性があった。

取り敢えず、土下座するところから始めれば許されるかな———と思った、その時である。

『ガアアアアアアアアアアアアアアア!!』

些か剣呑な。けれども和やかな朝の時間が、絶叫によつて引き裂かれた。

無論、返答に困った俺が、苦し紛れに発したのではない。

であれば、何のものかと言えば。

俺達の直上に、前触れもなく現れた魔獣のものだった。

巨大な両翼をはためかせ、煌々とした火球を発せんとする、赤い鱗の竜——あ!!?
竜型の魔獣!!?

なにになになになに!? 何このイベント!?

知らん知らん! こんな序盤から即死できるようなイベントあつてたまるか馬鹿!

も、もしかしてこれも、俺が転生したせいだったりするの……!?

「あつ——」

「守護魔法：重複展開!」

『M a g i a d e i g u a r d i a n i : D i s t r i b u z i o n e d u p l i c a t a 』

手元の杖が、俺の呼びかけに応じて魔法を呼び起こす。

直後、三重に展開されたドーム状の守護魔法と火球が互いを打ち消し合った——相殺、か。

起動句のみで発動した魔法であつたことと、中級の竜型魔獣と初めてエンカウントするのが、三〜四年生時代であることを考えれば、やはり俺のレベルはかなり高いらしい

……と唸つてしまう。

この辺も含めて、近い内に検証しないと……なんて思いながら立華くんを抱き上げた——いや違う！ 別にそういう趣味があるという訳ではなく、立華くんが腰を抜かしていたからである。

しかし、それも仕方のないことだとと言えるだろう。

そもそも『蒼天に咲く徒花』は、レベルが自分より20以上の相手だと「〇〇は怯えて動けない！」とか出て来るタイプのゲームなのである。

ざっけんな何だこのクソみたいなシステムは……と、当時は文句たらたらであったが、こうして見ると魔獣、めっちゃ怖いな。

発してゐる魔力が威圧的過ぎて、物理的にも精神的にも動きを阻害して来る。

なので当然ながら、他の生徒もほとんどが、その場でガタガタ震えているのだが、まあ立華くんの優先度が一番高いからね、仕方ないね。

とはいえもちろん、その他の生徒やヒロインに死なれても困るのだが……確定している訳ではないが、それでも俺のせいで誰かが死んだら寝覚めが悪すぎである。

というか俺の性格上、絶対に落ち込んで引きずりまくるので、なるべく避けたい——なんて不安は、しかし、杞憂に過ぎなかったのだが。

何故かと言えば、

「日之守くん！ 殺れる!？」

新条先生が守護魔法で全生徒を覆い、なおかつ束縛魔法で竜型魔獣ドラグーンを捕えていたからである。ついでに俺の全身には、多種多様な補助魔法がかけられていた。

アルティス魔法魔術学園の先生は、誰しもが一流の魔法使いだ。

俺が出しやばらなくとも、彼女がいる時点で、全員の命の保証はされているも同然であつた。

……まあ、俺に攻撃を委ねていることから分かるように、彼女はとある理由で攻撃魔法が使えないのだが。

その辺は立華くんがどうにかする予定である。頑張ってくれよな。

「砲撃魔法：拡大展開」

『Magia del bombardamento: Distribuzione espansione』

……急に冷静になってきたんだけど、これってもしかして、主人公のレベリング用レアイイベントだったりするんじゃないか……？

中級の竜型魔獣ドラグーンなら、誰でも倒せそうなくらい補助魔法バフかけられてるし……。

何か、そう考えたらそうとしか思えなくなってきたな……。

「弾種：通常」

『Proiettile: Generalmente』

あーあ、最悪。もう最悪だよ。

立華くんレベリング計画、初手からガバリすぎだろ。

俺のレベルが上がるのは嬉しいが、それはそれとして、立華くんが弱いままなのは困るんだよな。マジで。

魔王を殺せるのは、選ばれし勇者だけなんだから。

「目標捕捉——3, 2, 1」

『Sparare!』

瞬間、俺の想像を遥かに超えたゴン太ビームが竜型魔獣ドラグーンを貫き、勢い余って壁にも大穴を空けてしまった。

まあ、そうなるだろうな……という感想を、甘楽おれの記憶が絞り出す。

どうにか俺への経験値が彼に流れ込んだりしないかな、と立華くんの手をキュツと握ってしまったところ、滅茶苦茶嫌そうな顔で跳ね除けられた。

いや、ごめんって……。

「えーつと、だ、大丈夫……?」

「……そりゃ、君に抱えられてたんだから、無事に決まってるでしょうよ」

だよね……。

相変わらず塩対応な立華くんだった。

とはいえ、これは千載一遇のチャンスである。なにせ、実質新条先生のお手柄とは言え、ギリギリ俺の功績と言えなくもない状況なのだから。

ここで恩を売っておけば、多少は仲良くなれるのでは？

そう思つて手を引こうとしたら、無視して立ち上がった立華くんがダアン！ と机を叩いて俺を見た。

「二応、感謝はする。君には助けられた」

でも、と。

短い金髪を揺らしながら、主人公は俺を睨んだ。

「はつきり言つて、僕は君のことが嫌いだ！ 二度と僕の前に顔を出さないで欲しい!!」

で、その後。

魔獣が侵入してきたことについては調査をするが、それはそれとして生徒共は授業受けてな！ と、雑に要約すればそんなことを言われた俺達は、素直に教室に戻っていた。

もちろん、俺と立華くんの関係は最悪なままである。

本当、どうしてこうなったかな……。

「そりやそうだよ。立華くんはあれでいて、プライド高いもん」

頭を抱えていた俺の真横に座り、ニコニコとしながら「やつほ」と小さく手を振ってきたのは、ヒロイン No. 02、葛籠織日鞠^{つづらおりひまり}。

ふわふわセミロングな金髪と、ふわふわとした言動がチャームポイントな、同級生の美少女である。

かなり人懐っこく見える性格で、誰とでも近い距離で接し、思わせぶりなことを言う彼女は、しかし主人公以外に興味を持たない、言わば勘違い男子メーカーだ。

しかも、その主人公でさえ中々親密度が上がらないほどであり、根本的に他人に強く惹かれないところがある女子である。

まあ、その反面、気に入った相手には執着や独占欲といった面を曝け出す、厄介なヒロインでもあるのだが。

そんな日鞠は、全ヒロイン中トップの才能を誇る、これまた天才少女である——他キャラと比べて、こいつだけ得られる経験値が二倍である、と言えばその凄まじさが分かるだろうか。

分かりやすく言ったところの、万能の天才と言うやつであり、凡そあらゆる物事に対し、少し触れただけで「あゝ、うん。もう分かっちゃった」が出来る女だった。

まあ、それがゆえに気分屋かつ飽き性という、実に扱いに困る性格をしているのだが。

パーティに編成してんのに、いざ出撃したらいないんだけど！　ということがまあまあ頻発するヒロインである。ふざけとんのか。

彼女の気まぐれで、何度全滅したか分かったものではないプレイヤーも大勢いるだろう。そんな感じの日鞠は、主人公の……要するに、立華くんの幼馴染だった。

主人公がやたらと努力家であるのも、日鞠の横に並ぶためであった——という裏設定が開示された時は、やっぱ正ヒロインは日鞠なんじゃん！　と絶叫したものである。

さて、そんな日鞠であるが、ここで目についた問題が、既に二つある。

まず一つ目。主人公のことを、立華くんと呼んでいること——幼馴染ゆえか、日鞠の親密度は最初から20（上限が100なので、既に20%もある！）存在しているため、呼び名は「リツくん」なのだ。

彼女は気に入った人にだけ、あだ名を付けるタイプの女の子だった。まあ、個別ルート入ったら名前呼び捨てになるのだが。

そして二つ目。立華くんの隣が空いているにも関わらず、俺の横に自らやってきたこと——上記の設定から分かる通り、主人公とその他を比べた場合、迷うことなく主人公を選ぶのが”葛籠織日鞠”という少女だ。

この二つから推測するに——全く、こんなこと考えたくも無いのだが——あの立華くん、日鞠と全然親密度を上げてない!!

ありえないんですけど！ どうなってるんだ馬鹿！

「別に、プライドをツンツンしたかった訳じゃないんだけどな……」

「あは、どの口でそんなこと言ってるの〜？」

「ぐう……」

思わずぐうの音が出るくらい、正論パンチしてくる日鞠であった。

昨日から立て続けに立華くんの見せ場を奪い、醜態を晒させている俺である。

バッドコミュニケーションションしか連発していないことは、百も承知であった。

「でもでも、かっこよくはあったよ〜？」

「そりやどうも……えっと、葛籠織、だったよな」

「ふふ、知ってくれてたんだ〜」

「まあ、クラスメイトだし——それで、何の用だ？」

言って、頬杖を突く。

親密度云々を抜きにしても、わざわざ端っこに座っていた俺の横に来る理由は、日鞠には無いはずである。

そもそも初対面だし。

甘楽おれも俺も、基本的に女子と関わるのが苦手な陰キャ気質である。

であれば、そう。

近づいてきたのには、必ず理由があるはずだった。

あは、と小さく日鞠が笑う。

「ん、本当はね、あの魔獣、きみが召喚したのかと思ったんだ」

「思ってたよりエグイ疑い掛けられてたな」

「でもその感じだと、多分違うな？　って思ったから、協力してもらおうかなって」

——あの魔獣を呼び込んだ、犯人の搜索、と。日鞠は笑ってそう言った。

まあ、そうなるよな……と思う。

好奇心旺盛な彼女が、突然虚空から現れたとしか言えないあの竜型魔獣ドラグーンに、興味を持たない訳がない。

しかも日鞠からすれば珍しいことに、終始見ていたのに訳が分からなかった、という事件であるのだ。

誰かが企んだことであるのは間違いない。けれども、誰が何故、どのようにして行ったのが、全くの謎なのだ。

一応、調べないとだよな……と、俺の頭を悩ませている要因の一つでもある。

「う、正確に言うなら、協力させて欲しい」になるのかな？」

「……鋭いな」

「え、誰だつて分かると思うな。それより、ダメ？」

これでもかかってくらい、可愛く上目遣いしてくる日鞠だった。うっかり即答でOKしそうになったところを、力づくで押し込み、数秒思案する。

正直なところ、断りたい——というのも、出来れば彼女には、立華くんと親密度を上げて欲しいのだ。

とはいえここで断ったとしても、この天才少女のことである。

ゴリゴリに単独捜査とかするだろう。その結果、見知らぬところで殺されてたら嫌だしな……。

うーん……。

まあ、良いか……。

日鞠の親密度、序盤から必須って訳じゃあ無いし……。

必要なのは後半からである。何なら三年くらい放置していても大丈夫なヒロインだ、彼女は。

立華くんのが嫌いって訳でもなさそうだしな。

それに、普通に助かるし……。

俺は俺で単独で動いたら、あっさりと死ぬ可能性が全然あるのだった。

このゲーム、最強格の校長がサクツと暗殺されたりするからね。

学校モノに相応しくない殺伐さである。

「ん、まあ、それじゃあ、よろしく頼む」

「やった〜！ よろしくね、かんかん〜！」

「は？ かんかんってなに？ てか手握るのやめてね、勘違いしちゃうから」

「あは〜、かんかんってば、童貞さん過ぎ〜」

「言葉の切れ味急に上げるのやめない？ 止まっちゃうからね、心臓が」

《left》ご神託チャット▼《left》

《left》

☆転生主人公

は！！！！？
惚れちゃうんだが！！？

◇名無しの神様
ワロタ

◇名無しの神様
何ドキドキしてんねんお前

◇名無しの神様
嫌いです（ドンツ！）とか言ってたやつとは思えねえな

◇名無しの神様 これだからTS主人公様はよ

◇名無しの神様 男のツンデレとか需要ないんで……

◇名無しの神様 立華×甘楽、か。

◇名無しの神様 アツくなってきたな

◇名無しの神様 まあ、元が女だし実質ノマカプよ

◇イカした神様 お前TSものを精神的BLとか言うタイプのおタクか？ 殺すぞ

◇名無しの神様 なになになになに

◇名無しの神様 沸騰するのが早すぎるんよ

◇名無しの神様 マジで際どいラインの発言やめろ

◇名無しの神様 ごめんって

☆転生主人公 僕の配信チャット欄でレスバすんのやめろ！ てか、別にまだ惚れた訳じゃ無いし。ちよつとかっこいいと思っただくらいだし？

◇名無しの神様 お前はまずRTAしててことを思い出せ

◇名無しの神様 人生勝ち組なサードライフの為だろ、気合入れていけ

◇名無しの神様 金と権力と才能マシマシな人生をゲットするんだろ。がんばれ

◇名無しの神様 てかさっきのドラグーン、マジで何？ アレもバグ？

◇名無しの神様 いや、あれは主人公のレベルが5以下かつ、ヒロインの親密度が5

以下の場合発生する、いわゆるお助けイベント

◇名無しの神様 はえく、そんなのあるんや

◇名無しの神様 隠しイベントみたいなもんやね

◇名無しの神様 まあ、日之守とかいうやつに奪われたんですけどね……。

◇名無しの神様 ここまで完璧だったのに、日之守とかいうやつのでドンドン壊

れてくんだが？

◇名無しの神様 マジで出禁にしろあの踏み台

◇名無しの神様 いやでも、ぶつちやけカツコよかったよな、日之守……。

◇名無しの神様 うん……

◇名無しの神様 それな……

◇名無しの神様 これ本当に世界滅亡まで持っていけるんですかね……

《left》

《left》

【まさかの】蒼天に咲く徒花 ヒロイン全滅世界滅亡ルートRTA 【バグった】

《left》

ファンタジーにお嬢様はつきもの

前回までのあらすじ！

主人公の幼馴染ヒロインと行動することになってしまったぞ！

当面の俺の目的は、死なないことを主軸に誰にも死んでもらわず、主人公とヒロイン達に世界を救ってもらうことだぞ！

因みにうっかり主人公（引くほど弱い）の見せ場を奪ってしまったので、主人公にはバチクソに嫌われてしまってるぞ！

馬鹿かよ。

何でやりたいことと、やってることが矛盾してんだ。

俺はこんなに頑張っているというのに……。

「まあ、それが全部空振ってるからなんだけど……」

寮の個室で一人、朝陽を浴びながら今日の予定を組み立てる。今日は入学して初めての休日なのだ——と言っても、やることなんて考えるまでもなく、決まっているようなものであるのだが。

もちろん、竜型魔獣^{ドラグーン}侵入事件の捜査——ではない。

つーかぶつちやけ、そこはもう大体分かっている。というのも、『蒼天に咲く徒花』は一年で一章進む形式であり、章ごとにボスが用意されているのだ。

一〜四年。つまり、一〜四章のメイン敵は魔法を用いた犯罪者集団、通称・墮ち人と、そいつらの王である『黒帝^{シクテイ}』。

五〜八年。つまり、五〜八章のメイン敵は魔獣どもと、それを率いる『魔王』。

そして九〜十章で、その二つを纏めて相手することになっている。

そう考えればまあ、一章ボスの仕業だろうなあ、という結論に至るのは、道理であるというものであった。

黒帝は、つい二十年ほど前に世界を大きく揺るがした、史上最悪の魔法使いである。

多くの魔法使いを血祭りにあげたという『百鬼夜行』を主導し、その末に、我が校の校長によってぶちのめされた大魔女。

しかしながら、殺すことも、捕らえることも出来ず、今も彼女はどこかに潜伏しているという——のだが、実を言うところ、学園^{学園}の地下にいる。

かつて、死ぬ直前まで追い詰められた黒帝は、肉体を捨て魂だけの存在となることで、校長への憎しみを募らせつつも、自分にとって最上の肉体^{肉体}を吟味しているのだった。

で、その肉体に選ばれ一章ボスとなるのが、俺達の三つ上の先輩であり、黒帝と血の

繋がりにある少女なのである。

なので多分、今からその子をぶつ叩きに行けば、目下の障害は排除出来そうなものであるのだが、しかしイレギュラー塗れな現状を見る限り、安易にそんな判断は下せなかった。

そもそも、普通にボコされる可能性もあるし……。

それにほら、また俺の知らないイベントが起こっても嫌だし……。

仮に上手くいったとしても、二章が早回しで始まりでもしたら最悪である。

俺がどうこう、というより多分、立華くん含めて大勢の生徒が確定で死ぬ。

二章は大分ハードだからな……。

ちなみに俺の実力であるのだが、ここ数日検証したところ、”良く分からない”という結論に達してしまっていた。

あるいは測定不能、と言い換えても良いかもしれない。

いや、何か……魔力測定機とか使っても、エラーが吐き出されるんだよな。

これが俺の魔力が凄すぎて！とかだったら夢があるのだが、触れた瞬間エラーになるので何かもう、世界に否定された気分を味わってしまった。

とはいえ、体感と記憶を擦り合わせた感じ、相当なレベルであるのは確かである。

これで俺の死因が、大体的場合において超高レベルの魔獣の群れか、魔王であること

を除けば一安心だったんだけどな。

現実はその上手くないようだった。

「やつほー、甘楽くん。相変わらず死人みたいな目してるねえ」

「開口一番から悪口!？」

「朝陽が似合わない人って、わたし、甘楽くんだけだと思う」

「俺の罵倒大会を急に始めるのはやめましようね。俺が可哀想なだけなので」

ちよつと見惚れちゃうくらい可憐な笑顔であるにも関わらず、ビツクリするくらい失礼なことを言い始めたのは、当然ながら月ヶ瀬先輩だった。

アルティス魔法魔術学園の寮は、学年と男女で分かれているのだが、普通に行き来することが出来るし、男子が女子寮に行くのは禁止されている反面、その逆は許されているのだった。

まあ、だからと言って、月ヶ瀬先輩がここにいる理由には全くなっていないんだけど。は？ 何か流れて受け容れちゃったけど、本当に何でここにいるんだよ、この人。

「んー、暇だったから……とか？」

「フットワークが軽すぎるんだよな。しかも疑問形だし」

マジで何しに来たんだろう。

明らかにぐらかされた感じであるのだが、仕方ないのでお茶でも淹れることにし

た。

ふう、と一息ついてから、まあこれはこれで、悪くない展開ではあるな、と思う。

一章ボスと月ヶ瀬先輩は同級生かつ、親友だ。

情報を得るには、これ以上ないキャラクターである。

本来であれば、立華くんはこの辺の探求をして欲しいのだが、色々そんな場合じゃないんだよな……。

彼にはレベリングと親密度上げに専念してもらい、情報は全て俺が集める——というのが理想的な流れだろう。

ギヤルゲーによくいる、やたらとヒロインのことを知ってる親友キャラの如く、必要な情報が必要な情報をペラペラと明かし、スムーズに動いてもらうという訳だ。

問題があるとすれば、俺がハチャメチャに嫌われているということであるのだが……。

まあ、何とかなるんじゃないかな。その時の俺が何とかしてくれると思う。

「甘楽くんのそういう、未来の自分に対する根拠のない信頼が大きいところ、わたし嫌いじゃないよ」

「奇遇ですね、俺も自分のこういうところ、大好きなんですよ」

「甘楽くんは基本的に、自分のこと全部大好きじゃん……」

「そりゃ、誰だって自分が一番好きに決まってるでしょう」

「そんなんだから友達の一人も出来ないんだよ?」

「余計なお世話すぎる……」

大体、自分のことだけでも手いっぱいなのに、立華くんのことまで考えなければならぬ状態に陥っているのだ。

友達作りとかしている場合かよ——いや、仮に何もなくても、俺に友達が作れるとは思えないのだが……。

前の世界で友達の一人もいなかった俺であることに加え、今は踏み台な甘樂おれである。

は? 葛籠織? あれはただの協力者だから。

「さて、そんな甘樂くんに、わたしから良いお知らせです」

「ええ……」

「露骨に嫌な顔をした!」

もうちよっと期待とかしてよく、としょんぼりする月ヶ瀬先輩だった。

立華くんのヒロインだから、あんまりそういう目で見るのは良くないよな……という俺の自衛フィルターを貫通して来る可愛さである。

ふとした拍子に惚れそうになっちゃうからやめて欲しい。

ただでさえ、月ヶ瀬ひかりという女性のことは、キャラクターとして見たら滅茶苦茶

好きなのだ。

依存癖のあるお姉さんとか嫌いになれって方が無理だろ。

「それで、良いニユースってのは？」

「あ、気になりはするんだ」

「ここまでチラつかされて、気にするなって方が無理でしょうが……！」

お嬢様である月ヶ瀬先輩を相手に、台パンするのは品が無さすぎると思ったので、代わりに滅茶苦茶拳を握りしめることにした。

そんな俺を見ながら、月ヶ瀬先輩はニコニコと笑って、「そろそろだよ」と意味深に言う。

「は？ 何が？」

「ふふ、実はね——今日は、わたしの親友を紹介しようと思って来たんだ」
「は？」

待て！ と思うより先に、控えめなノックが響き、扉が開かれる。

そこから姿を現したのは、如何にもお嬢様みたいな風格を放つ、紅髪の女性——レア・ヴァナルガンド・リスタリアであった。

お察しの通り、レア・ヴァナルガンド・リスタリアは、黒帝と同じ血筋にある、一章におけるボスである。

黒帝を輩出したせいで、没落に没落を重ねまくったりリスタリア家の長女であり、学園内でもまあまあ疎まれている元お嬢様。

とはいえ、元より優秀な家柄でもあり、黒帝の肉体に選ばれただけあって、その身に秘める才能はメインヒロイン級である。

更に言うならば、先天的に《炎熱》の魔術属性を保有する魔術師でもある——まあ、要するに、めっちゃくちゃ炎の扱いが上手い人、と思っておけば問題ない。

そんな彼女であるが、俺達が入学した時点ではまだ、黒帝に乗っ取られてはいない——というのもこの女、死ぬほどメンタルが強靱であり、入学時からかけられている黒帝からの干渉を、意識的か無意識的にか、跳ね除け続けているのである。

一言でまとめてしまうと、どうしてもその凄さが伝わらないのだが、これはもうマジで凄い。

何せ黒帝の得意魔術は精神汚染系であり、全盛期は千を超える人間を操ったほどののである。

魂だけとなり、弱体化してはいるものの、本来であれば子供一人くらいチョロいもんではなく、なはずであるのに……。

故にこそ、作中最強の精神を持っているのは彼女であると、フアンの間では共通の認識を持たれていた。

まあ、結局屈してしまつたからこそ、一章が成り立つのだが、そこはもう仕方が無いと言えるだろう——と、ここまで言えば分かるだろうが、レア・ヴァナルガンド・リスタリアという女性は、本当の本当にただの被害者である。

彼女個人に、一切の落ち度はない。けれど、一度黒帝に憑依されてしまえば、もう殺すしか手段は無いのであつた。

彼女の魂は黒帝によって押し込められてしまつており、完全に黒帝に乗っ取られていたのだから、仕方あるまい。

開発陣の癖なのか知らないが、完全憑依されてもその直後であれば、まだ本人の意識が残つており、対話できるあたり趣味が最悪なんだよな……。

なにせ、どの選択肢を選び、どれだけ良い流れになつたとしても、最終的には無残にも黒帝に乗っ取られるのである。

俺と同じ、絶死の運命にあるキャラクター、という訳だ。

最後は20ターンほど耐久すると助けに来てくれる校長が、1ターンで彼女を消し飛ばして終了である。

これまたスチルが用意されているので、後味も最悪なのだ。

両腕を消し飛ばされ、胸に大きく穴を空けた彼女は、死ぬ直前に黒帝が逃げたために意識を取り戻し、光の無い瞳で薄っすらと微笑むのである。

ごめんなさい、ありがとう——とでも言うように。

初見で進めていると、あまりの絡みの多さに「ああ、これ最終的にヒロイン枠になるやつだな、分かる分かる」と思わされるだけに、トラウマになる人が多いシーンである。そんな彼女が、

「日之守甘楽様……と仰いましたわね？ お初にお目にかかります、わたくしはレア・ヴァナルガンド・リスタリア。以後、よろしくお願いいたしますわ〜！」

あ、是非とも「レア」とお呼びくださいまし？ と。

鼓膜をぶち破る気かお前みたいな声量で、元気良く高らかに言うものだから、

「うっ、うう……！」

「ちよっ、甘楽くん!？」

「あ、あらあらあらあら!? どうなさいましたの!? わ、わたくし、何かしてしまいましたかしら〜!？」

俺は思わず泣いてしまった。

レア・ヴァナルガンド・リスタリア。

ふわふわとした美しい紅の長髪に、翡翠色の瞳を持つ少女は。

俺の、前世での推しである。

「いやはや、お騒がせしてしまいました。腹とか切って詫びた方が良いですかね？」

「詫び方が物騒だ!？」

「考え方が数百年前の人間過ぎますわよ!？」

杖を取り出したところ、ガチだと思われたのか滅茶苦茶抑え込まれる俺であった。

……ダメだな。

あまりにも意味不明かつ、夢みたいな空間を一瞬で形成されてしまい、感情が迷子になっちゃった。

冷静にいこう。冷静に。

俺はお茶を一口すすり、静かに深呼吸した。

「それで、今日は何の用でここに？」

「うわっ、急に冷静になった」

「これはこれで不気味ですわね……」

揃って変なものを見る目を向けて来る二人だった。

普通に腹立つなこれ……と拳を握りつつ、妙だなとも思う。

こんな序盤から、レアが関わって来るものなのか……？

無論、俺の知らないイベントが発生したばかりのことであるし、そもそも俺は立華くんではないのだから、そういうこともあるのだろうが……。

だからと言って、わざわざ甘樂おれのところに来るか？

せめてこういうのは、立華くんにしるよ——とか考えていたら、レア先輩がお嬢様らしくペコリとお辞儀した。

「改めて、突然お邪魔してしまい、申し訳ありませんわ。ですが、わたくし、日之守様とは一度話したいと思っております」

「はあ……それは光栄ですけど、何で俺？」

「そうですね、そこには海より深く山より高い理由があるのですが——」

「えつとね、レアちゃん、甘樂くんとお友達になりたいんだって」

「ちよつと、ひかり!!」

「ほら、レアちゃんも友達、わたししかいないし。ぼっち同士惹かれ合うところあつ——」

「ちよつとお黙りくださいましね!!」

「シャーツ！ といった勢いで月ヶ瀬先輩に飛び掛かるレア先輩だった。

満面の笑みを浮かべている月ヶ瀬先輩に対し、レア先輩はかなりガチな顔つきであ

る。

日頃からこういう感じなんだろうな、と微笑ましく見ていたら、レア先輩が滅茶苦茶息を切らして俺を見る。

「フーツ、フーツ……フシャーッ……」

「うおつ、息の切らし方が獣的すぎる」

「喧しいですわよ！ ついでに今の一連の流れは忘れてくださいまし！」

「無理ですね」

無理だった。

何なら永久保存ものであり、何故録画しておかなかったのか、今になって悔いてるほどである。

美少女と美少女のじゃれ合いとか嫌いなやついないだろ。

コホン、と一息置いて、再びレア先輩は対面に座った。

「……」

「……？」

「……」

「……あれ!? 仕切り直す感じじゃなかったんですか!?!」

「うっさいですわね！ 何か遅れて羞恥が出てきちゃったんですの！ それに、こう

……何か話の切り出し方が分からなかったんですね！ お察しくださいませ！」

頬を真っ赤にして叫ぶレア先輩は滅茶苦茶可愛かったが、それはそれとして、理由がかなり陰キャだった。

思わずシンパシーを感じてしまい、曖昧な笑みを浮かべてしまったほどである。

改めて「ほら、本題いきなよ」みたいな空気になると緊張しちゃうよね。分かる分かる。

「同情の目を向けるのはおやめくださいませ……はあ、どうしてこうなったのかしら……」

「コミュニケーションの問題……でしょうね」

「あらあら、あんまり虐めるようであれば、わたくし、この場でギャン泣きして大暴れすることも辞さないですわよ？」

「プライドが無さすぎるだろ……」

かなりえげつない脅迫をしてくるレア先輩だった。

流石にそんなことされてしまったら、色々と收拾がつかなくなってしまうので、取り敢えず本題を促すことにした。

「えっ……と、そうですね。ひかりの言った通り、お友達になりたいと思ったのは事実ですわ」

「ははあ、それは俺も嬉しいですが」

ぼんやりとした返答を返せば、安心したように微笑むレア先輩だった。

ちよくちよく可愛くて困っちゃうな、なんて思えば「しかし」と、彼女は言う。

「その前に、言っておかなければならないことがありますの——いえ、いいえ。謝らなければならぬこと、ですわね」

「謝る……?」

「ええ、はい……というのも、先日、ドラゴン竜型魔獣侵入事件がありましたでしょう?」

静かに、美しい所作で彼女は頭を下げる。

月ヶ瀬先輩が、難しそうな顔で俺達を見ていた。

「ごめんなさい。あれ、やったのわたくしなんですの。そこをまず前提に、お話をさせていただき——その上で、わたくしを助けていただきたいのです」

震える声で、レア先輩はそう言った。

……。

……………!!?

あ?! 自白すんの!? 今、この段階で!!?

つーか助けるって、なに……!!?

本格的にメインシナリオがぶっ壊れている音を聞きながら、俺は心の中で絶叫した。

英雄／天才

「ふう〜ん、それでかんかんは、日鞠に相談の一つもなしに、承諾しちやっただ〜？」

「この浮気者め〜！」

「ワードチョイスが最悪過ぎるだろ」

最悪って言うか、そもそも浮気要素が存在していなかった。

普通に周りから「うわ、サイテー……」みたいな目を向けられてしまうので、切実にやめて欲しいところである。

校内でないとは言え、ここ、普通に近場の喫茶店だからさ……。

変に噂が広まりでもしたら、今後の学園生活、最悪を通り越して終わりである。

カラカラと、手元のジュースをストローでかき回しながら、葛籠織が頬を膨らませて俺を見た。

「信じてたのに〜、こんなに早く裏切るなんて思わなかったな〜」

「そういうこと言うのやめない？ 何か悪いことした気分になつてきちやうだろ」

「これからは、浮気かんかんって呼ぶね〜」

「誤解しか生まない蔑称やめろ！ 大体、こういう場を設けてる時点で、俺の誠実さが現れてるようなものだろ……」

「むっ……」

凶星を突かれたように、葛籠織が俺をジツと見る。

こどもも真つ直ぐ見つめられると、素直に可愛いという感想しか出て来なくなってしまうので、やめて欲しかった。

かといって、ここで目を逸らすのもな……。

本当にやましいことをした気持ちになってしまっているので、出来ればあつちが先に折れて欲しいな——と祈っていたら、葛籠織は心底不満げに息を吐いた。

「一旦、最後まで話は聞いてあげる……処分はそれから、ね」

「処分って何？ 日常生活話に出てきて許されるワードじゃないだろ」

「んも、良いから早く〜」

ペシペシと、脛に蹴りを入れて来る葛籠織だった。

ギリギリ痛いくらいの力で蹴って来る辺り、才能が無駄遣いされていた。いやちよつとマジで痛いからやめようね。

机の下で戦争を起こしながら、つい数時間前のことを思い起こす。

あの赤髪のご令嬢が、縋るような瞳で見てきた時のことを。

「まず、端的に言わせてもらいますわ——わたくし、身体を狙われていますの」
「すげえ自意識の高い台詞が飛び出てきたな」

「んあつ、ち、違います！ 別にそういう、肉欲的なアレではなく……！」

「魔法的な、あるいは魔術的な意味合いで、だよ。甘楽くん」

「でしようね。流石に分かります」

苦笑いしながら補足してきた月ヶ瀬先輩に、軽く返答しながら眉を顰める。

月ヶ瀬先輩、レア先輩の事情を知っているのか……。

原作では知らなかったはずなんだけど……やっぱり、マジでメインシナリオが壊れてきてるっぽいな。

だからと言って、何もかもが変わるといふこともないだろうが、あまり……そう、いわゆる原作知識を信用しすぎるのは良くないな、と思う。

まあ、そんなことを言ってしまうえば、ゲームの世界であるという認識をしているのが、そもその間違いなのかもしれないのだが。

ここはゲームだけれど、痛いくらい現実だ。

「誰に……というのは分からないんですよ、もちろん」

「いえ、それが分かるんですわよね。黒帝……ってご存知かしら？」

「は？ いや、えっ、ちょ——タイム！」

想像を遥かに超えた返答が飛んできてしまい、思わず手を前に出してしまった。

いや、でもこれは——はあ!?

何でそこがもう分かってんだよ！ と絶叫したいところを力づくでねじ伏せて、口元に手をやった。

先程、知識を信用しすぎるのは良くないと、そう思ったばかりではあるのだが……これはちよつと、話が違う。

黒帝の精神汚染は超一級だ。余程のことが無い限り、下手人が自分であることなんて対象に知られることは無い。

それも、才能があるとはいえ、現時点では学生レベルでしかないレア先輩が対象なのである。

有り得ないだろ、普通に考えて……。

俺が思っていたより全然——本当に、想定を遥かに超えているレベルで話が変わってきていると、そう考えた方が良いのかもしれない。

慎重に、なるべきだ。慎重すぎるくらいには。

「……もし、本当にそうなんだとしたら、俺達でどうこうできるレベルじゃないですか？ それこそ、校長にでも伝えた方が確実だと思いますが」

「うん、そうだね。本当にその通りだと、わたしも思う——でも、そうできない理由からい、甘楽くんなら分かってるんじゃない？」

試すような目を向けて来る月ヶ瀬先輩に、思わず表情を歪ませてしまう——というのも、アルテイス魔法魔術学園は、世界で一番安全な場所と言っても差し支えが無いからである。

何せあの、悪名高い黒帝を打ち倒した校長がいる上に、その校長が直々に、守護魔法を学園とその周辺にかけているのだ。

物理的にも、精神的にも、一切の邪悪なるもの遮断する、究極の庇護下にあるという訳だ——まあ、当然ながらその内側に、うじゃうじゃと敵が入り込んできているので、あまり意味を為していない設定なのだけれども……。

魔王はまだしも、黒帝とか滅茶苦茶身近なところにいるわけだしな。

とはいえ、それが全く機能していないという訳ではなく、むしろ長い年月をかけて、じっくりゆっくり少しずつ、守護魔法内に侵入してきたやつらのせいで、俺達の学園生活は滅茶苦茶にされるとい話ではある。

ゲーム的に見ると、落ち度が無い訳ではないが、言及するほどでもないのが、このア

ルティス魔法魔術学園の校長先生なのだ。

だから、まあ、何だ。要するに、「ここは絶対に安全な場所である」というのが、全員の共通認識なのである。

あと普通に考えて、まさか学園の地下に黒帝が潜んでいるとか、分かるはずがない——魂になっているとかサラツと言っているが、そんなもん前代未聞の特異的な技術に決まっているのだ。

校長どころか、仲の良い教員（そんなものがいればだが）に伝えたとしても、笑い飛ばされて終了だろう。

そして、何よりも問題なのが——

「……っ」

——それを訴えているのが、レア・ヴァナルガンド・リスタリアである、ということだ。

黒帝という、魔法使いの汚点そのものではないものの、しかし密接な関係にある人間。更に言うならば、黒帝を生み出してしまった代償を、今なお払い続けている家の娘——故に当然、彼女の発言に信頼性はあまり無い。

いや、いや。

リスタリアという、かつての名家に信頼がもう、存在しない。

校長への信頼と、黒帝を生み出した家の女への信頼……といった風に比べてみれば、誰だって前者を取るといふ話だ。

レアと黒帝は全く別の人間なだけだな。

そういう風に、軽く割り切れるほど『百鬼夜行』は、生温い事件ではなかった——當時を知っている魔法使いは、大体トラウマになっていると言えば、その凄惨さが少しは伝わるだろうか。

黒帝と戦う時、教員全員にデバフがかかったくらいには、ガチのトラウマになっているのである。

だから、レア・ヴァナルガンド・リスタリアは、誰にも頼ることができない。

だから、レア・ヴァナルガンド・リスタリアは、四年という年月の果てに精神が弱りきり、そこを付けこまれた。

いや、まあ、何か今、月ヶ瀬先輩に絶賛頼ってただけど……。

しかも相手が黒帝だつてこと、分かっただけど……。

前者は「まあそういうこともあるか」と納得できなくはないのだが、後者が本当に意味不明だった。

マジで何？

「ああ、そこはですわね、日之守様のお陰なんですわよ？」

「なんて?」

「だから、日之守様と空城様の戦いのお陰で、わたくしは相手が黒帝であるということが、分かったと言っているのです」

「は???」

ビツクリするくらい意味が分からなかった。

何がどうなったらそこが繋がるんだよ。

風が吹いたら桶屋が儲かるみたいな話?

「んー、そこはちよつと、説明が難しいんだけど……」

「……まあ、端的に言わせていただきますと、わたくし、今年に入ってから数回乗っ取られているんですわ」

「はあ」

でしようね、と思う。

そうでないと、竜型魔獣を召喚するなんてできっこない。

「無論、数秒程度ではございますが——日之守様は、憑依の際に極稀に発生する、同調現象というものをご存知でしょうか?」

「同調……?」

何か設定集で見た覚えがあるな、と真っ先に思った。

それからじわじわと、甘楽^{おれ}の記憶と擦り合わされるように、一文が引き出されていく。同調現象——即ちそれは、憑依先と憑依元が、全く同じかつ、強い感情を共有してしまつた場合にのみ起こる、自我の共有現象。

魂が、あるいは存在そのものが重なり、互いを共有し合つてしまふんだとか。

滅多に無いし、特に本筋には関わつて来ない、プチ設定みたいなものであつたはずだが……。

「えつ、いや……ええ？　嘘でしょう？」

「これがまた、屈辱的なのですが、本当でございまして……いや、でもですわね、これがそが日之守様のせいなんですわよ？」

「と、言いますと……？」

「甘楽くんの決闘、わたしとレアちゃんの二人で見てたんだ。それで、その時にちょうど、レアちゃんに黒帝からの干渉があつたの。つまり——」

「——つまり、日之守様に心底ビビつたんですわ。わたくしと、黒帝が」

だから、相手が黒帝であると分かつたのだと、レア先輩は真つ直ぐ俺を見ながらそう言つた。

いや、というか、え？

総括すると、全部俺のせいじゃん。

……俺のせいじゃん？

本当に俺のせいなんじゃん!!?

な〜にが慎重にいこうだよ、もう手遅れなんじゃねえか……！

もう引き籠った方が上手く事が運ぶんじゃねえかな……と言う思考を振り払いながら、情報を整理する。

やってしまったことを後悔するのは後で良い——つまり、今考えるべきなのは、まず協力すべきか否か。

これはどう考えても協力すべきだろう。だってこの二人、俺がいなくても勝手に動き回るだろうし……。

何せ、レア先輩は同調現象を起こしているのだ。少なくとも、かつてないほどに弱っていることくらいは察しただろう。

まあ、だからと言って、何ができるわけもなく、死ぬのがオチなのだろうが……。

というのも、魂からこつちに干渉することは出来ても、こつちから魂に干渉することはできないのである——これは俺達にその技術が無いという意味ではなく、そも『蒼天に咲く徒花』にはそういった技術が存在しない、という意味合いだ。

ゲームでも、最終的には逃げ出す暇も与えず、肉体ごと消し飛ばして終了だったくらいである。

それほどまでに、打つ手がない。

だから、「どうしようかな」というか「どうしようもなくはない？」というのが、素直な感想である。

強いて言うのなら、やはり一から十まで校長先生に話すのが、一番正解な気はするのだが、同調現象の下りを信用してもらえとは思えない。

証拠も何も無いから、本当に「この人が言うのなら……」くらいの信頼が必要になつてしまう。

レア先輩には無理だ。

何ならレア先輩の学内信頼度、ゲームだと0固定なまでであるからね。入学したての主人公でも100あるのに……。

次の授業は移動教室だよって言っても信じてもらえないレベルである。

そりゃ心も弱るよ。

あと、校長先生って基本的に学園にいないんだよな……。

確定でいるのは年末年始とか、各寮對抗戦（各寮の代表チームが決闘して優勝寮を決める催し。死ぬリスクが無いのにレベリング出来る年一のイベントだ）くらいなものだ。

……………あつ。

あれ？ これもしかしたら、どうにかなるんじゃないか？

「……大体わかりました。でも、俺達だけで黒帝を探したり、あわよくば撃退する——つてのは無理だと思います。ていうか、俺が嫌だ……死にたくない……」

「すつごい弱気なセリフ出てきた……」

「いえ、そうなるのも当然ですわ——本当に、無茶なお願いをしている自覚はありますもの。断られるどころか、信用すらされれないと思っていたくらいですわ」

ですから、お気になさらず。与太でも聞いたと思つて、お忘れくださいませ——と、申し訳なさそうに笑つて席を立とうとしたレア先輩の、手首を思わず掴む。

早い早い！

まだ話は終わつてない。

別に協力しないとも言つてない。

「抵抗の仕方を変えましょう、と言つているんです。もつと大勢の人に頼りましょう。具体的には、大人とかに」

「っ！ ですから、わたくしは、誰にも……！」

「だから、そこをひっくり返そうと言うんです——要するに、各寮対抗戦に出て優勝しましょう、と言えは分かりますか、レア先輩」

Q. 人気も信頼も、立場も何もないどころか、マイナスに振り切つてる人間が、それ

でも多くの人に影響を与えるにはどうするか？

A. みんなが注目するところで超活躍することで人気者になり、立ち位置を確立することで発言力を得る。

まあ、力技過ぎる上に、運ゲー過ぎるし、デカいイベントを一つ滅茶苦茶にする形になつてしまうのだが……そんなもん、もう今更だろ。

「と、まあ、そういう感じになつちやつたから、葛籠織には一緒に各寮対抗戦に出て欲しいん痛い痛い痛い、蹴る力を強めるな！」

「むうう〜」

滅茶苦茶不満そうな目で睨んでくる葛籠織だった。

まあ、確かに勝手に話を受けて、勝手に話を進めたのは申し訳ない限りであるのだが……。

というか葛籠織目線だと、本当に俺、ただの身勝手野郎なんだよな。

とても協力関係とは思えない自由さである。

そう考えたら、こうして蹴られまくるのも仕方のないことか……と抵抗をやめれば

「ん〜〜〜……でも、分かった、良いよ〜」

と、面白いくらい機嫌を立て直して言う葛籠織だった。
あれ？

おかしいな。もつと言いつ訳が必要になると思ってたんだけど。

「だってだって、チーム戦つてことは、カンカンと一緒に戦えるってことだよね？」

「まあ、そうなるな。もちろん、俺以外のメンバーともだけど」

「ん、それならおっけ〜〜！」

あ、でもそれはそれとして、ここの支払いはお願いしよつかな、なんて。

そんなことを言いながら、葛籠織はにっこりと笑った。

……いや、まあ、元よりそのつもりではあったから良いんだけど……。

何だか、妙に話がスムーズに終わってしまった、これはこれで怖いな、と思うのだった。

困惑した様子で会計に向かう彼の背中を見ながら、してやったりと思いつつも、葛籠織日鞠は思いを馳せる。

幾度も思いを浸らせた、あの日——彼と、自らの幼馴染の決闘があつた、その日へと。正直な話、興味なんて無かつた。

ただ、自分は思っていたよりも、あの幼馴染の少年を気に入っているらしい——という事に気が付いたので、気まぐれ程度に見に行つた。

そして——

『——こんなものじゃあ、ないはずだろう』

——そして、英雄を見た。

英雄の輝きに、自らの瞳は焼き焦がされた。

葛籠織日鞠は、史上稀に見る天才である——故にこそ、彼女にはその自覚があつた。

あらゆる人間は、自らの後ろを歩いてくる程度の人間であるのだと、何よりもその才能によつて教えられていた。

あの幼馴染くらいなら、あるいは自分の隣に来られるかな、なんて。

そんなことを思っていた矢先に彼女は、その先を見た。

吹き荒れる魔力。

手繰られる魔法。

平然とした眼で相手を見据える、一人の少年。

——この人だ、と。

この人こそが、私の運命であると。全身が、才能が叫んでいた。

この時代における英雄は彼であり、その隣に並ぶのは——並ぶべきなのは、自分であると。

「あは〜……」

けれども、まだその時ではない。

そうするには、自分はまだ弱すぎる——だけど。

だからと言って、それ以外の人間が、彼の横に立つのは許せない。我慢ならない。

「何だっけいいいけど〜」

事情なんてものは、もうどうでも良い。

疑わしい話だと、本当に彼女らのことを信じるのかと、そういった疑問はもう、投げかける気はない。

ただ、彼の隣に立てるチャンスがあるのなら、それだけは譲れない。

「甘樂は、日鞠のなんだよ〜?」

ヒロイン No. 02、葛籠織日鞠。

彼女はその端正な容姿を美しく、されども妖しく歪めて、そう呟いた。

二人は転生者様

——今でも鮮明に思い出せる、あの日のことを。

突如として現れた竜型魔獣^{ドラグーン}。それから放たれた火球を防ぎきった、三重の守護魔法。それと同時に、守ってくれるように飛び込んできた、オッドアイの少年。

「——っ、やば……」

混乱しながらも冷静に、竜型魔獣を見上げながら抱えてくれた少年は、確かに焦りの色を見せていた。

きつと、彼ならば容易に始末できるのだろう。何せ、バグつたらしいキャラなのだ——なんて思考は、一瞬のうちに消え失せた。

ああ、人だ。人なんだ。

散々踏み台だと、かませ犬だと聞かされていて、結局良く分からない怪物認定をされたこの少年は、確かに今、ここで生きる人間なのだ、私——僕は、この瞬間にようやく理解した。

「砲撃魔法：拡大展開」

緩やかに、けれども苛烈に展開された蒼色の魔法陣は、一ミリのズレもなく竜型魔獣を捕捉する。

それは余裕のある行為にも見えて、けれども押し当てられた身体からは、ドクドクという激しい鼓動が聞こえていた。

「弾種：通常」

不意に、彼の表情が歪む。

緊張からなのか、焦りからなのか、あるいは恐怖からなのか。それは分からないけれど、確かに彼の身体が強張った。

だから、思わず彼の手の上に、自分の手を乗せてしまった。

「目標捕捉——3, 2, 1」

そして、カウンtdownの後に、蒼の魔力光が迸った。

激烈な衝撃。鈍重な反動。それらを逆噴射させた魔力で平然と受けながら、彼は確実に竜型魔獣を仕留めきった。

消滅していく竜型魔獣に安堵のため息を吐いていると、不意に手を握られた——そこで、ようやく僕はハツとしたのだ。

いやっ、なに仲良さげに手を握ってるんだ！　というか、僕も僕で、何で手を乗せるとかしてるんだよ……！

仮に、転生前だったらそこそこ絵面になったかもしれないけれど、今の僕、男だし……。

そういうのが求められてる感じじゃないんだよ……！

女性だった頃の気持ちはまだ抜けきってないのかなあ……!?

内心叫びながら、机を叩く。

「一応、感謝はする。君には助けられた」

そう、助けられた。

正直なところ、今でも腰がまた抜けそうだ。

そのくらい怖かったところを救われた。感謝しないのは、幾ら何でも礼儀知らずだろう

う——でも！

そうだとしても……！

そういうナチュラル女誑しみたいなこととしてくる男が、私は——僕は!! 大ッ嫌いな

んだよ……！

「はつきり言つて、僕は君のことが嫌いだ！ 二度と僕の前に顔を出さないで欲しい！」

ただ……でも、そうだな。

もし僕が、女の子のままだったとしたら、きつとこんな思考すら挟めずに、惚れちゃつてたんだろうなー、なんて。

安堵とため息、それから焦りと共にそう思ってしまったくらい、日之守甘楽とかいう少年は、ちよつとかつこよかつたのだった。

アルティス魔法魔術学園には三つの寮が存在する。

ひとつ、赤の不死鳥

ロソ・フイニーチェ
ビアンカ・ユニコルノ

ひとつ、白の一角獣

ネロ・セラネータ

ひとつ、黒の人魚姫

それぞれの寮が、この学園を創設した際に貢献した人物が名付け親となっており、当然ながら、入学時に全生徒はそのどれかに振り分けられる——のだが、そこに特に意味はない。

いや本当に、理念とか信念とか、あるいはステータスですら、特に作用することなく、ランダムに振り分けられるのだ。

これはゲームでも同じことであり、だからこそ、どの寮が良い——というのは、特にない。

せいぜい、制服に縫われる刺繍が変わるくらいなものであり、特段、何かしらのバフ

／＼デバフがかかることもなければ、その寮だけのイベントが発生するわけでも無かった。

各寮に意味深に置いてある、謎の指輪でさえも、最後の最後まで役に立つことが無かった、ただのオブジェクトだったほどである。

考察ポイントのように見せかけた、ただの置き物だったという訳だ。

因みに今回、俺や立華くん、葛籠織が振り分けられた寮は、赤の不死鳥寮である。大体の生徒は、赤鳥寮なんて略し方をするところだ。

なので当然、月ヶ瀬先輩や、レア先輩も同じ寮である——というか、そうでもなければ各寮対抗戦に出よう！ だなんて言えないからな……。

各寮対抗戦というくらいなので、当然ながら、寮内で男女学年問わず代表五人を選出し、チームとして争い合うというのが主な内容だ。

年に一度のイベントであるので、全生徒、全教師が注目する一大行事である——のだが、意外とその詳細自体はあっさりとしたものだったりする。

というのも、これ、ただの集団による決闘でしかないのである。

例えば迷路だとか、例えば何かしらのスコアを稼ぐだとか、そういった、豊富な内容が用意されている訳ではない。ガチ武力を試される場であるのだ。

まあ、かつてあった黒帝の事件や、魔獣が蔓延していることから分かるように、か

なり危ない世界であるのだから、それも仕方なしと言ったところであるのだが。

取り敢えず戦闘力があれば、死ぬ可能性は薄れる訳だしな。

とはいっても、それだけでは面白みが欠けてしまう——と誰かが思ったらしく、毎年チームを率いるリーダーはランダムで決められており、そのリーダーが直々にメンバーを集めるクソシステムとなっていた。

で、俺達が一年目の時に選ばれるリーダーが、必ず月ヶ瀬先輩であるのだった——
| 察しの良い方は分かるだろうが、各寮対抗戦とは即ち、月ヶ瀬ひかりイベントである。
月ヶ瀬先輩をリーダーとして、メンバーに自分を選択しておく、安全にレベリング
出来る上に親密度もゴリゴリと上げられる、実質専用イベントという訳だ。

もちろん、他の生徒も自分の手で選ぶことになるのだが、ヒロインオンリーとかにすると協調性が0になり、それ以外だと『六年生男子A』みたいなのか選べないので、まあまあ頭を悩ませられるところである。

しかもこれ、決闘だから当然、高学年を選ぶと勝率が上がるし、士気も応援団のやる気も上がるのだが、あまり高レベルキャラで固め過ぎた場合、主人公が弱いと、自己肯定感が落ちて自信喪失モードに入る可能性がある。

こうなると、一週間くらい行動が出来なくなるので、出るのなら要注意ポイントであつた。

まあ、だからといって、低学年でチームを組むと、それはそれで自寮の生徒から滅茶苦茶反感買うし、士気も応援団のやる気も落ちるのだが……。

逆を言えば、これで優勝したりすると「俺達、もしかして世界でも救った？」みたいな褒め称えられ方をする上に、色々特典があるのだが、難易度が高いとか言う次元の話では無かった。ほぼ百パー無理である。

ともかくにも、何というか、かなり面倒なイベントであった——もちろん、レア先輩を選ぶことは不可能だ。

というか、入れようとするのと他の生徒に拒絶される上に、レア先輩にも遠慮されるのである。

残酷すぎるシステムだ……と唸ったものだが、ここはもうゲームじゃない。

月ヶ瀬先輩に「責任は全部俺が負うので……」というごり押しをして、メンパーも四人（月ヶ瀬先輩、レア先輩、葛籠織、俺）決定させてもらった。

そして、最後の一人も当然、もう決まっている——死ぬほど嫌がられるかもしれないが、もう絶対にこの人！ というのを、俺は決めていた。

深呼吸を一つ。

お昼のチャイムを聞きながら、俺はその人のもとへと踏み出した。

「立華くん！ ちょっとお願い事あるんだけど、聞いてくれないか……!?!」

「嫌だ。そもそも僕は、以前、もう近寄るなど言ったと思うんだが？」

「そこを何とか……！」

「くっ……ちよっ、手を離せっ」

「だ、ダメか……？　話だけでも……！」

「くっくっ！　分かった、分かったから！　話くらいは、聞くとしようっ」

ギリギリと奥歯を噛みしめて、睨み付けてきながら言う立華くんだった。

——そう、最後の一人とは、つまるところ立華くんなのである。

というのも、これは葛籠織をメンバーに入れた理由でもあるのだが、レベリングと共に親密度を上げて欲しかったのだ。

何せ彼、俺が見る限り常に単独行動しているのである。

その様子にはいつそ親近感すら湧いてしまうのだが、何かもう、孤高みたいなイメージすら付けられている彼は、どう見ても、どのヒロインとも親交を深めていないのだ。た。

見た感じ、かなり鍛錬や学習に振っているっぽいのである……それはある意味正しいが、しかし、これではどのルートにも行けず、最悪ヒロインが全滅してしまいかねない。

それは困る。超困る。

ヒロインが全滅＝世界滅亡と言っても過言では無いのだから——少なくとも、俺の知

るメインシナリオであれば。

既に壊れつつあるシナリオではあるが、主な面子が変わることは無いだろう。

そう考えれば、あるいは黒帝や魔王だって、俺の想像をぶち超えた強化バージョンで出てきたって、おかしくはない。

……特に、黒帝なんかは、本当にどうなるのか分からないのだ。

だからもつと、青春とか色恋とかいうやつに、浮かれて欲しかったのである。

この学園でそんなストイックな進め方してるの、俺、RTAでしか見たことないからね？

「まあ、端的に言うと一緒に各寮対抗戦に出て欲しいんだね」

「なるほど、断る。それじゃあ」

「うわーっ、待って待って待って！」

一緒にお昼を食べながら説明を終えたところ、爆速で断りを入れて立ち去ろうとする立華くんであった。

判断が早すぎるだろ。

幾ら相手が俺だからと言っても、もう少しくらい悩んで欲しいところであった。

立華くんの手を掴み、若干見上げる形で訴える——甘^{おれ}樂、立華くんより身長低いんだよな……。

若干の差ではあるのだが、こういうところも、主人公と踏み台の差！ という感じがして、苦笑いが出てきそうだった。

「もうちよつとだけ、考えてみてくれないか……？」

「考慮する価値すらない。それに、僕は忙しいんだ」

「えっ……そんな、ご飯食べたらいっつも隅っこで寝たふりしてるのに……？」

「喧しいぞ!？」

「黙れ!」 と叫ぶ立華くんだった。

「やれやれ。」

「参ったな。つい怒らせてしまった。」

俺のコミュニケーション能力の無さが露骨に出ている……。

「やっぱり、葛籠織に頼んだ方が良かったかな……」 と思つたが、それで断られた時、あ

いつが何とか食い下がってくれる未来が全く見えなかった。

「なんか……」「ふくん、それじゃあ良いやく。ばいばい」とか言いそうだな。

「そうなつてしまつても、やはり困る。」

「い、今なら美少女が三人もついてきやすぜ……？」

「何で急に、三下みたいない方になるんだ……」

「ついでに俺という従僕もついて来やすよ……？」

「じゅっ、従僕!? それはそれで、君は良いのか!?」

「というか、君、そんな扱いをされているのか!? と、何だかんだ心配してくれる立華くんだった。」

「やっぱり、こういうところは主人公なんだよな。」

「一応の訂正を入れると、デカいため息をついた立華くんが、呆れたように頬杖を突いた。」

「大体、何で僕なんだ。君からしたら、雑魚も良いところだろう」

「うお……テンプレみたいな卑屈さを出してきたな……」

「……帰らせてもらう!」

「ご、ごめんって——その、立華くんしか、いないんだよ」

「そう、彼しかいないのだ。世界を救えるのは、多くのヒロインを、救えるのは。」

「こんな世界で、それでも絶対に頼りに出来ると思える人間も、また彼しかいないのである。」

「少なくとも、俺にとっては。」

「未だにこういう見方であるのは、本当に申し訳ない限りであるのだが——やはり、空城立華という少年は、俺にとっては主人公なのである。」

「今弱くとも、すぐ強くなるだろうということを、確信してしまっているほどに。」

……まあ、思いの外バッドコミュニケーションを連発しまくっているので、正直かなり冷や冷やしてはいるのだが。

それはそれ、というやつだ。

「ぼ、僕しか……?」

「うん。各寮對抗戦に出るチームの、最後の一人は、立華くんしか頼めないんだ」

「頼れるのが、僕だけ……?」

「そう、立華くんだけ」

瞳を揺らし始めた立華くんは、逃すかとはばかりに目を合わせる。

押しに弱すぎないか? と不安になってしまっているものの、今言うことではない。

「ここがチャンスだ、と確信して真っ直ぐ見つめることにした。」

「僕は……君と肩を並べられるほど、強くない」

「でも、あの時よりはずっと強くなっていることくらい、見れば分かる」

「……足を引つ張るぞ、間違いなく」

「足を引つ張り合つて、笑い合えるのがチームつてももの——らしい。うちのリーダーが

言つてた」

「そこは君の言葉じゃないのか……」

「いや、俺はそんなこと言えるほど、コミュ強者じゃないし……でも、安心はできるだろ

「？」

「違ういな」

フツと笑い、それから逡巡するように、立華くんは口元に手を当てた。

臉を閉じてうんうんと唸る姿は、頭の中で意見を戦わせているようにも見える。

……これでダメだったら、流石に諦めるしかないよなあ。

これ以上食い下がるのは、ちよつとライン越えだ。しつかりとただの迷惑になつてしまふ。

もしそうなたとしたら、このあと月ヶ瀬先輩にどういふ言い訳をして、更には今後、如何にして立華くんとヒロイン達を出会わせるかを、考えなければならぬだろう。

そ、それだけは嫌だ……。

あまりにもタスクとして重すぎる……。

そんなことを思っていれば、不意に立華くんが俺を見て、

「仕方がないな……出るとしよう、各寮対抗戦」

「!! やったー!!」

「っ! ……言っておくが今回だけだからな! 君のお願いを聞くのは、今回限りと覚えておいて欲しい!」

「分かつてる分かつてる」

「それは絶対分かってない顔なんだが——はあ、まあ良い」

これで貸し借り無しだ、と立華くんが言う。

その言葉の意味に、少しだけ遅れて気付く——即ち、ついこの前の竜型魔獣の件だ。そうだった。立華くん、アレでハチャメチャに腰抜かしたんだった。

……ちよつと、色々と説明するのが、面倒なことになりそうだな……。

チームを組む以上、レア先輩周りの話もしなければならぬことを思うと、今から頭が痛いのだが——まあ、仕方がないだろう。

月ヶ瀬先輩がどうにかしてくれることを願いながら、俺は立華くんの承諾を得るのだった。

《left》ご神託チャット▼《left》

《left》

◇名無しの神様 ばー~~~~~かかおめ~~~~はよ~~~~!!

◇名無しの神様 仕方がないな……(やれやれ)じゃないんだよな

◇名無しの神様 滅茶苦茶ワロタ

◇名無しの神様 今どきのツンデレヒロインでもうちよいツンツンするぞ

◇名無しの神様 RTAの才能なさすぎか？

◇名無しの神様 月ヶ瀬フラグ折つた意味が無に帰してて草

◇名無しの神様 オリチャー全開過ぎるんよ

☆転生主人公 は？ あんな捨てられた子犬みたいな目をお願いされて断れるわけが

ないんだが????

◇名無しの神様 何キウンキウンしとるねん！

◇名無しの神様 急に開き直るな

◇名無しの神様 もう面白すぎるから何でもええがせめて反省の意思くらいは見せ

ろ

◇名無しの神様 貸し借り無しだ(キリツ)

◇名無しの神様 まあ借りがあつたのは本当ですし……

◇名無しの神様 日之守出てくると何もかも滅茶苦茶になるのほんまおもしろい

◇名無しの神様 マジで”””破壊者”””って感じ

◇名無しの神様 人の形した嵐なんだよね、日之守。

◇名無しの神様 最近は調子良かったのにな……

◇名無しの神様 あっちはあっちで全ヒロイン親密度Maxハッピートゥルーエンドでも目指してるのか？ みたいな手際の良さなのがまたウケるんだよね

◇名無しの神様 でもよお……ぶつちやけ、お願いして来る日之守可愛かったぜ……

◇名無しの神様 設定上背が若干低いから上目遣いになってんだよね。ズルだと思
う。

◇名無しの神様 踏み台とは言え顔は滅茶苦茶良いからな、日之守……。

☆転生主人公 いやでもほら、友達としてだから。友達として好意を抱いてる段階だから、僕は

◇名無しの神様 好意を抱いてる時点で終わってるんだよね

◇名無しの神様 あーあ、もう滅茶苦茶だよ

◇名無しの神様 最高にぶち上がってきちまったな

◇イカした神様 あれ？ 何か変じやね？

◇名無しの神様 変なのはお前の頭定期

◇名無しの神様 全部お前のせいな自覚ある？

◇イカした神様 ちっ、せーな。反省してまーす……じゃなくてほら、日之守の用意

したメンバー、おかしくない？

◇名無しの神様 ん？

◇名無しの神様 メンバー？

◇名無しの神様 てかもう五人集まってるのか。凄いな。

◇名無しの神様 月ヶ瀬、葛籠織、日守……あ

◇名無しの神様 れ、れれれれレア様

◇名無しの神様 レア・ヴァナルガン！・リスタリア

◇名無しの神様 待て待て待て待て待て待て待て

◇名無しの神様 何がどうなってるんだ

◇名無しの神様 え？ レア様選べんの!?

◇名無しの神様 無理

◇名無しの神様 設定上不可能

◇名無しの神様 何をどう足掻いてもレア様だけは選べん

◇名無しの神様 じゃあ、何故……？

◇名無しの神様 しりゃん……

◇名無しの神様 こわ……

◇名無しの神様 まーた日之守が原作壊してる……

◇名無しの神様 なに、これ……どうなんの？

◇名無しの神様 どうなっちゃうんやろねえ……

◇名無しの神様 おお、聞こえる聞こえる……原作が壊れる音が……

◇名無しの神様 もう跡形もないんだよ

《left》

《left》

《left》【原作クラツシャー】蒼天に咲く徒花 ヒロイン全滅世界滅亡ルートRTA【日之守】

《left》

宣戦布告、あるいは焔の女

——会場の空気は最悪だった。

一年生はようやく学園に慣れ始め、二年生以上は胸を高鳴らし始めた頃合い——つまり、各寮對抗戦初日。

アルティス魔法魔術学園が保有する、馬鹿デカイ土地に建てられた、これまた全生徒収容してまだ余るほどのデカイ会場で、各寮は毎年、最優とされる寮を決める戦いを行う。

生徒どころか、教員から見ても超のつくビッグイベント。

当然、そんな様子なのだから、代表となった生徒は闘志をギラギラと熱くさせ、絶対に優勝するという団結感を持って、入場をした。

まずは昨年優勝寮である、黒の人魚姫寮。

学生の身でありながら、突発的に現れた迷宮ダンジョンを単独踏破したという、『学園最強』と名高い女、ウィル・クラウネス率いる八年生五人。

彼女らの登場と共に、割れんばかりの喝采が鳴り響き、応援の音が木霊する。

それらに代表の彼らは、魔法による花火で応え、会場を熱気で満たした。次に入場となったのは、白の一角獣寮。

昨年、黒の人魚姫寮に優勝を奪われるまでは、五年連続で優勝という快挙を成し遂げていた寮であり、今回は『学園最優』と謳われるアルティス魔法魔術学園生徒会会長、レミラ・フィルフラウスをメンバーに加えた、四々八年生の混合チーム。

今年の優勝候補はこの寮であると噂されるほどに、リーダーを含めレミラ以外の生徒も有名かつ、優秀な生徒のみ。

黒の人魚姫寮に、負けずとも劣らない華々しさを演出しながら、彼女らは姿を現した。そして、最後に現れたのは、赤の不死鳥寮。

ここ数年、全く良いところ無しで終わっているものの、今年はその月ヶ瀬ひかりが代表リーダーとして選ばれたことから、かなりの期待が寄せられていた——のであるのだが、彼女らが入場した際にかげられた声に、好意的なものはほぼ無かった。

とはいえ、それも仕方がないと言えるだろう——今年の赤の不死鳥寮は、四年生二人、一年生三人という、明らかにやる気のないチーム構成であったからだ。

しかも、その内の一人はあのレア・ヴァナルガンド・リスタリアであるのだから、やむなしと言わざるを得ない。

リスタリアの名は、魔法魔術界では既に、汚点そのものと言っても差し支えが無い。

ゆえに、その家の長女もまた、この学園内では嫌われ者に位置している。

その上チームの全員が、月ヶ瀬ひかりの友人であるというのだ——仲良しこよしやってんじやねえぞ、という声上がるのも当然と言えるだろう。

応援というか、むしろブーイングすら巻き起こっていたほどであり、赤の不死鳥寮の生徒は今や、黒の人魚姫寮派か、白の一角獣寮派に別れているほどであった。

それほどまでに、赤の不死鳥寮は誰にも期待されていなかった。あるいは、興味の一つすら持たれていなかったと言っても良いだろう。

好きの逆は無関心、という言葉がお似合いとも言えるほどに。

だから、問題はその後だった。

『最強に、最優。随分と景気の良い二つ名と、それっぽい取り巻きですな』
発動された拡声魔法が、彼の声を、否が応でも会場全体に響き渡らせる。

『噂しか聞いてなかったもので、どんなものかと思ってたんですが……意外と弱そうで、安心しました』

黒の短髪に、目を惹く赤と青のオッドアイの少年が、ふてぶてしく笑う。

『良かったです、これなら今年は、赤の不死鳥寮が優勝できそうだ——ああ、でも、つまらない戦いは楽しくないから』

彼のことを、知っている者はそう多くない。

決闘に勝利したとはいえ、そんなことはこの学園では日常茶飯事だ。

勇者の末裔が弱かっただけ、という話すらあるほどで、高学年であればあるほど、気にも留めていなかった、ほとんど無名の一年生。

『俺の名は、日之守甘楽。精々足掻いてくださいね、先輩方』

即ちそれは、あまりにも無謀な宣戦布告。けれどもその表情は、あまりにも自信に満ち満ちていて。

会場にいた、ほとんどの生徒は押し黙り。

『最強』は失笑し。

『最優』は嗤った。

「なっ、ななな何してるんですの貴方様は〜〜」

「うおーっ、鼓膜が死ぬ！」

!!!???!?

柄にもなく宣戦布告とかしてみたら、控え室に戻った瞬間、レア先輩に締め上げられてしまった。

拡声魔法を使ってないのに、使っていた時の俺よりデカイ声で叫びながら、ガクンガ

クンと頭を揺さぶられてちよつと吐きそうである。

至極妥当な行動ではあるので、気軽にやめて欲しいとも言えないのがしんどかった。「何って言いますと、宣戦布告……?」

「そういうことでは無くてですわね……!?!」

ちよつとだけ言葉に詰まるレア先輩に、若干の申し訳なさは感じてしまうのだが、これはもう、俺の足が緊張でガタガタ言っていることから、仕方のないことであつたということも分かつて欲しい。

「というのも、あまりにも」ボケが、嘗めてるのか「みたいなパーティになつてしまつたせいか、最早見向きすらされなくなつてしまつていたからである。

端的に言つて、これでは士気もクソもあつたものではない——ただでさえ、月ヶ瀬先輩や葛籠織は、気分によつてステータスが乱高下するタイプの生徒なのだ。

ここまで無関心を徹底されてしまうと、月ヶ瀬先輩は普通に責任を感じて落ち込むし、葛籠織はやる気をマイナスにまでぶち込む未来がありありと見えてしまつたのだつた。

あと、普通に立華くんがガチで後悔した顔をし始めていた。これはヤバイ。

実際、ゲーム上でこれはまま発生することでもあり、宣戦布告も提示される選択肢である。だからこそ、せめて好きか嫌いかの土俵に持ち込むべきだな、と判断したという

訳だった。

葛籠織や立華くんはともかく、月ヶ瀬先輩は今回、優勝する上で最も重要な生徒である。

常に最高のパフォーマンスを發揮してくれなければ、勝てるものも勝てないというものであった。

レア先輩もそうであるが、四年生組は劣勢であればあるほど、限界以上の力を發揮してくれる主人公タイプの人間が集まっているからな……。

本当であれば、嘗め切られた状態で挑むのが理想的ではあったのだが……それで不調に陥られでもしたら、本末転倒である。

実際、この学園の校風として（というか、世界観的として、と言うべきだろうが）強さは何よりも重視される項目だ。勝ちさえすればリカバリは利く。

それに、ただでさえ、今回は珍しくネームドである『最強』と『最優』が出揃ったのだ。

彼女らはどちらも、ヒロインでも無ければメインキャラでもないが、当然ネームドというだけあって、滅茶苦茶強いサブキャラだ。

あるいは、レアキャラと言っても良いのかもしれないのだが——とにかく、各寮対抗戦で彼女らが出るのはかなり低い確率である。

勝っても負けても経験値が美味しいし、関係を結んでおけば、場合によつては色々助けてくれる人気キャラ、という訳だ。

無論、今回は負けるわけにはいかないのだけれども……。

ここまで来た以上、勝つ以外に明るい未来は無いのであった。言い出しつぺが自分なだけに、胃がキリキリしてきたな……。

「あはは……まあ、勝てばよかろうつて思考なのは分かるし、実際その通りなのもそんなだけどね……」

「やり方が、いささか強引過ぎると言っているのですわ」

「むっ……」

反論の余地が限りなくゼロだった。いやもう、本当にその通りですとしか言いようがない。

何だか衝動的に動いてしまったのだが、それがゲームのように上手くいくとは限らない訳だしな……。

いい加減、この辺の意識を切り離したい……と思いつつも、何だかんだ手放せない俺であった。

いつそ、何も知らない本当の異世界に転生とかだったら、こんなに考えなくても済むのに、とか思う。

まあ、それはそれで野垂れ死にとかしそうなものであるのだが。

「ああ、いえ、そう落ち込まないでくださいまし。何も、全否定する気はございませんのよっ。」

「？」

「ん〜とね〜、レア先輩は〜、ちよつと言葉が悪かったつて言ってるんだよ〜」

ドーン☆と背中のにしかかかってきた葛籠織が、楽し気に言う。

こいつ、俺を童貞いじりしてきてからやたらと距離が近いの、マジで揶揄つてきてるつて感じがしてクソ腹立つな……。

才能が覚醒しまくる前に一回、分かせてやった方が良いかもしれないと強く思った。

ただ、それはそれとして、言葉が悪いつて何だろう、とは思う。

うろ覚えだった台詞を、適当にそれっぽくアレンジしただけなんだけど……。

「……はあ、あの宣戦布告では、赤の不死鳥寮チームにはなく、君個人にヘイトが向いてしまうだろう、ということを行っているんだ。そのくらいも分からないのか？」

「え？ あつ、あー……なるほど！ 確かに！」

「確かに！ じゃない！ というか、そこは意識したところじゃなかったのか!?!」

脊髄反射でもあんなことするな！ 馬鹿か君は！ と叫ぶ立華くんであった。

他三人にもジトツ……とした目で見られてしまったので、シンプルな猛省してしま
う。

よくよく思い返してみなくても、大分凶に乗った発言になっちゃったな、という自覚
はあるからだ。

まあ、ここまで怒られるとも思っただけ……。

「た、大変申し訳ないと思っておりますね……」

「ふふ、心にもないことは言っちゃダメだよ？ 甘楽くん」

「手厳しすぎない？ ちよつとくらいは思ってますよ」

「ちよつとだけなんだ！ それはそれでドン引きだよ……」

ドン引きされてしまった。

葛籠織が爆笑していなければ、更に空気は最悪になっていたことだろう。

諦めたように、レア先輩が息を吐く。

「まあ……ですが、ありがとうございます。良い喝にはなりましたわ。改めて、身が引き
締まる思いにはなりましたもの——ですから、見ていてくださいましね。わたくしの勇
姿を」

レア先輩がそう言いながら、入場口へと向かう——時間だ。

各寮對抗戦は三日に分けられていて、一日ごとに戦うフィールドだったり、形式が異

なっている。

そして初日の種目は、全く工夫の為されていないシンプルな会場での、いわゆる勝ち抜き戦だ。

各寮チームから一人ずつ選出し、二人倒れた時点でその分は交代となり、倒れなければ延々と続投となる形の戦いである。

ここの順番決めはかなり頭を悩ませたのであるのだが、彼女の要望もあり、一番目はレア先輩となった。

まあ、レア先輩の為の戦いみたいなもんだしな。『最強』と『最優』も、大将で固定だし、まず初手で負けることは無いはずだ。

この営められまくっている状況をレア先輩がひっくり返せば、それこそ彼女の評価が丸ごと反転することにも繋がるだろう。

優雅に歩いてくレア先輩に近づいて、一言かける。

「頑張ってくださいね、誰が何と言おうと、俺達は絶対にレア先輩の味方ですから」

「あ、あら、嬉しいこと言ってくださいませのね……ありがとうございます。全力を尽くさせていただきますわ」

それでは、行って参りますわ〜！ 応援、よろしくお願いいたします〜！！ とレア先輩はド派手に入場していった。

さて、ここからだ。

ここからが勝負なんだ。

ドキドキと心拍数が上がりまくっていくのを感じながら、俺はレア先輩と、相対する

二人の生徒を――

あ!!!?

初手から『最強』と『最優』じゃん!!!?!!?!!??

「え? ヤバ……え? どうすんだ、これ……」

もう何か、レア先輩が奇跡でも起こして、どっちも叩きのめしてくんねえかな、と俺は空を見上げるのだった。

――ああ、本当に、嫌な空気だ。

レア・ヴァナルガンド・リスタリアは、入場するとともに、そう思う。

常に疎まれ、排斥されてきた彼女にとって、それは実に慣れたものであったが、そうでなければきつと、逃げ出すくらいは考えてしまったかもしれない。

それほどまでに、今の自分達は期待されていないのに、敵視はされている。

ただ、敵視があるだけ良い、と思った。

何も無いのが、一番寂しいから。

「おいおいおいおい、何だ、赤の不死鳥寮の先鋒はあのクソガキじゃあねえのかア!」
腰まで伸びた銀の長髪に、右眼を眼帯で隠した高身長の子——『学園最強』ウイ
ル・クラウネスが、挑発するように言う。

かつての迷宮単独踏破にて、失った左手の代わりに装着された、銀の義手で杖を弄ん
でいた。

「——本当に。てつきりあの少年が先鋒なのかと思つていたのですが、貴女ですか……
いえ、あるいはあの少年は、貴女方の秘密兵器のようなもの、なのでしょうか?」

青のインナーが入った、黒の長髪に銀縁の眼鏡。真っ白な手袋を嵌めた右手で杖を握
る女——『学園最優』レミラ・フィルフラウスが、訝しむように言う。

六年生にして、前生徒会長を決闘にて打ち破り、強引に生徒会長の座を奪った彼女は、
悔るようにレアを見た。

「ええ、その点につきまして、まずは謝らないといけないと思つておりましたの——
わたくしの可愛い後輩が、ご無礼をいたしましたして、本当に申し訳ございませんでしたわ」
優雅に美しく、レア・ヴァナルガンド・リスタリアは頭を下げる。

それをつまらなそうに見る二人に、しかし彼女は「ですが」と言葉を付け加えた。

「日之守様が仰ったことは、事実でございますわ。皆様如き、わたくしだけでも充分そうですもの」

——レアは思う。

動揺していたように見せかけて、あの少年は全て計算ずくだったのだろう、と。

特別、自身に敵意が向くように仕向けたのは、リスタリア家の女である、レアじぶんへのヘイトを散らすためなのだろう、と。

そのことを、純粹に嬉しく思う。まるで、一緒に全部背負いますよ、と言ってくれているようで、心地すら良かった——だから、報いたい。

助けを求めてからここまで、全て彼は準備してくれたのだから。

武を示し、頂に立つ。

握られた、30cm程度の機械製の杖が、薄っすらと炎を揺らめかせた。

「——精々、勝負くらいにはしてくださいませね?」

瞬間、勝負開始の合図は鳴り響いた。

同時に『学園最強』ウィル・クラウネスは、自身の杖に魔力を纏わせる——彼女は魔法魔術界にしては珍しい、超近接戦闘を好む魔法使いだ。

高い練度で磨かれた魔力を纏う杖は、切り裂けぬもの無い剣と化し、『加速』という、実にシンプルかつ、強力な先天性魔術属性を使いこなす彼女は、魔法使いでありながら

も魔術師であり、しかし音速の剣士となる。

それに遅れて、しかし堅実に、『学園最優』レミラ・フィルフラウスは、場の支配へと取り掛かった。

魔法使いというよりは、魔術師の側面が強い彼女の先天性魔術属性は《氷結》。

彼女の足元から氷の波は広がり、この会場は一瞬にして、レミラ・フィルフラウスの独壇場へと塗り替えられる。

そして、レア・ヴァナルガンド・リスタリアは。

「――魔装展開」

紅の極炎が、彼女を中心に溢れ出る。

それは、魔術における一つの極致。

「之なるは、命を生みし母なる炎」

炎が意志を持ち、形を成していく。

レアの身を纏う白の制服が、極黒のドレスへと塗り替えられていく。

「恐れ、慄き、しかして祝福なさい」

あまりの熱に、『学園最強』は足を止めた。

『学園最優』の氷は、瞬く間に溶け落ちた。

「我が身に宿りし炎は《神焰》」

レア・ヴァナルガンド・リスタリアは、日頃から目立たないよう努力していた生徒である。

故にこそ、決闘をしたことは無く。

故にこそ、本気で戦う機会には恵まれなかった。あるいは、ひた隠しにし続けていた。——それはつまり、彼女の本気を知るものは誰一人としていなかったということに他ならない。

「さあさ、皆様、お気をつけになって？　そうでないと——火傷いたしますわよ？」
神焔は、歓喜の声を上げて、踊り狂う。

《left》ご神託チャット▼《/left》

《left》

◇名無しの神様

◇名無しの神様

◇名無しの神様

◇名無しの神様

◇名無しの神様

◇名無しの神様

◇名無しの神様

◇名無しの神様

◇名無しの神様

◇名無しの神様

◇名無しの神様

◇名無しの神様

◇名無しの神様

◇名無しの神様

◇名無しの神様

◇名無しの神様

????????????????????

なにこれ？

本当になんなんだよマジで

知らん知らん知らん知らん知らん知らん知らん

本当に知らん事ばかり起きとるねん

脳みそこわれりゆ……

じよつ、情報整理ターーーーム!!!!

ヨシ!!

まず黒帝の位置が割れてるの、なに？

同調現象とかオマケ設定だと思ってたのに……

マジのガチで日之守のせいなの終わってんだよな

ビビったって何だよ

ビビった
驚愕かもしれんし……

まあ黒帝ちゃんビビりやしなあ、校長来た時もビビりすぎて戦う前

から逃げ出したくらいやん

◇名無しの神様 校長と日之守を並ばすな

◇名無しの神様 まあワイらもビビったくらいやし多少はね？

◇名無しの神様 いやそんなことよりレア様だよレア様
!!!!!!

◇名無しの神様 神焔ってなんなんすかね

◇名無しの神様 しりゃん……

◇名無しの神様 炎熱しか知りませんが……

◇名無しの神様 あちこちバグり過ぎなんだよな

◇名無しの神様 【悲報】レア様も日之守る。

◇名無しの神様 日之守るって何だよ……!!

◇イカした神様 ひゅー、色々アガツてきちまったな！

◇名無しの神様 ボケが！

◇名無しの神様 反省しろ馬鹿が

◇名無しの神様 てか魔装展開できるのはおかしくねえか？

◇名無しの神様 おかしくはない、実際黒帝憑依バージョンでも使ってたろ

◇名無しの神様 いやおかしいだろ、黒帝が憑依したからこそ、魔装展開まで使え

たって話じゃん？

◇名無しの神様 通説はそうだったんですけどお……

◇名無しの神様 どうやら違ったみたいですねえ……

◇名無しの神様 自力で魔装展開まで辿り着いた女（十六歳）

◇名無しの神様 これは最高の肉体ですわ

◇名無しの神様 黒帝ちゃんも欲しがるわけだよ

◇名無しの神様 日鞠たんにも匹敵する才能持ちつてことになるのか……？

◇名無しの神様 いや、流石にそこまでは……日鞠は最終的に魔装三重展開とかする

し……

◇名無しの神様 日鞠がぶっ壊れてるだけ定期

◇名無しの神様 原作もRTAもキャラも壊れててもうおしまいの雰囲気すら流れ

てきたな

◇イカした神様 流石に責任者案件だろ

《left》

《left》

【最早】蒼天に咲く徒花 ヒロイン全滅世界滅亡ルートRTA【別ゲー】

《left》

隠しキャラは鉄板

良く混同されがちであるのだが、『蒼天に咲く徒花』における「魔法」と「魔術」は、全くの別物である。

前提として、大きく分けるのであれば、魔法はつまるところ「超科学」であり、魔術とは正しく「ファンタジー」であるのだ。

人間であれば、誰しもが生まれ持つ魔力を媒介に、杖（正式名称：Terminal Operative Magic Precision）
 精密魔力操作端末。頭文字をとってT・O・M・Pなんて言う人もいるが、大体みんな「杖」と呼ぶ）を通すことで起こすことが出来る、多種多様に渡る現象。

発達した科学によって魔力を解析し、設定されたプログラムに魔力を通すことで、発動する現代の超常現象——それが、俺達が言うところの「魔法」であり、これを主に用いる人間を「魔法使い」と呼ぶ。

それに反して魔術とは、先天性魔術属性という、生まれながらにして持ち得た才能を駆使し、これほどまでに発達した科学でも解析できないプロセスにより、引き起こされ

る超常現象を指す。

杖を必要とせず、やろうと思えば無手でも属性に沿って起こすことが出来る超常現象——それが、俺達が言うところの「魔術」であり、これを主に用いる人間を「魔術師」と呼ぶ。

要するに、魔法は万人が使える手段であり、魔術は選ばれし者のみが使える手段、という訳だ。

あるいは、凡人と天才の差、と言っても良いのかもしれないのだが。

魔術師が大昔からいたことに比べ、魔法とは、ここ百年程度で確立されたばかりのものである——即ち魔法とは、魔術師に対抗するために、才能に恵まれ無かつた凡人が辿り着いた境地である、という訳だ。

これにより、魔術師と非魔術師との間に、大きな隔たりはなくなった、が、しかし。それでも極まった魔法使いと、極まった魔術師では、やはり魔術師が勝つというのが通説である。

というのも、魔法とは違い魔術には、極致とも呼ぶべき真髄があるからだ。

これには幾つかの種類が存在するが、最もスタンダードと言われるのが『魔装』である。

自らの属性を理解し、自身を属性と同期させることで出力を大幅に上げ、同時にそれ

を基に、一定の領域を完全に支配する、魔術の深奥。

その形はそれぞれではあるが、しかし、習得するのはそう簡単ではない——いや、いや。

こういった言い方は誤解を招きそうだから、断言しておくのだが、多くの魔術師は一生涯かけても習得することはできない。

魔術とは、それ自体が才能ではあるが、それを使いこなすにも、当然ながら才能がいる。

そのような稀少な人間の、更に一握りの人間がやつとの思いで辿り着けるが故に、魔術の極致と呼ばれるのだから——黒帝が、世紀の天才と謳われ、ただ一人の企みで魔法魔術界をひっくり返す、その一歩手前まで迫れたのも、ここが関係している。

彼女は人にしては、あまりにも魔術への造詣が深かった……あるいは、深すぎた。それこそ、憑依したばかりの肉体で、即座に魔装を展開できるほどには。

実際、ゲーム上でレア先輩に憑依した際は、『炎熱』の魔装を展開したし、概要しか開示されていない『百鬼夜行』では、精神操作した魔術師を、強制的に魔装展開させたほどであると言う。

転生前から「やべー女だな……」とは思っていたが、こうして自分の目で、初めて魔装を見ると「は？ 黒帝、化物とか言うレベルの話ではないですが……」となるのだっ

流石にこれに関しては俺は悪くないだろ、と絶叫させてもらいたい。

「あ、レアちゃん、結構無理してるねえ……」

「無理？」

「うん、無茶つて言い換えても良いかもしれないけどね——ほら、良く見て、甘楽くん。色々と、安定してないでしょ？」

隣に並んでいた月ヶ瀬先輩に優しく促され、目を凝らす。

会場は、紅の焰……要するに、レア先輩の魔力で満たされていた。

さながら異界の如く、そこはレア先輩だけの世界であり、しかし——

「あ、^{ほっ}解れてる」

思わず漏れた一言に、月ヶ瀬先輩が「でしょ？」と頷いた。

そう、言葉通り、解れてる。

もしくは、完全ではない、と言っても良いだろう。

レア先輩の出力は安定しておらず、魔力は乱れ、纏った魔装は崩れては再生を繰り返し、地を舐め尽くす紅焰は制御しきれていないのか、気ままに暴れていた。

あれでは、如何に大量の魔力を持つレア先輩でも、五分と保たないだろう。

もう少しよく観察すれば、早くも肩で息をしているのが見て取れる。

まあ、だからと言って、別に凄さが薄れる訳では無いのだが……。

一分だろうが三十秒だろうが、疲れていようがいまいが、展開出来てる時点で、既に偉業だ。

「まあ、それはね。そもそもレアちゃんが魔装を習得したのも、ついこの前だった訳だし」

「へえ……そうなんですか。何かきつかけがあつたり？」

「んー、あつたにはあつたけど……」

「……？ え？ 何ですか、その目は」

突然、呆れ切つたような……端的に言つて、クソ失礼な眼を向けて来る月ヶ瀬先輩だった。

急にそういうことをされると、俺が悪いみたいな気分になつてしまふのでやめて欲しい。

え？ 原因俺じゃないよね？ 特に何か関与してる訳じゃないよね？

心当たりが無さすぎるのだが、普通に不安になつてしまふ。

「……本当に、分からないの？」

「分かつてたらこんな問答しませんか……」

「はあ……あのね、レアちゃんはあの黒帝と同調したんだよ？」

影響が、出ない訳ないよね？」

「……………
??? ……
!!!?」

は？

え？ つまり、それは。

黒帝と同調した際に、まず黒帝が、レア先輩の魔術属性を理解して。

その上で、レア先輩は黒帝と自我を共有したから、魔装へと至った……つてコト!!?

……………じゃ、じゃあ、俺のせいじゃん。

本当に、一から十まで俺のせいじゃねえーか!!?

レア先輩に関するイベントが、悉く俺のやらかして滅茶苦茶になっている!!!

なーにが「俺は悪くないだろ、と絶叫させてもらいたい(キリッ)」だよ。ふざけとんのか。

明かされた衝撃過ぎる事実にも、頭を抱えてのたうち回りそうになってしまった。

これ、もしかしたら魔術属性が変質したのも、この辺が原因なのか……? と考えると、具合が悪くすらなってきた。

何もかも俺が悪いんじゃない……。いや、これに限っては、あるいは良い方向ではあるのかもしれないんだけど……。

てか、同調現象を起こしたって言っても、ほんの一瞬だろ……??

これはもう、レア先輩に才能がありすぎる方が問題なんじゃないだろうか?

「こらっ、責任逃れしようとしないのー」
「くっ……返す言葉が無さすぎるッ！」

根元の原因である自覚が生まれてしまった為、もうどうしようもない俺であった。

最近、反論の余地がない状況に陥り過ぎてる気がするな……。

俺、結構頑張ってるはずんだけどなあ……。

想定外のところで、想定外なことが起こり過ぎである。

世界は俺に何か恨みでもあんのかよ——て、いうか。

(これ、負けられない理由が増えちゃったな……)

控えめに言っても、《神焰》は《炎熱》より強力な魔術属性だ。分からないこと塗れではあるが、それは間違いない。

仮に、事が上手く運ばず、レア先輩が黒帝に憑依され切ってしまった場合、手の付けられないさが段違いになってしまう。

レア先輩と違って、黒帝の場合、魔装はもつと洗練されたものになっているのだろうし——レア先輩が、ここまで黒帝に影響を受けているということは、その逆もまた然りであるということなのだから。

もしそうなってしまったら、絶対に死人が出る。間違いない。

それは……純粹に困る……。

だってそんなの、実質俺のせいみたいなもんじゃん……。

まあ、誰も死なせない理由が重くなっただけではあるのだが、どうにも責任感が膨らんだような気がして、吐き気がしてくるといふものであった。

「あはは、そう不安そうな顔しないでよ。何にせよ、レアちゃんが負けることは無いんだから」

「いや、まあ、そこは特に心配していませんが……」

あれ、そうなの？ と無垢な笑顔で首を傾げる月ヶ瀬先輩を見て、思考を切り替える。

レア先輩の魔装は五分と保たないだろう——だが、それだけで充分すぎるのだ。

少なくとも、あれに対抗するのなら『学園最強』も、『学園最優』も、開幕から奥の手を出さなければならなかった。

そうしなかった時点で、決着は付いたも同然だ。

一番実力のある彼女らでさえ、ほんの少しの時間も稼げないということが明白である以上、各寮対抗戦の初日は、赤の不死鳥寮の圧勝で決まりである。

まあ、流石にレア先輩と言っても、ここから十人全員ボコすなんて真似は、体力や魔力の問題的に不可能だろうが、どうせ後には月ヶ瀬先輩が控えているのだ。

盤石の態勢と言っても良い——だから、問題は明日以降である。

レア先輩は、絶対にガス欠になる。あんなド派手に消費した魔力が、たった一日で回

復するとは到底思えない。

まあ、仮に回復したとしても、魔装を使うのは遠慮願いたいのだが……明日からは、本格的な集団戦になるはずだから。

制御できていない以上、あれはただの無差別攻撃魔法である。敵諸共味方まで……！とか、たまったものではない。

フレンドリーファイアとか一番関係性が悪くなるやつだし、見てて気分の良いものでも無いからな……。

折角、今こうしてイメージアップしてるのに、それがまた元通りになったらもう取り返しはつかないだろう。

ただでさえ、チームとしての練度や関係性を見ると、うちはまあまあ劣っているのである。

やっぱり基本は先輩二人を中心に、一年組がカバーしていくのが理想なんだろうな。立華さんと、葛籠織のレベリングもしないとだし——とか、考えながら試合を見

ていたら。

「おーほっほっほっほっほー！ 圧勝!!! でございましたわ〜〜!」

レア先輩は気合で十タテをした。

マジでなんなん？ あの人。

あと、どう見てもその拳を突き上げるポーズはお嬢様っぽくないからやめた方が良いと思う。

その晩、赤の不死鳥寮はかつてないお祭り騒ぎとなった。なにせ各寮対抗戦初日、完膚なきまでの圧勝である——それも、あらゆる生徒、教員の期待を大きく上回る形での裏切りによって。

テンションを上げるな、と言う方が無理であろう。寮の談話室は今や、持ち込まれたお菓子や料理によって、軽いパーティ状態となっていた。

ぶつちやけ、怖いくらいの掌返しではあるのだが、これが狙いだったので文句はどこにもない——特に、レア先輩が色んな生徒に囲まれている光景など、オタクが死ぬ前に見る夢？ って感じである。

ちよつと感極まり過ぎて泣きそうだし、出来れば写真とか撮りまくりたいな、という欲望を抑えながら、端っこでまったりとする。

今日の主人公は紛れもなくレア先輩であり、俺達他のメンバーは、オマケみたいなも

のだ。

まあ、月ヶ瀬先輩なんかはいつも通りの人気っぷりで、当然下級生に群がられてはいるのだが……一年生組は平和なものである。

葛籠織は友達とキヤイキヤイしているし、立華くんは普通に自室へと戻っていた。

立華くんに関しては、そこは！ 親密度を！ 上げにいけよ！ と叫びたくなつたし、実際そのように誘導しようかとも思ったのだが、俺が月ヶ瀬先輩と話している間、あの二人はあの二人で話し込んでいたことを思えば、不要かもしれないな、という結論にいきついたのであった。

葛籠織はあんまりしつこく話しかけたりすると、グツと親密度が下がったりするからな……。

ここは“見”に徹するべきだろう……とか思っていたら、

「おやおや、こんなところで一人ぼっちかい？ 少年……あんなに派手な宣戦布告をしておいて、実はそういうところが本性なのかな」

不意に、隣に腰を下ろした、泣きぼくろのある青い長髪の女性が、面白そうにそう言った。

え？ は？ ……え!?

「アテナ・スィーグレット……!？」

「おい、少年……仮にも教師を呼び捨てになんてするな」

「あつ……へへ、さーせん」

「謝罪が軽すぎる……まあ良いが」

嘆息してから、ふいふ、と煙草を吸い始めたアテナ先生を、しかしマジマジと見つめてしまう——というのも、アテナ・スィーグレットとは『蒼天に咲く徒花』における隠しキャラであるからだ。

グランドエンドまで辿り着いたセーブデータを削除し、一から始めることで、運が良ければ出会えるという、超レアキャラクターである。

その馬鹿なんじゃねえの？ みたいな出現条件に加え、ランダム性があることから、都市伝説だと言われているほどであり、かくいう俺も、動画で少ししか見たことが無いキャラクターであるのだが、これももう、本当に凄い。

各寮對抗戦期間中に出現する彼女と出会えれば、それ以降、魔法や魔術の特別個人授業（通常の授業の三倍のスキルポイントが手に入るイカれた授業である）や、魔道具の横流しに、杖の無償メンテナンスまでしてくれるのだ。

まあ、その一人のキャラに色々詰め込みすぎだろ、みたいな多数の役割を持っているせいか、親密度が存在せず、あまり情報の開示が行われなのだが……。

それでも、ボス戦以外にはパーティに組み込める上に、他の教員と比べてもステータ

スがかなり高い、幻の女である。

それが、今ここに……？

いや、そりゃあゲームじゃなくて現実なのだから、いて然るべきなのだろうが……。
何かちよつと感動してしまう俺だった。

ここまで不運に振り回されてきた俺に、ついに幸運が……！

「何だ、そんなにまじまじと見て……せんせーの顔に、何かついてるかい？」

「あつ、いや、そういう訳じゃ無いんですけど……何でここにいるのかなって」

「何でって、そりゃあ私が、この寮の副寮監だからに決まってるだろう」

「!!!?」

「凄い驚き方するなキミ……というか、知らなかったのか……」

私、そんなに影薄いかなあ……。と、がっくり俯くアテナ先生。

あ、そういう感じのキャラなんだ……。

何か意外だな、と思いつつも、副寮監？　と思う。

そんなの存在したんだな……。

「いやキミね、幾ら各寮對抗戦で忙しいからって、忘れるのはどうかと思うよ？　あゝ

あ、せんせー傷ついちゃったなあ」

「良い歳こいた女性が、子供を揶揄おうとしないでくれますか？　訴えますよ」

「フウン、良い度胸してるじゃないか、少年。土下座すれば許してくれるかい？」

「思いのほかあつさりと屈したな……」

「大人はね、弱いんだよ。権力と法律と外聞に」

情けないことを堂々と言うアテナ先生だった。

ちよつと生々しさがにじみ出ている、若干引いてしまう。

「ていうか、副寮監だからって、ここに居る理由にはなっていないと思いますが……」

「ん、まあね。でも、いても不思議ではない、そうだろう……なんて言うのは卑怯かな。

実を言うとね、キミらを見に来たんだ」

「……ってというと、各寮對抗戦チームですか？」

「そうそう。今日の活躍で、すっかり岸間先生——うちの寮監ね、一応——がやる気になつちやって、せんせーの方でサポートしてあげてって言うからさあ」

こうして見に来たって訳さ。ま、全員とは会えなかったけど。と煙を燻くゆらせながら、

アテナ先生が言う。

「ま、そういうことだから、明日からよろしくね？　って伝えて欲しくて」

「俺を伝書鳩にしたかつたってことですか……」

「そゆことそゆこと。ま、どうせ後二日だし、気楽に付き合いたくてさ」

それじゃ、よろしくねくと、アテナ先生は、俺の頭をぐりぐり撫でた後に、歩いて行つ

てしまった。

本当にそれだけだったんだ……という、若干の肩透かし感を味わいながらも、その飄々とした様子は、如何にも隠しキヤラっぽいなあ、等と思う俺であった。

空の戦い

ウイル・クラウネス。

パツと見では、普通の腕とは何ら変わらない義手と、ほぼ一体化している杖を振るい、腰ほどまで伸びた銀髪を風に靡かせる、『学園最強』の女。

一見、好戦的にすら見える隻眼。

魔法と魔術、どちらも巧みに扱い——しかし、その全てを近接戦闘に注ぎ込んだようなスタイルを好む、自称剣士。

アルティス魔法魔術学園の八年生であり、恐らくは、史上初の迷宮単独踏破を成し遂げた、『学園最速』。

生まれ持った先天性魔術属性《加速》により、地上より空中の方がよっぽど厄介だと評される、魔法魔術師——そんな、ウイル・クラウネスが、

「ク、クハハ」

と。

「クハツ、クハハ、クハハハハハツ！」

と。

「クハハハハハハハハハハハハハハハハハッ！」

と——さながら悪の親玉みたいな高笑いを発しながら、上空を駆け抜ける。ビツタリと、こちらの背後にくつつくように。

つまり俺は——俺達は今、彼女に追いかけられていた。

「おいおいおいおい！ 逃げてばっかじゃあ、つまらねえじゃあねえーかあ?！」

見せびらかすように展開された複数の魔法陣から、雨あられのように射撃魔法を飛ばしてきながら、彼女は叫ぶ。

先日、レア先輩に秒でボコされたくせに、その怪我はきつちりと治されたらしい。

特別、心が折れたという訳でもなさそうで、むしろ昨日よりずっと楽しそうだ。

剣士名乗るなら、空戦でも接近戦してこいや……とか思ってしまうのは、仕方がないことだろう。

「——葛籠織、迎撃いけるか?！」

「いけつ、るけど、ずつとこれだったらく、耐えられないよ?！」

「わかっ、てる……けどっ」

技術的な問題で、振り切れる気がしない——とは思っただけにして、俺の背中にしがみつきなながら杖を振るう葛籠織ごと、クラウネス先輩を見る。

距離は充分に取れている……けれど、多分、その気になればすぐに埋められる。

彼女が浮かべる、余裕綽々な表情からそれを読み取り、俺は箒に魔力を流し込んだ。悲鳴にも似た音を上げながら、箒は加速する。

それによって増す、全身に襲い掛かって来る負担を別の魔法で処理しつつ、更に高度を上げるべく、穂先を空へと向けながら、

(うおおおお！ 何でこんなことになってんだ……ッ！)

と、俺は遠くで戦ってるのだろう四年生組に、早く助けてくれと願うのであった。

さて、恐るべき逃走劇に至る経緯を整理するとしよう。そうする為にはまず、各寮對抗戦二日目の内容を知らされることになった、試合開始数時間前まで遡るのが妥当だろうか。

初日はレア先輩が、完膚なきまでの圧勝を披露してくれたが、各寮對抗戦は三日——つまり、合計三試合ある。

二試合は勝利を収めないと、優勝は手に入らない……初日の勝利だけでも、十分に汚

名は返上したように思えるが、それは多分、赤の不死鳥寮のみに限定した話になるだろう。

黒の人魚姫寮と、白の一角獣寮は、今頃メラメラと闘争心を燃やし、「クソが、次の試合では叩きのめしてやるよ」くらいのことを思ってる生徒の方が多いはずだ。

その辺もまとめて、「やっぱすげえよ、赤の不死鳥寮……」と思わせておきたい気持ちがあった。

それに、優勝はしておいた方が、色々とアドバンテージがあつて良い。

表彰されるとなれば、当然ながら校長とも直接対面できる訳だしな。

魔装に至ったことを絡めて話せば、多少なりとも信用はしてくれる……はずだ。

そういう訳で、二日目も頑張るぞと気合を入れつつ控室に集まれば、既に我が物顔でソファを独占していたアテナ先生が、

「お、ついに来たね、少年少女たち——では、せんせーの方から二日目の内容を開示するでしょう……今日の試合形式は、空戦だ」

と、何とも面白がるような顔でそう言った。

空戦。それは、上空で行われる形式の戦闘——と言うのは、少し間違っている。

正確に言えば空戦とは、上空により行われる超高速戦闘だ。

Abitodalvo tipopropulsionereazionereason
噴射推進式飛翔礼装——通称：箒を用いることで音速にまで

達し、その上で互いを落とし合う、実に物騒な戦いである。

いや、まあ、戦ってる時点で物騒もクソもないのだが……。

それはそれとして、その情報に俺は——というか全員、ハチャメチャに顔を顰めることになったのだった。

というのも、アルティス魔法魔術学園で本格的に空戦が教えられるのは、三年生からだからである。

一年生で陸戦（こちらは言葉通り、ただの地上戦だ。先日の勝ち抜き戦がこれに該当するだろう）に慣れ、二年生で飛行魔法を習得して空に慣れ、三年生になってようやく、空中での高速戦闘を教え込まれる。

つまり、俺と立華くと葛籠織は、完全に未経験であるのだ——箒の操作に慣れていないどころか、空戦においてどう動けば良いのかすら分からないのである。

こういったこともあるから、各寮対抗戦のチームは基本的に、四年生以上で構成されている。

今頃、白の一角獣寮と、黒の人魚姫寮の連中は、多少気が楽になっていることだろう——なにせ、戦力として数えられるのは、月ヶ瀬先輩とレア先輩だけと考えられるのだから。

しかも、レア先輩に関しては、

「も、申し訳ございません、全然回復いたしませんでしたわ……。一晚寝て戻った魔力は、大体三割といったところでしようか……」

とのことであり、頼りになるのは月ヶ瀬先輩だけとなっていた。

無論、空戦が行われることになる可能性を、考慮していなかった訳ではない。

考慮していなかった訳では無いのだが——現状の何もかもが、想定外すぎであるのだった。

状況は割と最悪、と言っても良いだろう。というのも、今日赤うの不死鳥ち寮が勝てば、その時点で優勝は決まりである。

しかも、魔装が使えるレア先輩と、空戦における天才と謳うわれる月ヶ瀬先輩がいる。

——つまり、黒の人魚姫寮と白の一角獣寮は、優先的にこちらを狙いに來るのが目に見えているという訳だった。

これでは実質、十対五（というか一）の形になってしまう。

五対五対二（おまけで三）であれば、やりようは幾らでもあつただけど……。

如何にも学生らしい、考えの甘さが出してしまったことを、ここに来て痛感してしまっていた。

「ちよつとこれは、どうしようか……」

「……捨て試合にしましょうか？」

「ん、でもでも、やるからには勝ちたいよ？」

「そう、ですわね。わたくしのせいであるのは重々承知ではありますが、それでも全力は尽くしたいですわ」

「とはいえ、僕ら一年組では、箒をオート操作にした囲しか出来ないし、レア先輩も長くは飛べないだろう」

五人揃って頭を突き合わせ、苦悶の表情を浮かべることになってしまった。

ゲームの時は特に思わなかったけど、直前に試合形式を伝えるのは、普通にシステムとしてダメすぎるだろ……。

焦るせいで、思考が空回りする。

ちよつとこれはもう、諦めて特攻かけるしかないんじゃないの……みたいな雰囲気の流れ始めたところで、

「おやおや、お困りかい？ 生徒諸君」

ぼんやりと煙をふかしていたアテナ先生が、如何にも秘策がありますよ、みたいな顔でそう言った。

「それなら仕方ないなあ。ここはセンサーが先生らしく、ちよつとだけ助けてあげよう」

「アテナ先生に……？」

「いやちよつとキミね、そうやって訝し気な眼を向けてくるのはやめたまえ……これで

もせんせーは、そこそ有能なんだよ？」

見ていたまえ！ とアテナ先生は展開した魔法陣に腕を突っ込んで、大きめの箒を二本、取り出した。

……？

何？ これは……。

「せんせーはさあ、常々思っていたんだよね。空戦は、一人でこなすにはやるが多すぎるって——箒の操縦に加速減速、身体にかかるG等に対する守護魔法、あるいは専用の分解魔法に加えて、敵を視認し、攻撃と防御までしなくちゃならないだろう？　しかも、ほとんどの場合において、速度は音速の域に達している」

もちろん、それらをこなすために、二年からじっくり教えてるんだけど……やつぱりこの辺は、センスの問題にもなってくるだろう？　とアテナ先生は言葉を紡ぐ。

なんか突然、講習みたいなのが始まったな、と渋い顔をしてしまったが、先輩たちは納得の表情で頷いていた。

「だからさ、以前思ってたんだよ。これ、役割分担したら良いんじゃない？　つて。操縦と、攻撃にさ。あるいは、片方を魔力タンクにしても良いだろう。で、そう考えた結果の産物がこれ——つまり、二人乗り用の箒だ」

これなら未熟なキミらでも、そこそ戦えるんじゃない——なんて言いながら、アテ

ナ先生は俺に箒を押し付けてきた。

ま、少年ならやれるよね？ と付け加えて。

そして。

「ペアとしては、こうだ。キミと葛籠織。リスタリアと空城。この二ペアで、月ヶ瀬を援護するように、一丸となって飛んでもらう」

さ、いつてらっしゃい。と、アテナ先生は親指を立てながら、にこやかに言った。

で、現在に至るといふ訳である。

アルティス魔法魔術学園上空——校長が展開した、超巨大守護魔法内。

後ろに攻撃・防御役の葛籠織を乗せて、俺は必死に空を駆っていた——チラと視線を走らせれば、先輩たち十立華くんは、明らかに多数に追われているように見える。

少なくとも、助けは求められる感じでは無かった。

予定と違い過ぎてキレそうである——それもこれも、後ろで高笑いしている、クラウドネス先輩のせいだ。

いや、さつきから他の生徒にも、ちよくちよく邪魔されてはいるのだが……なんかこ

の人だけ、開幕から俺だけを執拗に狙ってきてんだよな……。

どつかで恨みでも買ったかな、とかふわふわ思っていたのだが、よくよく考えてみなくても、これ絶対、宣戦布告のせいである。

何か……何なんだろうな……。

転生してから、その場その場で良かれと思つてやったことが、全部カスの予想外になつて返ってきてただけ……。

純粹に嬉しかったことが、隠^アし^{テナ}キヤ^{先生}ラが出てきたということだけ、と言う事実には普通に落ち込んでしまった。

あつちは《加速》でその気になれば、魔力が尽きるまで延々と速度を上げられる、という事実にも悲鳴を上げてしまいそうである。

箒の操作も未だにイマイチ分からないし、二人乗りだからかガンガン魔力吸われるし、挙句の果てには、

「少しは反撃してくれても良いんだぜえ、出来ればだがなあ！」

といったように、煽られ倒れているのである。大人げなさ過ぎるだろ。マジで顔が良くなかったら、一生恨む自信があつた。

というか、暫くは根に持つてやる。

「ん~~~~~……かんかん~~~~」

そんな中、葛籠織が耐え切れないと言ったように、苦悶の声を上げる。

気持ちは充分に分かるのだが、俺も我慢しているのだから、何とか我慢してほしい——なんてことを言おうとしたら、

「何考えてるのかは分からないけど、手を抜くのやめようよ。日鞠、そういうの一番嫌い」

バシバシと俺を叩き、日鞠は「それに」と言葉を続ける。

「もつと速くても、何しても、日鞠には視えるよ？」

だから、ちゃんとやって？ と、日鞠は耳元で囁いた。

当然ながら、俺は手加減をしていたつもりはない。

そのつもりは、無いのだけれども——

「……十秒、好き勝手するぞ。サポート頼む」

「あはっ、任せて〜！」

——遠慮はしていた。

それはもちろん、相手にではなく。

先輩たちと、立華くん——それに何より、箒と日鞠にである。

だけどもあ、もう良いだろう。

日鞠が良いって言ってるし、何より、段々腹が立ってきた。

箒は壊れたら、土下座とかしとけば良いし……。

どうせ経験値は等分だ。全部俺が落としたってそんなに問題ないだろう。意外に思われるかもしれないが、俺は結構、沸点は低い方なのである。

(チツ、ッ)までかあ……期待外れも良いところだったじゃあねえか)

仲間の魔力反応が一つ消えたのを感じしつつ、突然暴走し始めた二人組を眺めながら、ウィル・クラウネスはひとりごちる。

あのレア・ヴァルガナンド・リストリアが、あそこまで魅せてきたのである。

当然、あの宣戦布告した少年も、相当にやるのだろうと思っていたのだが——
「箒に振り回されてやがるな、つまらねえ」

速度だけはいっちょ前だが、それ以外はてんでなっていない。

空戦は基本的にセンスだ。努力も必要ではあるが、何よりセンスを要求される戦いである。

そしてあの少年に、それは無かった。

これ以上は時間の無駄だろう——早々に仕留めてやる。

『学園最優』と月ヶ瀬が陥っている、膠着状態もそろそろ終わる頃合いだ。

「射撃魔法：重複展開」

『M a g i a d i t i r o : D i s t r i b u z i o n e d u p l i c a t a』

《加速》を発動させながら、ウィルは魔法陣を五つ展開して、追い続ける。

射程圏内に入るまで、五秒も必要ねえ。

何なら背中掴んで、振り落としてやったって良い——

「あ、？」

瞬間、彼らの姿が消えた。

忽然と、空気に溶けたかのように。

思考に一瞬、空白が差し込まれる。

「しまっ——」

「目標捕捉」

超高速でありながら、真逆への方向転換。

それに反応できたのは、偏に彼女の持つ属性が《加速》だったからに他ならない。

ウィル・クラウネスは、自身の速度を上げる他に、自身の反射速度や認識速度にも《加速》をかけている。

一秒は、彼女にとって十分割出来ると言つても良い——その彼女が、一拍遅れた。予め展開しておいた魔法を発動させることで、撃ち放たれた魔法同士が至近距離でぶつかり爆発を巻き起こす。

それをぶち抜きながら、ウィルは《加速》を限界まで発動させて、

「クハッ、ハハハハハハハッ！ 良いぞお、それでこそだあ！ 盛り上がってきたじゃあ——は？」

真横に現れ、にこやかに手を振る少年と少女に、ウィルは理解不能を示す擬音を一つ、口端から漏らした。

彼女は今や、この場にいる誰よりも速い——教員でさえ、追いつくのは困難な速度が出ている。

それに並ぶ……どころか、余裕そうに笑う？

先程まで、まともに飛ぶことすら出来なかつた少年少女が？

この——たつた十数秒で、コツも何もかも把握した、とでも？

有り得ない——一瞬だけ思つた一言を振り払うより先に、

『Sparrare!』

再展開されていた射撃魔法が、的確にウィルの全身を穿つた。

不意に受けてしまったそれに、視界が二、三度と点滅し、身体が自由が一瞬にして奪

われる。

箒が手からすり抜けていくように離れていって、空気の波にさらわれたウィルは「クハツ」と笑った。

強いつか、期待できるとか言うレベルじゃねえ。あれは——

「あれは、化物だろーがあ……クソツ、『学園最強』は流星に返上になるなア……」

ギユンツ！ と落ちていくこちらに見向きもせず、流星の如く上空へと駆け抜けながら、まるでついでのように他生徒をボコボコと落としていく様子を見て。

ウィルは呆れたように、そう呟いた。

「おいおい、マジか……これはちよつと、せんせー的にも予想外だなあ」

『学園最強』が落ち、超高速での曲芸飛行を見せ始めた我が生徒を眺めながら、アテナ・スীগレットは一人、半笑いで言葉を零す。

可能性を与えたのは彼女であるが、しかし、多少はマシになるだろう——そのくらい
の気持ちの提案だった。

何せあれは、アテナが個人的趣味で改造して作った、質も大して良くない箒である。

その証拠に、たった五分の稼働で、箒は既にガタがきつつあった——それなのに。「やっぱり、あの少年は当たりだなあ……」

蒼色の魔力光に彩られた流星は、もう止まらない。

あれはもう、手が付けられないだろう——今日の勝ちもまた、赤の不死鳥寮で決定だ。日之守・葛籠織ペアによって均衡は崩され、月ヶ瀬とリスタリア・立華ペアは完全に包囲から抜け出した。

落ちる、落ちる、落ちる。

光が駆け抜け、光が瞬く度に、他寮の生徒は地へと落ちていき、救護隊に回収されていく。

頼みの綱と言っても良いレミラ・フィルフラウスも、熾烈なドッグファイトの果てに撃墜された。

ここまでのワンサイドゲームは、各寮對抗戦始まって以来、初めてなんじゃないかな？　なんて思いながら、アテナは背もたれへと身体を預けた。

「うん、うん……やっぱり、あの子しかいない。色々考えたし、イレギュラーばかりで、本当に困らされたけれど」

それでも、結果的には良かった、と。

むしろ最高に辿り着くことできて、ラッキーであった、と。

アテナはひとりごちる。

「日之守甘樂……あんなに変なのは、あいつ以来だ。それに何でか知らないが、既に混ざつてるし……せんせーの為にいるようなものじゃないか。もう、ゾクゾクしてきちゃったなあ」

煙をくゆらせながら、アテナは妖しく笑う。

「欲しいよ、キミが欲しい。何が何でも、せんせーのモノにしてあげるからね、少年」

黒の人魚姫寮と、白の一角獣寮。

その全ての生徒を空から撃ち落としたのと同時に箒が爆発し、先輩に抱きしめられるように拾われた少年を見ながら、アテナは情欲に塗れた声で、そう呟いた。

◇名無しの神様 だからおめーのせいなんだよ！

◇名無しの神様 責任者やろがい！

◇名無しの神様 現実逃避すな

◇イカした神様 はい……ごめんなさい……。

◇名無しの神様 で？ 流石に調査くらいはしたんだろ？

◇名無しの神様 おらっ、話すんだよ

◇イカした神様 うん、まあ、結論から言うんだけど

◇イカした神様 つぱバグってんね。完全に世界データ訳分からんことになってた

もん

◇名無しの神様 いやワロタ

◇名無しの神様 シレットとクソデカ情報口にするのやめろ

◇名無しの神様 「もん」とか付けときゃ許されると思ってるのか？

◇名無しの神様 にしても、やっぱり世界側からイカれてたか

◇名無しの神様 原因は日之守か？

◇名無しの神様 せやろな

◇イカした神様 んー、まあぎつくり言うとな、

◇イカした神様 転生者二人分のリソースに世界の方が耐えられなくて、キャパ求め

て勝手に別次元に接続したっぽいんだよな

◇イカした神様 だから世界側が変に拡張されて、他キャラ等に影響が出てんのかな
 ↳って感じ

◇名無しの神様 は？

◇名無しの神様 は？

◇名無しの神様 いや、は？

◇名無しの神様 待て待て待て待て待て待て待て待て！

◇名無しの神様 それってつまり、新しい世界が創造されたってことか!?

◇名無しの神様 軽いノリで変なこと言うのやめろ！

◇名無しの神様 創造っつーか、拡張だよなこれは

◇名無しの神様 世界拡張って権能的に許されてるのか……？

◇名無しの神様 いや……しりゃん……

◇名無しの神様 《神焔》もこの辺の影響か？

◇名無しの神様 そこはどうなんだろな。世界拡張で出るほどのデカイ影響ではな

くない？

◇名無しの神様 まあ、それだけならな……

◇名無しの神様 一番分かりやすい影響は今のところアテナせんせーじゃねえか？

◇名無しの神様 それはそう

◇名無しの神様 いきなり日之守が連れてきた時心臓止まったもんな

◇名無しの神様 二人乗り箒とかいう、知らんアイテム出してきたし……

◇名無しの神様 アレほんま意味不明でウケる

◇名無しの神様 しかも数分で完全に乗りこなす日之守な

◇名無しの神様 あそこだけ完全に別ゲーで笑っちゃった

◇名無しの神様 バグ生徒とバグ先生のコンビ爆誕しちゃったあ……

◇名無しの神様 シレッと日鞠たんも攻撃全部当ててんだよな

◇名無しの神様 これ日之守だから「まあ……そういうこともあるか」で済んでるの、

感覚死んでる感じがして最高だな

◇名無しの神様 これ全体的にレベルが日之守に引つ張られるように上がってるのか？

◇名無しの神様 パワーレベルリングって次元の話じゃなくなってきたんすけど……

◇イカした神様 まあでも、取り敢えずは様子見つてことでOKらしいから。このま

ま行くぜオラア！

◇名無しの神様 お前は少しは反省しろ

◇名無しの神様 転生させた側も、させられた側も馬鹿なの終わり過ぎでは？

◇名無しの神様 だから（世界が）終わってんだよなあ……

◇名無しの神様 いや、つかこれ、つまりこの先は何が起こってもおかしくない……ってことで良いのか？

◇名無しの神様 まあ……

◇名無しの神様 そういうことでしようね……

◇名無しの神様 様子見つてことは、ある程度は変わらないとは思うけどな

◇名無しの神様 世界が日之守った……ってコト!?

《left》

《left》

【もうやめたら？】 蒼天に咲く徒花 ヒロイン全滅世界滅亡ルートRTA [RTAすんの]

《left》

第二試合も勝利したことで、三日目が来る前に、早くも赤の不死鳥寮の優勝が決まった。

まあ、そうだとしても、三試合目は行われるのだが……二位と三位まできっちり順位

付けするのが伝統である。

ここまで来たら、三日目もきっちり勝って、二位争いを苛烈にしたい気持ちがあるな——なんて思いながら、ひゆるひゆる落ちていけば、滅茶苦茶な速度で落ちてきた月ヶ瀬先輩に回収された。

視線を横にやれば、葛籠織もレア先輩に抱きしめられて、大騒ぎされている。

あの二人、結構仲良いんだよな……。

ゲームでは見られなかった絡みなので、どうにも新鮮味があった。

「かつ、甘楽くん！ 大丈夫!? 生きてる!?!」

「いや、うん。全然平気です、ビックリするくらい無傷なんで、安心して……うわっ、泣いてる」

「うわっ！ じゃないよ……もうっ、本当に心配したんだからね?」

ていうか、飛行魔法使えるんだから、無事なら使つてよ! と半泣きで訴えて来る月ヶ瀬先輩だった。

どうせ落ちても、救護班に拾われるのだから、そう心配することでも無いだろうに……とは思わないでもないが、その上でこうやって心配してくれるのは、月ヶ瀬先輩の美徳だよな、と思う。

この人のこういうところが好きなんだよな、本当に。

「私は甘楽くんの、そういう楽観的のところ、嫌いだけどね……」

「いや、その、ごめんなさいってば……」

「ごめんで済むなら警察はいらないんだよ？」

「そこまで重罪だったかなあ……」

「女の子を泣かせた罪は重いんだから」

「そう言われるとちよつと納得しちゃうんでやめませんか？」

「というか、言葉に微妙な棘があった。」

「これではまるで、俺が悪者である。」

「ただでさえ、慣れない空戦をこなしたせいとか、全身が疲労を訴えているのだ。」

「もうちよつとこう、労ってくれても良いのではなからうか……なんて軽口を叩く前」

「に、俺達は会場へと着地した。」

「うお……うるさい」

瞬間、衝撃波でも降ってきたのか、みたいな感覚が全身を貫く——歓声だ。

「上手いこと降り立った俺達五人に浴びせかけるように、会場中から熱のこもった声が降り注いでいた。」

「中にはパンパカ魔法を放っている生徒までいる始末だ。あいつ絶対後で先生に締め上げられるだろうな。」

「いやー、あはは……派手なお出迎えだねえ」

「ここまで盛大にやられますと、何だか委縮すら覚えますわね……」

「あは、レア先輩は小心者ですもんね〜」

「ちよつと日鞠!? 貴女、わたくしの扱いがぞんざいになってきていますわよ!」

レア先輩にグルグルグルーつと振り回されて、楽し気に笑う日鞠であった。

いやなんか、俺が思ってたよりあの二人仲良いな……。

その親密度をもう少し立華くんに分けてやってほしい、と思えば

「えつと……その、なんだ、お疲れ」

その立華くんが、ぐったりしたように隣に並んでそう言った。

俺達の中で一番疲れてそうである——まあ、それも納得ものではあるのだが。

というのも、今回立華くんは、レア先輩の魔力タンク兼、補助としてペアを組んだのだ。

魔力を吸い上げられるのって、かなり身体に負担がかかるんだよね……。

見た感じ、彼の残り魔力は四割を切ってる、かな……と言ったところだ。

ゲームであれば、一日休息に費やそうかな、と考えるレベルの疲れ具合である。

「大丈夫? 肩貸そうか?」

「いや、いい。僕は平気だ……それに、どうせもう、戻って休むだけだろ」

「まあ、そんなんだけど……」

そうするまでに倒られでもしたら、困るんだよな——まあ、その時は月ヶ瀬先輩とかに対処してもらえば良いか。

ここらでグツと親密度を上げてもらった方が良いだろうし。

世話好きな月ヶ瀬先輩としても、放っておけないだろう。

「というか、僕の心配している場合か？ 君だって、相当に消耗しているだろう」

「立華くんよりマシだよ。それに、魔力の方はそう減ってる感じしないし」

「……相変わらず、気持ち悪いな」

「もうちょつと言葉選んでみない??？」

普通にただの暴言だった。

俺もちょつと気にしてる部分なので、出来れば優しく触れて欲しいものである。

思うままに魔法を使えるのは気持ちが良いが、出所が微妙に不明なのが、若干不安だった。

「さて、と。それじゃ戻るとしよっか。いつまでも、ここにいる訳にはいかないしね」

パンパン、と手を叩いた月ヶ瀬先輩が、リーダーらしくそう言った。

それに応じて、葛籠織はレア先輩に背負われ。

立華くんはフラフラ……と見てて不安になる感じで歩き出す。

「何か……こうして見ると、意外と圧勝って感じじゃないね」

「怪我は全員、ほとんど無いんですね。MPが全然無い魔法使い集団みたいなの」

「あははっ、言い得て妙だ」

でも、あとちよつとだから。がんばれっ、と励まされつつ、控室へと戻る。

そうすれば当然、特徴的な青髪を靡かせる、我らが副寮監がお出迎えしてくれたのだった。

といつても、もちろんソファに堂々と座りながら、煙草を吸っているのだが。

「や、お疲れ様——気持ちの良い勝ちっぷりだったねえ。せんせーも鼻が高いよ」

ぼんぼんぼーん、と俺達の頭を軽く叩いて、

「良く出来ました。ま、箒をぶっ壊したことに関しては、今回は不問にしてあげよう」

元々壊れる前提みたいなところあったしね、という聞き捨てならないことを言いながら、笑うアテナ先生だった。

しかし、それで完全に気が抜けてしまったのか、立華くんはソファにぶっ倒れ、葛籠織はその隣にくつたりと座ってしまふ。

こうして見ると、本当に死屍累々って感じだな……。

レア先輩も足ガタガタいってるし、葛籠織は俺が背負った方が良かったかもしれ無い、なんて思う。

「おや、月ヶ瀬と日之守は平気なのかい？」

「ええ、まあ、私は空戦慣れてますし、今日は甘楽くんが頑張ったので」

「保護者みたいな面で頭撫でるのやめませんか？ 恥ずかしくなってますけど

……」

「今更過ぎない？ お姉ちゃんみたいなものですよ」

「全然違いますけど……!？」

「これだから年上幼馴染は……。」

普通にドキドキしてしまうからやめてほしかった。

そういうことは、俺じゃなくて立華くんの方にやってほしいんだよな。

嬉しくないという話ではなく、単純に相手を間違えているという話である。

「フウン……仲睦まじくて良いね。羨ましいな」

「成人女性が何言ってるんですか……」

「年齢は関係ないだろう!？ やれやれ、失礼な少年だな、キミは……」

でも、とアテナ先生は言葉を続ける。

「そういうところ、好ましいな——ねえ、少年。日之守甘楽くん」

「はい？ えっ、何ですか急に……」

「キミ、せんせーの《box: absolute (0/0), z9》

ノ
肉体 になつてみない？」《／box》

「は？」

「魔装展開」

つい先日、聞いたような詠唱が、耳朵を叩く。

そう認識した瞬間、吹き荒れる魔力に俺を含めた全員が、その場に押し付けられた——え？

「之なるは、光を呑みし始まりの闇」

控室が——いや、世界が。暗闇に吞まれて消えていく。

抵抗は不可能だった——ただ、驚愕と困惑で、混乱することしか出来ない。

「讚え、敬い、しかして恐怖せよ」

知らない詠唱だった。見覚えのない魔装だった。

少なくとも、俺の知識には一切存在しない、先天性魔術属性。

「我が身に宿りし闇は《深淵》」

いや、いや。

違う、それどころではない。そんな程度の話じゃない！

まず、アテナ先生が——アテナ・スィーグレットが敵になるだなんて、聞き覚えの一つもない！

はあ!? 隠しキャラなのにこんなことしてくんの!?

「おっと、まずは最初に、こう言っておくべきだったかな——我が名は、ノエル・ヴァルトリック・リスタリア。キミらが言うところの、黒帝さ」

魔装は完成し、魔力は再度解き放たれた。

レア先輩のそれとは、完成度が桁違いのそれが発する圧は、破壊を伴っていて。

吹き荒れる闇に、意識はあつさり——

——飛ばさない! 死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ!

全員を囲うように、七枚の守護魔法を展開させる。

さながら津波の如く襲い掛かって来る暗闇を、力づくで押し返しきると同時に、パリン、と音を立てて守護魔法は消え去った。

「うわ、魔力の圧だけで、七枚全部破るのかよ……ありえねえ……」

「い、いやいや、有り得ないのはそっちだ、少年。今の一瞬で七枚も展開し、なおかつ、

せんせーの魔装攻撃を防ぐなんて——全く、さっきの試合と言ひ、キミにはビビらされてばっかりだなあ」

驚いたように、黒帝は笑う。

何笑つてんだ、ビビつてんのはこつちなんだよ、と文句を言いたいところではあるのだが、流石にそんな軽口を叩いてられるほどの余裕がない。

一先ず、気絶している皆を回収して後ろに隠したけれど、ほとんど意味のない行動だろう。

それに、何とか抵抗出来るように見えてるけど、普通に負ける気しかないし……。「ていうか、黒帝？ それこそ有り得ないだろ……レア先輩の肉体狙いじゃなかったのか？」

「それ、キミが言うのかい？ 少年が邪魔するから、こういう形になったんじゃないか……もちろん、言うまでもなく、せんせーにとっては今が、理想以上なだけだね」

「は？ 何だよ、それ……また俺のせいってこと……!？」

「お陰だよ、お陰——キミが最初のプランを破壊してくれたことによる、ラツキーと言っても良いだろうね」

俺の知ってるアテナ先生と、寸分変わらない笑みを浮かべながら、黒帝が言う。

やばいな。

意味不明な状況な上に、意味不明なことばかり言うから全然頭に入ってこない。これももう一回質問して良いやつかな、と思えば

「せんせーはね、キミがレアに関わった時点で、レアのことは諦めたんだ」

と、何でも無いように、彼女は笑った——は？

諦めたって何？ えっ……えっ!?

逆に、諦められるもんなの!? 唯一憑依できた、最高の肉体だろ？ レア先輩は！

「おっと、詳しいね。流石、せんせーの見込んだ生徒だ——その通り、憑依は凶悪な魔術だけれど、その分条件が厳しい。血縁くらいでないで、憑依したところで、万全に身体は動かせないさ」

「だったらー!」

「でも、例外はある——何事にもね。これはせんせーも、キミのお陰で知っただけど、混ざりものになら、その限りではないっほいんだよねえ」

「混ざりもの……?」

「ふふ……少年みたいだな、一つの肉体に、二つ以上の魂が混ざり合っている人間を、せんせーは“混ざりもの”って呼んでいる。と言えば分かるかな?」

いや分かん。全然分かん。もうビックリするくらい分からなかった。

え? いや——その、なに?

つまり黒帝は、俺が転生者だつてことを見抜いてる……つてことか？

それで、そういう人間は容易に憑依できると？

「憑依と言うか、融合と言うべきなんだけどね」

「また新しい単語出てきた……」

「言葉通りだよ、分からない？　つまり、二つを一つにするのも、三つを一つにするのも、

同じつてことさ」

「……？」

如何にもわかるでしょう？　みたいな顔で言われてしまったのだが、パツと分からなかつた。

というか、情報量が多すぎて、脳みそがパンクしているとんでもない——何だろう、一人分の肉体に、二つの魂を入れる（これが多分、俺がさせられた転生）のも、三つの魂を入れるのも変わらない、ということだろうか。

「……いや、だとしても、おかしい。仮に俺が該当するとしても、アテナ先生は違うだろ」「おかしくないさ、だつてせんせーは——ああ、つまり、『アテナ・スィーグレット』は人生二回目の女だつたんだから。時間逆行者……とか言えば伝わるかい？」

「はあ。」

いや知らん知らん知らん知らん！

また全然知らない情報が出てきた!!

何で一言喋る度に、俺が知らない情報が出てくるんだよ!

は? 二周目以降でしか出て来ない理由って、つまりそういうことだったの!?

何でこんなクソデカ情報を、こつちに転生してから知らなきゃならねえんだ……!

謎多き女だとしても、抱えてる謎がデカすぎるだろ!

「未来の彼女の魂が、現代の彼女の肉体に入り込む、その現場に居合わせちゃったからさ。ついお邪魔してみたなら、上手くいっちゃったって訳だ」

「……つまり?」

「今やせんせーは、『アテナ・スイーグレット』であり、『ノエル・ヴァルトリク・リスタリア』である……ってことさ。三つの魂は、今や完全に一つに溶けあつた……魂と魔法魔術は深く結びついている。今のせんせーは、全盛期のせんせーより強いよ」

ゴクリ、と息を呑む。

遅れてきた恐怖が、手を微かに震わせた。

それはつまり、その気になればいつでも殺せる、という意味合いなのだから。

——だから、落ち着け。

ゆつくりと深呼吸をして、思考をクリアにする。

殺せるのに殺していないということは、殺さない理由があるはずなのだから。

「……それで、結局のところ、俺達に何の用なんだ？ それだけの力があるなら、校長を狙っても良かったはずだ」

「ん、そうだね。でも万全を期したくてさ。少年の肉体に、入り込ませてもらうかなって——」

「ッ、砲撃魔法——」

「——思ってたんだけどね、やめにするよ。プランはまたしても変更だ」
「は？」

展開しかけていた魔法が、ふわりと霧散する。

同時に、アテナ先生——いや、黒帝か？ が、魔装を解いた。
何で？

「今の攻防で理解したよ、アテナの言うことは正しかった。キミは強い……強すぎるくらいだ。不覚にも、希望が見えたくらいには」

「??」

「だから22年、キミに一つ、頼みがある——せんせーと、結婚してくれないか？」

「なんて??」

「あつ、勘違っちゃった……つい本音が……コホン。せんせーと、世界を救ってくれない

か？」

「何をどうやったたら今のを間違えるんだよ」

突然シリアスが終わった音がした。

ていうか今、本音って言った？

は？ マジで何なの、この女……。

明らかに雰囲気霧散したにもかかわらず、取り繕ったばかりの真剣な表情を向けて来る、アテナ先生／黒帝を見ながら俺は、

「いや、どっちも無理です……」

と答えるのだった。

冷静に考えなくても、十三歳に求婚して来る成人女性には怖すぎるし、世界を救うのは立華くんの仕事なのだから、当然すぎる回答だった。

第一の破滅、来たれり

《left》ご神託チャット▼《left》

《left》

◇名無しの神様 ……………

◇名無しの神様 ……………

◇名無しの神様 ……………??

◇名無しの神様 ……………??

◇名無しの神様 何かもう笑うしか無くなってきたな

◇名無しの神様 なに、この……なに？

◇名無しの神様 ワロタ

◇名無しの神様 さっきまでのワイら「立華起きろーッ！ 起きろ起きろ起きろ起き

ろ!! 死ぬ！ 死ぬから!! とにかく起きて逃げろー……ッ!!!」

◇名無しの神様 今のワイら「はにやく……？」

◇名無しの神様 はにやく……

◇名無しの神様 もう訳分からんニヤンねえ

◇名無しの神様 何でもありになったとは言ったけどさあ……

◇名無しの神様 仮に拡張されても軸は変わらねえんだからよお……

◇名無しの神様 基本はメインシナリオ通りなはずなんだよなあ……

◇名無しの神様 そもそもこっちの介入に対して「混ざってる」とか言える以上、黒

帝ちゃんワイらの領分にちよつと踏み込んでない？

◇名無しの神様 そう……ですわ……

◇名無しの神様 いやでもこれ、立華の方は混ざってる判定されてないよな？

◇名無しの神様 そういえばそうだな……

◇名無しの神様 やっぱこれ、日之守自体に問題があるのでは……

◇名無しの神様 まあ、だとしてもこっち側に踏み込んでるのは間違いはないんだ

よな

◇名無しの神様 敵味方問わなくても、最高峰の才能持ちが拡張で壊れた性能に達し

てんだよ

◇名無しの神様 半歩分だとしても神の領分に踏み込んでくるの、普通に大問題で

すが……

◇名無しの神様 拡張どころじゃなくて、世界としての位階が上がってますねえ、こ

れ

◇名無しの神様 ふうく……

◇名無しの神様 責任者くん、息してる〜？

◇イカした神様 ……

◇名無しの神様 し、死んでる……

◇名無しの神様 メインシナリオくんと一緒に逝っちゃった！

◇イカした神様 上司ちゃんから鬼電来てるンゴねえ……

◇名無しの神様 いやくさ

◇名無しの神様 悠長にチャットしてる場合じゃねえんだよなあ……

◇名無しの神様 はよ出るカス

◇名無しの神様 上司ちゃん降臨してて草

◇名無しの神様 いやっ、っーかこれ、何がどうなった結果だ？

◇名無しの神様 そりやもちろん、世界拡張の影響だろ

◇名無しの神様 拡張っーか、世界レベルが上がってるっばいんだけどな

◇名無しの神様 明らかに原作から乖離してんだよ

◇名無しの神様 黒帝味方ルートとか、なんなんすかね……

◇名無しの神様 味方って言うか……何かその……せんせーと融合してるんすけ

どお

◇名無しの神様 しかもそれに日之守が求婚されてんだよね

◇名無しの神様 情報量が多いとかいうレベルじゃないんだよ

◇名無しの神様 あの変な女たらしバグ太郎出禁にしろ

◇名無しの神様 何でラスボス誑し込んでるんですかね……

◇名無しの神様 隠しキャラも一緒に落ちてるの意味不明だろ

◇名無しの神様 そもそもループって何？

◇名無しの神様 まあ……その説は前から提唱されていたが……

◇名無しの神様 せんせー、マジでどこからも情報開示されてねえからな

◇名無しの神様 開発者がSNSで「アテナは作中でもかなりの激やば女ですよ」つ

て呟いてたことしか情報がないんだよな

◇名無しの神様 なんでこんなぶっ壊れた世界線で真実を知る羽目になってんだ

◇名無しの神様 ちよつと納得いくのが腹立つところだな。道理で意味深な台詞

ばっか言う訳だよ

◇名無しの神様 しかもこれ、つまり黒帝と魔王以外に新たな脅威が出てきた……つ

て理解で良いんだよな？

◇名無しの神様 まあ、飽くまでせんせー／黒帝ちゃんの台詞だけだから断定はでき

ないけど、多分そういうことだと思っ

◇名無しの神様　　そうでもなきや、あの黒帝ちゃんが校長への復讐を諦める訳ないからな

◇名無しの神様　　あるいは魔王がもつとヤバくなってる可能性もあるけどな

◇名無しの神様　　実際、味方キャラばかり強化されてるし、そこは当然だろうな

……

◇名無しの神様　　レア先輩もだし、黒帝もせんせーもこれな訳だしな

◇名無しの神様　　これもしかして、日之守が全部の起点になってるのか？

◇名無しの神様　　てか、そろそろ日之守の方にもチャンネル繋いだ方が良くねえか？

◇名無しの神様　　ほんそれ

◇イカした神様　　いやもうずっと前からやってんのに繋がらないんだよね

◇名無しの神様　　は？

◇名無しの神様　　おい初耳だぞそれ

《left》

《left》

《left》 【壊れた世界で】 蒼天に咲く徒花　ヒロイン全滅世界滅亡ルートRTA 【何をする】

《left》

暗闇が無くなり、元の状態に戻った控え室。

そこでぐったりと倒れ伏した四人を守る形で立つ俺と、相対するアテナ先生^{黒帝}。

どう見ても、これからバチバチに殺し合う感じの構図であるのだが、何かもうそんな空気じゃなくなっていた。

俺の返答に、滅茶苦茶泣きそうな顔をしたアテナ先生^{黒帝}が、絞り出すように言う。

「……………アテナ先生^{黒帝}が、未来ではキミの恋人だつて言ったら、信じるかい？」

「えっ、こわ……………疑います。未来の俺の倫理観と貴女の常識を……………」

「そこまで言うことだったかなあ!？」

あんなにラブラブだったのに……………! と妄言を吐き散らかすアテナ先生^{黒帝}だった。

何だろう、さつきとは別種の恐怖で身体が震えてきたな。

俺が転生者じゃなかったら、普通に気絶とかしてたと思う。

「まあ冗談はさておき、だ」

「本当に冗談だった？ トーンがガチ過ぎだっただろ」

「うるさいっ! 冗談つてことにしておきたまえ——そろそろ、時間も無くなって

きたんだから、なおさらね」

「時間？」

また急に意味深なことを言い出したな……と思ったが、すぐにその真意を理解する。魔装を展開までしたのだ。

そろそろ異常を検知した教員か、あるいは校長先生がすつ飛んでくる頃だろう。

それはきつと彼女も分かっていたことだろうから、今の彼女がかつての自分よりも強い、という言葉は嘘じゃないんだろうな、と思う。

真正面からぶつかって、勝てる自信があつたのだろう。

「ん？ ああ、別にそこは、気にしなくても良いよ……いや、元々はそこが狙いではあつただけどね。どうせ有耶無耶になるから、考慮しなくて良い」

「有耶無耶になつて良いレベルの話では無いと思うんだけど……」

「なつて良いんだよ——いや、ならざるを得ないんだ」

「……？」

「良いかい？ 良く聞きたまえ……これから世界は、七つの破滅に脅かされる」

「破滅……？」

「滅亡と言い換えても良いし、終末と読み替えても良いよ。とにかく、この世界が終わるタイミングが、七つ来る。そしてせんせーがいた未来では、ついぞそれに勝てなかつた。

校長は殺され、魔法魔術防衛機構は崩壊し、この学園の生徒も皆殺しに遭い、そして、少年が死んだ」

「すげえ壮大な話になってきたな……」

というか、壮大の一言で纏めたくない感じのスケールだった。

先程から、あまりにも初出の情報ばかり出されているせいで、普通に現実逃避してしまふ。

完全に別ゲーの話だろ、これ……。

流石にこれは俺のせいではない？ という気持ち強い。

むしろ、これまでのイレギュラーも全部、その七つの破滅とかいうやつ^のせいなんじゃないの、と思つて来たほどである。

「これをね、少年にどうにかして欲しいんだよ」

「貴女と結婚するくらい無理だと思えますけど……」

「せんせーと結婚するのって、世界滅亡級に無理だったのかい!？」

いい加減泣くぞ?! と半泣きで睨んでくるアテナ先生^帝だった。

泣かれるとこつちが悪いみたいな気分になるからやめてほしいな、とだけ思う。

「いや、しかしだね、少年。キミにしか頼めないんだよ、こんなこと」

「買い被り過ぎですよ……今だって、俺は貴女より弱いのに」

「でもキミは、これから強くなれる。というか、加速度的に強くなる。キモいくらいにそこが重要なんだよ」

「何か今罵倒混ざってなかった？」

「気のせいさ」

気のせいなあ。

それなら仕方ないな。

「それにこれ、未来の少年に頼まれたことだし」

「う、嘘だ……俺がそんな殊勝なことを頼む訳が……」

「良く意味が分からないけれど、『ムシキングの大会でグーしか出せないけどノーダメで優勝する、みたいな難易度だけど頑張つて欲しい。多分だけど、大体全部俺のせいなので』という伝言を預かっているよ」

「俺だー！ー！ー！！」

すげえ俺だった。

どう考えても前世のことを知ってる俺にしか出来ない、馬鹿極まった伝言過ぎて、その場で絶叫してしまう。

ムシキングとか今更覚えてるやついないだろ。

じゃんけんでグーしか出せないくらい言え。

しかも、俺のせいなのかよ。

何で毎回「俺は悪くないのでは？」↓「俺のせいなんじゃん！」をやらなきやいけな
いんだ。

「ふふつ、理解してもらえたなら、何よりだよ」

「理解したくなかった、こんなこと……それで、俺はどうすれば？」

「んー？　すぐに分かるさ。ほら、来るよ——第一の破滅、『魔王』が」
「は？」

刹那。

会場は——世界は、劈くような悲鳴を上げた。

突如、空より落ちてきたそれを、果たして何と形容するべきか。

東洋に伝わる竜にも思えるが、しかし、内から溢れ出る闇色の魔力によって、輪郭が
酷く曖昧な、巨大な存在。

人ではない、魔獣でもない。当然ながら、魔族でもない。

それは魔王。

魔を統べるもの。魔導を体現せしめた、絶対なる王。

ゆらりゆらりと、会場にそれは舞い降りる。

魔法魔術界最強とすら謳われる、アルティス魔法魔術学園校長、ナタリア・ステラス
オーノの守護魔法を強引に打ち破り。

悠然と、しかしして優雅に。

「——終末である」

そのたった一言にさえ、魔力が乗せられている。

並の魔法魔術師では、それを聞いただけで気を失っていただろう——学園の生徒たちが
がそうならならなかったのは、他にもない、ナタリアと教員たちが、反射で守護魔法を
展開したからだ。

「裁きの時である。決断の時である。処断の時である——あらゆる生命は、ここで
終わる」

誰もが守りの内側にいて、なお跪き、頭を垂れてしまう。

圧倒的だった。

強い、弱い、次元の話ではなく、ただひたすらに、存在が違う。

「余、それは、滅亡を齎す世界の機構」

顎がゆるりと開かれる。

そこにあつたのは、破滅の光だった。

生命を終わらせ、世界を終わらせる、魔の光。

「——破滅の光を此処に。余は、全てを終わらせるもの」

「おいおい、気が早くないか？　もう少しくらい、せんせーたちとお話してほしいところ
 なんだけど」

ただ一人、アテナ・スィーグレット、あるいは、ノエル・ヴァルトリク・リスタリア
 は、魔装を伴い、魔王の前へと姿を晒した。

互いが自然と発生させる魔力がぶつかり合つて、空間が軋んで悲鳴を上げる。

（うわ、本当にアテナの記憶通りだなあ……生徒と先生を丸ごと守ってるせいで
 ナタリアあが動けないの、やつぱり最悪だよ）

会場の状況を把握しながら、彼女は小さく舌打ちをする。

もしも庇護すべき生徒がいなければ、とつくにナタリアが動いているはずなのだ。

それが出来ない——故にこそ、元々彼女はこのタイミングで、襲撃を仕掛けよう
 と画策していたのだが。

「……抗う者か」

「ま、そんなところかな——魔王様はさ、どうやって封印から解き放たれたんだい？」

「世界がそう望んだが故に、余は解き放たれた。ただ、それだけのこと」

まるで世界に意志があるとでも言うような台詞に、アテナノエルは冷や汗を流しながら、未
来の少年が立てていた予測は、概ね間違っていないか、と納得をする。

前回の顕現時には、対話することすら叶わなかった。

何故。どうして。何のために。

そういつた理由の一つすら聞き出せず、戦いは始まってしまった。

誰もがひたすらに動揺し、生まれてしまった多くの死体の上に立つ形で、一応の撃退
となった。

あのような悲劇は、もう繰り返してはならない。

自身と完全に混ざり合った、半身とても呼ぶべきアテナの記憶が、そう叫んでいる。

「これ以上の言葉は不要である——この星は、世界は、これにて終わりであるのだから」

「ツ——短気だなあ！ もうちよつとくらい、悠長にしてくれても良いだろうに！」

「遡行者であれば、時の重要さは分かるであろう」

瞬間、重圧は更に増した。

溢れ出る魔力が指向性を持ち、破滅の光は膨れ上がった。

「王核起動——第一、第二、第三拘束解除」

ナタリア・ステラスオーノが息を呑む。

アテナは杖を掲げ、会場を更に守護魔法で包み上げた。

「王核覚醒——第四、第五、第六拘束解除」

それは世界を終末に導く、終わりの宣言。

創世されると同時に用意されていた、世界の自滅機構。その一つ。

「王核展開——第七拘束解除」

本来、魔王とそれは別物だ。

しかし、世界の揺らぎによって、偶然にもそれは一つになった。

故にこそ、魔王には明確な自我が無い。

あるいは、自我そのものと、滅亡への機構が一体化している。

「之なるは、始まりの破滅。第一の滅亡」

ナタリアは、犠牲を出さないことを諦めるか否かの瀬戸際にいた。

一撃は耐えられる。確実に、誰も死なせない自信がある——だが、その次は？

生徒がいる以上、防戦に徹しざるを得ない。されども、それは死をほんの少しだけ、先送りにするだけだ。

あるいは攻撃に入れば、撃退することは可能だろう。

これもまた、間違いがない——魔王とはいえ、あれはまだ未完全だ。

封印から出てきたばかりで、あらゆる力が本来のそれには及んでいない。

しかし、そうだとしても、攻撃の余波だけで死人が出る。百や二百程度の規模を大きく超える、死人が。

当然ながら、被害が少ないのは後者だ——しかし、決断は容易ではない。

どうすれば良い、と。

思考が停滞しかける。

そんな様子を観察しながら、アテナノエエルはほくそ笑む。

殺す気は失せたものの、禍根が消えた訳ではない。

その苦渋に満ちた面を拝めたことで、一先ずは留飲を下げるとするか、と気合を入れた。

——アテナノエエルがここで、魔王を叩きのめすことは可能だ。

だが、彼女はそれをしない。

何故なら、それでは意味が無いから。

もつと強くなつてもらわなければならない少年がいる。

少し先の未来で、己の非力さに泣いた少年が、記憶に刻まれている。

英雄になるべき、少年を知っている。

「だからほら、そろそろ出番だよ。甘楽」

微笑みながら、彼女は空を見上げる。

真夏に相応しい太陽を背に、一つの影がそこにあつた。

「砲撃魔法：重複拡大展開」

『Magia del bombardamento：Espansione di

Distribuzione duplicata』

蒼色の巨大魔法陣が、空を埋め尽くすほどに展開される。

展開数は優に百を超えており、その一つ一つが、上級魔獣であっても掠めただけで殺せるだろう。

「弾種：限定無し」

『Proiettile：Illimitato』

あまりにも膨大な演算量に、杖が悲鳴を上げる。

処理しきれなかつた部分が反映され、解れ始めた魔法陣を見上げた甘楽は、零れた演算を、無意識的に己の脳みそで補つた。

「目標捕捉——3, 2, 1」

『Sparrare!』

火花を上げ、自壊していく杖が絶叫をする。

瞬間、百を超えた砲撃は解き放たれた。

それは、裁きを下す絶対者に向けられた、抗いの牙。

危険を察し、上空へと放たれた破滅の光とぶつかり合った蒼の砲撃は、しかし、拮抗することなく？み込んだ。

それこそ、裁きのように。

天空より落とされた連なる砲撃は、余すことなく魔王の全身へと降り注いだ。

んもおおおおおおお！ 何で八章でやつと出て来る魔王がもう出て来てんだ

よおー！ー！ー！ー！！

封印はどうなつてんだ封印は！

一章の途中でラスボスが揃うんじゃないやねえ！

ただでさえ、それなりに疲労してる身体に鞭打つて無茶したのに、結構ケロツとした顔しやがって……！

ちよつとは痛いくらい言いやがれ……！

クソツ、何でこんな危険を自ら犯さなきゃいけないんだ……いや、俺のせいらしいから、そんな文句言えないんだけど……。

つかこれ、立華くんが気絶している以上、絶対に殺すことはできないから、撤退させるしか無いんだけど、どうすれば良いんだろうな。

大気に漂う魔力を収束・変換し続けて、俺二、三人分の魔力をぶち込んだのに平気そうな顔してるから、正直力押し出来るかすら分からないぞ。

未完成状態とは言え、流石魔王と言うべきか、弱点属性とか無いし……。

満面の笑みでサムズアツプして来る辺り、アテナ^黒先生^帝は、ガチで俺一人にこいつを叩かせる気満々なのが伝わってくるし……。

しかも杖、壊れちゃったんだよな。

魔法使えなくない？ え？ 終わりじゃん……。

甘^{おれ}楽、設定的に魔術属性無いし、マジで打つ手無いぞ……。

………やはり、拳か？ 男らしく、原始的な暴力で挑むべきなのかもしれない。

ギラギラと目を輝かせ、如何にも「お前を殺す！」みたいな面をした魔王を前に、俺は大きく息を吐いた。

至りし者

「ふ、ふふ——あははははっ！ いやあ、ド派手にやったねえ、少年！」

杖が粉々になったことにより、使っていた魔法が全部消えたので、無様に落下していたらアテナ^{黒帝}先生に拾われた。

何笑ってんだ、と文句を言いたいところではあるのだが、完全にそれどころではない。俺の渾身の一撃は意味を為さず、抵抗する為の手段は、手元で爆発して跡形もなくなったのである。

いや……ちよつとこれ、本当に恥ずかしいな……。

空から現れたと思つたら特に何もできず、ただ落下してきただけのガキンチョになつてしまった。

「まったく、そう卑下するんじゃない。かなり良い魔法だったよ……今の魔王なら、直撃してればオーバーキルですらあつた、とこのせんせーが断言するほどにはね」

「は？ いや、直撃はしたと思うんですけど……」

滅茶苦茶な爆発とか起こっていたし、何よりアレだけ撃つて、全部外すのは流石にあり得ない。

もしそうだとしたら俺、ノーコンとかってレベルじゃないからね？

「んー？ 仕方のない子だな、キミは……ほら、良く観察したまえ。さつきと今では、大きく違う点があると思うよ？」

「違う点……？」

そんなに分かりやすい感じの影響出てたかな、と疑いつつもぼやける目を凝らせば、当然、見えるのはゲーム内で良く見た魔王だった。

このデカい会場を以てして、やっとなまるほどの体躯を誇る、龍を模した姿。その鱗に傷は一つとして無く、血の一滴すら流れていない。

余裕綽々って感じの表情で、俺達を眺めているくらいには無傷だった。

「え、いや……え？ 何一つ変化が見て取れないんですが……」

「え？ もしかして少年って、目が潰れてる感じかい？」

「節穴よりエグイ罵倒が出てきたな」

本当にちゃんと見てる？ とかなり真剣な顔で問うてくるアテナ^黒先生^帝だった。

流石にそうまで言う以上は、何かしら起こったんだとは思うのだが……。

俺の記憶にある魔王と、眼前に佇む魔王に違いは何一つ無いように思えた。

敢えて言うのなら、こうしてまじまじと見ていると、遅れて恐怖がやってくる、というこどくらいか。

「あのねえ……アレが最初に纏っていた魔力、目に入ってなかったのかい？」

「——あつ。あーっ！ そっか！」

未完全体の魔王って、魔力を纏ってたんだっけ！

あまりにも完全体の方が見慣れ過ぎていて、全然違和感が無かったのだが、そうか。一応、効いていたのか……というかあれ、装甲だったのかよ。

ゲームだと主人公が、特殊な力で消し飛ばしてしまうから知らなかった。

へえ、力押しで剥がせるんだな、アレ。

「まあ、だとしてももう、俺に出来ることは無いんですが……」

「？ 何言ってるんだい、本番はここから。そうだろう？」

「無茶苦茶言いますね……」

いや、確かに本番なのはここからだろうが……。

普通に俺がもう、限界だった。

過剰な量の魔力を吸収・変換・収束・出力したせいか、肉体が悲鳴を上げている。

多分、地上に降ろされたらまともに一人で立てない。

今でさえ、気を抜けば意識が軽く飛びそうなのだ。

それに、何より杖が壊れた。

魔法使いにとって、杖とは生命線だ。基本的に魔法使いは、杖が無ければただの一般

人であるのだから。

要するに、今の俺は何かボロボロな魔法使い、ではなく、何かボロボロな一般キッズである、という訳だった。

魔法を扱う為の手段が失われた以上、戦いにすらならないのは明白である。

「そうかな？　せんせーは、そうとは思わないけれど」

「……魔法魔術師からすれば、そうかもしれないませんが。魔法使いからすれば、これは常識ですよ」

「ああ、いや、そうじゃなくなつてさ。少年の言う通り、杖は手段であるけれど、同時に手段の一つでしかないつてことを、せんせーは言いたいんだよ」

魔王が無作為に放つ、死の光線を気楽に躲しながら、アテナ^黒先生^帝は授業でもするかのように言う。

端的に言つて、何言つてんだこの人？　つて感じではあるのだが、流石にこのタイミングで、無意味な情報を垂れ流すとは思えない。

やれやれ、と俺は耳を傾けた。

「言つてしまえば、杖とはプリセットされたプログラムに魔力を通して、魔法を発動しているに過ぎない」

「まあ、そうですね」

「だよね。でもそれってさ、本来人の脳みそでも出来ることだろう?」

「いや、そりゃあ、魔術師がいる以上、構造的には可能なんでしょうが……だから、魔術属性は才能って言われてるんでしょ」

「うんうん。でもさ、魔術師と魔法使いの脳みそに、これといった違いは存在しなかったらしいよ。これってさあ、つまり——魔術をより簡素にした魔法くらいなら、普通の人間でも脳で処理するのは可能ってことだよな?」

「は?」

滅茶苦茶な暴論を振りかざすのはやめろ! と。

そう言いたかった——否、言ったのだ。確実に口にはしたつもりだった。

ただ……そう。次の瞬間、

「そういう訳だから、実践よろしくね! そうら、がんばれ〜!」

という掛け声と共に俺がぶん投げられていなければ、ちゃんと言葉になっていただろう。

ちよつと洒落にならない速度を伴って、俺は魔王へと放たれる——いやこれ死ぬ

! 死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ!

ちよつ……本当に死ぬやつじゃんこれは!?

風圧で身動きが取れず、ただ絶叫するしかなくなった面白人間砲弾と化していたら、

不意に魔王と目が合った。

「——無様だな」

「あ!!?! 一連の流れ見ておいて、そんな煽りが許されんの!?!」

お前、全身を魔力でコーティングして、本気で砲弾になってやろうか——と、考えたところで、ふと気づく。

今俺、自然と魔力を無手で使う発想が出てきたな、と。

というか、そうする為の方法が、考えるまでもなく分かったな、と。

何でだ? と思う前に答えに辿りつく。

これ、目がぼやけてるんじゃないやなくて、魔力が視えてるんだ。

急激かつ大量の魔力を扱って、魔力神経が限界まで励起したお陰か? ともなく、理解すると同時に、世界の視え方が変わっていくのが分かる。

俺達の生きる世界とは別に、重なるように存在している、本来魔力で満ちている世界——別のレイヤーとでも言うべき世界が視える。

え、やば。魔術師って、もしかして生まれた時からこうやって視えてるの?

そりゃ強いわ。魔術師だけが、魔装に至れるのも納得できる。

「飛行魔法：高速展開」

「……ほう、触れたか。魔導の深奥、その一端に」

杖無しで、しかし展開された魔法陣を足場に跳ねて——飛ぶ。

次いで、追尾してきた幾条もの光線を、展開した四枚の守護魔法で防御した。

一枚、二枚、三枚と割れ、四枚目で止まる。よし、計算通り。

「——！ 予知したか、余の魔導を！ 世界の軌跡を！」

「いや別に、そこまで大仰なものじゃないと思うけど……ただ、今は世界が良く見える、つてだけ」

互いに展開した魔法陣から放たれた極光が、ぶつかり合って弾け合う。

火力的には、ほぼ互角。

今の俺と、今の魔王は、瞬間的に発動できる攻撃のレベルがほぼ同じということだ。

それはつまり、守護魔法や強化魔法に関しても、同じと言っても過言ではない。

無論、魔王が手を抜いているという可能性もなくはないのだが……あっちだって、加減をする理由は無いはずである。

「こまごまとやり合うのは、時間の無駄だ。

と、なれば。

「最大火力勝負になるよなあ！」

「——無意味な抗いだ。魔導の深奥に踏み込んだとはいえ、その領域では所詮、一步目に過ぎぬのだから」

巨大な魔法陣が、互いを脅すかのように展開される。向き合うは、闇色の魔力光。

それを自身の魔力で押し潰さんと、脳を限界まで回転させて、かつ魔力を練り上げる。「王核限定解除——之なるは、始まりにして終わりの破滅」

魔王の詠唱を聞きながら、冷や汗を垂らして魔法を用意する——魔法使いが、魔法を発動する際の掛け声は、いわばただの音声認証だ。

魔術に詠唱はつきものであるが、魔法は特別必要という訳では無い。杖に必要、というだけだ。

これまでの魔法行使で確信したが、脳で回せるのなら、言葉は不要だ………あれ？もしかしてこの考え、ダメか？

「此処に滅亡を。愚かなる星に鉄槌を。乱れた世に制裁を」

闇色の魔力との拮抗が、僅かに崩れ始める。

こちらの本気が、徐々に浸食されていく。

詠唱するなんて行動は、本来戦闘には向かないはずだ。喋るより動けてなるだろ、普通——では、何故そうならなかったのか？

俺ですらこうやって、言葉を必要とせずに魔法を発動できるのに。

魔装なんて、どう考えても無言で発動させた方が利便性も良いし、虚も突けるだろう

に。

これまでの間、魔術師が、詠唱破棄を重要視しなかったのは、何故だ？

「——秩序は此処で、闇へと融けた」

考えるまでもなく、目の前の闇が答えだった。

魔術師は、詠唱することが最適解であると、本能的に分かっていたんだ。

要するに魔術とは、生まれ持った魔術属性を扉とすることで、重なり合う別レイヤーに接続し、言葉でそつちを改変し、こつちに超常現象を齎すことなんだ！

あー、これまですつたな、と直感的に理解する。

気付くのが遅すぎた。かつてない万能感に身を委ね過ぎて、調子に乗った。

これ、死んだわ。

「王核限界駆動——」
Prima DISTRUZIONE
「訪れよ、第一の滅亡」

「っ、あああああああああああ!!!」

直後、同時に引鉄を引いた。

蒼の砲撃と闇の砲撃はぶつかり合って——拮抗しない。

俺の放つ砲撃魔法を、当然のように喰らい尽くした闇色が迫る、迫る、迫る！

ありつただけの魔力を総動員し、大気の魔力をかき集めてなお抗えない——やり方の効率が悪すぎて、追いつかない！

「消えよ、特異点」

「——ッ！」

言葉を発することすら出来なかった。

いいや、違う。

何かを言い返す前に、視界は真っ黒に染め上げられて。

意識は溶けるように消え落ちた。ただ、それだけのことだった。

「あつ、もしかしてこれ、ヤバい感じ?」

上空で一人、「まあ、何だかんだ少年ならいけるつしよ」と余裕をぶちかましていたアテナは、砲撃に呑み込まれた甘楽を見て、初めて危機感を覚えた。

辛うじて守護魔法は破られていないが、会場自体には大穴が空いており——そこから、彼が這い上がって来る様子は見られない。

……。

.....
.....

(や、やばいやばいやばいやばい！ 少年、死んじやった!? やだやだやだやだやだやだダメダメダメダメ!! うわああああん死んじやだくく!!)

滝のように汗を流し始め、泣きそうになりながらアテナエルは空を踏みしめる。

くそう、許さない。絶対に殺してやるぞ魔王！ と、半分くらい責任を擦り付け——
しかし、飛び出さなかった。

何故ならば。

一条の蒼い閃光が、魔王を穿ったからである。

「づつ、おえ……ぐ、ま、マジで、死んだと思った……」

「——有り得ぬ。何故生き残れた、特異点」

「いや、生き残ったって言うか、死んでないだけ、みたいなもん、なんだけどな……」

土煙から現れた甘楽は、生きているのが不思議なほどに満身創痕だった。

全身が、自身の血に塗れている。

歩くのは覚束なく、左腕はひしゃげてだらしなく揺れている——それでも、魔王には不可解だった。

当然だ、多少の拮抗はしたものの、直撃したのである。

一片すら残さず、消し飛んでいて当然だ。それなのに、何故？

思考・分析を開始して数秒。

魔王は解答を得る。

「守護の魔法を、壊れたそばから展開し続けたか」

「ええ……分かる、んだ。まあ、魔法は基本的に、高速かつ、大量の展開が売り、だから」

「理解した——であれば、次こそ消えるが良い、特異点」

慈悲は無く。ゆえに躊躇は無く。

魔王は再び、先程と全く同じ魔法陣を展開した。

それを見て、心の底から安堵していたアテナが、「今度こそやばい！」と、魔装を振るおうとするのと。

「久遠の彼方 祓われざる闇の先 沈まざる光の雫」

右手を前に出し、甘樂が詠唱を口ずさむのは、同時のことであった。

思わずアテナは動きを止めて、絶句した。

そんな彼女とは逆に、魔王は少しの逡巡も無く、口を開く。

「王核限定解除——之なるは、始まりにして終わりの破滅」

「理を壊す道 堕ちた天は何を見ゆ」

それは、アテナノからしてみても、有り得ない光景だった。

今、甘樂が行使しているのは魔法ではない、魔術だ。

いや、いや。

先天性魔術属性を必要としていないアレは、最早魔術と言つて良いのかすら分からない。
い。

未来アテナの記憶にさえ無いそれを、すぐに理解することは出来なかった。

しかし、ただ一つ、分かるとするならば。

彼は今、魔法と魔術、二つの方程式を解析し、独自の形に落とし込んでいるというこ
とだけだ。

「此処に滅亡を。愚かなる星に鉄槌を。乱れた世に制裁を」

「恐れること勿れ 讃えること勿れ」

膨張する魔力は、先程とは違い完全なる拮抗を生み出した。

ナタリアとアテナノの張つた守護魔法が、その余波だけで震えている。

「——秩序は此処で、闇へと融けた」

「導しるに従い ただ弓を引け」

二つの詠唱が、同時に終わりを迎える。

しかし、起動するのは魔王の方が早かった。

純粋な闇の破滅が、先んじて解き放たれる。

「王核限界駆動——」訪れよ、Prima Distribution「第一の滅亡」」

それは魔王本来の持つ切り札と、世界の自滅機構が備えていた仕組みが合わさった、第一の終焉。

容易に星を喰らい尽くし、常識を粉々に打ち砕く、終わりへと向かう一撃。

それが、今たった一人の少年にのみ向けられて、放たれた。

「展開——」第壹砲撃魔導：無窮」

対し、迎え撃つたのは蒼色の希望だった。

すべてを呑み込まんとする闇を、逆に喰らい尽くす光の権化。

アテナノエルの理解は、半分正解で、半分不正解だった。

現在、甘楽の行使しているモノは、超魔科学法でも無ければ、幻想魔術でも無い。

その二つが融合せしめた境地。あるいは、七つの滅亡のみが行使できる、世界を壊す秘奥——魔導。

何もかもが限界以上にまで到達した甘楽は今、本来人の身では辿りつけない……：辿り着いてはいけない領域に、ほとんど意識を失った状態で、指先だけ触れていた。

不完全な身で放たれた魔導と、不完全な理解で放たれた魔導。

どちらが勝ってもおかしくはなかった。

それほどまでに、互いの出力は拮抗しており——しかし。

「し、信じ、られぬ……有り得ない！ 余は、余こそは！ 第一の滅亡にして、魔王であるぞ！」

勝利の女神は、少年に微笑んだ。

勢いを増し続ける蒼色が、ついに闇を呑み込み、魔王を射抜く。

外装を剥がされ、弱体化した肉体を、一条の光芒が貫き天へと至る。

——魔王は、この世界において特別な存在だ。

選ばれし者による攻撃でしか、命を落とすことは無い。それはこの状況においても変わることは無く、しかし、魔王と一体化した、世界の自滅機構の方は別だった。

音がする、壊れる音がする。

死と再生を繰り返す度に剥がれ落ちていく不純物が、純然たる力を前に、完全に消し飛んだ。

逃げる力さえも失った魔王は、その場に崩れ落ちた。

同時に、気が抜けたのか、甘楽もその場に崩れ落ちる。

それを見て、

「え……えっ？ 凄いを通り越して、ちよつと気持ち悪いな……」

アテナは、自分を差し置いて普通にドン引きした。

バグった世界で何をする

「ん、おはよう……よう眠れたかいな？」

「……誰？」

「あれ!? うちのこと、知らへん感じ!？」

目を覚ましたら、全然見知らぬ女が当然みたいな面で、親し気に声をかけてきた。

え? マジで誰?

何か、どこかで見た覚えはある気がするのだが、視界が少しだけぼやけているのもあって、「この人!」というのが分からなかった。

これが月ヶ瀬先輩とかだったら、問題なく分かるんだけどな……。

「幾ら何でも不勉強過ぎるやろ……!? やれやれ……こら教育必要かもやなあ」

「不審者に教えられることは、何一つとして無いと思えますが……」

「不審者で……あゝ、これでも分からへんか?」

言って、女は如何にも魔女です! といった感じのトンがり帽子を脱いだ。

そうして露になったのは、目を惹く橙色の長髪に、人にしてはいささか尖がっている、

白い耳——あつ。

「こ、校長先生……!?!」

「はい、正解。これでも分からへんかったら、どないしよかと思たで」

ほんまに良かった、とため息を吐きながら、胸を撫で下ろす校長だった。

いや……校長つて、その強さと活躍の割には、あまりイラストが用意されてない、プチ不遇キャラなんだよな。

ただでさえ、今は頭が上手く回ってないし、これは気付かなかったのも仕方がないというやつだろう。

そもそも、寝起きから校長がいるとか誰も思わないだよな……つて、アレ?

何で俺、医務室に寝かされてんだ?

「ん、軽う記憶飛んでる感じかな……説明したった方がええかい?」

「いや、今気合で思い出すんで、ちよつと待ってください」

「気合でどないかなるものなんかいな、それ……」

校長の、こつちの世界ではかなり珍しい関西弁を聞き流しながら、少しだけ考える。

といつても、もう粗方思い出してはいるのだが。

弱体化してる魔王に風穴空けて……えつと、それから?

「それから、きみは救護班に回収されて治療を受けるも目え覚まさんと。今日でちよう

ど一か月を迎えたところやで」

「ふうん……え!? 一か月!? 俺、寝すぎだろ……」

「逆や、アレほどの無茶をしたこと考えたら、早すぎるくらいやよ」

身体もズタボロやったしなあ、と笑いながら校長が言う。

全然笑いどころではないのだが、まあ、死ななかつたのだから別に良いか……とも思う。

どこも欠損してないっぽいしな。

左腕とか、まあまあグツチャグチャになっていた記憶があっただけに、ほっと一息吐いてしまう。

「あつ、ていうか、そう。魔王は? どうなったんです?」

「きみがボコしたところを回収して、無力化しとるよ……いぎとなったら空城くんの力を借りるつもりやけど、今は色々聞きたいことがあつてなあ」

「ふうん……」

何というか、イマイチ要領を得ない返答ではあつたのだが、これ以上突っ込んでも教えてくれなさそうだな、と思う。

まあ、色々考えがあるんだろう。多分。

隠し通す! って感じではなさそうだから、その内話してくれるだろう。

「まあ、それで、気になってるやろう、うちからの用件なんやけど」

「はいはい」

「まずは、ありがとう……色々な事情があつたとはいえ、結果的にきみには救われた形になる」

「うお……成人女性に頭下げられるの初めてです。結構優越感出ますねこれ」

「きみ、性格悪いって言われへん？」

じつとりとした目を向けられる俺であつた。

あまりにも失礼な目つきである……いや何か、寝起きなせいとか口が軽いな。

仮にも相手は校長先生である。

もうちよつと敬う感じで行くとしよう。

「ええ、ええ。今更すぎやさかいね、ほんまに。ガチで」

「え？ 顔こわつ……めっちゃ念押しするじゃないですか……」

「うちも、生意気なクソガキは嫌いやあらへんしなあ」

心にもないことをニコニコと言う校長先生だつた。

いや、あるいは、俺みたいなのを教育するのが好きなのかもしれないのだが……。

彼女の活躍は、大体において戦闘であつたので、素直に「こういう人なんだ……」と

いう気持ちになってしまう。

黒帝を倒せたのも納得って感じの圧が笑顔に籠っていた。

「で、本題なんやけど——きみ、魔導使うとったよな?」

「え? あー……うん、まあ、多分……?」

「なんや不安になるような返答やなあ」

「いやっ、何て言うかアレは、ほとんど何も考えずに使ってたんで……」

魔法とか魔術とか、そういった面から見た場合の、火事場の馬鹿力——とでも言えれば良いだろうか。

身体は上手く動かないし、声も気合を入れなければ出せなかったし、意識ももうすぐ飛びそうって感じではあったのだが、頭だけはビツクリするくらい冴えていたんだよな。

あと、より鮮明に、良く視えていた。

今も何となく視えてはいるが、流星にあの時ほどではない。

「つまり?」

「今は使えないです……どうやって使ってたのかも、ぶっちゃけイマイチ分かんないです
すね」

「ほな、うちに教えるのは不可能なこと?」

「ですね、自分ですら分かってないのに、教えるのはもつと無理です」

まあ、仮に分かったとしても、教えることは不可能そうであるのだが。何というか……理論と感覚の先にあるんだよな、あの境地は……。

手法が分かったところで、気軽に辿り着ける感じじゃない。

あと、すげえ疲れる。

無限か？ つてくらい湧き上がってきた魔力が、あの一発だけで全部持っていた。それだ。

これは多分、詠唱の方を改良すれば、もつと良くなりそうなものであるのだが……簡単に練習できるものじゃないんだよな。

「ふうん……ま、大体予想通りつてとこやな」

「え、それじゃあ、本題は？」

「うん、それなんやけどお……きみ、第七秘匿機関に入ってもらうから」

「なんて？」

全然知らない単語出てきたんだけど？

何もかもが滅茶苦茶になっており、もうこれ以上は原作から逸れようが無いだろうと思っていたので、強烈なアツパーを喰らった気分になってしまった。

頭がぐわんぐわんとする。

第七……なに？

「せやから、第七秘匿機関や」

「何それ……」

「ざっくり言えば、うちの私設部隊なんやけど——せやなあ、分かりやすく言うのなら『七つの滅亡に対抗するための組織』やね」

「は？」

「前々から準備はしとったんやけど、今回は急やったからなあ」

「?????」

「いや、待て。」

待て待て待て待て待て！

何を言っているんだこの人は!?

!?
俺ですら、ついさっきまで知らなかった、七つの滅亡とやらに何で校長が詳しいんだ

原作ではこいつら、霞も存在無かっただろうが！

「いずれ世界は七つの破滅に導かれ、終焉へと向かう——ってな。この学園の校長になった人は、そないな言い伝えと共に、この機関を預けられるんよ。まあ、まさかうちの代で来るとは思ってへんかったんやけど」

「ええ……マジか……」

「マジもマジ、大マジやよく。そやさかい、うちはきみが欲しい。魔導が使えるんや、例え生徒やとしても置いてはおけへん」

「……拒否権は？」

「あつはつは！ ある訳あらへんやん、決定事項やで」

ですよねーって感じの返答をする校長だった。

まあ、ぶっちゃけ不都合はないのだ。むしろ、好都合と言っても良いだろう。

最初から、俺一人であれらに抵抗できるとは思っていないのだから……第一の破滅だって、魔王が弱っている状態でなければ倒せなかった。

というか、倒すのだって命を懸けたのである。

普通に無理だろ、一人じゃ。

とはいえ、ここで素直に頷くには一つ、問題があった。それはもう、クソでかい問題が——そう、アテナ^黒先生^帝である。

何か当たり前みたいな顔で馴染んできたんだけど、あの人普通に危険人物なんだよな……。

校長とも殺し合う仲である。事情を説明するのも一苦労である。

どう考えても協力し合ってくれた方が助かるのだが、どうにも手を取り合ってくれぬ未来が見えなかった。

「ん〜？ ああ、アテナ……ノエルのこと、考えとる？」

「!!？」

「良う顔に出る子やな……安心しーな。そことはもう、話し合い済みや。何せきみが倒れてから、一か月経つてるんやで？」

ちゆうか、あつちから話を持ち掛けてきたくらいやしな、と校長はカラカラ笑う。

そんなあつさりな感じなんだ……とは思うのだが、まあ、今の黒帝は黒帝であつて黒帝でない、みたいな意味不明な状態なので、納得は出来るといふものであつた。

いや、あるいは俺が寝ていた一か月の間、丸々話し合いにつき込んでいた可能性はあるのだが。

まあ、なるようになったのなら良いや。

「それに、拒否権があつても、きみは断れへんやろしなあ」

「……というと？」

「これから第七秘匿機関は、きみ以外の生徒も入れる予定やさかい……例えば、ほら、きみのチームやらなあ」

「つー！ ええ……いや、ううん……」

平然とした表情で、子供をそんな大仰な機関に入れようとするなよ、と文句を言いたいところではあるのだが、実際のところ、その判断は正しい。

普通に天才ってレベルじゃ語れないような生徒が多いからな……。

それに、今回俺が組んだ各寮對抗戦チームだって、言わば厨パみたいなものである。

実際、記憶がかなり怪しいのだが……俺が魔導使う時、全員ちやつかり起きて、控え室から会場に出て来てたよね？

何か普通に守護魔法無しで、あの場でいられた辺り、校長が目を付けるのも止む無しと言ったところだろう。

月ヶ瀬先輩とレア先輩は言わずもがな、立華君と葛籠織も伸びしろしかない——
どころか、育ち切れれば作中最強格な訳だしな。主人公とヒロインなのだから、これは当然とも言える。

それに何より、学園が直接狙われたのだ。

もちろん、学園側だって色々体制を立て直すだろうが、最も動きやすい学生を取り込んでおくのが、防衛には一番適しているし、手っ取り早い。

ただでさえ、魔王が来た時なんて混乱が先立ってしまい、避難がままならず、校長等が動けなかったのだ。

その辺を整えるだけで、いざという時の対処はスムーズに運ぶだろう。

「ま、教師失格みたいなこと言うてる自覚はあるんやけどなあ……：：：比喩抜きで、世界の危機や。アレコレ忖度してられへんやろ」

「いや、せめて見栄えの良い建前くらいは用意しろよ、とは思いますが……」

「きみ相手ならええやん。どうせ戦うしかないって分かっとるんやし」

「む……」

全く以てその通りすぎて、反論が思いつかなかった。

そう、戦わなきゃなんだよな……。

元より、黒帝と魔王とはやり合う気ではあったので、大して変わらないだろう、という気持ちもあるのだが……。

どんなやつが相手になるのか分かっているのと、分かっていないのとでは雲泥の差だな、と思う。

敵のことを考える時、ゲーム感覚になれなくなってきたもんな。

「ちゆうても、安心してな。別に今までの学生生活とは、ほとんどなんも変わらへんで。ただ、ちよくつとだけ、個別レッスン増えるだけやさかい」

「うわ……一番嫌なタイプの特別扱いだ」

「補習みたいな捉え方するのやめーや——とにかく、状況は呑み込めたかいな？」

「まあ、取り敢えずは」

イレギュラーにイレギュラーが相次ぎ、もう何なんすかねこれ……という気持ちが出来ないのだが、一応は理解した。

というより、考えること自体はシンプルになったようなものである。

これまでは立華君とヒロインの間を取り持ち、黒帝と魔王の仕事をどのように上手く全員で対処し、平等にレベリングするか……といったことを考えていた訳であるのだが、それはもういらぬということなのだ。

ただ、襲いかかってくる超強い敵を倒す、これだけで良い。

無論、難易度は跳ね上がっているのだろうが……。

個人的には、楽になったと言えるだろう。これからやって来るだろう脅威が、半端なく強いということさえ考えなければ。

「ん、よろしい。ほな、質問は？」

「特には無いですかね……というか、普通に眠いです。何か、すごい疲れた……」

「まあ、病み上がりやさかいね。そやけど、寝るのんはもうちよいだけ、後にしーな」

「ええ……」

これから早速何させるつもりだよ……と思っていれば、校長が扉へと目を向ける。つられるようにそちらを見れば、タイミング良く扉はスライドされた。

ゆらりと揺れる白髪。これでもかかってくらい存在をアピールする赤髪。完全に見慣れた金髪×2。

というか、普通に各寮対抗戦のメンバーだった。

何か、こうして見ると、如何にも「主人公パーティーです！」って感じの色合いだな……。

「あの子たちなあ、きみが眠ってから一日も欠かさずお見舞いに来てたんやで？」

「え？ 四人揃って？ 仲良しじゃん……」

「あつ、そういう反応になるんや……」

「いえ、もちろんその事実は嬉しいんですけどね？」

取り敢えず、ひらひらくつと手を振ってみたら、ブワツ！ とレア先輩が泣き出して。

それを契機に、全員がすげえ勢いで駆けこんでくるのだった。

その中でも、とりわけ難しそうな顔してる立華君だけは、平常運転だなあ、と思うのだった。

《left》

☆転生主人公 えくくくくごめんごめんごめん、泣きそう。泣いて良い？

◇名無しの神様 何だこいつ……

◇名無しの神様 平常運転すぎるだろ

☆転生主人公 いやだつて……もう、凄くない？

◇名無しの神様 それは……そうなのですが……

◇名無しの神様 凄いかかってレベルじゃないんだよね

☆転生主人公 あと寝顔も良かったけどやっぱ動いてる方が最高

◇名無しの神様 おいこいつもうダメだろ！

◇名無しの神様 もうズブズブに惚れてんじゃねえか！

◇名無しの神様 惚れてるっつーか感想がオタクのそれ過ぎなんだよ

◇名無しの神様 どうすんだよこれ……いや、っーかこれ、続くの？

◇名無しの神様 いやそれね

◇名無しの神様 一章の途中で原作終わらせるのロックすぎ

◇名無しの神様 ある意味RTAじゃん

◇名無しの神様 目指してる方向とは真逆のRTAを達成してんだよなあ

◇名無しの神様 世界記録更新でワロタ

◇名無しの神様 そろそろ驚き疲れて来たぞ

◇名無しの神様 第七の破滅……? 何……?

◇名無しの神様 校長「第七秘匿機関入ってね」ワイら「なにそれ??」

◇名無しの神様 これも全部日之守ってやつのせいなんすよねえ

◇名無しの神様 全部日之守がやってくれましたじゃんこんなの

◇名無しの神様 訳分からんことが起りまくった挙句、日之守が訳分からんことして、訳分からんくなつたな

◇名無しの神様 もう何にも分かんないニヤンねえ……

☆転生主人公 あく、でもこれから僕、どうすれば良いの？

◇名無しの神様 そうそう、そこなんだよね

◇名無しの神様 つぱりセ案件か？

◇名無しの神様 こっちの領分まで踏み込んでるやつもいれば、ガンガン原作壊すやつもいるし、流石にな……

◇イカした神様 いや、それなんだけど、リセは無しの方向になつたわ

◇イカした神様 つていうのも、世界の形が変わってるから手出しづらいんだよね

◇名無しの神様 あく、拡張ってレベルじゃなくなつたんだもんね

◇名無しの神様 下手にリセして変な影響出たら最悪だしな

◇名無しの神様 最悪転生システムにエラー出るかもしれんからなあ……

◇名無しの神様 マジやめろよ、昨日徹夜でメンテしたんやからな

◇名無しの神様 メンテニキいてワロタ

◇イカした神様 ただ、このまま放置するのは問題だし、いざとなったら世界ごと消

さなきやいけないから

◇イカした神様 立華くん（ちゃん）には、引き続きRTA配信してもらおうわ

◇名無しの神様 （ちゃん）でワロタ

◇名無しの神様 もう潔く「〇」つけるの逆にしろ

◇名無しの神様 身体は男の子だし……

◇名無しの神様 性転換薬あつたら、飲め飲め！

◇名無しの神様 TSにTSを重ねたらどうなるんだろうな、何かまたバグリそう

◇名無しの神様 怖いこと言うのやめろ！ いや……っ本当、マジで。

◇名無しの神様 俺達は既にバグとか言うワードに敏感になり過ぎた

◇名無しの神様 日之守とかいうやつ、許せねえよ……。

☆転生主人公 は？ 今更何RTAすんの？

◇名無しの神様 すぐえ真つ当な意見なんだけど、全然RTAしてなかったやつに言

われるとクソ腹立つな

◇名無しの神様 面の皮一万枚くらいありそう

◇イカした神様 うん、まあ、それなんだけど、原因に近しいと思われる日之守の調査をして欲しいんだよな

◇名無しの神様 ……!

◇名無しの神様 シレッと調査も含めてて草

◇名無しの神様 まあ良かったじゃん

◇名無しの神様 もう途中からずっとそうみたいなものだったしな

☆転生主人公 え？ 良く分かんないんだけど、つまり？

◇名無しの神様 つまり〜

◇イカした神様 日之守を攻略しろつつつてんの

☆転生主人公

《left》

《left》

【最初から】蒼天に咲く徒花 バグキャラ日之守甘楽 攻略RTA【これで良かったじゃん】

《left》

ここまでの登場人物まとめ（挿絵あり）

○日之守甘楽

・プロフィール

・年齢 十三歳

・職業 学生（魔法使い）

・概要

元踏み台兼主人公。

転生したせいか、バグっておかしなことになった男。

赤と青のオッドアイに、黒髪を持つ踏み台面の少年。

特に何か力がある訳でも無いのに、オッドアイなのはちよつと恥ずかしいと思っ
てい
る。

日之守家の長男らしい。妹がいるとかなんとか。

先天性魔術属性を持たないため、典型的な魔法使い。

魔術は使えないが、裡から湧き出て来る謎の莫大な魔力で原作を破壊するバグ太郎

……とか思っていたら、魔導を使い始め、魔術も使える気配を漂わせてきたバグカス太郎。普通にナーフされた方が良い。

魔法の演算を自前の脳で処理しきれない辺り、知能は相当高いと思われる。

『蒼天に咲く徒花』のキャラは、敵味方問わず大体好きらしい。なので無自覚ではあるが、どのキャラに対しても好感度が最初からそれなりに高い。

かといって、恋愛云々まで考えている訳ではない。というか、全員主人公のヒロインだしな……という意識が前提にある。

何だか世界もヤバイ感じになってきたので、縁があつたとしても、イチャコラしてる場合ではなさそうだなーって感じ。

主な戦闘スタイルは中々遠距離。射撃魔法と砲撃魔法を好み、近接戦闘はあまり好まない（出来ないという訳ではない）。

基本的に高スペックなのに慎重という、敵に回したらかなり嫌なやつ。だけど調子に乗り過ぎるきらいがあり、そこを突かれると弱い。

ゲームや漫画、小説でも結局一番好きになるのは主人公。

・使用魔法／魔術／魔導

・砲撃魔法：いわゆる極太ビーム。消費魔力が多く、好んで使う魔法使いはあまりいない。最低限のサイズでも、使用者の身長程度の魔法陣になる。

・射撃魔法：大体手のひらサイズの魔力弾を生み出し、発射する魔法。多くの魔法使いが好んで使う。弾道は自分で軌道を描くことも出来るし、オートで杖の方に動かしてもらうことも出来る。大体の魔法使いは後者で使用する。手のひらサイズの魔法陣であることが多い。

・飛行魔法：アルティス魔法魔術学園では二年生から学ぶ、空を飛ぶ魔法。箒ほどの速度は出ないが、普段使いやちよつとした空中戦で良く使用される。両足に小さな魔法陣が展開される。

・守護魔法：魔法使いが一番最初に教えられる魔法はこれ、と決められている魔法。盾状のものがメジャーであるが、形等は使用者次第なので、ドーム状にすることも出来れば、球体にすることも可能。手のひらに魔法陣が生成される。

・重複展開：大量の魔法陣を生成する際に使う。

・高速展開：効果時間を短くする代わりに、発動を早める。

・拡大展開：魔法陣のサイズを大きくする。これはイコールで火力の上昇を意味する。
・弾種：砲撃魔法、射撃魔法で使われるオプション。通常の他にも貫通や雷、炎や氷などがある。

・第壱砲撃魔導：無窮：こちらも見た目はただの極太ビーム。とはいえ魔法とは比べ物にならない破壊力を誇り、生成された魔法陣も別物だったという。巨大な魔法陣を支

えるように、小さな魔法陣が幾つも周りに展開されていた。

・各人物への感情

・空城立華：主人公！ やっぱり滅茶苦茶イケメンだな……と思っている。ゲームで操作していたのは当然彼なので、そういう意味合いでも一番好感度が高いと言える。

・月ヶ瀬ひかり：可愛い。ぶっちゃけ付き合うならこの人が一番良いと思っっている。

これは『日之守甘楽』というキャラクターと混ざり合ったせいもあるんだろうな、と自己分析している。

・葛籠織日鞠：可愛い。スキンシップが激しいのでうっかり好きになっちゃいそうで困ってる。時折妖しい目で見えてくるのだけはやめて欲しい。

・レア・ヴァルガナンド・リスタリア：クソ推せる。直接会ってなおやっぱり推せるな……と思ってる。これが異性への恋愛感情に繋がるかはまだ不明。

・アテナ・スイーグレット（黒帝）：強烈な好意を向けて来る怖い人。特に嘘を言っただけで無さそうな辺り、恐怖を加速させているが、普通に絆されてきた。

○空城立華

・プロフィール

・年齢 十三歳

・職業 学生（魔法使い）

・概要

『蒼天に咲く徒花』における主人公……に転生した誰か。

前世では女子高生をやっていたが、なんやかんやあつて死に、転生する運びとなった。イカした神様「其方さあ……世界滅亡とか、興味ない？」

転生主人公「本当に神？ 明らかに悪魔の誘い方だろそれは」
みたいな会話があったらしい。

なんやかんや引き受けることになったのだが、まさか男性になるとは聞いていなかったように、転生直後はそれなりキレていた（慣れた）。

元より主人公のスペックはかなり高いので、最低限のステで駆け抜けようとしていたところを、バグ太郎に滅茶苦茶にされた。バグ太郎被害者一号。

以来、事あるごとにバグ太郎に滅茶苦茶にされ、結果的にすげえ目で追うようになってしまった。

典型的なツンデレ女（男!!!）であり、転生して以来コミュを築こうとしなかったので、陰キヤの側面が強い。

とはいえ、生来の気質は明るい方だ、と本人は豪語している。本当かどうかは本人とイカした神様しか知らない。

イケメンも美少女も好きなので、RTAが変更になったこと自体は嬉しいと思っ
てる。

○月ヶ瀬ひかり

・プロフィール

・年齢 十六歳

・職業 学生（魔法使い）

・概要

『蒼天に咲く徒花』におけるヒロインの一人。

美しい白の長髪に、藍色の瞳を持つ美少女。

正義感や義務感と言ったものを強く感じる人間であり、どのような無茶でも成し遂げられる精神性がある。いわゆる主人公属性女。

ヤンデレフラグが立ちやすいヒロインではあるが、基本的には頼りになる、かつ親しみやすいお姉さんであり、かなり等身大な十六歳の少女。

チュートリアル戦で立華くんと仲良くなるはずだったが、バグ太郎が滅茶苦茶にしたせいで接点が薄くなった。バグ太郎被害者二号。

各寮対抗戦でそれなりに仲良くなったらしいが、「甘楽くんの友達という色が強い後

輩」という認識に留まった。

葛籠織、レアとの仲はかなり良好。普通に三人でお出かけとかもするようになったらしい。

目に見える範囲だけでも無茶苦茶する甘楽に最近目は惹かれがち。

○葛籠織日鞠

・プロフィール

・年齢 十三歳

・職業 学生（魔法使い）

・概要

『蒼天に咲く徒花』におけるヒロインの一人。

ふわふわセミロングな金髪と、ふわふわな言動がチャームポイントな美少女。

作中トップクラスの才能を持っており、最後まで育成すると魔装を三つくらい同時展開する最強の女。

故にこそ、何よりも自身の才能を信じている。

独占欲が強いが、特に独占したいと思つた物と出会つて来なかつた……のだが、甘楽の戦いに英雄の光を見出してしまい、目を焼かれて独占欲を初めて持つてしまった。バ

グ太郎被害者三号。

現状、甘楽に引き上げられる形で最も成長している子であり、しかし同時に、これではいつまで経っても追いつけない、ということを確認している。

甘楽が魔導を放った瞬間を記憶に刻み込んでしまった。もうダメ。この女は完全にターゲットしてしまった。

○レア・ヴァルガナンド・リスタリア

・プロフィール

・年齢 十六歳

・職業 学生（魔法魔術師）

・先天性魔術属性 《神焰》

・概要

『蒼天に咲く徒花』における一章のボス。滅茶苦茶ヒロイン面してるが全然そうではない。少なくとも原作では。

ふわふわとした紅の長髪に、翡翠色の瞳を持つ美少女。

作中最強のメンタルを持つ女であるが、同時に死を確約されているキャラクター……だった。

例によって例により、バグ太郎に滅茶苦茶にされた結果生き残った上、誰も知らない魔術属性を手に入れた。

クソほど声のデカいお嬢様であるが、かなり没落してるので、お嬢様と言って良いのかギリギリ分からないラインにいる。

とはいえ教育はキツチリとされており、学園というスケールで見ても、彼女ほど貴族然とした生徒も中々いない。

出自の関係で、他人に頼ることは許されなかった環境にずっといたため、人に頼ることをほとんど知らなかった。協力することも、教え合うことも。

各寮對抗戦は彼女にとって一生記憶に残る、輝かしい記憶なのは間違いないだろう。

○アテナ・スイーグレット／ノエル・ヴァルトリク・リスタリア（黒帝）

・プロフィール

・年齢 二十一歳

・職業 教師（魔法魔術師）

・先天性魔術属性 《深淵》／その他

・概要

『蒼天に咲く徒花』における隠しキャラ。／『蒼天に咲く徒花』におけるラスボスの一

人。

綺麗な青の長髪に、泣きぼくろのあるお姉さん系美女。

非常に謎の多いキャラクターであり、実態を誰も知らなかったのだが、バグ太郎が大暴れした結果ループしていることが明らかになった。

しかし、ループした際にノエル・ヴァルトリク・リスタリア（黒帝）の魂が混じったことで、完全に別人になってしまった。

黒帝は8:2くらいの比率で混ざるつもりだったのだが、アテナの自我が強すぎて5:5くらいの混ざり方となった。

つまり、彼女はもうアテナ・スイーグレットではなく、ノエル・ヴァルトリク・リスタリアではない。

しかし、アテナ・スイーグレットでありながら、ノエル・ヴァルトリク・リスタリアである、とも言える。

とはいえ、分かりづらいにもほどがあるため、二人が混ざり合った結果出来上がった、どちらでもない別人という捉え方をオススメしているらしい。

未来では甘樂の恋人だったらしい。本当かどうかは分からない。

過去に戻り、戦力になる子を育てようとか思っていたら、いきなり甘樂が訳の分からないことを始めてドン引きした。

○ナタリア・ステラスオーノ

・プロフィール

・年齢 四十一歳

・職業 校長（魔法魔術師）

・概要

『蒼天に咲く徒花』におけるお助けキャラ。

橙色の長髪に、特徴的な形をした白い耳を持つ。

外見がどう見ても二十代のそれであり、噂では妖術に手を出しているとか何とか。生徒には裏で妖怪婆と言われがち。

作中最強格のキャラ。黒帝とは因縁の仲だとか何とか。

○ウイル・クラウネス

・プロフィール

・年齢 二十歳

・職業 学生（魔法魔術師）

・先天性魔術属性 《加速》

・概要

『蒼天に咲く徒花』におけるサブキャラ。

銀髪隻眼片手義手の、近接戦闘を好む魔法魔術師。

単独で迷宮踏破を成し遂げ、その実力から『学園最強』と呼ばれていたが、下級生にボコボコにされ過ぎて普通に返上した。バグ太郎被害者四号。

とはいえその実力は本物であり、『加速』についても、近い内に魔装へと至ってもおかしくはない……らしい。

○レミラ・フィルフラウス

・プロフィール

・年齢 十八歳

・職業 学生（魔法魔術師）

・先天性魔術属性 《氷結》

・概要

『蒼天に咲く徒花』におけるサブキャラ。

黒の長髪に青色のインナーを入れており、眼鏡をかけた優等生な生徒会長。

魔法と魔術をかなり高いレベルで使いこなしており、今回の各寮対抗戦で『学園最強』

の名前を奪う気満々だったところ、変なものにボコされ倒した。バグ太郎被害者五号。無論、こちらにも実力は学生のそれを飛び抜けており《氷結》についても、魔装に至ってもおかしくないレベルにあるという。

○おまけ

・第一の滅亡：詠唱

「王核限定解除——之なるは、始まりにして終わりの破滅」

「此処に滅亡を。愚かなる星に鉄槌を。乱れた世に制裁を」

「——秩序は此処で、闇へと融けた」

「王核限界駆動——”Prima Distributions訪れよ、第一の滅亡”」

・魔導：詠唱

「久遠の彼方 祓われざる闇の先 沈まざる光の雫」

「理を壊す道 堕ちた天そらは何を見ゆ」

「恐れること勿れ 讃ほめるえること勿れ」

「導しるべに従い ただ弓を引け」

「展開——」第壹砲撃魔導：無窮」

・魔法

ざっくりと言えば超科学の産物

・魔術

ざっくりと言えばファンタジー世界のアレ。未だ原理を解明されていない。

・魔導

魔法でもなく、魔術でも無い。しかしその二つを凌駕する、未知の業。

第二章 ダンジョン・ブレイキング フライング・リスタート

「甘楽くんが……甘楽くんが、悪いんだよ？ 私はこんなにもきみのことを想ってるのに、きみは私だけを見てくれないから……！」

美しい白の長髪を、俺の真つ赤な血で汚しながら、彼女は言う。

いつも年上の余裕で満たされていた紫紺の瞳は、今や妖しい色を伴い、俺だけを映していた。

熱に浮かされたように、恍惚な笑みを浮かべている。

「ううん、違う、違う違う。本当は私だって、こんなことをしたくてした訳じゃ無くて——ああ！ でも、それでも！ これで甘楽くんが、私だけを見てくれるのなら、こうして良かった！」

手足を魔法で拘束した俺を抱きしめながら、彼女は錯乱したように捲し立てる。

その様子を、珍しい……とは思わない。彼女がそういう人間であることは分かっていた。いや、分かっていたつもりだった。その程度の理解だった。だからきつと、こうなっ

たんだろう。

「あ、あはは……取り乱しちやっつてごめんね。でも、うん、その目で見られたかったんだ。きみの瞳が、私のことだけを映してくれることを、何時からか、私は望むようになっていたんだから」

きみは底抜けに優しく、だからこそ、余所見ばかりしちやうから、と彼女は言う。

またそれか、と思う。彼女はいつも、俺のことを優しいと評する——実際のところ、そんなことは無いと思うのだが。

基本的に、自分のことばかり考えていたつもりだったから……けれども、彼女がそう言うのなら、きつと、ほんの少しくらいは、そうではあつたのだろう。

何とか気の利いたことを言おうと思つたけれど、穴の空いた喉は仕事をしなかつた。掠れた呼気が、抜けていくだけ。

「大丈夫、大丈夫だよ。甘楽くんはもう、何もしなくて良いから……だから、もう眠ろう？ 私もすぐに追いかけるから——そうしたら、ずっと一緒にいようね」

そう言つて彼女……月ヶ瀬ひかりは、ゆっくりと俺に口づけをする。

それが、冷たくなつていく俺に残された、最後の熱だつた。

「いや、俺死んでね!!!?」

なに諦めてんだ馬鹿!! 生きろ俺!!!

絶叫と共に、起床した。

息を切らしながら、恐る恐る首へと手を当てる——穴が空いているどころか、傷一つ無い。

それからじわじわと、今見たものは、月ヶ瀬ひかりルートBADENDの一つ。その夢であることに気が付いた。

ヤンデレちゃった彼女を、三日ほど放置することで、即座に入るトラップじみたルートの一つである。

怖ろしいほどにリアルであり、何故か主人公ではなく、甘樂おれの名前を呼んでいたが、まあ、そういうこともあるだろう。

もうゲームじゃなくて、直接会話する仲だからな……。

普通に仲が良い、と言っても良いくらいの付き合いにはなってきたので、解像度が上がった結果、こういう夢になったのだろう。

「まあ、それにしても最悪なんだけど……」

本気でカス極まる寝覚めの悪さだった。

前の人生含めて、明らかにトップを取れる悪夢である。

俺は死んで最悪だし、月ヶ瀬先輩にも失礼過ぎであった——いや、それは違うのか。

今の俺にとって、月ヶ瀬先輩はそういう行った行為が似合わない、優しい年上のお姉さんであるのだが、それだけではない。

気軽にヤンデレちゃう感じのヒロインなのだ。それは常に、念頭に置いておくべきだろう。

それが主人公相手にのみ、発揮されるものだとしても。

そういう不安定さを持つ人であるということは、忘れてはいけない。

世界が滅茶苦茶なことになり、原作もクソも無い状態ではあるのだが、そこら辺が変わっているということも無いだろう。

見る限り、人柄自体が変わっているようには見えないのだし。

「むしろ、思い出せてよかった……って言うべきなのかな、これは」

親密度の調整なんてもういらないんだ！　と思っていたが、これでうっかり立華くんが死にでもしたら、それはそれでことである。

自動的に月ヶ瀬先輩もいなくなるわけだしな……。

それは困る。普通に困る。超困る。

戦力は落ちるし、テンションは下がるし、雰囲気は最悪になるだろう。

まあ、流石に原作よりかはヒロイン達も慎重に動くだろうが……それでも結局、感情つてコントロール出来るもんじゃないからな。

ここらは心機一転、もう一度関係性を見直していくのはありかもしれない、なんてことを思う。

そう、心機一転。

時期的にも、ちようど良い訳だしな——何せ、今日は入学式なのだ。

つまり、今日から俺は、アルティス魔法魔術学園の二年生になるのである。

第一の破滅を退けてから、色々なことはあつたが、しかし、特段語るべきようなことも無かつた。

というのも、第二第三の破滅が続いてくるのだろうか……という予想に反して、今日に至るまで、すこぶる平和だったからである。

何なら黒帝と魔王の脅威が去つたので、原作で起こるはずだった諸々の事件まで無くなつてしまい、ビビるくらい平穏な学生生活が形成されたのだった。

無論、それが悪いということではなく、むしろ望ましいものであつたのは間違いない

のだが……。

どうにも肩透かしな一年だった、という訳である。

まあ、ゲームでもかなりテンポ良く年月経つしな。基本、一章一年構成ならはつて感じた。

「わわっ、くっ……うあっ!？」

とはいえ、こうも平和が続くと、どうしても気が抜けてしまうのは仕方がないと言えるだろう。

第一の破滅の件についても、かなり急なことであつた上に、明確な被害がほとんど出なかつたこともあり、本当に次が来るのだろうか？　と思つてしまう俺がいるのも、また事実であつた。

そしてこれはきつと、俺に限つた話では無いと思うし、悪いことでも無いのだと思う。喉元過ぎれば熱さを忘れる。大体の人間は、そういうものだ。

「ちよっ、んんっ、たすっ、たすけっ!」

もちろん、こんなことを考えているだなんて、校長やアテナ先生に知られでもしたら、ポカリと一発、気合を入れられてしまうのだろうが……。

下手をすれば、みっちり三日三晩ほど、個人レッスンされそうなものである。

そんなことになってしまえば、生きて帰るのは難しいだろう——全力で挑んでも

あの二人に俺は、全く敵わないのだ。

まあ、基本的に生徒が教師に勝つなんて無理にもほどがある、という話ではあるのだが。

ちよつと高くなり始めていた鼻はもう、ボキボキに折られまくっていた。

ついでに言えば、各寮対抗戦のメンバーも同様である。普通に五人揃って転がされた。

そんな、その内の一人である立華くんが、

「あーっ！ もう無理！ 無理無理無理無理！ 助けてくれーっ！」

と、地上にいる俺たちへと叫ぶ。

空城立華。『蒼天に咲く徒花』における主人公であり、勇者の血を引く少年。

現在、そのアドバンテージは失われたものの、バリバリと才能を覚醒させ始めていた彼は現在、飛行魔法の個人訓練中であり、俺と葛籠織、それから月ヶ瀬先輩は、それに付き合っているのだった。

一人を好む彼が、珍しい……と思われるかもしれないが、これは飛行魔法の訓練は必ず、飛行魔法を習得している者とするよう定められているからだ。

一人で訓練して一人で落ちて、一人で怪我されて手遅れに……とかなられたら困る、という訳である。

「いや、まだいけるまだいける、落ちては無いから。落ち着いて」

「お、おお、落ち着けるわけないだろう!? 見ろ、さつきから全然安定していない!」

「じゃあく安定させれば良いと思う〜」

「それが! 出来たら! 苦労してないいいん……!?!」

文句を言おうとして、飛行魔法に振り回される立華くんであった。

ふおおおん! と勢いよく全身を回転させている。

アレはアレでどうやっているんだよ……と聞きたいところではあるのだが、こんな動きを見られるのは今だけだろうから、取り敢えず微笑んで見守っておくことにした。

飛行魔法は、多くの魔法使いに愛用される魔法ではあるのだが、コツを掴むまでが難しい魔法でもある。

逆を言えば、コツさえ掴めば、すぐに使いこなせる便利な魔法だ。

まあ、基本的に人間って、地に足つけて生きる生き物だからな。

空中で自由自在に動く、なんてことをすぐに出来る人間はそう多くない。

例外と言えば、

「ん〜……あつ、おっけ〜」

とか言つて、一発で習得した葛籠織くらいである。

習つて二分で教師に「完璧」と言わせた辺り、本当に才能の塊であることを分からさ

れてしまった。

もちろん、フラフラしてるとは言え、ああして空中にいるのを保っている辺り、立華くんもかなりのセンスがあるのだが。

「あはは……まだ地面にいる時の感覚抜けてないんじゃないかな？　空中に不可視の足場があるんじゃないかと、文字通り浮いてるって考えようか」

「それは、分かっているんだが……」

「いっつも教室で無になろうとしているでしょ、あのくらい自然体になって」

「君は僕にハツ倒されたいのか!？」

そうなんだな!?　と立華くんが叫びに涙声を滲ませる。

普通に申し訳ない気持ちにはなってくるのだが、何だかんだ言って、彼は追い込まれば追い込まれるほど、成長する類の人間だ。

レア先輩の魔力として使われた時でさえ、ただそれだけで大幅にレベルアップしたほどである。

流石の主人公、と言うべきだろう。

「あは、かんかんつてば、教えるの下手くそ」

「葛籠織にだけは言われたくはないんだけど……」

「私からしたら、どっちもどっちだよ……」

俺の右隣に座る、月ヶ瀬先輩が呆れたような目で俺達を見る。

対して、俺の左隣に座る葛籠織はドヤ！ といった様子で俺を見ていた。何でだよ。どっちも高評価されてるんじゃないやなくて、どっちも低評価されてるって話だからね？

これ……。

「へへへ、かんかんとう一緒なのが嬉しいんだよ」

「そうやってストレートに好意を示すのやめない？ 好きになっちゃうかもだろ」

「もしそうなたら、ちゃんと振ってあげるよ」

「振っちゃダメだろそれは……いや、個人の自由ではあるんだが……」

期待させるとして振るのは犯罪だろ……。

この年頃の男女と言えば、特に勘違いしやすんだから……。

俺が転生者じゃなかったら、既に惚れてる自信があるほどである。本当に気を付けて欲しい。

「勘違いさせると言えば、甘楽くんもな気がするけどね」

「えっ……俺ですか？」

「レアちゃんの時もそうだったけど、きみ、助けを求められたら完膚なきまでに助けちゃうから。そういうの、結構ズルだと思うよ」

「大分理不尽なこと言い始めたな……」

というか、レア先輩の件についてだって、別に俺が何もかもやった訳ではない。何か……本当に謙遜抜きで、流れで解決になっただけである。

しかも、俺が動いたのだって、多分な私情が含まれていたのだ。

推しだから、これからの事件に関わるから、親密度の調整をしたかったから……という、ちよつと誰かに言える感じの類ではない、愚かしい考えが。

これを優しいという一言に纏めるのは、少々以上の抵抗があった。

「……甘楽くんって、そういうところ面倒臭いよね」

「おっと、自分のことを棚上げするのは良くないですよ？」

「!!？」

「えっ？ 自覚無しなんだ……」

監禁したり、強制心中とかしてくる女が、面倒臭くない訳ないだろ。

いや、あるいは自覚が無いからこそ、面倒さ極まっているのかもしれないのだが……。

この辺をあんまり突つুকのは藪蛇になりそうだな、と思つた。

「あはく、どんぐりの背比べだく」

「それは流石に俺に失礼過ぎだろうが……!」

「甘楽くんが今一番失礼なこと言ってるからね!!」

ビックリしたように言う月ヶ瀬先輩だった。

「助けを求めながら加速するのはやめろーッ！」

ていうか、明らかに自ら急降下の姿勢に入ってたよね？ 暴力切による排除札を切るのが

早すぎるだろ。

そう思いながらも、飛行魔法を展開して地を叩く——これ、普通に受け止めても怪我しそうな速度に達してるな……。

瞬きをするごとに速度を上げる立華くんだった。マジで殺す気？ つてスピードである。

とはいえ、流石に箒の速度に追いつくことは無いのだが。箒はある意味では、杖すら凌ぐ大発明だ。

人ひとりで加速できる速度は限界がある。それも、素人ともなれば問題にする程でもない。

俺は急速降下してきた立華くんを抱き留めた。

「ぐおっ……!!? 衝撃す……」

「お、おい！ 不安になるようなこと言うのはやめてくれないか!？」

冷静に考えれば俺も、飛行魔法に関しては何に熟練者つて訳じや無かった。

ほぼ突撃みたいな形で抱き留めてしまい、一瞬息が止まりそうになつたが、上手く立て直して勢いを殺す。

そのまま空中で二、三回ほど回りながら速度を落とすし、ゆっくりと地上に降り立った。「し、死ぬかと思った……!」

「お前を殺してやる、みたいな顔で落ちてきたやつとは思えない台詞だ……」

「はあ!? ベつ、別に僕は、嫉妬した訳じゃ無いんだが!」

「自白しちゃったねえ……」

「ここまで素直に本音を吐き出されると、これはこれで好感が上がってしまうな、と思つた。」

俺の思つていた主人公像とはまあまあ違うのだが、悪くはない。

とはいえ、如何にもツンデレです、みたいな男なのはちよつと斬新だよな……とか考へていれば、

「あらあら、皆様方、揃っていましたのね?」

飛行魔法の訓練中でしたかしら? と、満面の笑みで現れながら、レア先輩はそう言つた。

それから、改まったように口を開く。

「緊急招集ですわ——日之守様。アテナ先生が、貴方様にだけ、話したいことがあるそうです」

◇名無しの神様 そりやね

◇名無しの神様 ただ製造方法も特殊だし材料も稀少だからな……

◇名無しの神様 今はしゃーなしだろ

◇名無しの神様 まあでも、ついに始まったな第二章

◇名無しの神様 第二章……第二章……？

◇名無しの神様 ワイらの知ってる第二章と全然違いますか……

◇名無しの神様 普通なら魔王の存在とか片鱗程度しか出てないはずですが……

◇名無しの神様 ……まあ、二年生編ってことで！

◇名無しの神様 せやね、切り替えてこーぜ

◇名無しの神様 にしても本当に、魔王の件から特に事件は起きなかったな

◇名無しの神様 それなあ

◇名無しの神様 大災害が終わったあとみたいな静けさだったよな

◇名無しの神様 文字通りそうなんだよなあ

◇名無しの神様 ひのもり大災害なので……

◇名無しの神様 つつてもこれ、結局どうなっていくんだろうな

◇名無しの神様 まあ……流石に学園のイベントは変わらない訳だし、ある程度はそ

れに沿うとは思っただけだな

◇名無しの神様 一年生の時も一応、各寮対抗戦っていうイベントの上で起きたことではあるしな

◇イカした神様 頼む……これ以上は平穩に進んでくれ……

◇名無しの神様 いや草

◇名無しの神様 本気の懇願じゃん

◇名無しの神様 もう手遅れに決まってるんだろ馬鹿が

◇イカした神様 えーんえんえんえん

◇名無しの神様 喧しすぎて草

◇名無しの神様 自業自得なんだワ

◇名無しの神様 そんなことよりもっと日之守さんの顔写してくれんか？

◇名無しの神様 日之守のファン出来てて草。

《left》

《left》

【はてさて】蒼天に咲く徒花 バグキャラ日之守甘楽 攻略RTA 【次はどう壊れる】

《left》

デビル・シークレット

第七秘匿機関とは、確かに校長の保有する私設部隊ではあるが、しかし、その本部は学園内に存在しない。

メインとなるメンバーが学園とは関係のない……校長が直々にスカウトした人間が多いのだから、特におかしな話では無いだろう。

具体的な場所はついぞ教えてもらえなかったが、それでも学園とはほど遠い場所にあるという。

とはいえ、今のような状況になった以上、リーダーである校長がアクセスしづらい場所を本拠地とし続けるのは合理的では無いだろう。

そう言った事情から、いつそ学園自体を本部として機能させてしまうのかと思っていたのだが、

「いやいや、そんなんしたら噂になりまくってまうやろ……ただでさえ、お偉いさんの多くは七つの破壊について信じてへんのや。今の段階で変に睨まれたくはあらへん」

と、半笑いで返されてしまった。

アルティス魔法魔術学園の校長は、基本的にその時代における、最強の魔法魔術師となる決まりだ。

しかしそれは、その強さを以て学園を守って欲しい、という思いと共に、重い役職を与えて常にコントロール下に置きたい、という政府のお偉いさんの気持ちがセットになっっているが故のシステムである。

要するに、あんまり問題を起こすと相応以上の罰を課されかねない。

結局のところ、暴力は権力には敵わないという訳だ。

加えて、今の校長……つまりナタリア・ステラスオーノは、築き上げてきた伝説と並行して、問題を起こしてきた人物でもある。

何か不可解なアクションを起こせば、きつく睨まれる可能性があった。それは出来れば避けたい事態である……は？ 今思ったけど、これ普通に人徳の問題じゃん。

ここに来て個人の問題が、致命的な全体の問題になるのは校長失格すぎるだろ……。マジで悔い改めてくんないかな……とは思うものの、であればどうするのか？ という疑問について、パーフェクトな解答を用意してきたのだから、文句は言えなかった。

まあ、なんというか……ぎっくりと言っつてしまえば、校長は学園と本拠地を接続したのだ。

もちろん、物理的な意味ではなく、魔法魔術的な意味合いである——つまり、

「空間転移、ね。俺の知らない魔法魔術がまた出てきたな……」

学園敷地内に存在する教会の一つへと足を踏み入れ、奥に飾られている鏡に手を触れながら、魔力を流し込む。

そうすれば、浮かび上がってきた魔法陣が手のひらに移るので、その状態で祭壇に触れば、本部へと瞬間移動出来るという訳だった。

俺としては、この微妙な面倒臭さにゲームっぽさを感じ、思わずテンションを上げてしまうのだが、他のメンバーからはまあまあ不評であった。

立華くんなんてあからさまに「めんどくさっ……」という顔をしていたほどである。とはいえ、このシステムは実に画期的なものと言えるだろう。

というのも、空間転移なんて技術自体が、未だにしっかりと確立された技術では無いからである。

校長曰く、ダンジョン迷宮の仕組みを用いているとか。

そもそも迷宮に入ったことすら無い俺に、その説明は一ミリも伝わらないのだが……。

「ま、すぐに分かるか……暗証番号2963……開通」

祭壇に触れながら、そう呟くのと同時。世界は暗転した。

「うつひよ〜！ お久じやのう、お前様〜！」

「なにになになになになにに誰誰誰誰誰誰誰」

転移が完了すると同時に、突撃してきた銀髪の少女に押し倒された。

当然ながら、見覚えは無い。

こちらで知り合った人間どころか、ゲーム内キャラを思い返しても、全く該当しないほどである。

何でこんなところに少女がいるんだよ……。

「うん？ 何じゃ、余のことを忘れたと申すか？」

「忘れたも何も、初対面だと思っただけですけど……」

「失礼なやつじゃのう……アレだけ激しくやり合った仲じやろうに」

「何!?! それは何の記憶なの!?! 怖い怖い怖い!」

存在しない記憶をこれでもか、と溢れさせてくる少女だった。本気で恐怖を覚えてしまい、ブルブルと身を震わせてしまう。

見たところ、十歳にも満たない風貌であり、膝まで達するほどブカブカな白のTシャ

ツ（最強！ とドデカく書かれている）を着ているのだが、自己主張が激しめな紅の瞳をギリリと光らせており、妙な大人っぽさを感じてしまう。

参ったな。

本当に分からない。

校長の時と違い、何となく知っているような気はする……という、片鱗すら感じない見知らなさだった。

というか、そもそもの話、ここまで典型的なロリババアみたいなのが知り合いにいないわけないだろう！

ファンタジーでしか許されない存在過ぎだった。いや、ファンタジー世界ではあるんだけれども……。

「え、余のこと、本当に分からないの……？」

「え、俺達、そんなガチな顔されるような仲だったの……？」
滅茶苦茶切なそうな顔を向けて来る幼女だった。

途端に申し訳ない気持ち湧き上がってきたので、本当にやめて欲しい。あと、そろそろ俺の上から退いて欲しかった。

ワンチャン誤解されかねない体勢だからね？ これ。

「やれやれ、仕方のないやつじやのう……」

「俺が悪いみたいなの方向性で話を進めるのはやめないか？」

「お前様ほどの悪を、余は見たことないがのう」

言いながら、ピッ！ と幼女が人差し指を向けてきた。ちようど、手を銃の形にするようにして。

突然、見た目相応にチャンバラでもしたくなかったのかな、なんていう思考は、しかしすぐさま覆された。

「王核限定解除——之なるは、始まりにして終わりの破滅」

「——ッ！」

反射だった。

思考を一瞬たりとも挟むことなく、幼女——魔王を突き飛ばした。

鋭く杖を引き抜き、鋒を向ける。

「射撃魔法：重複展開！」

『M a g i a d i t i r o : D i s t r i b u z i o n e d u p l i c a t a 』

蒼色の魔力が渦巻き、多重の魔法陣が形を為す。

詠唱破棄しても良かったが、今はまだこちらの方が、一つ一つの火力が高い。色々と疑問はあったが、そんなもんは後で良い。

抵抗はあるだろうが、ここでもう一度、行動不能まで落とし込む——！

「うおおおおおおん！ 待て待て待て待て待て待て待て！ 余は無害！ 無害じゃからそれ引つ込めんかあ!!!?」

「は？」

二十を超える魔法陣を展開すると同時に、魔王は泣き叫びながらその場に寝転がって腹を見せた。

さながら犬がする服従姿勢である。

え、ええ……？

始まったかと思われたシリアスが、瞬き一回分にして霧散してしまった。

なに……何なのこいつは……。

思わず俺も、魔法陣を消してしまう。

「見れば分かるじやろ、魔王じゃい、ま・お・う。お前様が徹底的にボコした、偉大なる魔王様じゃ」

「いや、それはもう分かるんだが……そうじゃなくて、というか、もつと分からないっていうか……」

何で幼女姿になってんだよ……。というか、人型になれるもんなの？ 威厳もクソも無いし、何だか色々驚いてしまう。

「それはお前様が、余を限界まで削り飛ばしたからじやろうが……人の形をとるだなん

て、余とて久し振りじゃ」

「その姿が一番消耗が少ないってことか……?」

「まあ。つーか、余だつて元は人間じゃからな、当然じゃろ。口調も当時のモンじゃ」
「!!?」

本当に知らない情報が出てきた!! は? マジで知らない。何それは?

え? めっちゃ強くて長生きしてる魔族だから、魔王って呼ばれてんじゃないの?

いや、確かに言われてみれば、その辺は明言はされてなかったと思うけど……。

元、人間……?」

急に脳がバグるような情報をサラツと出すのはやめろ。

ここ最近はそのような想定外が無かったから、耐性が下がってんだぞ。

「随分と大昔の話じゃがな。軽く千年は前じゃろうよ」

「へ、へえ……」

「クカカツ、何を呆けた顔をしとるんじや」

人の気も知らず、魔王が軽快に笑う。

マジで何笑つてんだ、とグーパーンを入れたいところなのだが、見た目が見た目だけに、どうしても躊躇してしまう。

もつとこう……如何にも魔族です、みたいな姿になってくれたら嬉しいんだけど――

——いや、いや。違うだろ。

仮に姿が幼女だろうが、力を失っていようが、野放しにするのは普通にダメだろ。

一発くらい殴って、気絶させておいた方が良いんじゃないか？

「ええい！　すぐに暴力を振るおうとするのはやめんか。余とて、自身の今の立場からいはわきまえておる。ここまで迎えに来たのじやって、アテナの許可が下りてのことじやぞ」

「アテナ先生の……？　ていうか、そういうことなら、大分前から目覚めてたのか……」
「ざっと一か月ほど前じやがな。こうしてある程度、自由に動くことが許されたのは、今日が初めてじやが」

大方、今のように余の口から、余のことを説明させたかったのじやろう。と、分かり切ったような口調で言う魔王だった。

まあ、確かに他人から今のような説明を受けていたら、何度か鼻で笑っていただろうし、半信半疑になっていたことだろう。

そういった、無駄な時間を無くしたかったというのなら、一応は納得が出来そうだった。

ていうか、アテナ先生いるんだ。

あの人、呼び出すくせにいざ向かえば、メッセージが残されているだけだから、今回

もそうかと思っていた。

ずっと姿を見かけないし、ついに学園を追放されたのかな……と思っていたのだが。「お前様、アテナへの当たりが強すぎじゃろ……まあ、別に良いんじゃないけど。とにかく、そういうことじゃから、そろそろ行くとするかの」

「……………へ?」

「はあ? そんなもん、アテナのところに決まってるじゃろ——今日は大切な話がある、と聞いてはおらんかったか?」

言って、魔王はニヤツと笑ってみせた。

「少年~~~~~!!! 会いたかったよ~~~~~!! 元気してた!? 怪我してない!? 順調に力をつけていたかい!?!」

「いや、いらぬいらぬ! そういうのはもう良い! 似たようなことさつきやったから!」

「ちやんとご飯は食べていたかい? 風邪とかはひいてなかった? 勉強に困ったりも

していなかっただかい?」

「もしかして俺の親とかだったりする感じ?」

実家に帰った時の学生が受けがちな質問を連発してくるアテナ先生だった。

相変わらず以上の、強烈な圧を伴っており、若干引いてしまう。

会わなかった分だけ、何かしらのエネルギーがチャージされてんの? みたいな爆発

具合だった。

やっぱり毎日会わないと、普通の会話が出来ないのかもしれない。

抱きしめられそうになるのを回避しながら、切実にそう思った。

「え? そんなと毎日会いたかったって? もう、仕方のない子だなあ、きみは……」

頬を赤らめながら無理ある捏造し始めた! 怖すぎるだろ」

「大丈夫、すぐ怖くなくなるよ」

「怖さが二段階くらい上がりましたよ、今」

これ以上物理的に距離を縮めるのはやめよう、と固く誓う俺だった。

何をされるか分かったものではない。

ただでさえ、俺は実力的にこの人に敵わないのだ。

「何をイチャついとるんじや、お前様は……」

「今のがイチャついてるように見えたのか? 本当に?」

「うわっ、急に据わった目で見てくるのはやめんか！ 普通にビビるじゃろ！」
ちえい！ とペシペシ蹴って来る魔王だった。

何度見ても「これが……魔王か……」という気持ちになっちゃった。

このままでは殺されてしまう……と怯えていた俺がマジな馬鹿に見えてくるのでやめて欲しかった。

もう少しこう……威厳とか保ってほしい。

いや、実際に戦った時のこいつは強すぎるくらい、強かったんだけど……。

「それより、他のメンバーとかは呼んでないんですか？ 緊急だって聞いたんですけど」

「ん？ うん、そうだね。せんせーが会いたかったから、呼び出しちゃった……って言うのは半分冗談なんだけど」

「半分はガチなんだ……」

この人、俺のこと好きすぎるだろ……。

あんまりそういつたことを言われ続けると、変に絆されそうになって困る。

「学園外のメンバーは結構忙しいからねえ、順次伝えていく予定さ。だから、まずは少年に……ってね」

「レア先輩たちを、呼ばなかった理由は？」

「質疑応答は一人の方が楽だから、かな。それに、二人つきりが良かったし」

「ナチュラルに余を除外するのはやめんか！ 今日の主役は余じゃろ……!?!」
「は？ 主役はいつだって少年なんだが……!?!」

ピヨンピヨンピヨン、とジャンプする魔王と睨み合うアテナ先生だった。
信じられるか？ この二人、原作だとラスボスなんだぜ……。

あまりにも馬鹿みたいな光景すぎて、つい忘れそうになつてしまふのだが、この二人が揃つてるとか、それだけ言つと緊張感が走りまくる状況であつた。

普通に考えて、この並びは俺が殺されるやつだろ。

何でその間で、中学生みたいな主張をぶつけ合つてんだ……。

「どうでも良いんですけど、結局本題は何なんですか？」

「ん、そうそう、それなんだけどね——」

「——来ておるぞ、二つ目の破滅が。もうそこまで迫つてきておる」

アテナ先生の言葉を引き継ぐように、魔王はそう言った。

いつの間にやら椅子に座っており、実に偉そうに足を組みながら。

余裕ありげな表情で、煽るように。

アテナ先生からガンガン睨まれているのを、ちつとも気にすることなく。

「既に、余の身から第一の破滅は取り除かれた……しかし、それでも残滓くらいは残つておるのじゃろな。分かるんじやよ、他の破滅の、気配とでも言うべきものがの」

「……それは、どこまで分かっているんだ？」

「生憎、これだけじゃ。何時来るか、どこに来るか……：そういった、具体的なところまでは分からぬ。ただ、近づいて来ておるといふことだけは、分かるという話じゃの」

「ふうん……カスのドラゴンレーダーみたいなものか」

「良く分からんが侮辱されてることだけは分かるからの!？」

完璧なしたり顔を崩して「んがーっ！」と吼える魔王だった。実に平和だな、と思わず考える。

というか、校長やアテナ先生が魔王を生かしてるのは、これが狙いだったのか……。

アテナ先生の未来の知識はもう、ほとんど役に立たない——というのも、彼女の知っている未来と今は、既に変わってしまったからだ。

同じタイミングで、次の破滅が来るとは限らない。

まあ、だからと言って、弱つてるとは言え魔王を飼うなんて、ぶつちやけ正気じゃな
いと思うが……。

アテナ先生は事情が事情だし……って感じだが、魔王はまた別だ。

さつさと駆除した方が今後の為になる——いや、もちろん、味方に出来るのなら
ば、心強くはあるのだろうか。

普通じゃないからなあ、校長もアテナ先生も……。

「もう少し、詳しいことは分かんないの？ 例えば……一か月とか、二か月とか、それくらい曖昧さでも良いから」

「ん……こればかりは、感覚的なものじゃからのう。今すぐではないが、半年以内には来る……といったところじゃろうな」

「ふうん……」

意外と当てになるな、と思った。

少なくとも半年以内に来る、ということが分かるのは大きすぎる。道理で最近、また校長が学園にいないことが増えた訳だ。

色々と、準備しているのだろう。

「それじゃあ、もう一つ質問」

「ふん、何でも申すが良いわ」

「今のが、全て真実である証拠は？」

「……？ ……!! もしかしてお前様、余が嘘を言っているとでも言いたのか!？」

「むしろ何で、その可能性を考慮されなと思うたの？」

誰もが、一番最初に疑問に思うところだろうが……!

言っておくけど魔王の言葉とか、信頼に全く値しないからね？

歴史的に見ても、長いこと敵対し続けてきた、言わば人類の敵である魔王に、信憑性

とか無いから。マイナスぶち抜けてるから。

「はあく……やれやれ、これだから人類は嫌なんじゃ。疑い深くて、面倒臭い」

「元人間だったやつが、良く言うな……」

「魔王として過ごした期間の方が長いからのう……故にこそ、余は敢えて言うぞ。余は真実しか話しておらん、とな」

「根拠は？」

「ある訳ないじゃろう……」

そもそも、と魔王は言葉を付け加える。

見るからに仕方がない、といったポーズで、ため息交じりに。

「自分より強い者には従うのが道理じゃろうが……。封印なんて狡い真似でなく、弱っていたとは言え、真正面から打ち破られたのは、初めてじゃったぞ？」

「……えっ!? そんな野生の獣みたいなルールでお前、生きてたの!？」

「流石にそれは聞き捨てならん侮辱じゃからな!? 特異点とは言え、マジでハツ倒すぞお前様ア！」

ガターンツッ! と椅子を倒しながら、ファイティングポーズをとる魔王だった。

お、やるか? とこちらにも構えようとすれば、不意にアテナ先生が言う。

「ああ、それ。ちよつと聞きたかったんだけど、良いかい？」

「む、なんじゃ……」

「きみは少年のことを、特異点って呼んでるけど、それってどういう意味なのかな」

スツと目を細めたアテナ先生に対して、魔王は「ふん」と鼻を鳴らした。

「何じゃ、知らなかったのか……いや、それも無理ないのかの」

「……というところ？」

「こやつはどう見ても異常じゃろうが。魔力が多い、頭が良い、才能がある……そういう意味では無く、存在からして異質じゃ。この世のものとは思えんほどに」

「……………」

「あらゆるものにおいて例外。世界の破滅にも、創造にも立ち会おう何か。世界が変わる時、必ず起点に在る者。そういう存在を、七つの破滅はそう呼ぶ——ま、ざっくり言えば、未知そのものってところじゃな」

また一つ、賢くなれたのう？ と笑う魔王に対して、少しだけ考えさせられる。

今まで何となく、なあなあで流してきたのだが。

俺は一体、何者なのだろう——と。

ニユー・ヒロイン

アイラ・ル・リル・ラ・ネフィリアムは、『蒼天に咲く徒花』において、ヒロインの一人という役柄を与えられている。

二章における、実質的なメインヒロインであり、これまでのようにナンバリングするのなら、ヒロインNo.3と云ったところだろうか。

腰ほどまである黒の長髪に、陶器のような白い肌を持ち、ブルーの瞳を宿すクールな彼女は、当然ながら大人気キャラである。

さて、その性格と言えば、日鞠の逆——と言うのが、一番手軽に伝わるだろうか。潔癖症かつ、誰にでも壁を作るタイプであり、パーソナルスペースを広く持つ彼女は、しかし、驚くほどにチョロい。どれくらいチョロいかと言えば、極度の一目惚れ体質とかいう、裏設定があるくらいにはチョロい。

普通に世間話をするだけでグングンと親密度が上がる女性であり、気付けばあっちゃから告白してることがあるほどである。

とはいえ、その世間話が出来るとなる仲になるまでが、ちよつとだけ大変ではあるのだが

……。

何せ、初対面時の会話なんて、

「はあ……近寄らないでくれるかしら。視界に入るだけで不愉快なのよ、貴方」

なのである。

しかもこれ、特に深刻な理由があつて、他人を遠ざけているとかではない。単純に、人嫌いなだけであるのだ。

そういつたこともあり、彼女の所属する白の一角獣寮では「氷の女王」と呼ばれているのほどであつた。

特に氷結系の魔法や魔術を使わないにも関わらず、そのような二つ名がある時点で、その冷たさが分かるというものだろう。

とはいえ、先程も言つた通り、その氷はすぐに解け落ち、何なら絵に描いたような都合の良い女になるのだが……。

初めの内こそ、容赦のない鋭い言葉で心を抉つて来るが、耐えてさえいればすぐに絆される女である。

もちろん、この時主人公のメンタル値が低いと、心が折れて鬱になつたりするのだが……。

攻略自体は、そこまで難しくないキャラと言つて良いだろう。

ただ、こういった性格の女性なので、こちらからアクションを起こさなければ関係性を結べない、というのがポイントだろうか。

あつちから誘ってくるということがまず無いので、忘れないように話しかけに行かなければならない。

え？ 忘れたら？ もちろん死ぬ。何か知らんところで変死体になってる。

しかも、死なれたら主人公のやる気が下がりがまくるし、最終決戦で普通に不利になるんだよな……。

まあ、もうその原作はかなり原型が残ってないのだが……。

そうは言っても、もっと恐ろしい脅威が降りかかってきているのである。彼女の協力には必須と考えるべきだろう。

アイラは少々傲慢な人間ではあるが、それに見合うだけの才能と実力がある女性だ。

二年生にもなったことだし、如何にして立華くんをぶつけるか、あるいは自ら赴き、友人程度の距離を保ちつつ合流させるか……ということ、最近は何となく考えてはいたのだが。

そんな小賢しい考えは、この壊れた世界の前では全く以て無意味だった、と言うべきなのだろう。

とある日の、放課後。

ワイワイと、三々五々に散っていくクラスメイトの間を縫うように、彼女は俺の前にやってきて、

「日之守くん、よね？ 初めまして、私はアイラ。アイラ・ル・リル・ラ・ネフィリアム

……早速で悪いのだけれども、貴方、私とチームを組んでくれないかしら」

なんてことを、言いのけたのであった。

なるほどな、意味が分かんねえ。

隣で急にヤバイ目をし始めた葛籠織に震えながら、俺は何故、こんな意味不明な状況に陥ったのかを思い返すことにした。

「ああ、そうだ。言い忘れていたが、明日からお前らには迷宮攻略を^{ダンジョン}目指してもらおうから」

顔に傷のある、強面な我がクラスの担任が、授業が終わる十分ほど前に、「今思い出した！」みたいな面でそう言った。

つまんねえな〜という雰囲気だった教室が、一瞬だけシン……となり、数秒置いて

ドツ！ と溢れ出すように騒がしくなる。

この授業は珍しく、三つの寮が合同で受けていた授業であり、その騒がしさも人一倍……いや、三倍だ。

しかも学年が上がったとは言え、寮同士の仲はすこぶる良好であるのだから、誰もが私語をまき散らし始めていた。

とはいえ、当然ながら例外というのはいる訳であり、

「ふにゅ……すや……」

といったように、俺の右隣で寝息を立てている天才美少女もいれば、

「……んんっ……」

といったように、俺の左隣で寝てる振りをしている主人公もいるのだった。

マジでこいつら何やってんの？

片や一ミリも興味を持たず、片や構って欲しそうにチラチラ見てくんだけど。

どちらもベクトルが違うだけで、問題児でしかなく、むしろ俺が寝てないのがおかしい、みたいな空間が形成されているのだった。

無論、ここで俺まで寝る訳にはいかないのだが。

何故か担任が、滅茶苦茶厳しい顔で俺を睨んできているから……というのもあるが、そもそもこの迷宮攻略自体が、原作二章における重大なイベントだからである。

第二の破滅がそろそろやってくるといふのなら、ここを警戒しておいて損は無いだらう。

迷宮は文字通り別世界だからな……。

当然、肩透かしになる可能性は大いにあるが、用意をしておいて損することは無いだろう。

それに俺、普通に授業が楽しいんだよな……。

何か考えなくても大体理解るので、学ぶ楽しさを感じているという訳では無いのだが、当然のように「魔法」とか「魔術」とかいうワードが入って来る授業、楽しくない訳が無かった。

まあ、その内慣れてしまうのだろうか、それも込みで今は楽しい。

「知ってるだろうが、迷宮つーのはある種の異世界だ。天地はひっくり返るし、燃えねえ炎だってあれば、融けねえ氷だってある。当然、未知の敵性体だって存在する」

先生はペラペラと喋りながらも、それに沿ったイメージを魔法で出力していく。

この辺、教師の特色が出るよな……と、こちらに来てからつくづく思わせられる。

俺としては見慣れている、黒板に板書していく先生もいれば、こうして魔法を使う先生もいる。

中には実践しかさせない先生もいるし、マジでただ喋って終わりなだけの先生もい

る。

強さを重視してるせいかな、変な教師が多いんだよな。

ゲームではあんまり目がいかなかった点でもあり、かなり新鮮味があった。

「つつても、どれもこれもが常識からぶつ飛んでる訳じゃあねえ。危険性が高ければ高いほど非常識だし、低ければ低いほど常識的だ。で、この内お前らが攻略するのは、Bランク迷宮になる」

担任がそう言いながら、『E x, S, A, B, C, D, E』といったようにアルファベツトを並べる。

そうそう、そうなんだよな。

Eランクが一番難易度が低く、E xランクが一番難易度が高い（というか、測定不能の迷宮である）。

つまり、Bランクはほどほどに常識的で、ほどほどに非常識的な迷宮、という訳だ。いつそのこと、最もスタンダードな迷宮と言い換えても良い。

まあ、原作二章は黒帝の仕込みによって、Sランク迷宮に飛ばされるんだけど……。今回も一応、それに類似した事件が起こる可能性はあるとは思っておくべきだろう。

もちろん、黒帝も魔王も、今となつてはこちら側であり、校長や他の教師も念入りに、迷宮の精査はしてくれているだろうが……。

七つの破滅は、文字通りイレギュラーだ。

何が起こつてもおかしくはない。

「当然だが、お前らだけでつっ—話じゃあねえ。四年生以上、七年生以下で一人入れて、学年混合の四人パーティを作れ」

八年生は今忙しいからな、と変わらず怠そうに言う担任だった。

こういうのつて、本当に先輩に知り合いがいなかったら詰みだよな……。

ゲームの時は全く気にすることなく、それどころか高ステータスキャラを無条件で組み込めるとか最高じゃん！　と思っていたのだが、こうして現実になると、げんなりとしてしまう。

何だかんだ、年上の知り合いが少ないんだよな、俺……。

というか、そもそも知り合い自体が少ないのだが——何だか、妙に遠巻きにされることが多い学生生活である。

まあ、普通にドン引きされてるだけだとは思うんだけど……。色々と、滅茶苦茶やつたからな。

とは言え、一人ならば、月ヶ瀬先輩かレア先輩で良いだろう。

異常事態に陥つても、最も落ち着いて対処できるメンバーとも言えるし。

しかし、そうなる、レア先輩と迷宮攻略できる可能性が浮上する訳か……。

完全に二次創作でしか見たことの無い光景すぎて、夢が広がってしまうな。

何か、大切なことを忘れているような気がしないでもないが、それすら吹き飛ばしてしまうワクワク感だ。

「ただし、これは死人を出さねえ為の保険だ。基本的には三人で攻略するものと思え——お前らは、アルティス魔法魔術学園の生徒なんだからな。これくらいやってもらわなきゃ困る」

浮ついた雰囲気をぶち壊すように、冷たい声で担任が言う。

あからさまにプレッシャーをかけに来た感じだ。とはいえ、それを性格が悪いとは言えないのだが。

アルティス魔法魔術学園は、設定上は結構なエリート校である。

メインキャラたちの才能がおかしすぎるだけであり、甘^お楽^れも含めてモブ生徒達ですら、才能には恵まれている。

それはつまり、要求されるハードルが高いという意味でもある、ということだ。

と言っても、この辺俺はかなり実感がなく、酷く曖昧な認識しかないので……。

ゲームでも大して触れられないし、俺の場合は、気付いたら入学していた！ みたいなもんだしな。

「つーわけでだ、仲良しこよしするのは咎めねえが、死ぬような思いをしたくなきゃ、面

子はバランス良くすることたな……以上だ。時間も時間だし、授業は終了。ホームルームも怠いから抜きで良い」

時計をチラと見てから、教科書をパタンと閉じた担任が、「問題だけは起こすなよ」と気怠そうに言いながら教室を出ていった。

厳つい顔面の割りに、意外と生徒から好かれている理由が垣間見える対応である。

ちよつと早めに終わらせてくれる教師は、どこでも好かれるもんだよな。

かくいう俺も、好感度がちよつと上がるのを感じながら、両隣を小突こうとした、その時である。

少しだけ早い、しかし規則的な足音が耳朶を叩き、誰かが視界に入る。

靡く濡れ羽色。

細められた、ブルーの瞳。

白魚のような手が、俺の机に片方乗せられた。

「日之守くん、よね？ 初めまして、私はアイラ。アイラ・ル・リル・ラ・ネフィリアム……早速で悪いのだけれども、貴方、私とチームを組んでくれないかしら」

真正面で、もちろん断らないでしょう？ みたいな面をするネフィリアムに対し、俺は思わずフリーズしてしまう。

それから、じわじわと言葉の意味と、彼女の存在を認識していき、最終的に「あ、こ

れじゃん」という感想が脳に落ちてきた。

いや……これじゃん。

忘れてたの、これじゃん!!

本当なら、一年生組はこれで三人になるんじゃない?!

そりやそうだよ、いつの間にかゲーム目線で物事考えていたけれど、甘^{おれ}楽は主人公じゃない!

四人で組んだらあぶれるじゃん! 俺が邪魔者過ぎる……!

いやっ、というか、何で俺の方に来たんだ……じゃなくて、何であっちから来てるんだよ……!

急にラツシユをしかけてきたイレギュラーに、流石に困惑してしまう。

「あら、嫌ね。そんなに間の抜けた顔をしないでくれるかしら。別に、好意があるという訳では無いのだから」

「……うー、えーと、じゃあ、何で?」

「当然、私が隣に並ぶのならば、貴方以外には有り得ないと、そう感じただけよ」
ため息交じりに、そんなことを言うネフィリアムだった。

え? 初対面とは思えないくらい、高く評価されてるんだけど……とは思ったが、魔

王の件で生じた影響と考えれば、まあ分からなくもない。

そんなに力に固執するような人間だったか？ という疑問はあるが、これは単純に、俺の彼女に対する解像度が低かっただけ、とも言えるだろう。

それに、驚きはしたが、この流れはまあまあ理想的である。

俺と、立華さんと、葛籠織と、ネフィリアム。

二人ずつに分かれて、他をテキトーに補充する形にすれば、まあ、丸く収まるんじゃないだろうか。

ネフィリアムの性格は難有りではあるが、そんなことを言ってしまうえば、俺の周りにいるやつ、全員難有りまくりな訳だしな。

変人同士、仲良くやってくれられることだろう——

「あは、身の程を知らない女だ」

——とか思ったところで、嫌に粘着質な声が、耳朶に張り付いた。

思わずゾツとしてしまい、誰の声であるのかが、一瞬分からなかった——それほどこまでに、言葉にしづらい、悍ましきのようなものが、そこには込められていた。

いつの間にか、ハッキリと目を覚ましていた葛籠織が、ドロついた眼でネフィリアムを見る。

「……誰が、身の程知らずですって？」

「はつきり言われなくちゃ、分からない？」

バチツ、と火花を散らすように視線がぶつかり合った。

それを契機に、空気が最悪になっていき、教室からすげえ勢いで人が消えていく。

俺も便乗したいところであるのだが、左隣にいる立華くんまで、厳しい顔でその場から動かなかつたので、脱出不可であった。

「思いつがるのも、ほどほどにしないとだよ？ ぼっちさん」

「は、日之守くんに寄生するだけの女が、良く吼えるわね」

「寄生することしか能のない女には、そう見えちゃうんだね。かわいいさ」

チツ、という舌打ちと共に、ネフィリアムが腕を組む。

それに対して葛籠織は、いつも通りの表情で頬杖を突いた……いやつ、怖えーツ！

なにになにないに？ 何で急に喧嘩が始まってんの!?

君たち、初対面だよね？

親の仇なのかな？ みたいな目で睨み合うには、あまりにも因縁が無さすぎるだろ。

頼むからやめて欲しい。

何がキツイって、俯瞰すると俺を取り合ってる、みたいな構図になってるのが一番キツイ。

こんな最悪な両手の花、俺いらぬ……。

「……良いわ、分かった。ではこうしましょう——葛籠織日鞠、私と決闘なさい。

勝った方が、日之守さんとチームを組むのよ」

「あはく、わざわざ負けに来るのく？」

「あら、怖いのかしら？　そうよね、だって私の方が強いんだもの」

「短絡的な煽りだく、ふふ、でも、良いよ。乗ってあげるく」

「度胸だけはあるようね……楽しみだわ。それでは、行きましょうか」

「おっけく」

言つて、二人は立ち上がる。

決闘場へと向かうのだろう——それこそ去年、俺と立華くんがそうしたように。

その後ろ姿を見ながら、俺は言葉を零した。

「え……？　何か俺、今ナチュラルに賞品にされなかつた？」

「ははっ、モテる男はつらいな？」

「いやこれモテてる言つて良いのか分からな……うわっ、顔こわっ！」

何で立華くんまでそんな顔してんの!?

まるで俺が一番悪いみたいな感じになるから、本気でやめて欲しい……。

ちよつと泣きそうになりながら、今ばかりは全肯定アテナ先生に傍にいて欲しい、

と思ふのだった。

《left》ご神託チャット▼《/left》

《left》

☆転生主人公 は？ なにあの女？

◇名無しの神様 うわっ、ビックリした！

◇名無しの神様 いきなり濃度の高い殺意滲み出すのやめろ

◇名無しの神様 転生して以来初めて見る顔でワロタ

◇名無しの神様 急に日之守争奪戦始まるのダメすぎるだろ

◇名無しの神様 【悲報】うちのボケナス、争奪戦に乗り遅れる

☆転生主人公 敢えて話に入らないことで、一緒に見る機会を手に入れたって言った
ら、どうする？

◇名無しの神様 急に知恵がチンパンジーから人間に進化するのやめろ

◇名無しの神様 何でその知能をRTAに生かせねえんだお前は

◇名無しの神様 いやでも日之守攻略としては正しい、のか……？

◇名無しの神様 面白い通り越して怖いんだよちよつと

◇名無しの神様 あのパグ太郎また女引っかけてる……

◇名無しの神様 何なんすかね……ヒロインを誘うフェロモンでも出てんのか？

◇名無しの神様 有りそうで嫌だなそれ……

◇名無しの神様 二年生編、冒頭から滅茶苦茶になつて何かホツとしちやつた

◇名無しの神様 わ、わかる……

◇名無しの神様 順調だなく怖いなくって思つてたから助かる

◇イカした神様 ま、このくらいはね、許容範囲内のイレギュラーつすよ

◇名無しの神様 声ガツタガタに震えてそう

◇名無しの神様 日鞠たんの目、かなりガチだったからな……

◇名無しの神様 つつても、アイラも相当強いだろ

◇名無しの神様 一応原作通りなら、二年生編開始直後は学年最強格だな

◇名無しの神様 すぎえ戦いになりそうだけ

◇名無しの神様 死人が出ないことを祈るばかりだな

《left》

《left》

【開幕！】蒼天に咲く徒花 バグキャラ日之守甘楽 攻略RTA 【日之守争奪戦！】

《left》

ヒロインズ・デュエル

アルティス魔法魔術学園は決闘を許可されている……どころか、むしろ推奨すらされている学園である。

教師勢が全員実力者であることもあり、実戦でこそ、学べるものがあるということを知っているからだろう。

だからこそ、決闘場は各学年につき、三つずつ提供されていた。

その内の一つで対峙する二人を、立華君と並んで特等席で眺める。

「凄いギャラリーだな……僕たちが戦った時より、多いんじゃないか？」

「まあ、二人とも有名人にはあるからな……」

「フツ、どうした？ 顔色が悪いぞ？」

「これで良かったら俺、嫌なやつ過ぎるだろ……」

あー、もう、マジで胃が痛い。

何でこんなことになってんだ、という文句を通り越して、最早泣きながら暴れたいくらいである。

というのも、仲間と仲間候補がバチバチなものもそうであるのだが、あの二人が俺を奪い合っている、という噂まで一気に広まってしまったからだ。

いや、変に尾ひれがついてる訳ではないし、まあまあ事実ではあるのだが……。

そのせいで、学年問わず野次馬が決闘場には集まりまくっているのだった。

もうね、四方八方から好奇心による視線をぶつけられてるんだわ。

注目されるのは苦手というか、普通に嫌いなので勘弁してほしかった。

「注目を集めるようなことばかりしておいて、面白いことを言うんだな、君は」

「いやっ、別に好きでこんなことしてる訳じゃ無いからね？」

突然発生したイベントに、全身引きずり回されてるみたいになってんだよ。

身も心もボロボロになるので、そろそろ俺には優しくしてほしいところだった。

「自業自得だろ……それより、ほら。日之守は、どっちが勝つと思うんだ？」

「ええ……分からない……」

「……………」

は？ 嘗めてんのか？ みたいな顔を、無言で向けて来る立華くんであった。

何か恥ずかしくなってくるからやめて欲しい……別に、考えるのが面倒だったという

訳ではない。

本当に分からないので、分からないとしか言いようがなかったのである。

しかし、まあ、敢えてどちらかを選ぶというのなら、やはり葛籠織だろうか。

原作通りに進んでいるのなら、間違いなくネフィリアムであるのだが……如何せん、ここはもう、別の世界線と言つても差し支えが無い。

その証拠という訳ではないが、葛籠織も立華くんも、通常では考えられないほどのレベルアップを遂げている。

そういった側面を加味すれば、やはり葛籠織が若干上か……？　と思わなくもない。

ただ、葛籠織が原作通りでない以上、ネフィリアムだつて、原作通りでない可能性が非常に高いのも、また事実であると言えるだろう。

それこそ、ネフィリアムから俺に声をかけてきたように。

何かしらの違いが、彼女を大幅にパワーアップさせている可能性は大いにあった。

何がどう作用して、どのような変化を生むのかは全く分からない、ということは、一年生の時に心底思い知らされたから……。

まあ、特に何かが起こっていなくとも、ネフィリアムはクソ強いので、やはり分からないというのが本音になるだろう。

「ま、見てれば分かるだろ」

「それは、そうなんだが……まあ良いか」

不安なら手でも握ろうか？　という、立華君にしては珍しい提案を拒否すると同時

に。

決闘の立会人である教師が杖を振るい、戦闘開始の合図を放った——瞬間。
 「撃ち殺せ」
 Spara a morte

ネフィリアムの言葉に応じて、漆黒の弾丸は撃ち放たれる。

そう、彼女は魔法使いではない。魔法魔術師だ。

《暗影》という、先天性魔術属性を保有する彼女は、既に相当なレベルでそれを使いこなしている。

とはいえ、魔法で対抗できないほどではない。当然だ。

これは射撃魔法で撃ち合いになるかな、と思えば

Spara attraverso
 「射 抜 け」

同じように撃ち放たれた光の矢が、それらを全て相殺した……………あ!!?!?

え……いや、え!? つ、使ってるじゃん……。

葛籠織、当たり前みたいな面で魔術、使ってるじゃん……!?

有り得ないだろ、と有り得くはない、という意見が脳内で激しくぶつかり合う。

というのも、葛籠織が魔術を使っていること、それ自体はおかしいことではないからだ。

葛籠織は天才中の天才である。故に、当然ながら、先天性魔術属性を保有している。

だから例えば、今のネフィリアムがやったように「殺せ」だけでは基本、魔術は発動しない。

その後「撃ち殺せ」という、明確な手段を言葉にすることで、一つの魔術に仕立て上げているのだ。

当然、それは葛籠織の方も同様である。

Sparatratravrosioi Gidicaii peccato
「弓引くは天の射手 汝の罪は今許される」

なんて？

いや、え……なんて？

とんでもなく抽象的な言葉と共に生成された、百を超える光の矢に思考が止まる。

え？ 知らない……。何それ、俺の知ってる魔術と違う……。

俺がドヤ顔で魔術についての説明をした直後に、それを覆すような真似をしないで欲しかった。

魔術はもつところ、直截的な言葉で使うものだろうが——ああ、いや、そうでもないのか？

飽くまで魔術とは、本人のイメージに依存するものだ。

だから、葛籠織がアレで完璧なイメージを作れているのなら、発動してもおかしくはないってことになるだろう。理論上は。

そういう意味不明な自由性があるところも、魔術の強みと言えなくもない。いや嘘。やっぱりおかしいよあいつ……。

「——沈め！」
Laverei.

トポン、とまるで水に沈むように影へと消えて、ネフィリアムは光の雨を回避する。いや、あれ本当便利……というか、最早ズルだよな。

影にさえ入ってしまえば、彼女はほぼ無敵だ。その上——

Calcidae uccidi
「蹴り殺せ！」

「——守護魔法：高速展開！」

『*Magia dei guardiani: Distribuzione ad alta velocit.*』

——影であるのなら、どこからでも出てくるのが出来るのだから。

葛籠織の影から飛び出したネフィリアムの、影を纏った一撃が守護魔法を突き破り、葛籠織へと届く。

「かつ、は——」

まともな叫び声も上げられず、葛籠織は吹き飛んだ。

地を滑るように転がっていき、壁にぶつかることでようやく動きを止める。

姿は見えないが、流石に倒れたってことは無いだろう。

ただ、相当なダメージではあったはずである。

「魔術師なのに接近戦をやるなんて、クラウネス先輩みたいだな……」

「そこも込みで、影から出てきたんだろうな。葛籠織も、意識は中々遠距離に向けてたし、完全に意表を突かれた形だ」

まあ、ネフィリアムはそもそも、中々近距離タイプの魔法魔術師ではあるのだが。

影に潜ることで、常に距離的なアドバンテージを取れるから、そうなるのも当然と言ったところだろう。

「……改めて、聞いても良いか？ どっちが勝つと思うか」

「え？ ううん……」

もう、聞くまでも無いんじゃない？ と思いつつも決闘場へと目をやれば、土煙から葛籠織が姿を現した。

守護魔法の上から叩かれた左腕は軽くひしゃげている。動かせないどころか、何もしてない今でさえ、激痛が走っているだろう。

俺の知る限り、葛籠織があそこまでの傷を負うのは初めてだ。

痛みの他に、混乱や困惑だつてあるかもしれない。

だから、まあ、ここまでだろう。

流石にここまで見れば、決着も見えたようなものである。

「まあ、多分だけど。奇跡が起きない限りは——」

決まったな、と。

アイラ・ル・リル・ラ・ネフィリアムは、慢心ではなく現状を分析した上で、そう断じた。

確かに、葛籠織日鞠は強者である。

それは間違いないことであり、実力についてだって、自分と同じか、あるいはそれ以上だっただろう。

だからこそ、初撃が重要だった。

実力がほとんど拮抗しているが故に、先に負傷した方が敗北する。そういう認識がま
ずあった。

今の一撃は、確実に左腕を砕いただろう。無論、その程度で倒れるような女では無い
だろうが、激痛が全身を駆け巡っているに違いない。

魔法魔術に限らず、戦闘というのは集中力が物を言う。

さて、片腕を潰された状態で、どれほど戦闘に集中できるだろうか？ 余裕を保ち、常に分析していられるだろうか？

まだ決闘は始まったばかりであり、一度も負傷していないこちらが圧倒的に有利だ。このまま長期戦に持ち込み、じわじわと体力を削っても良いし、一気に仕留めてしまっても良いだろう。

この決闘は、今やネフィリアムの手の中にある。

(……決めた。一息で始末してあげるわ、葛籠織さん。貴女は強かったから、そこには敬意を表しましょう)

射撃魔法を複数展開し、並行して魔術の詠唱を口遊む。

そこには「後はもう仕留めるだけ」といったような慢心は、欠片ほども存在しない。

飽くまで健在であることを想定した上で、全開の火力で叩きのめす。

(悪いけど、日之守くんはいたたくわね……いえ、日之守くんの隣、と言うべきかしら) 日之守甘楽。

異質な強さを持ちながら、どこか惹かれてしまう少年。

見ていると、自身の本能が……あるいは才能が、この人だと叫んでいるような感覚に陥る、恐ろしい男の子。

きっと、葛籠織も同じ感覚を得たのだろう。目を見れば、そのくらいは容易に分かる。まあ、だからこそ、奪いたくなるのだが。

「目標、捕捉——3」

砂煙から姿を現したものの、彼女は動かない。

否、動けないのか。

「2」

関係ない。ギブアップしていないのなら、意識が飛ぶまで叩きのめす。ただ、それだけだ。

「1」

けれども、まあ、迷宮攻略は三人で、とのことだったから。

私と、日之守くんと、おまけで貴女でも良いかもしれないわね、なんてことを思った。

『Sparare!』

杖が叫び、魔法は起動する。

同時にアイラは勝利を確信し——

「あは、日鞠、分かっちゃった」

普段と変わらない、緩やかな声でした。

しかし、その瞳はかつてないほどに世界を捉えている。

ネフィリアムは、瞬時にま^まずいと思つた。

思つた時には、遅かつた。

Aurora dai! altra parte
「彼方より極光を」

殺到したネフィリアムの、決着をつけるだけだった魔法魔術は、しかし、振り抜かれた極光によつて打ち碎かれた。

何の抵抗もなく、ただ光に吞まれるように。

Lamentaci ciei ch'è cadono.
「堕ち行く天に嘆きを」

光の柱が、空から幾つも降り注ぐ。

影を生み出す余地を残さず、ただ真つ白な光に染め上げられていく。

Desideri qui
「願いを此処に」

世界が光に沈んでいく。世界が光に吞まれていく。

影は残らない、逃げ場所はどこにもない——それなら！

(同じように、喰らい尽くしてあげるわよ！)

葛籠織日鞠は稀代の天才である。今この瞬間、埒外の魔術を行使していることから、それは分かるだろう。

さりとて、ネフィリアムもまた、天才なのである——魔術に話を限定するのなら、今なお彼女の方が練度は上だろう。

「影よ 大いなる影よ 海の如く広がりし深淵よ 忌々しい光を呑み下せ！」

初見である葛籠織の魔術に対して、ネフィリアムは反射で特効魔術を組み上げた。

地の底から、這い出るように湧き上がってきた影は——しかし、空から落ちて来る、無数の極光によって打ち砕かれた。

拮抗することすら出来なかつた。

ただひたすらに、蹂躪され、食い潰される。

「——え？」

間の抜けた声が、ネフィリアムの口から零れ落ちた。

そう、ネフィリアムは天才だ。加えて、努力を怠ることの無い勤勉な生徒でもある。

だが、足りない。

それだけでは葛籠織日鞠には届かない。

彼女が見るは、遙か先の未来。英雄となつた少年の隣に立つ、最高の自分。

そこに至る道を、最短距離で進んできた彼女は既に、立っている次元ステージが違う。

敢えて痛みを許容することで、進んで窮地に立つことで、これまで開けなかつた扉を、

葛籠織日鞠は今、力づくでこじ開けていた。

「光の雫は 全てを赦すだろう」

肉体から魂までをも満たす、猛々しい想いのみが、日鞠を支配する。

一つに収束された、少年に対するあらゆる感情がまた一つ、彼女を新しい段階へと引き上げる。

視える世界が変化する。感じる世界が変化する。

「我が身に宿りし光は《*Luce che abita in me Aurora* 天光》」

それは魔術の深奥、その一端。

極めし者のみが到達しうる、世界の真理。その一つ。

場を支配し、自らを高める『魔装』とは別の極致。

世界の理すら捻じ曲げる一撃必殺。魔術の秘奥——根源魔術。

「*La volont  de cieio qui* 天の意思は此処に在り」

遍く総てを呑み下し、浄化し、完全に消滅させる極光が絡み合つて一つとなる。

存在ごとく灼き消すことの出来る、理外の一撃が、空から落ちて来る。

さながら神の裁きね、と。

ネフィリアムはまるで他人事のように思う。その手が、杖を振るうことは無かった。

否、振るえなかった、と言った方が正しいだろう。

日鞠は今、ここら一带の魔力を完全にコントロール下に置き、その総てを根源魔術に

注ぎ込んでいる。

即ち、ネフィリアムは負ける……いや、いや。

(これは、流石に、死んだかしら)
待ち受けるのは死のみだろう。

救護班がいがいがまいが、最早関係はない。肉体の一片すら残らないことは、間違いないのだから。

それを意識すると同時に、全身が竦んだ。身体は震え、ペタリと座り込んでしまい。

抱擁するように極光が——

「砲撃魔法：重複拡大展開!!」

『Magia del bombardamento: Espansione duplicata』

——届かなかった。

一人の少年が、背を向け魔法を行使していた。

オプシオンをスキップし、即座に撃ち放たれた計百の砲撃魔法が、光を押し留めて道を阻む。

根源魔術とは、この世界における究極の一撃必殺だ。

それに魔装で、あるいは同じ根源魔術以外で、打ち克つのは不可能である——普通であれば。

だからこれは、夢であるのだろう。ネフィリアムはそう思う。

そう、だって、有り得ないはずなのだ。

磨り潰されるどころか、砲撃魔法が根源魔術を打ち破るなんて。

消し飛ばされた極光の残滓が、パラパラと降り注ぐ。

百を超えてなお、増え続けていた砲撃魔法は霞のように消え去った。

そして、

「平気か？ ネフィリアム」

何でも無いように、少年は笑いながら手を差し出すものだから、ネフィリアムは。

「は、ひゃい……」

顔を真っ赤にさせながら、その手を取りながら気絶するのだった。

し、しししし死んだと思ったアーーーーッ！

葛籠織、もしかして史上最大の馬鹿なのか!! 殺す気満々だったじゃねえか今の!

根源魔術を使ってるだとか、お前が習得するのは魔装じゃなかった? とかいう疑問

全部ぶち抜くレベルの衝撃だったんだけど!?

マジで間に入らなかつたらネフィリアム、消し飛んでたからね?

何があつたらそこまでやろうと思えちゃうんだよ……いや、単純に初めて発動したから、加減が利かなかつただけな気はするけれど……。

いや、本当、マジで焦った……。

途中でかなり押し込まれた時、かなり終わったと思つた……。

杖も脳もフル回転させてなかつたら、本当に死んでいた。

クソツ、今になって足が震えてきやがった。

勝つとは思っていたが、まさかこんな形になるとは思わなかつた……。流石にちよつと反省して欲しい、と葛籠織を見れば。

フラフラツとした後に、彼女はその場に頽れた——ので受け止めた。

お陰で左手にネフィリアム、右手に葛籠織である。

何か本当に、最悪な両手の花になってしまった……と思いながら、巻き起こる歓声から目を逸らすのだった。

クール・タイム

「どうしましょう、日之守くん。私、貴方のことを好きになってしまったみたいだわ。取り敢えず、愛人からで良いからどうかしら?」

「それは取り敢えずで出して良い提案なのか!? もっと自分を大切にしろ!」

「えっ? それは、こんな私でも恋人にしてくれる……ということかしら?」

「うわ、自己肯定感が地に落ちきっている……」

取り敢えず返答としてはノーかな、と答えれば、「ならやっぱり愛人かしら……」と顎に手をやるネフィリアムであった。

全く以て意味不明な状況だと思われるかもしれないのだが、俺からしてみても、やはり意味不明な状況であるので勘弁願いたい。

というのも、ここは医務室であり、俺は葛籠織とネフィリアムの見舞いをしにやってきたところであるからだ。

葛籠織もネフィリアムも、最後には気絶しちゃったからな……。

片や根源魔術を使用し、片や直撃でなくとも、それを受けたのだ。

意識を飛ばすのも無理ないというものである。

どう考えても俺は悪くないと思うのだが、決闘の原因が俺である以上、様子くらいは見に行くべきだろう……と思ひ、顔を出したところの出来事であった。

滅茶苦茶意識を取り戻していたネフィリアムが、俺の手を取りながら、これ以上ないくらい真剣な眼で言ったのである。

普通に惚れる相手を間違えてんだよなあ……!! と叫ぶわけにもいかず、かなり死んだ目で応対せざるを得なくなっているという訳だった。

いや本当、何でこうなったかな……。

状況的にああするしか無かったとはいへ、まさかたつたそれだけのことで惚れられるとは思わなかった。

一目惚れ体質、恐ろしすぎるのである——何が恐ろしいって、別に恋人じゃなくても良いから傍に置いて欲しい、が中心にあるのが怖すぎる。

どういう育ち方をしたら、十四歳でそんな倫理観に熟成されるんだよ。

「いえ、普通に考えて、何番目だろうと好きな人に愛してもらえるのなら、それだけでアドじゃない？」

「そんな悲しいことをアドとか言うな！ どう考えてもディスプレイアドなんだよ、その思考がよ」

「何を言ってるのかしら、愛されることが一番のディスプレイに決まってるじゃない」

「いや怖い怖い！ 過去に何があったら、そんなこと真顔で言えちゃうんだよ」

本当に心配になってきてしまう俺であった。

実際、ネフィリアムの過去はあんまり語られないんだよ……若干、仄暗い感じの雰囲気を持ち見せしてくる程度である。

いやまあ、俺だって全ルート網羅出来ていた訳では無いので、どつかのルートでは語られていたのかもしれないのだが。

ヒロイン一人につき、幾つもルートがあるゲームなので、その可能性は大いにあるのだった。

分岐があり過ぎて、網羅するのに時間がかかり過ぎるんだよ……。

こんなことになるのなら、もっと気合を入れてプレイしておくべきだったな、と思うばかりである。

「安心なさい、私は日之守くんのことを、一番に愛する自信があるわ」

「まずは一番に愛される努力とかがしてみない？ 変わるよ、見える世界とか」

「見え方が変わっても、世界が変わる訳じゃないでしょう？ それなら結局無駄じゃない」

「すげえ過激派な思考が出てきたな……」

「一か十かしか知らないの？　みたいな言い分だった。

思わず身体を震わせ、距離を取ってしまった——何というか、思っていたより怖い。大体こんな感じの女性であることは知っていたのだが——キャラとしては、という意味合いになるが——直に目の当たりにすると、「好意を向けられて嬉しい」より先に、「え、何か色恋とかしてる場合じゃないくらいの問題抱えてたりしない？　大丈夫？」になつてしまうのだった。

何か……困っていたら力を貸すよ、と思わず言いたくなつてしまふくらい、どこか歪んで見えるように見える女性である。

この先長い付き合いになつて欲しいとは思うが、どう付き合つて行つたらいいんだろう、と今から悩んでいれば、

「あはく、そんな考え方してるから、日鞠に負けたんだよく？」

と、不意に聞き慣れた声が耳朶を叩いた。

振り返れば、隣のベッドで寝ていたはずの葛籠織が、ニコニコと笑みを浮かべながら俺達を見ている。

とはいえ、上半身を起こすので精一杯な様子ではあるのだが——疲労度合いで言えば、葛籠織はネフィリアムより遙かに上だ。

救護班と先生は、根源魔術を無理矢理使用した反動で、魔力神経がかなり限界に達し

ていると言っていただろうか。

要するに、全身がかなりヤバイ筋肉痛に苛まれることになった、と思ってもらった良
い。

よくまあ、たった一日寝ただけで起きれるものである。一週間は寝たきりかな……
とすら思っていたというのに。

「あら、おはよう、葛籠織さん。よく眠れたかしら？」

「もうバツチリだよ。それより、かんかんとアイラちゃんは、何していたの？」
すつ……と葛籠織の目が細められ、室温が少し下がったような感覚を覚える。

もうあからさまなプレッシャーであった。

まあ、ね。

未だに俺の手はネフィリアムに包まれたままな訳であり、傍から見たらイチャついて
いるようにすら見えてしまうだろう。

当然、それは誤解ではあるものの、怪我人の真横で何やってんだお前は、と思われて
も仕方がないと言えば、仕方がなかった。

さて、どうすればスムーズに誤解を解けるだろうか、と手を払いながら考えるより先
に、ネフィリアムが答えた。

「見ての通り、日之守くんの愛人にしてもらっていたところよ」

「!?」

「うわー!? 誤解に誤解を呼び込むような一言を吐き出すのはやめろ!」

「では、何と言うべきだったのかしら?」

「えっ、それは……うーん、俺にフラれていたところ、とか……?」

「!!?」

「良いのかしら? あまりそういう、強い言葉を吐かれたら私、泣いてしまうわよ?」
「斬新な脅し方するね君。マジでやめようね、そういうの」

「何か俺が悪いみたいになって来ちゃうでしょう? と諭していれば、何を言っているんだこいつらは……?という、驚愕と困惑が交じり合った目で見えて来る葛籠織であった。

「いや本当、何を言ってるんだろうね……。」

「渦中の身でありながら、何とも説明しがたい状況にあるのだった。

「とはいえ、葛籠織であれば、今のやり取りで大体把握しただろうが……。」

「んうー、つまりー、かんかんは一夫多妻派ってこと?」

「え!!? 全然違う! 今の流れでそこにいきつくことあるか!?!」

「そもそも断ってるって言ってんだろうが……!」

「ただでさえ、二人の女子に取り合いされた男とかいう、ギリギリ不名誉な称号を与えられたばかりだというのに、更にハーレム許容とかいう属性を付加されてしまったは、

最早手に負えない。

……。
というか、一夫多妻制を推してるといふのなら、それこそファイリアムの方な訳だし

は。
何でこの構図で俺がずっと不利益被ってるんだろうな。不思議でたまらないよ、俺

「まあ、今のは冗談だとしても、負けたアイラちゃんが、かんかんに近づくのは話が違うよね？」

「そうかしら？ 賭けていたのは、日之守くんとのパーティーを組む権利だけだったと、私は記憶しているけれど」

「あは、それならもつと分かりやすく、負け犬が近寄るなつて言った方が良く？」
「随分と獣らしい威嚇をしてくるものね、少しは人間らしくしたらどうかしら」

再びバチリツ、と二人の視線ががち合つて火花を散らす。

俺がちよつと意識を逸らした瞬間にこれなのだから、もうシンプルに不仲なんだろうな、こいつら。

互いに暴力をぶつけ合ったのだから、多少は仲が改善されたことを期待していたのだが……。

そんな見通しはフィクションの中でだけ立てている、と言われた気分であった。

どうにも見知ったキャラであるだけに、関係性の話になると、ゲーム的思考になるのは悪い癖すぎるな……。

ゲームはゲーム、現実 は現実。

中々難しいことではあるが、この辺は上手いこと切り分けたいといけないうら。

「あ、そうそう。言い忘れてたけど、決闘については無効になったから」

「!? な、なんで〜!?」

「あー、まあ、ルール上色々あつてな……というか、これに関しては俺が一番悪いんだけど……」

決闘は、原則乱入禁止である。

というのも、決闘というのは文字通り一対一で、命を懸けて行われるものであるからだ——もちろん、学生の決闘で死者が出ることなんてまず無いし、出さないために救護班が常に控えてはいるのだが。

それでも、基本的にはどちらかが倒れるまで行われるものであり、そこに第三者が介入することは、シンプルに許されることではない。

滅茶苦茶なルール違反である……何なら、互いの誇りを汚したと、この二人にタコ殴りにされて俺はおかしくないのであつた。

もちろん、この「蛮族が決めたのかな？」みたいなルールを俺は、知らなかった訳で

はない。仮にも一年時に決闘した身である、ルールくらいは頭の中に入っていた。

だから、全部分かっていた上で、俺は決闘に介入したのである……まあ、内申点とか評価とか、外聞が下がったところでね、あんまり気にするようなことでもないし。

ネフィリアムに死なれたり、葛籠織が人を殺してしまったという事実を、マイナスとして重く背負ってしまうリスクと比べれば、天秤にかけるほどでも無いのであった。

そういう訳で、決闘は無効となったのである——といっても、葛籠織は根源魔術使用中に意識を飛ばしていたし、ネフィリアムも死んでいただろうから、結果的には、引き分けに近い形になっていただろうが。

「そういう訳だから、あの賭けも無効っつーことで——ていうかね、お前ら勝手に俺を賭けるなよな……」

「参ったわね。全く反論が出来ないじゃない」

「あは、真つ当な意見だ」

全然反省していない様子の子の二人に、思わずため息を吐く。

まあ、元よりそこは求めていなかったのだが……ここまで全く悪びれていないと、いつそ清々しいというものであった。

いややつば嘘、ちよつとは反省して欲しい。出来れば目に見える形で頼む。

とはいえ、これはこれである意味、都合が良いと言えなくも無いのだが——何せ、俺

が乱入したことについて、彼女らは全く気にしていないのだ。

それはつまり、こちらの意見をゴリ押ししやすい状況である、ということでもある。

「さて、それじゃあ迷宮攻略チームについては、振り出しに戻った訳なんだけど——」

「もちろん、日鞠と組むよね？」

「うわっ、圧が凄いな！ 言葉をかぶせてくるのはやめろ！」

「……………」

「ネフィリアムはジツと目だけで訴えかけてくるのはやめろ……怖い、普通に怖いから」

軽く人を殺せそうな目するじゃん……。

夢に出てきそうなので本当にやめて欲しかった。

一旦話を聞こうか、とこれ見よがしにコホンと咳払いをする。

「まあ、色々と考えて、先生方とも話してみた結果になるんだけど、今回俺は、誰とも三

人組にならないことにしたから」

「…………お、怒らせちゃった？」

「え？ ああ、いや、別にそういうのじゃない。ていうか決闘に関しては、動機や結果は

ともかく、内容は素晴らしいものだったの一言に尽きるからな……」

実際、根源魔術を目の当たりすることが出来る機会は滅多に無い。というか、俺は普

通に初めてだった。

周りにぼんぼこ魔装使ったりする人がいるだけに、感覚がバグりがちであるのだが、根源魔術も魔装も、魔術の極致点だ。

稀少という一言に纏めるには、あまりにも勿体ない気持ちになってしまいうくらいの神業である。

「それじゃあ、日鞠は、凄かった？」

「そりゃもちろん、死ぬかと思っただけだな」

「えへへ、やった」

ぼわぼわとしながらもガッツポーズする葛籠織であった。

いや、何もやったーではないのだが……まあ、向上心があるという見方をすれば、プラスではあるのだろう。

それに、結果としてネフィリアムの実力が十分に測れたのは大きい。

思っていたよりずっと強かったのは、嬉しい誤算と言えるだろう。

「だからまあ、単純に、俺だけ四く七年生の……その、いわゆる助っ人枠で組むことになったんだよな」

まあ、何というか。

迷宮攻略という授業自体、生徒の成長を促す為のものであるのだが、俺の場合、別にもう良くない？ という流れになってしまったのだった。

俺とて迷宮には入ったことは無いのだが、まあ普通に対応できるでしょ君……という、身も蓋も無い結論に至った訳である。

大体の障害を味方に任せず、全部自力で突破されるのも意味がないし、そもそもチーム組みでここまでの騒動に発展させた咎（これについては本当に何で俺なんだよ、とは思うが）もある——というのが建前であり、本音を言うと、アルティス魔法魔術学園の生徒としてではなく、第七秘匿機関の一員として動きたかった。これに尽きる。

何せご存知の通り、何が起こってもおかしくはない状況である。

何かが起こった時に、立華君と葛籠織、ネフィリアムが死んでしまつては困るのだ。だから、俺はその保険と言う訳である。

それに、第一の破滅の戦いを全員が知つてる分、俺であればこういう特別扱いをされても、角が立たないというのもあった。

まあ、正直なことを言つてしまうと、レア先輩や月ヶ瀬先輩と一緒に行けなくなつてしまつたので、俺としてはもうこの時点で、楽しみが半分奪われたようなものであるのだが……。

仕方が無いだろう。二人とはいつでも会えるし、文句を言っている場合でもない。

「そういう訳で、葛籠織とネフィリアムと立華君。そこにプラスで俺つて形になつたら」

「つまり、結局は日之守くんの掌の上だった……ということかしらう？」

「ええ……いや、うん、まあ、最終的には、そういう形になっちゃったんだけど……まるで俺が黒幕みたいな言い方するのはやめようね」

またしても誤解が生まれかねないし、もつと言うなら黒幕はお前らの方なんだよ。

二人して気絶するし、決闘はどうするかで若干揉め始めるし、そこから俺の話に発展するで大変だったんだからな。

今回に限っては普通に被害者なのであった……とは、流星に口が裂けても言えないかもしれないのだが。

不本意ながら、俺が原因な訳だしな……。

問題児の一人や二人くらい、俺が責任持つて見ることになったのも、また仕方がないと言わざるを得ないだろう。

「あはく、すっかり日鞠も問題児扱いなんだく」

「お前はずっと前から問題児扱いだっただろうが……!」

「いえ、待つてちょうだい？ 私もその枠に入れられてるのかしら……!?!」

「何でお前もビツクリしてるんだよ、当たり前だろ。決闘に至るまでの流れ、もう忘れちゃったの？」

むしろこの場合、一番不利益被ってるのは立華君とも言えるのだった。

やっぱりこいつらのことは放っておいて、立華君と俺と、他の生徒で組めば良かったかな……とか思う。

まあ、それはそれで、立華君が怖かったから遠慮したのだから。

あの後、何だかやたらと二人で組むことを推してくるもんだから、思わず引いちゃったんだよな。

いや本当、今思い返してみても、凄い熱量だったな……。

それが迷宮にかける想いなのかどうかは、さっぱり判断がつかなかったのだが、その熱量を少しでも良いからヒロインに向けたら良いんじゃないかな……と思うばかりであつた。

俺に向けてもあんまり意味がないというものである。

「とにかく、そうなったから、よろしくってことで。どっちにも期待してるよ。それじゃ、ゆっくり休んでな」

言いながら、包まれていた手でネフィリアムの髪を梳き。

未だに身体を上手く動かせないらしい、葛籠織の頭をポンポンと叩く。

何だかもう、一件落着いたように見えるのだが、むしろ忙しいのはこっからである。

色々用意しないとな、と思いつつ医務室を出た。

去つていく少年を、呆けたように見ながら、ネフィリアムは頭に手を添えポツリと言葉を漏らす。

「……あれって、素なのよね？ 狙ってる訳じゃ無いのよね……？」

「うんうん、かんかんってそういう人なんだよ」

同調する葛籠織の言葉に、ネフィリアムは曖昧な笑みを浮かべ、

(普通に天然誑しじゃない……)

と思うのだった。

オンリー・ヒーロー

「迷宮攻略？^{ダンジョン} あー、やったやった。懐かしいなあ、レアちゃんが迷子になって大変だったよー」

「えっ、何その話。ちよつと詳しく聞かせてもらっても良いですか!？」

「……甘楽くんって、レアちゃんの話になると食いつき方凄いいよね、好きなの？」

「え？ そりやもちろん好きですが……ひえ」

何だか先日の葛籠織を想起させるような眼差しを向けて来た月ヶ瀬先輩に抱いた感想は、言葉の通り「ひえ……」であつた。

最近、この類の目を向けられることが多いの本当に何なんだよ。

マジで怖いから遠慮して欲しい。

ハイライトが消えてるとか言うレベルじゃないからね？

何か……濁ってるんだよ、瞳が。

午後八時過ぎ。赤の不死鳥寮、女子部屋、個室。

一日のタスクを消化し終え、上手いことぼっかり時間が空いてしまったところ、お誘

いがあったのでお邪魔したら、今にも殺人事件が起こりそうな雰囲気、にわかに漂い始めることになってしまった。

もちろん、この場合死体になりそうなのは俺の方である。

ついでに言えば、女子寮に男子が入るのは普通に規則違反だから、どう転がっても俺が悪いみたいな状況になりかねないんだよな……。

ついこの前、月ヶ瀬先輩の夢を見たばかりであるだけに、何だか口が上手く回らなかった……あれ？ もしかしてこれ、選択肢をミスったら死ぬやつか？

おいおい、急に『蒼天に咲く徒花』っぽくなつてきやがったな、と震えてしまう。

「なーんてね、冗談。きみが軽率に好きとか言える子なのは、とつくに知ってるから」

「おっと、まるで俺が軽い男みたいな言い方するじゃないですか」

「いや結構そうだよきみ……」

少なくとも重くはないよね、と笑う月ヶ瀬先輩だった。

そりゃあ、月ヶ瀬先輩と比べたら誰だつて軽いに決まっているのだが、流石に口に出す訳にもいかず、苦笑いする。

とはいえ、実際のところ、学園で関わる人間のほとんどが女性であるのだから、そこについても反論は出来ないのだが。

つい先日だつて、ネフィリアムと知り合つたばかりである。

元がゲームである以上、ある程度は仕方がないと言えるのだろうか……。それでも周りにいる男子が立華君だけというのは、幾ら何でも少なすぎるな、と改めて思うのだった。

いやでも、友人とか作ってる暇は結構惜しいしな……。

ただでさえ、気軽に友人を作れる環境では無いのだ、俺の場合。

だから、無理にそこに時間を割くくらいであれば、自分も含めた周りのレベリングに集中したかった。

それは今回の迷宮攻略についてだって、同じことである。

「いや、というか、そう。迷宮ですよ、迷宮。何かこう……具体的にこういう感じ、みたいな話ではできませんか？」

「また抽象的なこと言うなあ、甘楽くんは……あまり、聞いても為にならないと思うよ？」

迷宮は同ランクと言っても、その中身は千差万別なんだから」

「まあ、それはそうなんですしょうが……」

ゲームだとその辺、あんまり描写されなかったからさ……。

ランクS迷宮に飛ばされた挙句、即負けイベントが始まり、その後は何とか死なないように逃げ回るだけのお話なのである。

二章は鬼門と言われるだけあって、この章の死亡率は滅茶苦茶高く、制作側もそれを

分かってるのか、全キャラの個別死亡ムービーが用意されているほどであった。

普通に趣味が悪すぎであるのだが、これはこれで深みが出る内容なので中々文句を言えない。

生死の境目を綱渡りするような絶望的状况であるため、かなり各キャラの解像度が上がる、妙に人気な章なのである。

かく言う俺も、好きな章を三つ上げると言われたら、必ずこの章を入れることだろう。無論、今はその原型が欠片も無いのだが……。

ただ、そういうこともあって、普通の迷宮というやつを、少しは知っておきたいのであった——まあ、それも空振りに終わりそうではあるのだが。

同ランクとは言え、参考にすらならないと言われてしまつては、聞くだけ無駄である。まあ、それはそれとして、月ヶ瀬先輩とレア先輩の面白迷宮攻略トークは、耳にしておきたいところではあるのだが。

「いえ、あのですわね……わたくしがいない間に、わたくしの恥ずかしい話を聞き出そうとするのはやめてくださいまし？ 動揺しすぎてティーカップ落とすところでしたわよ、マジで」

何とかちよつとだけでも良いから聞かせてくれませんか……！ と交渉していたら、呆れた様子でやってきたレア先輩が、飲み物とお茶菓子を持ってきてくれた。

月ヶ瀬先輩とレア先輩は相部屋であるのだ——というより、俺のように完全に個室になっている方が珍しい、と言うべきだろうか。

赤の不死鳥寮の二年生、奇数だから俺だけ一人部屋なんだよな。

微妙にハブられてる感じがして寂しくはあるのだが、一人の方が楽ではあるし、特に文句は無かった。

いや、まあ、たまに立華君が来たりはするんだけど……。

「隣国から仕入れた珍しい茶葉を使ってみましたの、お味はいかかでしょうか？」

「へえ、全然違いが分かりませんでした」

「この味音痴さん……ッ！」

レア先輩に、まあまあ目力の籠った視線を受けてしまう俺であった。思わず助けを求めて月ヶ瀬先輩を見たが、呆れたように笑みを返されるばかりである。

えっ？ これ、俺が悪いのか……!? と思ったが、言われてみれば日之守家は、まあまあな名家である。

お茶の違いくらい分かって当然だったのかもしれない。

大変だな、お偉いさんの家つても。

何となくオリジナルの甘楽おれに、申し訳なくなりました。

「あつ、でもこのクッキーは美味しいですね。ちよい形は不揃いですけど、そこさえ良く

見えて来るくらい美味しいです」

「あらあら、そうらしいですわよ？ 良かったですわね、ひかり」

「ちよつ、レアちゃんも一緒に焼いたやつでしょ、それは！」

顔を赤くした月ヶ瀬先輩が、可愛らしく結っているポニーテールを揺らしながら、レア先輩へと小さく叫ぶ。

何だか珍しい光景である———というのも、この二人の場合、揶揄されるのは大体レア先輩の方であるからだ。

もちろん、この二人との付き合いは、それこそたった一年だけなのだから、本当は珍しくも何でもない、日常的光景であるのかもしれないのだが。

しかし、そうか……。

手作りクッキーか。

そういう『蒼天に咲く徒花』では、睡眠薬入りのクッキーを食わされて連行されるなんてこともあったな、ということを出す。

あれは確か……そう、ネフィリアムのルートだっただろうか。

クッキーを食べた主人公が「あ、れ……意識、が……」とか言い始めた瞬間全てを察し、「あー、はいはいはいはい！ 監禁されるやつね、終わりです！」と叫んだ記憶が鮮明に蘇る。

これ、明らかに犯罪者の手口であるくせに、バッドエンドルート直行という訳では無く、むしろネフィリアムルートの正解なんだよな……。

まあ、その後もかなりシビアな選択の連続を迫られることになるルートではあるのだが……。

そのネフィリアムに、現在本当に好意を持たれているっぽいので、一応気を付けた方が良いでしょうかもしれないな、と思いつながらクツキーをモグモグ食べる。

いや、流石にこの二人が俺に薬を盛ることは無いだろうし……。

何より本当に美味しいので仕方がない。

美少女が二人、眼前でわちやわちやするのを眺めながら、お菓子を食べるなんて贅沢極まりないな、と思っていれば、

「ああ、そういえば」

と、レア先輩が手を叩いた。

「迷宮ですけれども、わたくしもひかりも入りますわよ」

「!? えっ……え!!? 何ですか!?!」

「いえ、何でも何も、他の下級生に頼まれましたので……断るのも可哀想ですし、ね?」

「は? 何それ聞いてない……」

「うわっ、甘楽くんとは思えない低い声出てきた!」

ちよつと怖いよ、と笑う月ヶ瀬先輩に頭を下げながら、これが寝取られてやつか……と奥歯を噛みしめる。

くそつ、二人の人気具合を嘗めていた。

いやもう、どう足掻いても彼女らとは組めなかつたのだし、そこは割り切つていたつもりではあつたのだが……。

こつやつて直接言われると、どうしても悔しさが出てくるな、と思うのであつた。

……ああ、でも、これはこれでラッキーではあるのか？

別に一つの迷宮につき、一つのパーティが割り振られる訳では無いからな……というか、そんなにたくさん迷宮があつたとしたら、世の中は大迷宮時代に突入しているというものである。

迷宮は、稀少と言うほどではないが、かといつて気軽に幾つも用意できるものではない。
い。

ただでさえ、人工的に作れるものでは無く、自然発生したものであるのだから、それも当然と言えるだろう。

だから、その、何だ。

つまるところ、ワンチャン月ヶ瀬先輩とレア先輩。この二人と同じ迷宮になる可能性はあるということである。

とはいえ、もしそうなったとしても、助け合い等をすることはないのだろうか——
—今回に限って言えば、パーティ間での助け合いは基本NGだ。

ランクBダンジョンくらい、一パーティだけで攻略するか、あるいは生き残ってみせろという主旨の授業であるのだから、それも仕方ないだろう。

あるいは、もつと端的に、迷宮主をどのパーティが先に討伐し、迷宮を攻略するかというレースである、と言い換えても良い。

競争心こそが人を一番成長させるさかいなく、なんてことを、校長は言っていたらうか。

かなり人を選びそうな、実に武闘派な理論である……しかし、そうだとしよ、迷宮での二人の活躍をこの目で見られるというのなら、それも全然許せるというものであった。

やれやれ。

ちよつと楽しみになってきちやつたな。

「言いづらいですけども、怖い顔した後は無言でじわじわと笑顔になるの、本当に怖いからやめた方が良いと思いますわよ……？」

「余計なお世話すぎる……先輩たちの前くらいでしかならないので、ギリギリセーフになりませんか？」

「うーん、ギリギリアウトかなあ」

ギリギリアウトだった。

そんなにヤバい顔だったかな……と頬を何度か揉めば、レア先輩が吹き出すようにして笑う。

「ふ、ふふ、そうしてきますと、まるで英雄様とは思えませんわね?」

「……えっ、何!?! 何ですか、その大層なあだ名は……!?!」

「あれ、甘楽くん、知らないの? あの一以来、結構みんなそうやって呼んでるよ、きみのこと」

「マジで知らない、怖すぎる情報が出てきたな……」

滅茶苦茶誰が言い出したんだよ、みたいな呼び名だった。

普通に恥ずかしいのでやめて欲しい。

学園最強とか、学園最優よりずっと恥ずかしいんですけど……。

ポエマーだけ選んで入学させてるのか? この学園はよ。

「明日からどんな顔で学園歩けば良いのか分からなくなってきたんですけど……」

「あはは、嫌なの?」

「嫌じゃない訳ないでしょうが……!」

むしろこれを良しとするやつ、早々いないだろ。

せめて原作主人公の方をそう呼んであげて欲しかった。

彼の場合、既に勇者だなんだと持ち上げられていたので、ダメージも無いだろうし。

「そうは言いましても、わたくしは日之守様に、ピッタリだと思いますわよ?」

「微妙に嬉しくない褒め言葉だ……」

「——いえ、いえ。本当に、真面目にわたくしは、そう思うのです。だって、少なくとも

もわたくしにとつて、日之守様は英雄なんですもの、ね?」

有無を言わせぬ語調で、レア先輩は真つ直ぐ、俺の目を見ながらそう言った。

驚いたことに反論する余地しか無いのだが、そのせいでどうにも言葉が出ずに、黙り

込んでしまう。

英雄……英雄、ね。

俺に限らず、人ひとりを指すにはあまりにも綺麗で、重たい名前だと、そう思う。

だから、全くこれっぽっちも嬉しくないという訳でも無いが、些か恐れ多さがあるの

も事実だった。

というか、身に余り過ぎる——なんてことも、そんな目で見られたら、言える訳も無

いのだが……。

何だか面倒な状況になってきたな、と俺はお茶を飲みながら、何とも言えない曖昧な

笑みを返すのだった。

この世に英雄キロウなんてものはないのだということとは、教えられる前から知っていた。誰であろうとも、構わず手を取ってくれるような人はどこにもいないのだと。

どれだけ苦しく、絶望的な状況であつても、助けてくれる人はいないのだと。

息苦しい暗闇から連れ出してくれる王子様は、どこにもいないのだと。

リスタリア家の長女。レア・ヴァナルガンド・リスタリアは、十歳にも満たない内から、そのようなことを芯の髓まで思い知らされていた。

黒帝の起こした『百鬼夜行』を契機に、リスタリアの名は地に落ちた。

信用を失い、価値を失い、魔法魔術師の間では最も恨まれる名として、歴史に刻まれることとなった。

そんな——レアからすれば、顔も声も知らない人間のせいだ。

家は没落し、都の中心から辺境に居を移すこととなり、それでも親は日に日に寡れ、自分でさえも、常に多くから排斥されてきた。

生まれた時からそうだったのだから、これから先もそうなのだろうということは、幼

い彼女でさえも容易に理解できた。

だから、だろうか。

今となつてはもう、そうした理由さえも忘れてしまったけれど。

それでも、ほんの少しでも、そんな現実には抗おうと思つて、声を大きくしたのだと思う。

父と母に叩き込まれた礼儀作法を、いついかなる時も忘れず、心の無い言葉にだつて笑みを向けることにした。

折れてはならないと。

屈してはならないと。

本能的か、あるいは理性的な部分でそう判断し、魂に火をつけたように振舞つて来た。それを、後悔したことは無い。

唯一無二の親友を得ることが出来たのは、きつとその成果なのだから——けれど、それは同時に、そこが限界であるのだという、裏付けでもあることに、レアは気が付いてしまった。

学園に入つてからも折れず、曲がらず、自身の道を貫いてきた。

かの黒帝と、自分は全くの別であるのだと。

ただ自分自身を見て欲しいのだと、そう叫ぶように重ねてきた努力は、しかし、こう

いう形でしか実らなかったのだと、そう感じるようになった。

生まれてからずっと晒されてきた、敵意や悪意にレアの精神は、至極当然のように弱っていたが故に。

それをレアは、自覚できていなかった訳ではない。

常に気丈に振舞おうと努力してきたレアは、何よりも先にそのことに気付き、しかし、受け容れそうにすらなっていた。

頑張ることは得意だった。けれども、疲れないという訳ではない。

前を向くのは得意だった。けれども、辛くなかったという訳ではない。

頼れるのは自分だけだということくらい、分かっていた。けれども、助けを求めているなかった訳では無い。

そういう、ひた隠しにし続けていた弱さはきつと、大きくなり過ぎていた。

だから、ちよつとした衝撃で零れてしまったのだと、レアは思う……否、あれはちよつとどころの衝撃では無かったが。

とにかくレアは、助けを求めてしまった。あろうことか、初対面の下級生に。

とはいえそこに、大きな期待をしていた訳では無い。気の迷いそのものだ。

どうにもならないということは、どうしようもならないということは、とづくに分かり切っていたことなのだから。

『だから、そこをひっくり返そうというんです』

——それなのにあの少年は、気軽に文字通り、全部ひっくり返してしまった。

これまでの苦悩を全部、あたかも埃でも払うかのように解決してくれた。

無意識のうちに伸ばしてしまった手を、当たり前のように掴んでくれた。引つ張り上げてくれた。

生きる世界が変わった。息苦しさは、いつの間にか無くなっていた。

暗闇の真つただ中から、気付けばレアは光の中に連れ出されていた。

救われたのだ、完膚なきまでに。

助けられたのだ、これ以上ないほどに。

さりとして、ここで勘違いするほど、レアは盲目的ではない——あの少年が、レアだからと言って、助けてくれたのではないことくらい、考えるまでも無く分かったから。

助けを求められれば、誰だって助けてしまう少年であるのだ。

彼は、レアだけの王子様ではない。

彼は、レアだけの英雄キローではない。

けれどもそれが、どうしたと言うのだろうか？

日之守甘楽は、誰か個人の為の英雄ではない。

それでも、レアにとっては唯一の英雄であるのだ。焦がれに焦がれた、王子様である

のだ。

誰でも救う？ そんなこと、当たり前だろう。彼は文字通り、英雄なのだから。だから、自分だけのものになって欲しいんだなんて、口が裂けても言えない。

独占したいという気持ちはあれども、表に出すことは生涯無いだろう。

ただ、傍にいさせて欲しいと思うだけだ。

強いことと、傷つかないことはイコールではないから。

妙な凶太さと、妙な繊細さを兼ね備えたこの少年が、いつか倒れてしまいそうな時に、支えられるところにいたい、と。

レア・ヴァナルガンド・リスタリアは、心の底からそう思う。

その感情を何と呼ぶのかは、彼女自身でさえも、まだ分からない。

ティーエスツ・ダンジョン！

「その、ええっと——ど、どう？ 変じゃない？」

突然現れた美少女が、目を伏せ、頬を赤らめながらそう聞いてきた。

足元まで伸びた美しい金の長髪に、青空をそのままはめ込んだように透き通っている、スカイブルーの双眸。

健康的でありながらも、どこか繊細さを感じる真っ白な肌に、線の細い身体。

だというのに出ているところは出ており、引つ込むところは引つ込んでいる、あたかも理想を描いたような女性だった。

更に言うのなら、制服が若干改造されており、どうにもパツと見、聖女のように見えしてしまうのがかなりダメだった。

うっ、と唸って俺はその場に両手をつき、絞るように声を出す。

「変か変じやないかと言えば、どう考えても変極まりないが、それはそれとしてすげえ好みです……」

「かつ、かんかん〜!？」

「よっしやー!」

「貴方も何を喜んでいるのかしら!? 正気に戻ってちょうだい!」

金髪碧眼の美少女がガッツポーズを決めて、葛籠織とネフィリアムが驚愕の声を上げる。

何とも非難と困惑が入り混じった眼差しであり、俺としても委縮してしまうのだが、しかし、偽ることは出来ない本音であつたので許してほしい。

いや、ね。

思考がすつ飛ぶくらいに異常事態であることが、本音を吐き出させるハードルを下げているというのもあるのだが、もう純粹に、見た目が好みど真ん中なのだから許してほしい。

それが元男であり、友人であり、なおかつ原作主人公でも、である。

そう、俺の眼前でヒラヒラと可愛らしく手を振りながら、「ほら、そろそろ起きなよ」と声をかけて来るこの美少女は、いわゆる性転換した空城立華であるのだつた——
!

驚愕の空城立華性^T轉換現象^Sにまで至った経緯を振り返ってみるとしよう。その為にはまず、迷宮^{ダンジョン}攻略がついに始まった、と言うのが一番手っ取り早いだろうか。

ランクB迷宮。常識的でもなければ非常識的でもない、実に普通と言つて良い立ち位置に存在する迷宮と言えども、迷宮は迷宮である。

当然のように命の危機に瀕しかねない場所ではあるし、少なくとも気を抜いて挑んで良いところではない。

それが明らかに二年生の実力を逸脱した三人と、プラス俺という四人組であつても変わることはなく、与えられた期間をフルに活用して準備を進め、ついにその日がやってきたのであつた——いや、そうは言つても俺は助っ人枠であるので、大して用意を手伝うことも無く、比較的のほほんとして過ごしてはいたのだが。

若干の心苦しさがあつたものの、そこはもう仕方が無いだろう。

既にあからさまに鼻負されてるチームみたいになつて居るのだ、出来るところは公平に進めなければならぬ。

まあ、今更文句を言つてくるような同級生も、いないと言えはいいのだが……。

だから好き放題しても良い、ということにもならないだろう。

そういう訳で、第二の破滅についてちよつとだけピリつきつつも、無事迷宮攻略の日を迎え、意気揚々と突入したのである。

とはいえ、そのことについて、特段語るようなことは無かった。というのも、確かに無重力の空間があったり、一寸先も見えない暗闇の部屋があったり、魔獣とも魔族とも言えない、奇妙な生物に囲まれたり、言葉を話す植物に絡まれたりと、実に迷宮らしいイベントはあったものの、困ることなく順調に進むことが出来たからである。

いやもう、本当に、パパパツと解決して進む三人の後ろ姿を、呆けたように見ながらついて行くだけの時間だった。

気分は完全に観光のそれである——原作のように迷宮に入った瞬間、千手観音みたいな化物にポコポコにされるとかいうイベントが無かっただけに、安心すらしていたと言っても良い。

目に入って来る景色も、「あれこれ地獄じゃない?」みたいなおどろおどろしいものではなく、空のような何かが上には広がっているのだから、それも仕方が無いと言えるだろう。

要するに、かなりの暇人になっていた。

いや、もちろん、やる事が全く無い訳では無い。こうしている今も、一応の索敵等はしている……のだが、しかし、その程度のことである。

ていうか、何かあっても基本的に対処は任せる方針だしな……。

完全にいらぬ子状態だった。

他のチームを遠目に確認できた時に、滅茶苦茶目を凝らして月ヶ瀬先輩か、レア先輩探すくらいしか楽しみが無い。一応、同じ迷宮にはなったのだ。

まあ、それでも結局、迷宮が広大なせいで機会が全く無いのだが……ただぼんやりとしているよりは、幾分かマシだろう、と戦闘中である三人を見ていれば、その内のひとり——ネフィリアムが、こそつと傍らに寄ってきた。

ここまで結構な頻度で戦闘は起こっていたのだが、傷一つないどころか、汚れ一つ見当たらない。

白を基調とした制服だというのにこれなのだから、思わず感心してしまう。

「ふふ、随分と暇そうな顔をしているわね、日之守くん？」

ピッタリと、身体をくつつけるようにして来たネフィリアムが、誘うような目つきを向けてくる。

特別悪い気分でもないが、シンプルに暑苦しかったので距離を空ければ、若干のジト目に変化した。

「折角、お話し相手になってあげようと来てあげたのに、ちよつと冷たいんじゃないかしらっ。」

「それは有難いけど、お前今戦闘中じゃん……ほら見ろ、葛籠織がすげえ顔でこつち見てるぞっ。」

「ふふつ、それならもつと見せつけてあげましょうか。ほら、ぎゅーって」

「いやしない、しないから。何で空気を積極的に悪くしようとするの、お前は……」

パチーンと軽くデコピンしてやれば、「あうつ」と小さく悲鳴を上げて、額を抑えるネフィリアムであった。

その仕草自体は可愛いんだけどな……。

やってることは完全に肉食系のそれだった。

「もう、ケチな人ね。良いじゃない、このくらい。それに、ハグをするとストレスが三割も解消されるのよ? やり得だとは思わない?」

「いや別に、俺はストレス溜まってないからな……」

「安心なさい、私は溜まってているわ。それはもう、滅茶苦茶にね」

「嫌な告白だな! 良ければ話でも聞こうか? 相談相手くらいにはなるよ」

「いえ、私としては、抱きしめてくれればそれで良いのだけれども……」

「それはもう、ただハグしたいだけの人じゃん……」

詭弁を弄しようとするんじゃないよ。

断られてなお、愛人になろうという意欲が滲み出ていた。

その心の強さをもうちよつと他に回せなかったのかな、と思うばかりである。

「何を言っているのかしら、私ほど心の弱い女の子は、探しても早々いないわよ?」

「お前がそれを言うのと、ただならぬ闇を感じて不安になっちゃうんだけど……」

「出来れば耳元で、全肯定してくれる甘い言葉を囁いて欲しいくらいには弱々よ」

「大分強めの願望が出てきちゃったな……」

「というか、そんなことをする俺はシンプルに気持ち悪すぎであった。」

「どう足掻いても似合わないだろ……」。

「あら、そんなことは無いと思うけれど……ふふつ、それなら一度、試してみれば分かるかもしれないわよ？」

「何としてでもハグする方向に持って行こうとするのはやめろ、段々心が揺れてきちゃっただろ……」

「後もう一押し……いえ、二押しってところかしら」

「もしかしてお前、ここまで計算ずくで会話していたのか!？」

「だとしたら、何とも恐ろしい話であった。」

「男を手玉に取る才能に満ち溢れすぎだろう……」。

「どうにも知れば知るほど、ネフィリアムの強かな部分が発見されるようだった。」

「その調子で他のことに対しても、色々と前向きになつて欲しいな、と思えば、」

「随分と良いご身分だな、僕たちにだけ戦わせて、雑談に興じるだなんて」

「と、立華くんが呆れたような眼差しでそう言った。」

見ればすっかり、迷宮内特有のモンスターとの戦闘は終わったようだった。

死体の一つすら残らず、代わりに黒い霞のようなものが立ち上っている。ゲームでも結局説明が無かったのだが、このモンスターたちは一体何なんだろうな……。

改めて考えてもみれば、死体が残らないというのは些か不気味である——いや、正確に言うのなら、残る時もあるのだが。

ゲームチックに言えば、ドロップアイテムが落ちるのだ。

薬の材料になったり、装備品に加工したりと、その用途はかなり豊富である。

アルティス魔法魔術学園が、必ず迷宮攻略を授業に組み込んでいるのは、ここら辺も関係がしていると言って良い。

ゲームでは二章以降、ちよつとしたプチ要素でしかないくせに、設定的な見方をする
と、迷宮は魔法魔術界とかなり絡み合ってるんだよな……。

「あー、ほら。怒っちゃったじゃん、立華くん。謝つとけよ、ネフィリアム」

「ふう……仕方ないわね。男の嫉妬は見苦しいわよ? 空城くん」

「喧しすぎるぞ!? せめて形だけでも良いから謝罪しろ! 何で僕を煽るんだ!」

というか、そもそも嫉妬じゃないから……とため息交じりに言う立華くんだった。

それはそれで、俺としてはどうかと思わないでも無いのだが……これでもネフィリアム、きみのヒロインだからね?

現状をちよつとでも良いから憂いて欲しかった。

この女を恋人として扱えるのは、原作主人公たる立華くんだけなのだから。

「あは、結局くつつくことすら許されなかつたくせに、良く言うね」

「うおつ……!!? おい、葛籠織、降りろ……」

「えへへ、いやです」

突然背中に飛びついてきた葛籠織が、今度はネフィリアムを煽るような目をしながらそう言った。

こいつら、何でチーム内で煽り合ってるの……?

喧嘩するほど仲が良い、という言葉が微妙に適してないくらいには、空気がギスギスとしていた。

頼むからもうちよつとこう、仲良くなれとはもう言わないからさ……せめて協力的な関係性を築いてくれないかな……。

戦闘中は息が合っているとは言えども、そうでない時が大体これでは、主に俺の身が持たないというものであった。

「まあ、でも、お疲れ様。あの程度なら、二人でも充分って感じ?」

「ん、まあ、そうだな。というか……」

「全然一人でも楽勝って感じかな」

立華くんの言葉を引き取って、葛籠織が言う。ネフィリアムも、それについて別意見は無いようだった。

満場一致という訳である。

ふうん。

それは重畳。

というかむしろ、それ以外の答えが返ってきたら、ちよつとどうしようかと悩んでいたところなので、良かったとも思う。

原作からは既に外れていると言えども、強くて損することは無いだろうからな。

何もかもが順調なようで何よりである。

この分だと、先輩たちとも出会えなさそうだし、サクツと終わらせて帰りたいな、という欲が沸々と湧いてくるのを感じた。

「日之守……君、今先輩方のこと考えていただろう」

「だから何で分かるんだよ……!」

「君は顔に出過ぎなんだ、それに尽きる」

「どう考えてもそつち側の特殊能力なんだよなあ……!」

ていうかそれ、女性特有の能力じゃなかったんだ、と思う。

もしかして、俺以外の全人類が保有している能力なのか……?」

もしそうだとしたら、俺はあまりにもこの世で生きていく才能が無いというものであった。

「いや、いや。ありえないだろ……」

「有り得ないなんてことは有り得ないって言葉、知らないのか？」

「えっ？ 急にハガレンのオタク出してくるじゃん——あ？」

変だ、と思った。

あからさまに「やべっ！」という顔をした立華くんを見て、更に首を傾げる。

いや、正確に言うのなら、元より変だとは思っていたのだ。

彼は——立華くんは、あまりにも主人公らしくない。

まあそういうこともあるか、とは思っていたのだが……。

もしかして、俺と同じような転生者か？

「えーっと、立華くん」

頑なに目を合わせなくなった立華くんに、そう声をかけて、

「転生とかって、信じる？」

と、続けた。

否、続けたかった。

つまりそれは、叶わなかった——というの。

突然直上から滝みたいな勢いで振ってきた、ピンク色の液体が、立華くんを呑み込んだからである。

……は!?

う、うわー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ 完全に油断した！

即死する液体とかじゃないよな!?! 怖くなってきたんだけど!?! と叫びそうになれば、

「けほつ、けほつ。う、うゝん……何だ? 身体が、変な感じ……」

驚くほど聞き覚えの無い高い声が……女性的な声が、耳朵を叩いた。

落下してきた液体が無くなって数秒。

鋭くバツクステップすることで回避した俺達は、その中心へと目を凝らして、思わず声を失った。

しかし、それも仕方がないことだろう。

何故ならそこに、立華くんの姿は欠片も無く。

代わりに目を疑うくらい美しい、一人の女性がびしょ濡れになって佇んでいたのだから。

で、少々落ち着いて今に至る。

迷宮内に幾つも存在する安全領域（ゲーム内ではセーブポイントだった）で、この現象について頭を悩ませる。

いや、その、何というか……何が起こったのか、というのとは分かるんだけどな。

もう見たまんま、性転換してるのだ。

ほんの少しも動揺していない、立華くんが恐ろしく思えるくらいの一大事である。

こいつ、肝が据わり過ぎだろ……。

「いや、まあ、特に不自由していないしな。慣れてるし」

「慣れてるって何!? そんな気軽にTS出来る環境下にいたのか!」

「まあ……部分的にYES、かな」

「い、い、わ……」

聞くのも躊躇われるレベルの怖さだった。

部分的にはってなに？

確かに『蒼天に咲く徒花』には、性転換薬とかいう薬があるが……。

だからといって、多用されるものではない。というかアレ、普通に稀少な品だし……。

ランクA迷宮で手に入る素材が必須なくせに、ゲーム内だと大して役にも立たない薬

である。

「それに女性になったとは言え、人であることには変わらない訳だし……身長は低くなったけど、不自由は無い。ほら、この通り」

「ちよつと？ 急に手を握るのはやめようね、ドキドキしちゃうから」

「君は本当に、童貞なのか非童貞なのか分からないやつだな……」

「生々しい考察するのやめない？ 俺が可哀想だろ……」

言いながら、俺の右腕に抱き着いてきた立華くん（「ちゃん」と言うべきだろうか？）を眺めながら、ため息を吐く。

いや……冗談抜きで可愛いな……。

これが性転換した男であるという事実が無ければ、うっかり惚れてしまっていたところである。

危ない危ない。ガチで危ない。

「……はあ、空城くんのこと、見過ぎよ日之守くん」

「いや別に、そういう意図で見ていた訳じゃないから……多分……」

「ちよつと自信無くなってるじゃない……」

「んうゝ、でもでもゝ、本当にどうするのゝ？」

俺の肩に頭を預けた葛籠織が、核心を突いたようなことを言う。

そう、そうなんだよね。

解毒薬を作るだけの材料は手元がないし、もちろんランクBの迷宮では調達するのは不可能だ。

ていうか、どこであつても材料調達はまあまあ困難である。

ワンチャン、校長とかに掛け合えば手に入るかもしれない……というラインだった。

とはいえ、別にそれらの必要は全く無いのだが。

「どうもしない……迷宮で受けた影響は、基本的に迷宮を出れば元通りになるもんだしな」

「ああ……そう言えばそうだったわね」

「まあ、基本的には、なんだけど……」

ゲームでも、迷宮を出れば自動的に何かも回復したものである。

まあ、流石に性転換したなんて話は聞いたことも無いので、そこについては少々不安なところではあるのだが……。

そうは言つても、獣人にさせられたみたいな話は小耳に挟んだことがあるし、まさか例外つてことはないだろう。

要するに、だ。

「これまで通り攻略するのが、一番良いと思う。今でも充分すぎるくらい順調だし、問題

も無いだろ」

強いて言うのなら、立華くんの、性転換したことによって出るだろう違和感や差異を調べつつ、そこをカバーしつつ……にはなるだろうが。

それを込みにしても、ペースが落ちることはないだろう。全員優秀だしな。改めて仕切り直して行こうか、と俺は手を叩いた。

《left》ご神託チャット▼《left》

《left》

◇名無しの神様 キタ——。(。▽。H——!!

◇名無しの神様 うおおおおおお!!!

◇名無しの神様 おいおいおいおいおい!

思えねえ……

◇名無しの神様 迷宮に入ってから一生泣き言言ってたボケとは思えないぜ

☆転生主人公 ええい、喧しい喧しい！ 見てな、私の本気はここからよ

◇名無しの神様 もう一人称が変わってやがる……

◇名無しの神様 すぐ調子乗るなこいつ

◇名無しの神様 でもこれは仕方ないって、マジ悔しいけど可愛いもん

◇名無しの神様 いやそれな……散々原作主人公はTSしたら可愛いって論議には上がっていたが……

◇名無しの神様 これほどとは、な……

◇イカした神様 スクシヨは撮ったか？ 録画は出来てるか!?

◇名無しの神様 マジでさっきから延々とスクシヨ連打してるわ

◇名無しの神様 日之守もタジタジで草

◇名無しの神様 顔真つ赤だもんな、面白すぎる

◇名無しの神様 さっきまで転生云々を詰め寄ろうと思ってたのにもう頭から抜けてそう

◇名無しの神様 抜けるってこれは。しゃーない

◇名無しの神様 ワイらですら数秒レス書き込めなかつたもんな

◇名無しの神様 つーかバレたらまあまあ困るんだよ

◇名無しの神様 まあ、日之守がどこから影響受けてるか不明な以上はな……

◇名無しの神様 見せてくれよ、ボケナス。お前の本気つてやつをよ……！

《left》

《left》

《left》 【ついに来たぜ】 蒼天に咲く徒花 バグキヤラ日之守甘楽 攻略RTA 【この時が】

《left》

ディスターピング・サイン

さて、立華^{ボケナス}が性転換し、馬鹿どもが大騒ぎしていた頃。

レア・ヴァナルガンド・リスタリアは、順調に攻略していく自らのパーティーメンバーである、三人の後ろ姿を眺めながら歩を進めていた。

ここまで一つも苦戦することなく、迷宮^{ダンジョン}特有のイレギュラーな罠にも冷静に対処する後輩達に、彼女は内心拍手を送っていた。

(とはいえ、こうして目の当たりにしますと、日之守様はともかく、日鞠や空城様の異常さが良く分かりますわね……)

目の前の三人の戦いは、実に堅実だ。前に出た二人を、一人が援護する形のスリーマンセル。そこに付けられるような文句は無く、されどもレアは、物足りなさを感じてはいた。

しかし、それも当然だろう。

彼女が親しくする二年生は、全員規格外であるのだから。

(いえ、いえ、比べるのは良くありませんわね。彼らだって、二年生としては充分すぎ

るほどですわ。当時のわたくしより、優秀に見えるほどですもの)

何せ、レア自身の迷宮攻略と言えば、罨を起動しては大騒ぎして、逃げ惑い、挙句の果てには迷子になったという記憶が強いのだ。

戦闘の方は問題なかったが、多種多様な罨への耐性が低かったのである——具体的に言えば、大量の虫が落ちてきた時点で、レアはちよつと意識をすつ飛ばした。

で、気付けばパーティーから離れ、完全に迷子となったのである。

合流するのに丸一日かけたほどだ……だから、彼らの冷静さを、レアはほんの少しだけ羨ましく思う。

(……いえ、羨ましいと思うのは、そこだけでは無いのかもしれないわね)

根本的に、彼らが現在二年生であるということを、レアは純粋に羨ましいと思ってる。

あるいは、もっと直截的に、日之守達と同学年であるということを、羨ましく思っていると言っても良いかもしれないが。

学年が離れている以上、共に過ごせる時間というのは、どうしても少なくなってしまうものだ。

それに、出来るのなら、彼らとはもつと早く出会えていたら良かったのに、という気持ちが無いとは言えなかったから。

（ああ、でもそうだとしたら、ひかりと会えなくなってしまうすわね。それは困りますわ……）

月ヶ瀬ひかり。彼女はレアにとって、これ以上ない親友だ。

ひかりがいなければ、レアはきつと、日之守と出会う前に屈してしまっていただろうと、確信できるほどには、心の支えとなってくれた友人である。

多大な恩と友情を感じる彼女と出会えないのは、非常に困る。

そう考えるのならば、やはり今の形がベストなのかもしれない、とレアは少しだけ微笑んだ。

（しかし、妙ですわね……）

思考を切り替え、周囲を見渡しながら、レアは迷宮に入ってから、長らく感じていた違和感へと目を向ける。

というのも、迷宮攻略がスタートしてからレアは、一度も他のパーティを見かけていないのである。

既に攻略が始まってから、三日が経とうとしているのにも関わらず。

無論、それは有り得ないという訳では無い。迷宮内部は酷く広大であり、進み方というのはそれぞれなのだから、そういうこともあるだろう。

しかし、である。

アルティス魔法魔術学園の生徒と言えども、しよせんは二年生。迷宮攻略については素人であり、別のパーティであっても、同じような思考で、似たようなルートを選ぶことは多い。

実際、レアの時もそうだった。一日につき、二、三パーティと遭遇した覚えがある。（もしや、他と比べて遅れている……？ いえ、有り得ませんわね。むしろ、ペースとしては早すぎるくらいですわ……であれば、トップを独走している、とか？）

有り得なくはない。

レアの加入しているパーティは、それこそ意欲のあるメンバーのみで構成されており、真面目に一番に迷宮を抜けることを、目的としているパーティだ。

睡眠や食事にかかる時間も必要最低限として、肅々と迷宮主の下へと邁進している。

日バグ太郎之守とかいう、当然のように寝すぎたり、隙あらばイチャついたり、まったくした食事タイムをとっているやつらとは、丸つきり意識が違うのだ。

それに、レア自身にその自覚はまだないが、彼女は学園内でも既に有名である——
—以前とは真逆に、人気である、という意味合いで。

良いところを見せたい、お近づきになりたい。そういう思考が、彼らに無いとさえ嘘になる。

（ですが、そうだとすると、おかしくはありますわよね……通例でいけば、迷宮主にはあ

と三日は必要でしょうし……」

ランクBダンジョンは基本的に、一週間程度で攻略される程度の規模だ。長くても十日かかるかどうか、と言ったところである。

しかも、レアが感じている通り、このパーティの進行速度は早く、もしかすれば今日中にでも迷宮主には辿り着くかもしれない。

（近道のような道は幾つか通りましたが……いえ、流石に考えすぎですわね。ここはシンプルに、後輩の優秀さを称賛するといたしましょう）

レアはそう結論付ける。本当に、特段おかしな事態に陥っている訳では無いのだ。

ただ、少しばかり珍しい状況にあるというだけで、それ以上も以下も無い。

それに、トップを独走しているというのなら、これから追いつかれることもあるだろう。

うんうん、とレアが一人頷いていれば、

「あの……レア先輩？」

と、パーティの内の一人。後衛担当の少年に声をかけられた。

ハツとして前を見れば、彼以外の二人も不思議そうな目でレアを見ていた。

「あ、あら、申し訳ありません、少し考え事をしておりまして……何かございましたか？」
「いや、えつと、多分もう、迷宮主前まで来ちゃったと思うんで、一応準備が出来てるか

を聞きたくて」

「えつつつ」

思わずまろび出てしまった一音を隠しながら見れば、言葉通り、眼前には重厚な扉が佇んでいた。

石造りと思われる、両開きの巨大な扉。

その奥から感じられる、濃厚な魔力と殺気。間違いないく迷宮主だ。

え、早すぎませんこと!? という驚愕を、かなり頑張ってレアは押し込んだ。

「ええ、わたくしは問題ありませんわ。皆様がよろしいのなら、そのまま突入するのも構いません」

言って、レアは軽く魔力神経を励起させる。

いつでも魔術と魔法を発動できるように準備して、緊張した面持ちで、扉を開く彼らの後を追った。

「んー……あー? これ、先行ってるパーティがいるな?」

立華くん（やはり「ちゃん」と呼ぶべきかもしれない）をお姫様抱っこしながら言え

ば、葛籠織とネフィリアムが怪訝そうな顔で俺を見た。

まあ、怪訝そうな顔をしているのは元からであるのだが……具体的には、立華くんを抱っこし始めた辺りから。

いや違う！ 別にあまりにも見た目が好み過ぎて、こうしている訳ではない！

ただ、攻略中に立華くんが突然気絶したのである。

軽く調べたところ、特に外傷も無ければ、魔力の循環も滞っている訳では無いので、肉体が変化した反動が出たのだろう、と結論付けたのだ。

で、まさか置いていくわけにもいかないし、起きるのを待つのは時間の無駄すぎる、というところで俺が彼（彼女？）を運ぶことになったのだった。

もうマジで良い匂いがしてヤバイ。でも二人の向けてくる目もかなりヤバイ。

何で俺は迷宮でこんな目に遭わなければならぬんだろうな。

「それは少し……考えづらくないかしら？ 空城くんの件でごたつきはしたけれど、それでも私たちのペースは、はつきり言って相当よ」

「うん、まあ、それはその通りだし、だからこそ気になったんだけどな……」

「あは、確かに大気中の魔力薄くい。戦闘した後だね」

「ん、やつぱさうだよな」

「貴方たちには何が見えているのかしら……」

何が、と言われると、文字通り魔力の流れが見えてます……としか言いようが無かった。

どうにも、魔導だったり、魔装だったり、根源魔術が使えるようになれば、見えるっぼいんだよな——いや、逆か。

見えるからこそ、使えるのか。

まあ、とにかくそういうことだった。

意識して見れば、大気中の魔力の流れがちよつと普通じゃない。

明らかに、戦闘後特有の乱れ具合である。

「んう……でもこれ、ちよつと変く？」

「ちよつとつていうか、かなり変だ。どう見ても、戦闘後から半日は経過してる」

「……嘘でしょう？」

「俺も嘘だとは思いたいんだけどな……」

ぶつちぎりでトップを独走していると思っただけに、かなり驚いてしまう。

いや、というかこんな事態は、正直言つて有り得ない。

というのも、迷宮内の敵なんて相手ではない俺達は、片手間に戦闘しながら進んできたようなものなのである。

立華くんので少々時間はロスしたものの、全体的に見ればそれは微々たるものだ。

ほとんどの罨は意味を成さなかったし、ルートの選択だつて迷うことは無かつた。

つまり、独走状態であつて然るべきなのである、俺達は。それは当然、長めに入れていた休息を加味してもだ。

だから、これは何かがおかしい。予期していない何かがある。

「いや、まあ、単純に他のパーティーが、幸運にも近道を発見しまくつた可能性もあるんだけど……」

「二度や二度ならまだしも、両の手で数えられないくらい発見しないと、このペースは無理じゃないかしら」

「そうなんだよなあ……」

現実的ではない可能性を排除すればするほど、第二の破滅が脳裏を過つて眉を顰めてしまう。

とはいえ、その可能性はあまり無いとも思うのだが……何せ現状、俺達より先に進んでる生徒がいる、ということしか判明していないのだ。

これがもう、迷宮が滅茶苦茶！ 阿鼻叫喚の地獄絵図！ とかだつたら、最早その可能性しか無かつたのだが。

この場合、単純に俺が見逃していただけで、滅茶苦茶強い人がいたのかしれないし——
——ああ、そうでなくとも、月ヶ瀬先輩やレア先輩がいるパーティーであれば、有り得

るんじゃないか？

「無いと思うなく、ひかり先輩も、レア先輩も、積極的に手は出さないと思うし〜」

「そうね。日之守くんもそうだけれど、貴方たちは基本的に攻略にはノータッチでしょう？」

「ええ……じゃあ、他にもう考えられる可能性、ないか？」

それこそ、後はもう、迷宮主までの道順を最初から知っていたとか。

あるいは都市伝説じみたような話だが、迷宮に誘われて案内されたとか、そういった可能性しか無くなってくる。

どちらも当然ながら、眉唾物だ。ゲーム内設定で明かされた訳でも無く、単純に学園内でそういう噂がある、というだけだしな。

「さあ……ただ、これ以上考えていても仕方がないでしょう。というより、考えるより先に進んだ方が、早くないかしら？」

「ネフィリアムのくせに、珍しく正論言い始めたな……」

「嫌ね、私は常に正しいことしか言っていないでしょう？」

「寝言はね〜寝ていうものなんだよ〜」

「なっ……！」

ド辛辣な葛籠織に、絶句させられるネフィリアムであった。即座に二人の間で視線が

バチり始め、こいつらマジで秒で沸騰するな……と思うばかりである。

いや、着火したのは俺のようなもんなんだけど……。

とはいえ、ネフィリアムの言ったことは、今回ばかりはかなり正しい。

何せ、迷宮主はもうすぐそこなのである。ていうかもう目の前。かなり遠めだけど、扉見えてる。

正直、結構不安要素が出てきたので、ちよつと慎重に探りたいところではあるのだが……。

何かしらのイレギュラーが起こっているんだとすれば、まごまごとしている訳にもいかない。

だが、まあ、その前に。

「立華くん……立華くん、起きれるか？　おい」

「ん……んにゅ……」

小動物的な声を出しながら、パチパチと立華くんが目を覚ます。

ふあ、と小さくあくびをし、ふにやりと笑う。

「おはよう……って、何だこれ!?　何で君が、僕を……!?」

「おつとと、暴れるな暴れるな！　今下ろすから……」

「いやっ……このままで大丈夫。ずっとこうでも良いよ？」

「うわつ、急に女口調になるな！ ビックリするだろ！」

あと露骨に顔を近づけるな！ 俺の胸で涙を拭くんじやない！ 頭でもぶつけたのか!? 心臓出てきちゃうからやめろ！」

一悶着どころか、二、三悶着の末に、ようやく立華くんを下ろして、状況を説明する。何だかだらしな顔つきになっていた彼女も、流星に事の重大さを理解してくれたようだった。

「ふうん……そういうことなら、仕方ないね。君を揶揄うのは、その後にしてあげよう」
「こいつマジで何なの？」

性転換してから大分エグイキャラ変してない？ 大丈夫？

何かこう……身体の方に精神が引つ張られたりしてるのだろうか。

ちよつと有り得そうだな……と思いつつも、考察していても仕方がないし、さつさと進むことにした。

迷宮主のいる部屋特有の、巨大な扉へと葛籠織が触れ、
「うん、やっぱり開いてるね」

という言葉と共に、勢いよく押し開く。

そうすれば、広がったのは予想通り巨大な一部屋だった。

あまり装飾は無く、言ってしまうえば殺風景な正方形の個室。

迷宮主の姿は、無い。そこまでは良い、想定内だ。

だけど——

「誰もいない……なんてこと、有り得るのかしら？」

「いや、有り得ない。ていうか、迷宮主が殺されたなら、迷宮自体も無くなってるはずだから……」

やはり、想定外の何かが起こっている——と、考えるのは、少々早計である。

理由は二つ。

一つは、先に来たパーティが迷宮主に殺され、その迷宮主は何かしらの能力によって、今は姿を隠している可能性。

そして、もう一つが。

「シークレットフロア第二迷宮かな？ この感じは」

「うわーっ!? ビックリした!」

突然、俺の脳内を読み取ったかの如く発言を、耳元で囁いたのは月ヶ瀬先輩だった。

えっ、な、何!? 何でここにいんの!?

バツ! と勢い良く振り返れば、月ヶ瀬先輩のパーティの三人もそこにいる。

どうにも俺達並みの速度で、彼らも辿り着いたらしい……えっ? 有り得ないだろ。

「えっ、いや……え? 早くないですか……?」

「あはは……近道をたくさん見つけられたのもあるんだけど、ちよつと助言しすぎちゃって……」

「ああ……まーた甘やかしたんですか……」

頼られるとどうしても120%で応えてしまう、月ヶ瀬先輩の本領が発揮されてしまったようだった。

そんなんだから、どんどんフラストレーション溜まるんですよ……とチクチク言葉をぶつけながらも、お前らも甘えてんじゃねーよ、という目を三人へと向ける。

こういった積み重ねが後から、お前らじゃなくて立華くんの方に向くんだからな。マジで気を付けて欲しい。

いや、その立華くんと月ヶ瀬先輩は、現在特に深い親交がある訳では無いのだが……。こつからね！ こつからあるかもしれないし！

「ていうか、やつぱり第二迷宮シークレットフロアの方だと思いますか？」

「うん、間違いないんじゃないかな……迷宮主の気配は無いし。それにほら、魔法陣出て来る」

「あー……マジだ……」

部屋の中央に現れた、魔法陣がクルクルと回っている。

ゲームでも見た覚えがある形だ。つまり、あれは転移用の魔法陣。

しかも良く見なくても、使われた痕跡が見て取れる。

「これ、行かないですよね……」

「こーらっ、露骨に嫌そうな顔しないのっ」

コンコン、と俺の頭を軽く叩いた月ヶ瀬先輩が、自分のパーティへと戻っていく。

何だか妙に嫌な予感がするな……と思いつつも、軽く準備を整えてから行こうか、と俺は立華くん達に声をかけた。

《left》ご神託チャット▼《left》

《left》

◇名無しの神様 ば—————か

◇名無しの神様 はい解散！ 解散解散！

◇名無しの神様 安心安定のポケナスでございますだつたな

◇名無しの神様 スヤスヤ立華ちゃん草

◇名無しの神様　いつまで寝とんねんこいつ

◇名無しの神様　丸々半日は寝とったぞ

◇名無しの神様　面白すぎるやろ

◇名無しの神様　ポケナスの本領発揮しててダメだった。そろそろ本気出せや！

◇名無しの神様　安定のポケナスすぎるんだよ馬鹿が

◇名無しの神様　ワイらの期待を返してくれや、頼むからよ

☆転生主人公　うるさいうるさい！ あんな反動あるなんて知らなかったし！ 教

えろや！

◇名無しの神様　おめーーが気合で耐えるしか無いんだよ、T Sの反動はよ！

◇名無しの神様　迷宮出ちやったら元通りなんやぞ？ もっと気合入れろや！

◇名無しの神様　でも何だかんだ日之守占領してたからな、起きてるよりずっと良

かったんやないか？

◇イカした神様　ワイのメス立華ちゃんフォルダもかなり満たされたしな

◇名無しの神様　言い方キシヨ……

◇名無しの神様　でもスヤスヤ立華ちゃんお姫様抱っこ日之守のスクシヨ、最高だぜ

これ……

◇名無しの神様　大分濃いファンが増えてきたな

◇名無しの神様 てかシークレットフロアってなんや？

◇名無しの神様 何や知らんのか

◇名無しの神様 迷宮主撃破後に滅茶苦茶低確率で現れるエリア。危険だけどその分経験値だったりアイテムが旨い、まあ、ボーナスステージみたいなものだな。

◇名無しの神様 はえゝ

◇名無しの神様 ちなエリア自体は狭いんやがボスもいるから倒さないと迷宮から出れん

◇名無しの神様 え……？

◇名無しの神様 危険って、どのくらいなんです……？

◇名無しの神様 基本的にランクの一個上だから、この場合はランクAのレベルやろなあ

◇名無しの神様 く、クソゲーじゃん……

◇名無しの神様 おっと、今更かアゝ？

◇名無しの神様 蒼花は神ゲーとクソゲー、両方の性質を併せ持つ♡

◇名無しの神様 今ヒソカいたな

《left》

《left》

【安心安定の】蒼天に咲く徒花 バグキャラ日之守甘楽 攻略RTA【ポケナスでござい
ます】

《left》

セカンド・ルイン

第二迷宮シックレットフロアの攻略は、俺達と月ヶ瀬先輩の、二パーティ合同によって進めることとなった。

難易度が、これまでと比べても跳ね上がるということや、月ヶ瀬先輩のパーティメンバーが結構疲弊していた、というのもあるが、単純に、何かしらのイレギュラーが起こっていた場合、傍にいても守った方が守れるからである。

手の届く範囲にいてくれれば、まあ、命の保証くらいはしてあげられる……はずだから。

あと俺が月ヶ瀬先輩と行動したかった。

人として好きというものがあるが、これもシンプルに、戦力として多大な期待が出来るからである。

この人、魔装使ったレア先輩とも互角に渡り合うからな……。

充分以上に頼りになる人であった。

流星の原作ヒロインと言ったところである——いや、そんなことを言ってしまう

ば、どいつもこいつも流石を超えて、お前は本当に何なの？ と聞きたくなるレベルであるのだが。

葛籠織は言うまでもなく、ネフィリアムは見ての通りだし、立華くんと言えば今や立華ちゃんである。

何なんだ？ この面子は……。

異常者しかいないじゃん、と思っていれば、

「ね、ねえ、甘楽くん……」

と、月ヶ瀬先輩が俺の肩をつついた。

細い洞窟のような道を通っており、光源と言えば天井や壁に張り付いている、薄っすらと発光する苔のみなので、表情はしつかりとは見えないのだが、その声音は若干震えている。

どうしたのだろう。まさか、ちよつと暗いだけで、怖くなっちゃったのだろうか。

それはそれでちよつと可愛いな。

「いや、確かにちよつとは怖いけど……そうじゃなくって。その……彼女は誰、なの？ というか、空城くんはどこ行っちゃったの……？」

こしょこしょと、耳打ちでもするかのように言いながら、月ヶ瀬先輩が立華くん（そろそろ「ちゃん」で良い気がしてきた）を見る。

そういえば碌な説明してなかったな……。

ワンチャン、このまま何も話すことなく迷宮脱出まで行けないかな、とか思っただけなのだが、当然ながらそんな訳にもいかないようだった。

仕方ないな、と思いつつ立華くんの手を引けば、彼女は「ひやつ」と実に女性らしい声を上げる。

何で時間が経てば経つほど、見違えるかの如き勢いで女性らしくなっていくんだよ。前世は女性だったりしたのか？

板についてるとかってレベルじゃないんだよな、と心臓を微妙に早くしながら、俺達のいるところ……つまり、パーティーの最後方まで来てもらう。

「ちよつ、何だ？ いきなり……」

「いやほら、月ヶ瀬先輩に事情説明してなかったから」

「あー……」

なるほどね、と頷いた立華くんが、少しだけ考える素振りをしてから、月ヶ瀬先輩へと微笑んだ。

何故か俺の腕を掴み、引き寄せて。

具体的に言うならば、右腕に抱き着いてくる感じで。

「日之守の彼女です♡」

「!!?」

「あれ!? 何言ってるの!？」

「先日迷宮で拾われて、その流れで付き合うことになりましたっ」

「?!?!」

「滅茶苦茶な嘘に滅茶苦茶な嘘を重ねるのはやめろーッ!」

何一つ求めていた情報開示がされていないんだが!？」

葛籠織とネフィリアムはもうどうしようもないにしても、立華くんまで暴走を始めた
ら、收拾がつかなくなっちゃうだろうが……!」

あと本当に身体をくつつけてくるのだけはやめてほしい。

冗談だったとしても、俺の心臓は冗談抜きで早鐘打っちゃうんだよね。

ついでに言えば、ビツクリするくらい甘い声を出すのもやめて欲しい。

このままではちゃんと好きになってしまいう可能性があった。

嫌だ……この歳でそんな特殊な性癖を獲得したくはない……。

「特殊も何も、今の僕は女性なんだから、問題ないんじゃないか?」

「問題しかないに決まってるだろ……! 大丈夫? 頭の中身詰まってる?」

あー、もうほら、月ヶ瀬先輩が処理落ちしちゃったじゃん。

意味不明な情報に翻弄されたせいかな、目を回してその場に縫い付けられてしまっ

る。

何なら頭からは湯気が出てそんなもんだ。

滅多に見ることが出来なきそんな光景で、これはこれで写真とか撮っておきたいところではあるのだが、そうする訳にもいかない。

ペチペチと頬を叩けば、二、三度の瞬きをしてから月ヶ瀬先輩は再起動した。

「え、ええつと……ここはどこ？ わたしは誰……？」

「記憶喪失!? 嘘だろ、こんなことで!？」

「あつ、そうじゃないそうじゃない。それで、甘楽くんの彼女、だっけ……？」

「よ、良かった……」

いや、全然事実ではないので、全く良くはないのだが。

それはそれとして、未代まで恥になりそうな仕方の記憶喪失だけは防ぐことが出来て、本当によかった……。

最悪、色々とおしまいになるところだった……。

おい、と肘でどつけば、流石にばつの悪そうな顔をした立華くんがペコリと頭を下げ、それからやつと経緯を話し始めた。

「と言つても、「空城立華です。性転換しました」という、実に大雑把な一言ではあつただけけども。」

まあ、それ以上に言いようがないからな……。

またしても動きを止めてしまった月ヶ瀬先輩であつたが、十秒ほどしたところで苦笑いをした。

「あはは……ランクB迷宮なのに、性転換薬が落ちて来るなんてことあるんだねえ」

「本当、ビックリしましたよ……。ただ、第二迷宮があるんだから、それも納得ものではあるんですけどね」

「そう、だね……実際のところ、どう？　甘楽くんはこの第二迷宮のランク、どのくらいか予想つく？」

「んー、まあ、ある程度は」

少なくとも、ランクB以上であることは、設定上からも明確ではあるのだが、だからと言って、単純にランクAと決めつけることは出来ない。

もちろん、俺だつてこれが初の迷宮攻略であるのだから、正確なところまでは分からないが、それでも目に入る環境や様子、第二迷宮の最奥から感じられる圧、大気中の魔力の濃度や流れから、ある程度の予測は出来る。

だから、はつきり言つてこの第二迷宮が、異常とは全然言えない程度の難易度であるということとは、容易に理解できていた。

「ランクA以上ではあるけど、ランクSには全然届かない……まあ、精々中間。敢えて言

「うのなら、ランクA+ってところですかね」

「ん、わたしも同感。そこまで肩肘は張らなくて良いくらいだね」

「ですわね……」

と言っても、普通の二年生からしたら、即死してもおかしくはない程度のランクではあるのだが。

迷宮の難易度は、以前教えられたようにEからEXまでである訳だが、その一つ一つの間にある難易度の差は、隔絶的なものである。

ランクS迷宮の推奨攻略レベルとか、ランクA迷宮の推奨攻略レベルより60も違うからな……。嘗めてんだろって感じだ。

つまり、ランクA+みたいなものであることも、かなりのものではあるのだ。

単純に、原作と比べてみても、俺を含めて全員が強すぎる、というだけのことである。

普通に原作通り進んでいたとしたら、ランクA迷宮でも、詰みの状況そのものだからな……。

まあ、だからこそ嫌な予感がするのだが。

「何で先に攻略した子たちは、ここ入っちゃったかなあ」

「そこなんですよね……こういう時に待ったをかけるのが、助っ人枠の役目でもあるはずなんですわ」

まあ、俺だったら突っ込むんだけど……流石にこれは例外である。

月ヶ瀬先輩やレア先輩のように、普通の二年生と組んでいる場合、第二迷宮を見つけたのならば、迷宮主ダンジョンボスの部屋で、他パーティを待つよう指示するのが正解だ。

何せ助っ人枠の役目は、とにかく誰も死なせないということなのだから。

危険であることが分かり切っている場所に、進んで踏み込むことを許可する訳がない。

であるのならば、そうしなければならなかった理由があると考えた方が、建設的だとは思うのだが……。

「悩んでいても仕方ないんじゃないか？ さっきネフィリアムも言っていたが、どうせ進むしかないんだろう？」

「まあ、そうなんだけど……考えてないと落ち着かないんだよね。どうにも、嫌な予感がする」

「へえ、日之守にも恐怖って感情はあったんだな」

「立華くんは俺を何だと思ってるの……?!？」

「無敵の英雄様、だろ？」

「ハ、ハ、ハ……」

「ま、随分と女性には弱いみたいだが」

ぐにいーつと、俺の頬を指で突く立華くんであった。

クソツ、性転換前は誰よりも女性に弱そうな面していたくせに……!

むしろ女性の方がガツツリ性に合ってるんじゃないの? と思わせられるくらい、何というか、女性らしい立華くんである。

というか、別に俺は女性に弱いという訳ではないのだが……。

葛籠織だから、ネファイリアムだから、月ヶ瀬先輩だから、レア先輩だから……まあ、それと、立華くんだから、どうにも緊張するだけである。

アテナ先生? アレはちょっと例外だろう……。

魔王は論外である。中身にしても、見た目にしても。

「あはは、ここは空城くんに、わたしも同意かな。でも、甘楽くんの懸念も分かるし、ちよつと急ぎたいね……」

「戦闘痕も新しいものばかりになってきましたしね……多分、通ったのはそんなに前じゃない。一時間とか、そのくらい前?」

「ということは、追いつけるのか?」

「運が良ければね……」

まあ、悪かったとしても、遭遇出来そうなものではある——その場合、「死体」という意味にすり替わることにはなるが。

いや本当、悪趣味な冗談という訳では無く、真面目な話である。

何なら入り口からちよつと進んだところに、四人分の死体が落ちていてもおかしくはないな、と思つていただけに、ここまで血痕の一つすら見当たらないことに、驚愕すら覚えていた。

あるいはそれを、違和感と呼び変えても良いが。

「……ちよつと、先頭にいる葛籠織とネフィリアムとも話してきました」

そう言つて、スルスルと前に出れば、渋面の日鞠に出迎えられた。

不満そうに唇を尖らせている。

「日鞠たちに敵の処理を押し付けて、イチヤイチャするのは楽しかつた？」

「いや言い方、言い方に悪意がありすぎるでしょう？ 別にイチヤついてないから……」

「立華くんを抱き着かれて、喜んでたじゃん！」

「あれはちよつと別枠だろうが……！」

イチヤつきに換算するんじゃない！ 益々女性として認識しちまうだろ……！ と

叫びそうになるのを堪え、コホンと咳払いする。

今はこんなことで言い争っている場合ではない

ていうか、ここの観点であまり言い争いたくない。滅茶苦茶にボロが出そうだ。

「それはもう、自白しているようなものじゃない……」

「ふー……気のせいってことにしとかないか？ それより——」

「それより、先を急ぎたい、という話でしょう？ 残念だけれども、それに従うことはできないわね」

「ええー……」

ここに来て嫌がらせとかするなよう……という顔をすれば、ネフィリアムは呆れたようにため息を吐き、それからピツと指をさす。

とは言っても、俺に向けてではないのだが。

示された方向は、ちょうど前方だった——あつ。

「もうゴールじゃん」

「そういうこと……珍しいわね。日之守くんがあまり、周りを見れていないだなんて」

「大体いつも、こんな感じだと思うけど……」

「ふふつ、そうかしら」

またまた謙遜しちやつて、みたいな顔をするネフィリアムだった。

これはこれで腹は立つのだが、正直なところ、焦っているのは事実なので、何も言い返すことが出来ない。

というのも、先程から散見される戦闘痕のほとんどが、焦げ付いた跡なので……つまり、炎系の魔術ないしは、魔法が使用されたということに他ならない。

そして俺には、炎の魔術を得意とする、親しい人がいる訳で……。

そこがどうしても気になってしまふのは、もう仕方がないと言えるだろう。

「レア先輩だったとしたら、こんなところに入れさせないと思うけどな」

「そりゃ俺だって、そう信じてはいるんだけどな……」

何事にも、イレギュラーというのはつきものである。

どんな小さな可能性であっても、最後まで捨てる訳にはいかないだろう。

それに、どうせもう、答え合わせの時間なのだ。

全員にそれとなく目配せをしてから、きっかり十秒。

石造りの扉をゆっくりと押し開けば、広がったのは、炎の海だった。

「——ッ！」

全員が、即座に臨戦態勢へと入る。

いつ、どのタイミングであつても各々が魔法、あるいは魔術を行使できる状態へと入り、しかし、何も起こらない。

迷宮主の咆哮は響かないし、かといって、戦闘音が鳴り響いている訳でも無かつた。

ただ、ひたすらに静寂。

巨大な一室に広がる炎が揺らめく音だけが、耳朵を叩いていた。

けれどもいる。

確かに強大な何かが、中央に。

——嫌な予感がした。胃の底に、急に重いもの落ちてきたかのような不快感。薄つすらと感じた吐き気を振り払い、眼前の炎を打ち消せば。

「レア先輩……?」

そこにいたのは、ある意味今、一番会いたかった女性だった。

見慣れた美しい紅い長髪は、それだけで彼女であると理解させてくれる……それなのに、疑問形になってしまったのは。

一本の黒い槍のようなものが、彼女を地面に縫い留めていたからだろう。

彼女の髪色と同じ紅色の、大きな水溜りの真ん中に彼女はただ横たわっていて。

その全身には、黒い焔とでも呼べる何かが絡みついていて。

声は出なかった。否、出せなかった。

何よりも良く視える眼が、現実を受け容れようとしていなかった。

先程までは良く回っていた頭が、急に停止していくのを感じる。

誰かが悲鳴を上げた。そのお陰で、少しだけ正気が戻った。

何が起こっているのか、何をすべきなのか、思考を力づくで回転させる。

そう、そうだ。

良く見ろ、考えろ。アレは何だ?

その黒焔は、ただ見ているだけで悪寒がした。

その黒焔は、ただ近づこうとするだけで指先が震えた。

あれは、レア先輩の焔ではない——だと言うのに、それらはまるで、彼女の一部分であるかのように絡みついていた。

レア先輩を覆うように、あるいは、レア先輩を侵食するかのようには。

黒い焔は、ただ蠢いていた。

地から湧き出ているかの如く、増殖し続けるそれは、絶え間なくレア先輩を包み上げていく。

魔法とも魔術とも呼べないであろうそれは、命があるかのように微細な振動を繰り返していた。

それを見ていることしかできなかったのは、俺が彼女の生死を確認しなくなかったからなのかもしれない。

ただ純粹に、その光景に圧倒されていただけかもしれない。

何にせよ、ただ呆然としている内に、変化は起こった。

レア先輩の身体がドクン！と跳ねて、宙に浮く。されども落ちることは無く、中空に浮かび上がり、己を貫く槍を引き抜いた。

同時に槍は黒の焔へと融けて、レア先輩の内側へと吸い込まれるようにして消えた。

覚えのある感覚がし始めたのは、その瞬間からだつた。

悪寒が全身を駆け抜ける。

冷や汗が止まることなく流れ抜ける。

広がっていた焔が、彼女の内側へと、吸い込まれていくように消えていく。

あらゆる熱が、彼女に奪われていく。

焔が彼女の中へと混ざり合っていく。

焔が彼女を新しく象っていく。

焔が彼女を破滅へと誘っていく。

吐き気がした。

同時に全てを理解して、「最悪だ」と吐き捨てた。

長らく求めていた肉体うづわの到来に、焔はこれ以上ない歓喜の声を上げていた。

気高く美しく、何より強かった彼女を、しかし手に入れるのは容易かつた。

ここまでの案内に使った三つの命を天秤に載せてやれば、彼女はその身を差し出した

のだから。

どれもこちらが用意した、手駒に過ぎなかったと言うのに。かくして、それはついに此処に成った。

「——滅亡の時だ、人の子らよ」

静かにそう告げながら、それは緩やかに地に降り立った。

「わたくしは……いや、いや。俺様は、第二の破滅。それそのもの」
ふわりと焰が舞う。

彼女の着ていた制服が、黒々と染め上げられていく。
肌には黒い模様が走り、瞳が闇色に染まっていく。

「破滅を此処に——星の生命は、これにて決したぜ」

それは、既に彼女がレア・ヴァナルガンド・リスタリアではないという証左。

あらゆる生命を無と帰す、星の自滅機構。その一つの、依り代を用いた完全顕現。

されども塵の如く残った、彼女の名残が最後に声を上げた。

誰よりも美しく生きた、焰の女は、一人の英雄へと。

たつた一言、最後の願いを託す。

ああ——日之守様。わたくしを、殺してください。

ターニング・ポイント

覚えのある紅の焰が、ふわりと空気に解けていく。

レア先輩の温もりが、風に流れて消えていく。

この眼はハツキリと現実を捉えているのに、恐ろしいくらい頭は回らなかった。

いや、だって……は？

何だ、これ？

「っ、日之守くん！ しっかりして！」

そう叫んだネフィリアムに、強引に引き寄せられた。

まるでこれから逃げるとでも言うかのように——いや、違うな。

実際に逃げようとしているんだ。

月ヶ瀬先輩のパーティーメンバーは、既に扉の外へと連れ出されていて、立華くんが葛

籠織と月ヶ瀬先輩の手を引いている。

それはこの場で取れる、最適解ではあるのだろう。

「逃がすものかよ。あらゆる生命は終わりだっつってんだろ」

パチンツと音がした。

反射的にネフィリアムを押し退けた瞬間、即座に起動した守護魔法は欠片と化して、数瞬の明滅後には身体が壁にめり込んでいた。

身体が異常を察知するのに数秒遅れた。

痛みが後から追いかけて来る。

「がつ、ぐ、あ……？」

飛びそうになつた意識の尾を引つ掴むと同時に、せり上がってきた血を吐き出す。

ガラリと音を立てながらその場に落ちて、そこでようやく呼吸の仕方を思い出した。その中で、じわりとじわりと思ひ知らされる。

依然としてごちゃつきまくっている頭でも、はつきりと。

第一の破滅とすら、こいつは格が違う。

Spar a t t a v e r s o i c c i e l i G i u d i c a i l p e c c a t o
 「弓引くは天の射手 汝の罪は今許される！」
 s t r i s c i a r e f u o r i o m b r a p r o f o n d a c o r r i v i c i n o a l l a l u c c e
 「這い出でるは深き影 光の下を並び駆ける！」

黒白合わせて二百本の矢が撃ち放たれる。

決闘時よりも、精度と火力を底上げされたそれらは、しかし辿り着く前に霧散した。揺蕩う黒焰に食られるように。

「……接続者と、候補者か？ ハッ、足りてねえな」

闇色に染まった瞳が、彼女たちを見る。

ゆるりと腕が上げられる。彼女たちが展開した守護魔法が、数秒保つことなく黒焰に？み込まれた。

「射撃魔法：重複展開！」

『Magia distribuzione duplicata』

黒焰の中から二人を引きずり出した、立華くんが吼える。

展開された三十の魔法陣から、オプションをスキップした弾丸が飛び出し、それごと押し潰された。

三人が三人とも、その場に強制的にひれ伏せられる。

「主たるものまでいたか……豪勢な面子に囲まれてるな、特異点」

第一の破滅とは違い、随分と馴れ馴れしくそれは言う。

嘗められてるのが分かる。それだけの余裕があちらにはある——違う。

あいつ、俺が攻撃できない……したくないのが分かってるんだ。

第二の破滅は、俺に視えているのが分かってる。

未だにレア先輩の意識は生きていますということ。

未だにレア先輩の魂は失われていないということ。

分離させる方法はどこにもないと言えるほどに、密接に混じり合っているということ

を。

かといつて、第二の破滅ごとあの肉体を破壊してしまえば、それはイコールでレア先輩を殺すということに、他ならないことを。

否応なく理解してしまつたが故に、決断出来ない状態に陥つてしまつたことを、アレは理解している。

「実に人間らしく弱いな、特異点。ま、知つてたからこそ、こういう形を取つたんだが」指先が向けられる。拙い、と思う前に視界はブレた。

月ヶ瀬先輩に抱きしめられて、そのまま空を翔けていく。

「しっかし、ここまで効くのは予想外だぜ。案外脆いな、特異点」

黒焔が追いかけて来る。飛行魔法の限界値まで迫る速度で翔ける月ヶ瀬先輩に、しかし易々と追いついてくる。

大口を開いた黒焔に、二人揃つて叩きのめされた。

「拍子抜けだぜ……あくあ、迷宮と融合したり、感情まで獲得したりしたつてのに、無駄か——仕方ねえ。それじゃあ始めようか、第二の滅亡を！」

止めなければ、とは思ふ。

そうしなければならないと、強く思う。

レア先輩に残された、たった一言が頭の中で何度も思い返されて、吐き気がした。

「ねえ、甘楽くん」

「なん、ですか」

息を整えながら、それでも立ち上がった月ヶ瀬先輩が、俺を起こしてくれる。

ダメージはまだ、そこまで大きくない。戦おうとするのなら、戦えるだろう。

「レアちゃんの焰は、何か教えてくれた?」

「……自分を、殺してくださいって」

「そっかあ……それじゃ、倒してあげないとだね」

ほんの少しも悩むことなく言われた台詞だった。

その声に迷いはない。

彼女の藍色の瞳は強く、第二の破滅を見据えている。

いや、はえーよ。何でそんな決断をすぐ下せるんだ。

「あはは、そんなにおかしなことじゃないよ——ただ、レアちゃんがそう望んだのなら、そうしてあげるのが、親友の役目だと思うから。」

それに、レアちゃんの身体をあれ以上、変なのに好き勝手させられないでしょ?」

わたしに止められるなら、わたしが止める。それだけだよ、と月ヶ瀬先輩は笑った。

強い人だな、と改めて思った。

見習って、隣に立つべきなのだろうとも思う。

「甘楽くんは、優しいから。きつとたくさん考えちゃうんだと思う。

でもね、レアちゃんもそんなことくらい分かってて、その上で、きみに言葉を遺したんだってこと、分かかって欲しいな。

きみは、レアちゃんの英雄なんだから」

言つて、月ヶ瀬先輩は空を翔け、杖を振るつた。

それに合わせるように、立華くん達も攻撃を始め、その度に薙ぎ払われる。

常軌を逸した実力を持つ彼女たちでさえ、まるで虫けらのように弄ばれている。

しかし、それも当然の帰結と言えるだろう。

そもそも、第二の破滅を想定した戦いは、基本的に俺を主軸としたものだ。

「良いねえ、本命があつたザマで落胆したが……少しは楽しめそうじゃねーか！」

だから、直に戦いは終わるだろう。

彼女たちの抵抗は、定められた滅亡をほんの少しだけ遅らせることしかできない。

そうだ、死んでしまう。今、一人一人倒れていつているように。

立華くんも、月ヶ瀬先輩も、葛籠織も、ネフィリアムも、死んでしまうのだろう。

それだけはダメだ。誰一人にだって、俺は死んでほしくない。

——だって、少なくともわたくしにとつて、日之守様は英雄なんですもの、ね？

不意に、そんな一言が頭を過る。

迷宮に入る前、レア先輩にそんなことを言われたんだっけ。英雄、か。

似合わないな、と改めて思った。

こんな有様では、到底その名前は受け取れない。

あまりにも、相応しくない——それでも。

そうだとしても、そう信じられたのならば。

きつと、それには応えなければならぬだろう。その願いを、叶えなくてはならぬのだろう。

それが、信じられた者の、責務なんじゃないだろうか。

託された者が、為すべきことなんじゃないだろうか。

「あ————！ クソツ！ 砲撃魔法：重複展開！」

『Magia del bombardamento: Distribuzione duplicata』

開いた合計百門の砲台が、口を開いて砲撃を吐き出した。

空から降り注ぐように、第二の破滅を呑み込むが、少しのダメージも入った様子はない。

「あーん？ 何だ、元気じゃねえか。隅っこで泣く時間は終わったか？」

「チツ、せーな。殺してやるよ」

「ハハツ、良い度胸だ！ 特異点なら、そうこなくっちゃなあー！」
急速に魔力を練り上げる。

同時に場の魔力の制圧に取り掛かり、第二の破滅が薄く笑った。

「なるほどな、第一がやられる訳だ。人の身に余るだろ、それ」

「は？ 何だ、ビビって媚でも売りに来たか？」

「ハツ、雑魚が調子に乗るなっつってんだよ」

反射で展開した守護魔法を突き破った蹴りが、腹にめり込んだ。

宙に浮くと同時に、黒焔は群れを成して落ちてくる。

「がっ……う、ああ……!？」

頭から足先まで、食い破られながら炙られる感覚が、全身を隈なく埋め尽くす。

それらを力ずくで払いながら、杖を持ち上げた。

血が出過ぎてフラフラする、身体がもう倒れたいと叫びをあげる。

けれども、それで良い。これが絶好調だ。

思考だけはクリアで、眼も良く視えている。

目にももの見せてやるよ。

「久遠の彼方 祓われざる——」

「おいおい……そんな初歩の初歩で抵抗しようとか、笑えすらしねえぞ」

第二の破滅が呆れたように手を打ち鳴らす。ただそれだけで、俺の魔導はかき消された。

……あ？

有り得ない、と思うより先に、黒焰の群れは視界を埋め尽くしていた。

一点集中させた砲撃魔法で道を作り、そこから抜け出せば、第二の破滅は笑う。

「二つ、授業をしてやるよ、特異点。魔導つてのはな、より深く理解している者を、主として選ぶんだ」

「主として、選ぶ……？」

「そうだ……例えば、こんな風にな」

第二の破滅が指先を向けて来る。そこにあつたのは、先程消された蒼色の光だった。

それが黒々と焰に染め上げられていき、「よく覚えて死ぬよ」と、第二の破滅は言った。

「展開——」第壹砲撃魔導：無窮」

瞬間、それは撃ち放たれた。

俺のそれよりずっと強く、第二の破滅に改変された砲撃に、全身が包まれ焼き焦がされていく。

それが消えた頃にはもう、両の足で立つことすら出来なかった。

声を出すことすら出来ない。砕け散った杖が手から滑り落ち、前のめりに倒れそうになって、首を掴まれた。

「原型残るのかよ、すげーな。今の、最大出力だぜ？」

「あー……生温い、シャワーみたい、だつたけどな」

ペツ、と血を吐いてやろうかと思ひ、押し留まる。

身体はレア先輩なの、卑怯すぎるだろ……。

見慣れない闇色の瞳に覗き込まれて、悪寒が背筋を駆け抜けた。

「……何だよ、これだけか。期待外れ——いや、人の身にしては、上等か」

「随分、上から、目線だ、な……」

「上だからな。ハツ、もう良い、飽きた」

グツ、と首を掴む力が増した。

こんなことをせずとも、一秒もいらずに殺せるだろうに。

まるで愉しむように、それは少しずつ力を増していく。

「あばよ、特異点。呆気なく、つまらなかつたぜ」

力が増していく。痛みが増していく。

意識が薄れ、呼吸が途切れ、死が迫って来る。

圧倒的な力の前に、ダラリと力は抜けて。

「沈^{Lavellio}みなさい！」

聞き覚えのある声が、聞こえた気がした。

影の中へと消えていった少年に、第二の破滅は少しだけ瞠目し、それからゆるりと首を動かした。

フツ、と少しだけ笑う。

無駄な抵抗だな、と。

「はっ、はあ、はあっ……」

その先で息を切らすのは、一人の少女——アイラ・ル・リル・ラ・ネフィリアムだった。

先程まで、自身と周りに回復魔法をかけながら、日之守の戦いを見ることしかできなかった彼女は、それでもギリギリでの救出に成功した。

立華たちの影に出現した彼女は、今も大切そうに、気絶した日之守を抱きしめている。
(逃げられ……はしないわね。かといって、撃退は不可能だわ。少なくとも、私では無

理。日之守くんが、もう一度起きてさえくれれば、逆転の目はあるかもしれないけれど……)

自分達と同じように、あつさりと敗北を喫した日之守を、しかし、ネフィリアムは未だに信じている。

それは、日之守を盲目的に信じているから——ではない。

明らかに、今の日之守の動きは精彩を欠いていたからである。

メンタルが万全ではないのだろう、とネフィリアムは予測する。そしてそれは、実際に正しい。

日之守は動揺や困惑といった感情を、使命感だけで押し込んでいた。

それが結果的に、自らのパフォーマンスを、酷く落としていたということにも気付けずに。

「健気なもんだな、人の子つてのは。そんなに特異点が大切か？」

「随分と頭の悪い質問をするのね。そんなこと、言うまでもなく、当たり前じゃない」

「ハツ……じゃあ、そうだな。そいつを俺様に超越せば、お前は助けてやる……つったら、どうする？」

「断固拒否に決まってるでしょう。あなた、三流の悪役みたいなことを言うのね」

強気なことを言うネフィリアムの身体は、しかし恐怖によって震えている。

それなのに、その瞳だけは確かな強さを放っていて、だからこそ、第二の破滅は理解できなかった。

「……恋愛感情ってやつか、下らねえな」

「あら、感情を獲得したとか何とか、言っていたように記憶しているのだけれども……それは嘘だったのかしら？」

「獲得したからこそ、だ」

「ということは、理解は全然できていないってことなのね……ふふっ、まるで生まれたての赤ん坊みたい」

一つ、教えてあげましょう。とネフィリアムは言った。

その手にある少年の頭を撫でてから、その場に寝かし。

守るように前に立ってから。

「私ね、日之守くんに言ったのよ。『私は日之守くんのことを、一番に愛する自信があるわ』って」

大気中の魔力が、少しだけ騒めいた。

ネフィリアムを中心に、渦巻くように。

「一番って、何も私の中で一番ってだけではないの。世界中の誰よりも、私が一番に愛する自信があるってことなのよ。まあ、彼は照れ屋さんだから、まだ受け取ってもらえて

ないのだけれども」

片想いも楽しいわ、と恥ずかしそうに笑いながら、ネフィリアムは言う。

頬は少しだけ赤らんでいて、この場には似合わないけれど、見た目相応の女の子らしい。

「話が見えねーな、だからどうしたんだっつーんだよ。そんなモンは、今だって何の役にも立ちやしねーだろ」

「だから、教えてあげると言っているでしょう——恋する女の子は、最強なんだってことを！」

アイラ・ル・リル・ラ・ネフィリアムという少女は、この世界に存在するあらゆるものよりも、日之守甘楽という少年を愛している。

日之守甘楽という少年の為ならば、命の一つだって惜しくはないし。

日之守甘楽という少年の為ならば、誰の運命だって変えてしまおうだろう。それはきつと、世界の運命だって。

Ombre profonde d'abîsses
「深淵より極黒を」

渦巻いていた魔力が、騒めいていた魔力が形を与えられる。

闇よりも濃く、黒よりも深い影が、産み落とされていく。

Abbi priet del destino che ti inghiotte
「呑まれゆく運命には慈悲を」

それを見て、しかし第二の破滅は鼻で笑った。

根源魔術——確かにそれは、人類が行使できる最強の奥義。魔術の秘奥、その一つである。

けれども第二の破滅にとつて、その程度は兎戯に過ぎない。

第一の破滅とは違い、第二の破滅の顕現度合いは、比較にならないほどなのだから。
「想い^{metti qui tu pensiero}を此処^{metti qui tu pensiero}に」

それでも高まり続ける魔力を、抗うことをやめない姿勢を、第二の破滅は面白く思う。だからこそ、真正面から打ち破ろうと手を上げた。

黒焰が蠢く。

「底^{l'ombra senza fondo}無き影^{accettata tutto}は悉くを受け容れるだろう」

それすら呑み込むほどの影が、際限なく広がり続けていく。

この場の制圧権は、既にネフィリアムの手の中にあつた。

それを握りしめて、彼女は叫びをあげる。

「我が身^{l'ombra che alberga nel mio corpo}に宿りし影^{l'ombra che alberga nel mio corpo}は——《極夜^{Notte}》！」

熱く燃える感情が、ネフィリアムの中を駆け回る。

彼女の持つ愛情が、あらゆるものに劇的な変化をもたらしていく。

ネフィリアムは思う。もっと一緒にいたい。もっと生きたい。もっと傍にいた

いと。

だから——だから、日之守くん。

これが終わったら、私、貴方にアイラって呼んで欲しいわ。そして、私は貴方のことを、甘楽って呼ぶの。良いでしょう？

「我が愛は此処に在り」

遍く全てを食い広げる影の群れが、迷宮内を支配する。

深く、広く、果て無く続く影はさながら夜そのもの。

概念すら上書きするそれを前に、第二の破滅は己の一部とも言える黒焔を対峙させ、

「——な、んだ、これは……！」

一方的に食い消すどころか、完全に拮抗したのを感じ、思わず声を零した。

どちらかが、優勢になるほど押し込めてはいないし、押し込まれてもいない。

それ自体がもうおかしい。有り得ない。あつてはならないことだ！

魔術が魔導と、同等の火力を發揮するなど——！

「認めねえ——認めねえ！ 感情一つで、何かが変わるなど！」

「必死になればなるほど、認めてるも同然だと思おうわよ、ベイビーちゃん？」

軽口に乗るように、放たれる根源魔術は限界を軽々と超えていく。

それは偏に、彼女の持つ愛情故に。

出力が際限なく上がる黒焔に、彼女の影は、全く負けないほどのものへと変貌していき。

それは、正しく異次元の戦い。その余波だけで、街が一つ消し飛んでもおかしくないほどの拮抗。

世界の行く末を定める分岐点^{ターニングポイント}だった。

そこから、少し離れたところ。

倒れ伏す仲間たちの真ん中で、薄っすらと甘楽は目を覚ました。

戦いに起こされるといふ形で意識を取り戻し、その戦いに言葉を失い。

それから、抱きしめられていることを理解した——いや、ちよつと待つて。

何かすげえ柔らかいのが温もりと共に押し付けられてる気がする!!

「え? え!!? なに、何……!?!」

「あつ、馬鹿、動くな……!」

返ってきたのは、立華くんの声だった。

それに気づいて、少しだけ冷静になってみれば、確かに考えるまでもなく立華くんである。長い金の髪や、この小さな身体は彼女そのものだ。

……いや違う! だとしたらもつと問題じゃん!!?

だつてこれ、半裸同士で抱き合つてる形になるわけだよな!」

「わー! 馬鹿馬鹿、暴れるな離れようとすんなこつちを見るな!」

「無茶苦茶言うねきみ!! 無理無理無理無理! え? ほんとに何やつてんの!」

「僕だつて好きでこんなことしてる訳じゃない! さっきの攻撃で服が破けちゃつたんだよ……! だから、そのまま身じろぎしないで、前だけ見えて!」

今頃顔真っ赤にしてんだらうな……というか、耳まで真っ赤にして言う立華くんであつた。

いや、だからといって、何で抱き着いてるんだよ……という疑問は、すぐに解消された。

身体の傷が治つていく、失われた体力が戻つていく。消費された魔力が補填されていく。

これ、回復魔法をかけてくれながら、同時に魔力の譲渡までしてくれてるのか。

「それだけじゃない……というか、それだけならここまでしてない……!」

「ええ……じゃあ何なの……」

「君に、僕の勇者の力を貸し与えてる。その為に、こうして……その、素肌を合わせてるんだつ」

「――」

言葉を失った。けれどもそれは、別に「何言つてんのこいつ？ やば……」とドン引きしている訳ではない。

なるほど、と深く頷いてしまったのだ。

『蒼天に咲く徒花』における勇者の力とは、魔王への特攻でもあるが、それは極端に押し上げられた『悪性への特攻』と言い換えても良い代物だ。

要するに、相手の悪性が強ければ強いほど、それは効力を増す。

例えば魔王相手であれば、その攻撃力は最大で十倍にまで膨れ上がったほどである。

貸し出しとか出来るんだ……と思ったが、思い返してもみれば、原作でもキスしたヒロインには譲渡できていた。

普通に肌の接触だけで出来たのかよ。

「これで多分、もう少しまでもにやり合えるだろ……それと、だ。日之守」

「まだ、何か？」

「うん……少し、聞きたいことがあるんだけど」

「ん、良いよ」

全身で感じる立華くんには、死ぬほど心臓を鳴らしながら、深呼吸と共に話を促す。

これ、俺の鼓動聞こえてないよな……？

「君、ドキドキしすぎだろ……」

「うるさいな!」 そつちだつて凄いい心臓鳴つてるじゃん!」

「こんな状況でしない方がおかしいだろう……!」

「うーっ、と互いに唸り合つてから、黙り込んで一拍を置く。

早く話せよ、という話であつた。

「えーつと、第二の破滅つて、迷宮と融合したつて言つてたけど、それつてつまり、シークレットフロア ダンジョンボス 第二迷宮の迷宮主も、あいつつてことで良いんだよな……?」

「その認識であつてると思う。多分、間違いない」

「そつか、それじゃあ、もう一つ。迷宮から脱出する方法つて、迷宮主を倒すだけなのか?」

「俺の知る限りは、それだけだけ……」

「迷宮を破壊とか出来たら、脱出できたりしない?」

「ええ……随分野蛮なこと聞いてくるねきみ……いや、出来ると思うけど」

というか、正確なことを言えば、迷宮主を倒せば迷宮脱出となる訳では無いのだ。

迷宮主を倒すことで、迷宮全体が瓦解し、跡形もなくなることで、脱出となるのである。

だから、完全に破壊し尽くせば、脱出となるのはそうであつた。

まあ、だから何? という話ではあるのだが……。

「いや、だつてさ、迷宮で受けた影響は、迷宮から出れば元に戻るんだろう？ それつてつまり、迷宮を破壊して脱出すれば、レア先輩と第二の破滅は分離するつてことなんじやないのか？」

「——うお、えつ、天才？」

え？ いや……いける。いけるいける！ その理論なら全然いける！

ビックリするくらい蠢族じみた発想ではあるが、これまた驚くくらい隙が無い！

問題は、どうやって破壊するかだが……。

「まあ、迷宮自体は魔法魔術で破壊できるからな……俺だけでも、そこそこ壊せるとは思う」

「うん、だろうな……タイミングを合わせられれば、僕らの方でも後押しできるから、それで全壊させられると思う。ただ——」

「ん、分かつてる」

言いながら、チラリと戦場へと目を向けた。

未だに変わることなく拮抗は続いているが、ネフィリアムの消費が激しい。

あのままだと、押し切られてしまうだろう——そして、それに代わるのならば、やはり俺以外にはいない。

出来るのか？ と自問すれば、余裕、と自答が返ってきた。

滅茶苦茶ボコボコにされた貸しもある訳だしな、百倍にして返そう。

言つてやりたいこともあるし。と、眼をギョツと瞑つて立ち上がりながら、短く息を吐いた。

「俺の魔導が初歩つてことは、応用もあるつてことなんだよな……」

まあ、言われてもみれば、当然のことではあるのだが。

更に発展させるといふ思考が無かつたのは確かだったので、目から鱗つて感じであつた——多分、形は自由なんだ。

「久遠の彼方 祓われざる闇の先 沈まざる光の雫」

例えば以前使つた魔導は、ただ放出するだけだつた。

それに比べ、第二の破滅は焰を意思あるものかのように扱つている。

魔術と一緒に、使い手によつて、幾らでもそれは形を変える。

「理こそは我に在り 墮ちた天はこの手の中に」

だから、もつと自由にやろう。

軽く死にかけたせいとか、あるいは立華くんを力をつたつたからか、調子は万全を通り越して、万能感すらあるくらいなんだから。

「恐れるならば我を見よ 讀えるならば我が下に」

いつになく眼が良く視える。世界の形が良く捉えられる。

自分の中に混ざった、勇者の力を洗練させて、編み込んでいく。

「勇あるものよ 集い纏え」

第二の破滅と、同じ土俵で戦うのは不利だ。

大規模魔導のぶつけ合いだと、あちらの方が練度は高い。

「展開——」 第式装甲魔導：夢纏」

だから纏う。魔導そのものを、外套のように仕立て上げる。

その一部を切り取って、立華くんを覆い、頭をクシヤリと撫でた。

「わっ、ちよっ、何するんだ!？」

「いや、ちよっとしたお礼……みたいなの? とにかく、ありがと。いつてきます、頼んだ

よ」

「~~~~っ! 行ってらっしやい、任せてくれ」

トンツ、と軽く地面を蹴った。それだけで、第二の破滅の眼前へと迫り着いた。

視線が交錯する。

「ハッ、死んでなかったか。何をしにきた?」

「礼をしに来た」

詠唱抜きで魔導を手繰る……正確には、纏った一部を手繰る。

武器であり、防具であるそれを、指でなぞって形を変えて——砲撃として、零距离

離から撃ち放った。

「がっ、ああ、あああああああ!?!」

「おっ、良かった。上手くいった」

蒼色の閃光の中に、第二の破滅が消えていく。

何、死にはしないだろ。

どうせきつちり元通りになるんだ——いや本当、そう分かっただけで気が楽だな……。

やりたいようにやって良いんだ、という安心感が、思考をフルで回転させる。

十全に身体を動かせる、意識が明瞭になっている。

反動で後ろに下がりながら着地すれば、力を使い切ったようなネフィリアムがそこにいた。

「悪い、待たせたな」

「本当……待たせ過ぎよ。私、泣いちゃうかと思っただわ」

「何でそんなに泣いちゃいたがるんだよ……悪かったって。後は、俺に任せて」

「ええ、お願いね」

ふらりと倒れたネフィリアムを横抱きにして、立華くん達に預ける。

さて、第二ラウンドだ。

「あつさり死んでくれるなよな、第二の破滅」

いや……それにしても立華くんの、滅茶苦茶でかかったな……。

そりゃ服の上からでもデカいデカいとは思っていたが、直に触れ合うのとは別物過ぎた。

ヤバすぎるだろ、アレは……。

本当に、迷宮内にいる間だけの、一時的な奇跡の産物で本当に良かった……。

仮にずっと続くんだったら、普通に俺の方が参ってしまうところだった。

ふ……、あつぶねえ……！

《left》ご神託チャット▼《/left》

《left》

◇名無しの神様 うわー！

?!?!?!?!?

◇名無しの神様 半裸の美少女と半裸の美少年が抱き合ってた!!!

◇イカした神様 スクシヨ百万枚撮った

◇名無しの神様 安心しろ、動画もバッチリだ

◇名無しの神様 天才か？

◇名無しの神様 これが、ボケナスの本気……!?

◇名無しの神様 こんなのもう、ボケナスなんて言えないじゃん……

◇名無しの神様 ボケナス様だよこんなの……

◇名無しの神様 滅茶苦茶絵になってたの面白すぎんだわ

◇名無しの神様 さっきまで完全にお通夜だったとは思えないくらい盛り上がって

きててワロタ

◇名無しの神様 マジで誰も発言しなくておしまい感漂ってたからな

◇名無しの神様 次は普通に普通の転生して幸せに生きて欲しいとか思ってたわ

◇名無しの神様 ほんそれ

◇名無しの神様 逆転ホームランにもほどがあるんよ

◇名無しの神様 アイラちゃんが滅茶苦茶やり始めたとか思ったら、何かバグ守が覚

醒してて草

◇名無しの神様 あいついつつも覚醒してんな

◇名無しの神様 流石にアイラちゃんに謝って欲しい

◇名無しの神様　でもかっこいいから許しちゃうよ

◇名無しの神様　日之守のあれ何？　何か……魔導とかいうのを、纏ってる？

◇名無しの神様　まあそんな感じだよな

◇名無しの神様　雰囲気完全に超死ぬ気モードなんだよね

◇名無しの神様　纏ってるのもマントっぽいし、かなりそれっぽいよな

◇名無しの神様　リボンオタクにしか分からない会話やめろ

◇名無しの神様　何だよ、超サイヤ人って言えば良いのか!?

◇名無しの神様　すげえ分かりやすくなってる草

◇名無しの神様　最初からそう言え

◇名無しの神様　ボッコボコじゃん

◇名無しの神様　流石に第二の破滅くんが可哀想になってきた

◇名無しの神様　日之守さんの前になんか立つから……

◇名無しの神様　シンプルに自殺志願者のそれなんだよ

◇名無しの神様　南無……

《left》

《left》

【来る！】蒼天に咲く徒花　バグキャラ日之守甘楽　攻略RTA【第二の破滅！】

⋈
l
e
f
t
⋈

うお……これ、かなり気持ちが良いな。

ボコボコにされて溜まっていたプラスチックが解放される感覚がする。

とは言っても、特別大きなダメージにはなっていないだろうが。

少しだけ焼き付いた跡を残した第二の破滅が、怪訝な目で俺を見て、数瞬後に絶叫した。

「今、のは——ハア!? 有り得ねえ! テメエ、一度顕現させた砲撃魔導を、そのまま体内にも循環させてるのか!」

「えっ!? うわ、マジで見ただけで分かるかよ……すげえな、理解力イカれ過ぎだろ……」

「イカれてるのはテメエの頭だろうが! 何でそれで死んでねーんだよ!」

「いや、敵だとしても言い方つてもものがあるだろうが……! 精神攻撃に移行するのはやめろ!」

ていうか、大本となる魔力を通す”魔力神経”があるんだから、魔導だって、流そうと思えば流せるだろ。

それに、ただ循環させてる訳では無い。

体外に顕現させた砲撃魔導を、身を包む衣装のように形成し直して、それから体内に流し込んで全身を循環させ、再度放出する際に、大気中の魔力を取り込み補完しながら

形成し、また体内に……ということ、無限に行っているだけである。

これによって、身体能力を大幅に向上させた上に、いつでも詠唱抜きで、砲撃魔導を撃ち出せるという訳だ。

砲撃魔導という観点から見れば、一度詠唱することで撃ち出した砲撃魔導を、そのまま消費せずに再利用している形になるからな。

マジでこれ进行を思いついた瞬間、もしかしたら俺は天才なのかもしれない……と自画自賛したほどである。

「信じられねえ……人の頭で、そこまでの演算が出来るものなのかよ。気持ち悪い」
「だから！ レスバに持ち込もうとするのはやめろーッ！」

普通に俺の心が折れて終わりになるだろうが！ と踏み込んだ。

とはいえ、相手は第二の破滅である。

星の自滅機構にして、世界を終わらせる七つの滅亡。

たった二度の攻防だけで、俺の激変したリズムに、完璧に合わせられた。

眼前に、銃のポーズをした指先を向けられる。

「ハッ、直線馬鹿ほど読み易いものもねえな」

「失礼だな……俺って結構、優秀な学生なんだけど。先生の話とかも、ちゃんと聞く方なんだよな」

「あん？ 何が言いてえ」

「勉強の成果を見せるって言うってんの——あつ、それとももう、忘れちゃった？ それなら、今度は俺が教えるよ」

第二の破滅が向ける指先で、渦巻いていた黒焔が霧散する。

ふわりと誰かに吹き消されたように、跡形もなく——そして。

それは俺の手元で、再形成される。

「展開——」 第弐神焔魔導：無焔」

へー、これ無焔って言うんだ。最初から展開されてたから知らなかった、と解析を終え、行使してから思う。

手元の黒焔が、見慣れた蒼色に移り変わって、第二の破滅は頬を引き彎らせた。

「魔導つてのは、より深く理解している者を、主として選ぶらしいぜ」

「なっ——」

それにしても、主として選ぶってな……。

単純に魔導の演算を横からパクっただけじゃねーか。

撃ち出された蒼色の焔が、第二の破滅を呑み込み喰らい尽くす。

絶叫すら消し潰すそれは、しかし力づくで薙ぎ払われた。

闇色の眼光が鋭く光る。

「ツ——クソが、良いぜ、認めてやる。特異点、テメエは確かに、この世界のイレギュラーだ。俺様を殺し得る可能性がある」

「ずっと思つてたけど、レア先輩の身体と声でクソとか俺様とか言われると、これはこれで悪くない気持ちになるな……」

「何ッなんだテメエは！ 本当に頭がイカれてんのか!?! ああ、クソツ！ 本気で消してやる！」

絶叫と共に、ズルリと無焰には変化が起こる。

黒から白へ。

魔導としての位階が上がり、先程とは全く別の演算で動くものへと変貌を遂げていく。

「遊びはしめえだ。今から俺様は、テメエを明確な敵として、障害として認めよう——

—破滅を此処に。俺様こそは、滅亡を齎す世界の機構」

白焰を手繰りながら、第二の破滅はそう告げた。

それは俺に対する宣言であり、己に対する宣言であり、そして、星に対する宣言であった。

感じる圧力が、目に見えて増す。

進化したというよりは、ただ、枷を外しただけのような感覚。

文字通り、手加減をやめたということ、言われなくても理解した。

「頼むからよ、すぐに死ぬなよな、特異点」

意識が、一瞬飛んだ。

宙に身体が打ち上げられていることを確認し、遅れて追いついてきた痛みで顔を顰める。

蹴ら、れた！

クソツ、見えたのに反応できなかった！

「ハハツ、良いぜ！ その顔だ！ ほんの少しだけでも、良い夢は見れたかア!？」

「優位に立った途端、元氣いっぱいになるねお前……」

ていうか、近接戦闘に持ち込んでくるのはやめろ！

幾ら身体能力を底上げしてると言っても、俺は基本的に魔法使いなんだぞ！ 中々

遠距離が本職なんだっつーの……！

至近距離での殴り合いも蹴り合いも、出来なくはないが練度が全く足りていない。

同じ土俵に上がった時点で負けだ、だから乗らない。ただ受け流して、ひたすら下がる。

距離を離せば離れただけ、ビツタリと付いてくる第二の破滅に舌打ちをした。

「おいおい、そう逃げるなよ。寂しいだろ?」

「何それ……もしかしてお前、俺のことが好きなのか……う？」

「死ぬエー！」

白焔が、引き絞られて光線のように撃ち放たれる。

極至近距離でのそれは、易々と俺の肩を貫いた。貫通された傍から焼き切られ、血の一つすら流れない。

代わりに目も眩むような激痛が走って、けれども足は止めなかった。

第二の破滅の腹へと手を当てる。

「あんまり強い言葉を、使うな、よー！」

考えていたことは同じだ。

自身の魔導を手の中で圧縮し、引き絞ることで貫通性を上げた第二の破滅と。

自身の魔導を手の中で圧縮し、けれども面制圧の為に、ただ大質量の砲撃を行った俺。

多分、ダメージとしては俺の方が低い。というか、言ってしまうえば、無秩序に撃ち放つただけなので、かなりの無駄がある。

だけど、それで良い。強引だったとしても、距離を作れたのなら、後はもう俺の領分だ。

「チツ、容赦がねえな。良いのか？ この身体は、テメエの大事な女だろ？」

「は？ お前それは、流石にライン超えだからな」

そもそもお前がレア先輩を素体にしなければ、それで終わった話だろうか。迷惑とか、困るとか、そういうレベルじゃない。

大体、そんなことは百も承知の上で、本気でやってんだよ。

申し訳なさとか、既にいっぱいいっばいで、パンクしてるに決まってんだろ。

「だけど、それも一旦呑み込む。いつまでも気にしていたら、それこそレア先輩に申し訳ない」

考えてもみれば、レア先輩に判断する時間なんてほとんどなかったはずなのだ。

何が起こっているのかを、何をされたのかを、把握することすら困難だっただろう。だというのに、レア先輩は最低限の情報だけで、解を導き出した。

己を殺してもらうしかないという、限りなく正答に近い答えを、俺に託してくれた。その覚悟の大きさに、いつまでも怯んでいる訳にはいかないだろう。

後でいっばいごめんなさいして、何とかチャラに……なるかなあ。なると良いなあ。まあ……なるでしょ！ と砲撃魔導を五つ、圧縮したのを並べて放つ。

打ち立てられた白焔の盾を軽く貫通し、第二の破滅を撃ち抜いた。

「がっ、ぶ……ああああアアア……!?!」

「良く叫ぶやつだな、そろそろ後悔してきたか?」

「ギ、イ……調子に、乗るなよ特異点——人の子如きが、俺様の前で、偉そうに吼え

るんじやねえ！」

白焰が、第二の破滅を中心に渦巻き、絶対の盾となる。

あー、アレは無理だな。攻撃性を極端に下げて、防御性に全振りしてる。

どれだけ圧縮しても貫通させられないだろう。しかも、常に演算式を変えて端から構築し直しているから、こつちで再演算して乗っ取ることも出来ない。

この期に及んで何の真似だろう……時間稼ぎ？

いや、こつちとしては有難い限りではあるが——あつ、違う！

「まずっ——」

「開け、地獄の扉——之なるは、そうあれかしとされた怨嗟の滅亡」

悪寒が背筋を駆け抜ける。

第一の破滅と同じだ、アレは、最後の手段に出た。

視れば理解する、第一の破滅とは比喩物にならない、大規模魔導だということが。

「此処に滅亡を。愚かなる命は薪に。煌々と燃ゆるは死の焰」

地の底から、黒と白の焰が湧き上がる。

第二の破滅を基点として、地獄の焰が雄叫びを上げる。

世界を丸ごと呑み込むような、絶望的な圧を伴って。

「——真理は此処で、灰へと消えた」

地獄の扉が開き、とめどなく焔はこの世に産み落とされていく。たつた一つの生命すら逃さんとばかりに、焔は果てしなく広がっていく。

「燃え尽きろ、第二の滅亡」

黒白の焔は、世界を覆わんとばかりに解放された。世界を舐め尽くす、死の焔が。あー……参つたな。これ俺、相殺できないぞ……？

今使っているこれだつて、元より広範囲攻撃による真つ向勝負をしたくないから、突破力を上げた形として採用した訳だし。

それに、そもそも俺は、ここら一帯を破壊するほどの大規模な魔法魔術、魔導を行使したことが無いのである。

最大で砲撃魔導くらいなものだ。それでは百発撃つても足りないだろう。

つまり、ノウハウがない。今から学習して作り上げるのは、普通に手遅れである——だから。

「葛籠織、頼らせてくれないか？」

「ふえ？」

根源魔術の発動準備を始めていた彼女の隣に並んでそう言えば、葛籠織は呆けたように俺を見た。

パチパチと、数回瞬きをする。

「アレを迎え撃つのは、俺だけじゃ無理だ。でも、葛籠織がいればできる……葛籠織が、必要だ」

「……あは、おつけ〜！ 日鞠はどうすれば良い〜？」

「いつも通りで大丈夫……ああ、でも、全部受け容れて欲しい」

言つて、俺は葛籠織を後ろから抱きしめた。全身を密着させて、彼女の利き手である左手に、俺の左手を重ね合わせる。

「かつ、かんかん〜!?!」

「わーっ、違う違うー！ どさくさに紛れてセクハラしたかったとかじゃない！ ただ、葛籠織の身体を通して、魔術に魔導を乗せるから。こうしないと無理なんだつて」

かつて、立華くんがレア先輩の魔力を補った時、その身に抱き着いていたように。

あるいは、先程俺が、立華くんを力を譲渡された際に、肌を密着させたように。

互いが触れ合っていればいるほど、その効率は良く、同時にリスクも落ちる。

だから、決して下心がある訳では無いのである。いや本当、マジで。

滅茶苦茶良い匂いがあるとか、柔らかいとか、細くて心配になるとか、思つてたりなんかしない！

「嫌だとしても我慢して欲しい……本当に、他の手段が無いので……」

「も〜……も〜っ！ 仕方ないな、かんかんは。ね、日鞠のこと、日鞠って呼んで？」

「……日鞠。いけるか？」

「えへへ、もつちろん！」

元気良くそういつた日鞠に合わせるように、左手を真つ直ぐ伸ばして、第二の破滅へと向ける。

Aurora daij aitra parte
「彼方より極光を」

「遥かなる少女に救いを」

流れ始めた彼女の魔力に、俺の魔力を編み込んでいく。

神々しさすら感じる白光に、蒼色を塗り合わせる。

Lamentai cielei che cadono
「堕ち行く天に嘆きを」

「嘆きの声に慈悲の雨を」

葛籠織の意識に、俺の意識を同調させていく。

二人ではなく、一人になる。一つの命として、魔力を手繰る。

Desideriqui
「願いを此処に」

「叶わずとも力を此処に」

紡がれる言葉に、言葉を重ねる。

二重となった言霊が、世界に劇的な変化を齎していく。

Gocce diluce Perdona tutto
「光の雫は 全てを赦すだろう」

「裁きの剣はこの手の中に されども振るわれることは無く」

蒼と白が混ざり合った光の柱が幾本も屹立し、世界を眩く染め上げていく。

「我が身に宿りし光は《天光》」

「光の扉は今開かん」

魔術と魔導の垣根を超えて、その先へと至る。

人の領分から神の領分へ。

理解の内側から理解の外側へと、足を踏み入れる。

「天の意思は此処に在り」

「——我が剣は光の中に在り」

眼前まで迫った死の焰と、解き放たれた希望の光が喰らい合う。

出力はほぼ同等、規模も負けていない。

押し込まれた分だけ、押し返すことが出来ている——それならば。

ここが、最大のチャンスだろうがよ。

「立華くん！ 月ヶ瀬先輩！」

「ああ！」

「任せて！」

二人が声を合わせて魔法を起動する。

俺が渡した魔導の一部をそのままエネルギーに転換し、照準を第二の破滅に合わせて撃ち放った。

「ガッ、アアア!?!」

過たず直撃した中で、第二の破滅が叫びを上げる。されどもそれは、大きなダメージにはならないだろう。

けれども、意識は逸れた。手元がほんの少しだけ狂った。思考に、空白が差し込まれた。

それはつまり、魔導の制御がブレたということに他ならない——奪うのは無理でも、力ずくも込みで、軌道を纏めることはできる。

第二迷宮とは、迷宮の一番下に存在する空間だ。
シークレットフロア
ダンジョン

だから、真正面からぶつかり合っていた二つの魔導をそのまま、上へとかちあげる！
そうすれば必然的に、魔導は迷宮を下から上まで、全部喰らい尽くして破壊する……はずである。

いやちよつと心配になってきたな……。

これで破壊しきれなかったら、ワンチャン巻き込まれたかもしれない生徒が、即死しただけで終わっちゃうんだよな。

責任がデカすぎて震えてきたぜ……。設定上、即死してすぐなら再生するはずなんだ

けど……。

何とかなれーッ！ と内心叫びながら軌道を上へ、強制的に変更させる。

第二の破滅が瞠目した瞬間、二つの魔導は天へ向かって昇り上がった。

「あつ、有り得ねえ——狂ってやがるのか!？」

眼前でしかされた出来事に、思わず第二の破滅は絶叫した。

あの特異点が、どうしようもなくイカれていることは分かり切っていたつもりだったが、まだ足りなかったらしい、と。

第二の破滅が行使した魔導は、ただの魔導ではない。

七つの破滅、その一つとして作り出された時に与えられた、星を滅ぼす絶対権限。

人の子では、指先を触れただけでも魂を破壊され、理解を示そうとしただけで、脳を完全に打ち砕く呪いの業。

それが阻まれるだけでも異常事態だというのに、あまつさえ手を加えてきた？

有り得ない、信じられない——そんなことは、あつてはならない!

「お前そればかりだな……いい加減認めてくれないと、こっちが悲しいんだけど……」
声が出た。忌々しい声だった。

何もかもを滅茶苦茶にされた、最も疎ましい少年に首を掴まれ、勢いよく上へと引きずられていく。

それに第二の破滅は、抵抗できない。

一体化した迷宮が、もう数秒も保たないことを如実に感じる。

迷宮脱出の理論が成り立っていき、ようやく手に入れた器から、強引に引き？がされていくのを感じる。

「でも、まあ良いや。ただ一つだけ、これだけは覚えとけ、第二の破滅」

上方へと加速し続けていく少年が、怒りを滲ませながら言葉を紡ぐ。

勝利宣言か、あるいは七つの破滅には、世界を滅ぼさせないとしても宣言するつもりか。どちらにしても、下らねえ、と第二の破滅は思う。

七つの破滅は、一が最弱で、七が最強の構図となっている。

これから目覚めるだろう、第三の破滅でさえ、第二の破滅が十いても全く敵わないほど。

それほどまでの戦力差がある。故にこそ、そんな話をされたところで、笑うしかない。

「確かに俺はあ……NTRと闇落ち系は全然いけたし！」

「なにになになになになになに」

あれ!? 何か流れ変わったな。

ビックリするくらい、意味不明なことを言い出した日之守に、第二の破滅は一撃で脳をぐちゃぐちゃにされた。

「憑依モノも皮モノも、全然楽しめる人間だけれども!!」

「待って、何!? 何の話してんだ teme は!? 怖い怖い怖い!」

生まれて初めて味わう恐怖という感情に、第二の破滅の分離は急速に早まった。

レア・ヴァナルガンド・リスタリアの身体から、第二の破滅が完全に引き剥がされる。支えを失い、人の形さえ保てず、黒い靄のようになってしまった第二の破滅は、レアを抱きしめ、太陽を背にした日之守の、最後の声を聞く。

「レア先輩憑依ものだけはガチなトラウマ過ぎて薄い本でもダメなんだよ馬鹿が! 二度とするなー! ツ!!!」

極大の、蒼の閃光が解き放たれる。

それは正義の鉄槌ではない。

私怨で百パーセント満たされた究極の一撃が、迷宮を完全に破壊し尽くしながら、迫り落ちる。

「わア……あ……」

その中で、第二の破滅は思わず泣いちやった！
その涙は声も無く、極光の中へと解けて行った。

ネクスト・ステージ

「あら、眼が覚めましたのね、日之守様」

「あー……？ あつ、えっ!? レア先輩!？」

「はい、わたくしでございます。おはようございませす、ですわね」

つぶねー、マジで誰かと思った。

普通に「誰?」とか言っちゃうところだった。

校長の時とは違い、どっからどう見ても俺の推しであり、なおかつこれ以上ないくらい、好きな先輩であるのだが……。

空白に塗りつぶされたみたいに思い出せなかった。

まあ、疲れてるのかな、と思う。

死ぬような思いをした訳だし……と、周りを見渡せば、実に見覚えのある白い空間が飛び込んできた。

うーん、どう見ても我が校の医務室である。

つまり、去年と全く同じシチュエーションであった。

やれやれ、天井しちまうところだったぜ。

「因みに、眠っていたのはほんの三日ですわよ。前回とは比べ物にならないくらい、早いお目覚めでしたわね」

「おお、俺、成長してる……いや違う！ 身体の方は大丈夫ですか!? 傷とか、あれ以来調子が悪いとか、それでなくとも、何かしらの後遺症が残ったとか……!」

「きやつ、わ、わたくしは大丈夫ですわ。ええ、頭のとつぺんから、つまさきまで。問題一つありません」

ですから、落ち着いてくださいまし。とベッドから乗り出した俺を、優しく戻してくれるレア先輩だった。

思わずほつと息を吐く。いや本当、マジでよかった……。

言うまでもなく、今回の脱出方法は滅茶苦茶だったし、そうでなくともレア先輩は、あの第二の破滅に身体を使われていたのである。

その上、最後はかなり容赦なくボコしちゃったのだ。

何かしらの後遺症……そうでなくとも、それに近い何かが起こる可能性は、十二分に考えられた。

それが無いのならもう文句が無い、万々歳である。

「というより、怪我の度合いで言えば、日之守様の方がよっぽどですわよ。迷宮脱出直後

だと言うのに気絶いたしますし、魔力神経はズタズタだったという話です」

「ええ……」

道理で最後、ありったけを放った後の記憶が、イマイチ定かでない訳である。

普通に迷宮を脱出したことで回復するのだから、ある程度の無茶は許容だと思っただけ……。

半壊……というか、九割五分壊状態からのダメージは、迷宮内のダメージとされなかつたようである。

判定厳しいな……と思いつながらも、魔導の反動がヤバすぎることに冷や汗を流した。

何なんだろうな、使っている間は万能感に満たされるのに、使い切った途端全部持たてられるんだけど。

普段はしない脳の使い方だったり、良く分からんもんを視たりしていることが、思っている以上に負担になっている、ということなのだろうが……。

だからと言って、毎度毎度こんなに消耗していたら、次はもう敗北するビジョンしか見えなかった。

どう考えても長期戦に持ち込まれたら、負けるしかない訳だから……。

マジな改善点すぎる。

「ふふ、ダメですよ、日之守様。そう難しい顔をしないでくださいませ。今は、休息の

時間なのですから」

「あうあうあうあう、何ひゆる、んですか」

「少し解して差し上げようかと思いましたが」

華やかな笑みを浮かべたレア先輩に、ぐにぐにと頬を揉まれ倒す。

「ご褒美なのか遊ばれているのか、微妙に分からないところではあるのだが、レア先輩が楽しそうだから良いことにした。」

いや……本当、レア先輩無事で良かったよ。

じわじわと実感してきたそのことに、普通に涙腺が緩んだ。

「くっ、うう……」

「あら、あらあら、日之守様は本当に、良く泣くお方ですわね」

よしよしと、甘やかされるように抱きしめられる。ビビるくらい情けないのだが、一度始めた涙は止まることを知らず、ポロポロと際限なく溢れ出てきた。

え？ うわマジやばい。

気を抜くと本当にわんわんと声を上げて泣いてしまう。

流石にそれは遠慮したいところだったのだが、どうしても肩が震えてしまった。

感情つてコントロールできるもんじゃないな、と頭のどこかでそう思う。

「っ……う、ごめん、なさい。ちよつと、止まらな……」

「良いんですわよ、むしろ、いっぱいお泣きになって？ わたくし、日之守様のそういう、人間らしいところも好きなんですの」

「ぐう、人誑しすぎる……」

「それ、そのままお返しいたしますわよ……」

言つて、目一杯抱きしめてくれるレア先輩だった。俺、今死んでも悔いがない……。全身が浄化されそうな気分である。

これだけでもう、たくさん頑張った甲斐があつたというものであつた——いや、実際その通りみたいなもんなんだけど……。

世界の滅亡とか二の次でしかなかった。

レア先輩が戻ってくればそれで良かった、という思考があつたのは確かである。

「……ごめんさい。日之守様がそんなに傷ついたのも、苦しんだのも、全て、わたくしの責任ですわよね」

「えっ？ あく……いやでも、俺のはほとんど自己責任ですよ。まあ、多少は他の要因もあつたでしょうが」

「そう、ですわよね……本当に、申し訳——」

「——でも、丸く収まりました。第二の破滅は消滅し、レア先輩は元気に元通りになつて、俺達は誰一人として欠けてない。それならほら、別に謝ることはないでしょ」

というか、元よりレア先輩が謝ることなんて、一つたりともないのだが。全部第二の破滅のせいじゃん……。

強いて言うのなら、全滅寸前に追い込まれるまで、まごまごと悩んでいた俺が、二番目に悪いと言ったところだろうか。

いや、今思い返してみても、うだうだしすぎなんだよな。

冗談でもレア先輩の命を天秤に乗せるなよ、馬鹿か俺は……。

本当に多方面に向けて、ごめんなさいしたい気分だった。

「むしろ、謝罪なんて聞きたくないくらいです——だから、そうですね。それでも何か言いたいと言うのなら、ありがとうつて、言つて欲しいです」

「——本当、日之守様は。わたくしをそう、甘やかしても良いことはありませんわよ？」

「いや、それ言ったら俺が一番、甘やかされてるような気がするんですけどね……」

「そうかしら？　でも……ふふつ、そうですね。ありがとう……ありがとうございませ、日之守様」

レア先輩の腕に再度力が籠められる。

今度はレア先輩の肩が震えていて、そりやそうだよな、と思った。

俺がレア先輩を傷つけるのを躊躇ったように、レア先輩だって、みんなを傷つけるの

は嫌だったはずなのだ。

何もできないのに、半端に意識を残されていた分、その後悔は推し量ることすら出来ないだろう。

今回の事件で、一番傷ついたのは彼女であると、そう言っても良いほどに。

だから、その背中をポンポンと叩いた。

「はい、どういたしました。と言つても、俺だけじゃなくて、皆の頑張りなんですけどね」
「ええ、ええ、分かっておりますわ……けれども、わたくしは日之守様に、重荷を背負わせてしまいましたから」

「ん、それはそうですね……マジでその一点については、本気で反省して欲しいです」

今回の件ではつきりと分かったが、俺は殺せと言われて素直に分かった！ と言える人間ではない。

それが親しい人間であればあるほど顕著になるのだろうし、それらの感情を無理やり押し込むと、ビックリするくらい動きが鈍くなる。

頭の回転も、魔力の扱いも、何もかもがダメになる。

この辺、サクツと割り切れる人間である方が、強くはあるんだろうけれども、俺は多分、一生そうはなれないのだろうな、と思つた。

「だから、二度と殺してくださいなんて、言わないでください。代わりに、良い言葉を教えてあげますから」

「代わり……ですか？」

「ええ、はい……ただ、助けてって、そう言ってください。そうとさえ言ってくれば、俺は道理だつて蹴つ飛ばしますよ」

「——っ」

自らそう名乗るのは、正直今でもかなり気が重いし、分不相応だとは思うけれど。

あまりにも似合わなさすぎて、失笑してしまうくらいなのだけでも。

彼女を安心させるためならば。

彼女の心を守るためならば。

無理だとしても、認めないでもない。

その重さに耐えられるように、いつかは似合う日が来るように、研鑽を積み重ねようと、そう思うから。

「だって、俺はレア先輩の英雄らしいですからね。殺すことは出来ませんが、助けることはできます。それが、どこからであつても、何からであつても」

「~~~~っ！ 日之守様は本当に、人誑しですわね……」

「あれ!? そこに話が接続されるんですか!？」

「されるんですわよ、お馬鹿さん」

優しく言ったレア先輩が、おかしそうに笑う。

呆けた俺の頬を撫でて、翡翠色の瞳に真っ直ぐ見つめられた。

「そんなことを言われると、勘違いしてしまいますわよ?」

「? 別に、勘違いじゃないと思いますけど……」

むしろ、間違いないようが無いくらい、真っ直ぐな言葉であった自信があるのだが……。

窮地に陥った時、ただ頼ってくれさえすれば、絶対に何とかしてみせる。

言ってしまうえば、これだけのことである。

いや、まあ、俺に出来る範囲の話になっちゃいはずなのだが……。

それでも、全力を尽くそうと思う。

「そういうところですよ——ええ、本当に。日之守様のそういうところも、わたく

し好きですわ」

「それは」

光栄ですね、なんて言おうとした。

言ってる意味は良く分からなかったけれど、取り敢えず、好ましくは思われているら

しかったから。

それに越したことはない、と笑みを浮かべれば、ふわりとレア先輩の香りがして、頬

に柔らかな感触がした。

「……………えっ」

自分でもビックリするくらい淡泊な声が出て、けれども言葉を続ける前に、ピタリと指先を口に当てられた。

「好きですわよ、日之守様」

「それ、は……………どういう、意味で？」

「ふふっ、さて———どういう意味でしょうね？」

頬を赤らめたレア先輩が、恥ずかしそうに笑って身を翻す。

その手を掴もうとしたけれど、するりと躲かれて、

「たくさん悩んでくれて、良いんですわよ？」

と、レア先輩は医務室から出て行ってしまった。

……………えっ。

ええ……………。

「勘違い誘発爆弾じゃんこんな……………」

マジな人誑しはどっちだよ、と窓の向こうを見上げれば、見慣れた晴天がどこまでも広がっていた。

と、まあ。

そんな感じに、それっぽく俺の二年生編は終わるのかと思っていたのだが。

どうにもそこまで上手く、平和な感じで幕が引ける感じではないらしい——ということを、死んだ目をしながら俺は理解した。

「そやさかいさあ、かんにんって言うてるやん。なんべん説明させるんやで、今回の件は不可抗力なんやって」

「それは分かかっておる！ 分かかっておるが、互いの立場上の問題もあるじゃろうが！」

「その辺はこう……そつちで上手う擦り合わせてくれたらええやん」

「そういう訳にもいかんから、こうして儂自ら足を運んできたんじやい……！」

アルティス魔法魔術学園、校長室。

中々の近寄りがたさを誇っているそこに連行された俺は、そこそこ激しく言葉を交わ合う、二人の男女を眺めていた。

片方は我が校の校長であり、もう片方は知らない爺さんである。

まあ、口振りのに相当偉い人なのだろうが……。

マジで知らない人だな。

ゲームにも出て来てないんじゃないか？

「お主のところの生徒——つまりその小僧が破壊した我が校舎の分、それなりの要求をこつちも？ませないと、上が面倒じゃ」

「かあり、まーたそれか。勘弁してほしいわ、上の顔色ばかり窺うて」

「お主が顔色を見なさすぎなんじゃ……！」 何回儂がお主を擁護したと思つとる!」

「はいはい、いつも助かってますう、おおきに〜」

「こつ、このクソガキ……ッ！」

白髪とたつぷりの白髭を蓄えたお爺ちゃんが、顔を真っ赤にして台パンしていた。

何でも良いのだが、わざわざ俺を呼んでおいて喧嘩するのはやめてくれないかな、と思つた。

これ俺、もう帰って良いだろ。

「いや小僧！ お主もお主で帰ろうするのはやめい！ 中心人物だつーことが分かつたらんのか!」

「えつ、俺!?! もしかして俺の話してたんですか!?!」

「逆にそうじゃなかったら呼ばんじやろうが……!」

いや、まあ、それはそうなんだけど……。

生憎、校舎を破壊したような記憶はなかった。

流石にそんな、テロリストじみた罪を犯した記憶はない。

もしかして……濡れ衣を着させられようとしてるのか……!?

「自身の潔白を信じすぎじゃろ……流石に言い逃れ出来んからね。」

「えっ……ごめんなさい。本当に身に覚えが無いので、マジな動揺をしてるんですが……」

「えっ」

「えっ?」

何言ってるんだこいつ? みたいな視線が交わり合つて、かなり微妙な間が出来上がった。

お爺ちゃんとか校長が数秒視線を合わせ、それから校長が「あつ」と理解したような声を上げた。

「甘楽、もしかして記憶飛んどる?」

「飛んでるって言うか、最後に攻撃し終えた後、即気絶したらしいので……」

「あく、そつかそつか、そうやったな。ほな、まずはサクツと説明しよか」

校長が杖を振るって、画像を二つ、空中に投影した。

一つは崩れ落ちていく……多分、迷宮。

もう一つは明らかに攻撃を受けたね、みたいなぶつ壊れ方をしている、全く見覚えのない学校の校舎だった。

……えっ、これもしかして、俺がやったとでも言うのか？

「ん、ご明察やな。どっちもきみの大手柄やで」

「つまり……報酬がある？」

「罪状なら、出そうと思えばたつぷり出せるぞい」

ボケ共が、さっさと話を進めろ。という目で見て来るお爺ちゃんであった。

お爺ちゃんだから無駄話とか長話が好きかなって思ってたんだけどな。

それともお爺ちゃんだから、あんまり話が長くなると疲れて眠たくなっちゃうのかも
しれない。

「失礼なガキ過ぎるじやろ、儂今めっちゃびつくりしたよ」

「面白い子やろ〜？ それでな、まあ、何でもこうなったかっちゅーと、一言に纏めるの
ら、迷宮を破壊して脱出したから、やね」

「ええ……何か、そこまで怒られるような問題でしたか？」

「いや、それ自体は別にええんよ。むしろ良うやったって、後でいっぱい褒める予定があ
るくらいや」

だから、問題はその後にある……というか、出来た。と校長は言った。

二枚目の、かなり凄惨に破壊された校舎の写真が大きく表示される。

「迷宮つちゆうんは、真の意味での異世界つて言うてもええ。出入り口は見つけられるけど、実際にその迷宮自体、この世界のどこにあるのかは分からん訳やな」

「ん、まあ、そうですね。脱出したら、出入り口に強制的に戻されますし」

「そうそう、そうなんよ。そやけど、今回は違うた——きみらが力づくで破壊したさかい、強制送還機能が……というよりは、迷宮に備わっている機能全般が働かへんかったんやね。つまり、一時的に迷宮そのものが、この世界自体に顕現した」

「? ……あつ」

何言いたいんだろうこの人? と頭を回した瞬間、点と点が線で結ばれた。

要するに、九割五分ほどぶっ壊した時点で、迷宮はこの世界に現れてしまったのだ……具体的に言うのなら、その謎の校舎の真上とかに。

で、ダメ押しとばかりに放たれた俺の魔導が、迷宮ごと校舎をぶち抜いてしまったの
だろう。

「……えつ、やば」

「そうそうそうそう、普通はそういう反応になるんじやよ。真顔で『こちらは悪くないし?』みたいな顔できる訳ないんじや。」

あと謎の校舎じゃないからの、一応儂が校長やつとる学校じゃから。《ヴァルキュリア呪術騎士学校》って知らんかの？」

「おお……全然知らないです」

「マジで!？」

いや、マジで知らない。

え!? 本当に知らないんだけど!?

呪術って何だよ! おい!

ていうかそもそも、『蒼天に咲く徒花』で、アルティス魔法魔術学園以外の学校とか存在するんだ!?

いや、そりゃあ言われてみれば、あつて然るべきだろうけれど……。

原作では影も形もない……よな?

ちよつと最近はこの辺、上手く思い出せないのだが、全くピンと来ないし、無いはずだ。

「で、今そのことについて、ちよつと揉めとるつちゅー訳や。この爺さんもうちらと同じように、事情は分かつとるから、不問になる予定やつたんやけど……」

「今回の件があつてなお、お偉いさんつてのは認めないんじやよ。七つの破滅、その存在をのう……いいや、あるいは、恐れているが故に、目を背けているだけかもしれんがの」

あとこいつが睨まれ過ぎとるんじや、と指をさされる校長だった。

……いや、軽く話している上に、俺は全く悪くないみたいない分であるのだが、滅茶苦茶大事件ではあると思うので、俺にしか責任がないと言って良いまであるだろ、これ。

参ったな、と腕を組む。

「いやいや、ほんまに甘樂は悪うあらへんつて。悪いのんは、今回もまたなんもできひんかった、大人の方や」

「そうじやのう……とはいえ、全くの無関係と言い張るのは無理じやから、こうしてこの場に来てもらつとる」

「ま、そんなんやな。で？ 結局どないすん？ 弁償だけでええか？」

「いやそれ最低ラインじやからな……もう一つ、儂の方から条件がある」

言つて、お爺ちゃん俺を見た。いやこれ、お爺ちゃんつて呼び方かなり不敬か？

お爺ちゃん先生とかの方が良いかもしれぬ。

「……カイクス・ラウレストじや。ラウレスト先生と呼ぶが良い」

「ラウレストお爺ちゃん先生……」

「きみこだわり強いって言われぬか？ もうちよつと折れる努力しようか……いやそうじゃなくての。お主、彼女とかはおるか？」

「うわつ、久し振りに会う、かなりうざい親戚がしてくるタイプの質問だ！ 答えなきやダメですか？ これ」

「例えが最悪過ぎるじやろ！ 良いから答えんか！」

「ええ……いるように、見えますか？」

「全然見えるから聞いとるんじやけど……」

その感じならいないんじゃないやな、良かった良かった、問題ないの。と笑うラウレストお爺ちゃん先生だった。

何が良かったんだよ、マジで殴り倒すぞ。

「そこで拳を選ぶあたり、野蛮性を隠し切れて無さすぎるんじゃないが……いや、なに、こちらの学校から一人、お主に監視を付けたいと思つての」

「……監視？」

「うむ、護衛と言つても良いが、まあ、監視じやな。留学……のような形にはなるじやろうが、儂のところの、とびつきり優秀な子を傍に付けさせ、常に目を光らせておきたい」
「そんな人を、ちよつと目を離れたら大問題を起こすモンスターみたいな……」

「実際そんな感じじやろうが」

「ぐう……」

ちよつと言ひ返すことができず、思わずぐうの音が出た。

大体的場合において、俺は悪くないんだけど、何か中心にすることが多いんだよね……。

決闘と言ひ、破滅と言ひ、危険なものに振り回されがちだった——いやつ、ていうか、えっ？

彼女がいるか聞いたのつて、つまり。

「うむ、女子じゃ。お主より一つ上だったかの。元より彼女も、そつちの学園に興味あつたようじゃし、winwinというやつじゃな。ナタリア、文句は無いか？」

「いや、うちは無いけど……」

ええの？ という目線を送つて来る校長だった。

これ、普通に嫌なんだけど、断れる感じじゃないよな……。

来年は今年より、ちよつと色々面倒なことになるとは思うのだが、もうここは諦めるしかあるまい。

死んだ目で頷いてみせれば、

「まあ、ほんの一年程度のもんじゃ。その間、今回ほどの大事が起こらなければ、お主に自由は戻る。悪いとは思うが、耐えてくれんかの？」

なんて、心にも思つて無さそうな顔で言うラウレストお爺ちゃん先生だった。

やれやれ、とため息を一つ。

何事も諦めが肝心だ、と自分に言い聞かせながら、「来年は無事に過ごせますように」と願うのだった。

ここまでの登場人物まとめ2 (挿絵あり)

○日之守甘楽

・プロフィール

・年齢 十四歳

・職業 学生 (魔法使い / 魔導使い)

・概要

二年生になり、益々バグ太郎として磨きがかかってきた。

ちよつと何かすれば周りの女が決闘し始めるし、ちよつと介入したら女を惚れさせる最悪の人間。こいつの周りに女子置かない方が良いんじゃないか？

第二の破滅との件でコツを掴んだよう、魔導を好き放題操れるようになったらしい。

自己申告の通り、接近戦をやや苦手としている。とはいえ、これは魔法魔術学校の間のみならず、魔法使い、魔術師、魔法魔術師はほぼ例外なくそうである。

彼の身近で例外と言えば、それこそいつぞやの「ウィル・クラウネス」くらいだろう

か。

好き嫌いせずに、接近戦も学ぶべきかな、と最近は考えているとか何とか。

魔法、魔導に関わらず、砲撃を好むのは、「いや……普通、銃とか大砲が直撃したら死ぬだろ……」という、前世で形成された価値観によるところが大きい。

プリンはプッチンする派。

・新使用魔法／魔術／魔導

・第二神焰魔導：無焰

一般的に炎と言われて想像されるようなものを模した形状をした魔導。

普通の炎系魔法魔術と同様に、対象を焼き焦がしたりする性質と同時に、殴ったり叩き落したりといったことが出来る性質も兼ね備えており、任意で切り替えが出来る、非常に便利な魔導。

基本的には白い炎であるのだが、第二の破滅は楽しむためにリミッターをかけており、黒色となっていた。

甘楽が使用した際に蒼くなったのは、意図的に色を変えただけであり、それ以上も以下も無い。

・第二装甲魔導：夢纏

砲撃魔導を自身の内側に流し込み、身体能力を大幅に上げ、同時に体外にも衣服と

いう形状で顕現させることで防御力と、接近戦での攻撃力を向上させた上に、無詠唱で砲撃魔導を放てるようにされた、甘楽オリジナルの魔導。

魔力神経に直で魔導を流し込んでいる為、長時間使用すると命を落とす危険性がある。

「砲撃魔導つてめっちゃ強いよな……」↓「そんなに強いものを体内に流し込んで、その力を臂力等に変換すればすげえ強いんじゃないか？」↓「ついでに身体にも纏わせれば便利なんじゃないか？」みたいな思考がベースになっている。

ざっくり言うともラゾーマを体内外に循環させてる感じ。何で死んでないんだこいつ!?

・各人物への感情

・空城立華：順調に成長してくれて嬉しいよ……と思っていたら、急にTSされてタジタジになってしまった。女性になった立華の見た目が全てにおいて好みドストライクであるため、普通に惚れてしまいそうになっていた。というか、ほとんど一目惚れしてるようなもの。

・月ヶ瀬ひかり：幼馴染であり、先輩。適度な距離感を保ってくれる、唯一の人という認識。特別な感情は持ち合わせていないし、相手もそうなのだから、このまま距離感

の関係性でいれたらな、と思っっているが……？

・葛籠織日鞠：流石に何かクソでかい変な矢印向けられてるな……と理解してきた。現状、戦闘においては最も頼りにしている。

・レア・ヴァナルガンド・リスタリア：好きだ、という自覚はあるが、それがキャラクターへのものなのか、人としてのものなのか、異性としてなのかは依然としてハッキリしていない。

・アイラ・ル・リル・ラ・ネフィリアム：美人さん。ちよつとした切っ掛けで、クソでかい好意をぶつけられるようになってしまったな、と困りながらもまあまあ喜んでる。ネガティブなのかポジティブなのか良く分からねえな……という印象。

・アテナ・スイーグレット：相変わらず押し強い女性だな……という印象以外ない。二年時の彼女は、ほとんど学園にいなかったの、仕方ないとも言えるが……？

・魔王：うわーっ！ 褐色銀髪ロリだ!! これが……魔王……？ 嘘だろ、信じたくない……のまま固定された。

○アイラ・ル・リル・ラ・ネフィリアム

・プロフィール

・年齢 十四歳

・職業 学生 (魔法魔術師)

・概要

『蒼天に咲く徒花』におけるヒロインの一人。

濡れ羽色の長髪に、透き通った青色の瞳を持つ美少女。

恐ろしいほど惚れやすく、なおかつ、一番でなくとも良いという思考が前提にある為、ヤンデレフラグは意識しないと立たないという、『蒼天に咲く徒花』においては珍しいヒロイン。

雑に一言で纏めてしまうと、都合の良い女ということになるのだが、そうなるようになったバツクボーンがある……らしい。甘楽はこれについての詳細は記憶にない。

イレギュラーである甘楽との邂逅と、それと共にいたことにより、この段階で『根源魔術』を習得してしまった。バグ太郎被害者六号。

あと何か魔術属性が土壇場で進化した。レアの時もそうであったが、本来、先天性魔術属性が変化することは無い。しっかりバグ太郎と愉快的仲間たちの本領を發揮してみせた。

戦闘後、名前で呼び合ってる日鞠と甘楽の会話に脳を破壊されたらしい。可哀想。恋する女の子なのでとても強い。

○魔王

・プロフィール

年齢 不明（本人が覚えていない為）

職業 無職（あるいは捕虜）

・概要

『蒼天に咲く徒花』における、ラスボス。

ゲーム内では最後の最後まで主人公たちを苦しめるのだが、何か序盤に滅茶苦茶ボコボコにされてしまった挙句ロリにされてしまった。

第一の破滅が混ざり合ったことによる、早期の封印破壊が行えたのだが、結果的に回復しきっていない身体による現世への顕現となったため、普通にボコされやすかったという背景がある。

これは魔王側のガバというより、第一の破滅による「いや……魔王が使えたら勝ち確定でしょ……」というガバガバな理論によるものだったため、第一の破滅側のガバと言えるだろう。

無論、焦ることなく時を待ち、魔王の肉体が万全な状態であったのならば、仮に魔導が使えたとしても、甘楽は敗北していた。

とはいえ、その場合、七年は待つことになるので、待ちきれなかったのも仕方が無いと言わなければならない。

現在の魔王は、七つの破滅の被害者第一号と言うのが、一番的確だろうか。

○カイウス・ラウレスト

・プロフィール

年齢 八十二歳

職業 ヴァルキュリア呪術騎士学校校長

・概要

『蒼天に咲く徒花』には登場しなかった、アルティス魔法魔術学園とは別の学校の校長。
長。

これ以上の情報は不明であり、これから判明していくものと思われるが……？

○おまけ

・第二の破滅：詠唱

「開け、地獄の扉——之なるは、そうあれかしとされた怨嗟の滅亡」

「此処に滅亡を。愚かなる命は薪に。煌々と燃ゆるは死の焰」

「——真理は此処で、灰へと消えた」

「——”燃え尽きろ、第二の滅亡”」

・根源魔術：葛籠織日鞠：《天光》：詠唱

「彼方より極光を」
Aurora da i altri parte

「堕ち行く天に嘆きを」
Lamenta i celi che cadono

「願いを此処に」
Desideri qui

「光の雫は 全てを赦すだろう」
Gocce di luce Perdonatutto

「我が身に宿りし光は《天光》」
La luce che abita in me Aurora

「天の意思は此処に在り」
La volontà del cielo qui

言うまでもないが、滅茶苦茶に甘樂の魔導を意識した根源魔術であり、だからこそ、この根源魔術に甘樂は容易く魔導を乗せることが出来た。

・根源魔術：アイラ・ル・リル・ラ・ネフィリアム：《極夜》：詠唱

「深淵より極黒を」
Ombre profonde dall'abisso

「呑まれゆく運命には慈悲を」
Abbietà del destino che ti inghiotte

「想いを此処に」
metti qui i tuoi pensieri

「底無き影は 悉くを受け容れるだろう」
L'ombra senza fondo accetta tutto

「我が身に宿りし影は——《極夜》！」
l'ombra che alberga nel mio corpo ——— Notte

「我が愛は此処il mio amore quiに在り」

恋する女の子なので発動出来た。意味が分からないのだが、壊れた世界なのでそういうこともある。

アイラの底の無いほど深い愛により実現された、魔導にすら対抗しうる根源魔術。

・魔導：詠唱

「久遠の彼方 祓われざる闇の先 沈まざる光の雫」

「理こそは我に在り 墮ちた天そらはこの手の中に」

「恐れるならば我を見よ 讃えるならば我が下に」

「勇あるものよ 集い纏え」

「展開——」 第貳装甲魔導：夢纏」

正確に言うのなら、これは砲撃魔導とは違い、甘楽個人の力のみで行使されたものではない。

立華くん（ちゃん!）の勇者の力のありきのものである。

つまり、二人の初の共同作業ってことです。

・呪術

詳細不明

第三章 わーるどウォーゲーム みくプロフィット

「お兄……様？ お兄様？ えっ、お兄様!? お兄様ですか! お兄様ですよね!

やったーっ！ お兄様お帰りなさい!! ずっと、ずっとずっと帰ってくるのをお待ちしていました！ お兄様ーっ！」

「あー、うん、ただいま……いや待て！ そこを動くな！ 徐に立ち上がるな！ スタートダッシュを決めようとするなーっ！」

反射で促した制止は、しかし当然のようにスルーされ、黒髪の小柄な少女はクラウチングスタートをガッツリ決めて、勢いよく飛び込んできた。

まさか、カウンターを決める訳にもいかず、判断を悩む内にガシィッ！ と真正面から抱きしめられ、かなり勢いのあるキスの雨が顔面に降ってくる。

俺の絶叫をかき消すように、少女は目にハートでも浮かべてるかの勢いで、言葉を捲し立てた。

「ああっ、そう言わずに！ もっと抱き着かせてください、もっと嗅がせてください、

もつと触らせてください！」

「うわあああああ！ 俺から離れろーッ！」

意地でも離れんとばかりに力を込めて来る少女を、ブンブンと振り回す。

畜生！ こいつ火事場の馬鹿力を発揮してやがる！ 全然離れねえ！

「嫌です嫌です！ もう一生離れません！ 病める時も健やかなる時も一緒です！」

「結婚する気なのか!? 法的に無理があるだろ！」

「お墓に入るときも一緒です！」

「それ俺、確実に無理心中させられるよね？」

一周回って殺意に収束させるのはやめろ！ と叫びながら、黒髪の少女を投げ飛ばした。

ポーン、と宙を舞って、やたらと豪華なふわふわソファに落下する。

ポフン！ という可愛らしい音がしてから数秒後に、恨めし気な目でそいつは俺を見た。

「うつ、うつ……お兄様が、冷たいです……」

「嘘だろ？ 今のが冷たい内に入るのか……？」 間違いなく正当防衛だっただろ……」

「あつ、でもでも、旦那様に冷たくあしらわれる、陰のある人妻って感じで、これもまた良いですね……」

「幻覚を見るのが上手過ぎない？　今のはどう見ても、捕食者と被食者の構図だったんだけどな」

恍惚な笑みを浮かべ始めた少女に、俺は呆れた目をすると共に、クソでかいたため息を吐いた。

だから、実家に帰ってきたくなかつたんだよ……。

信じられるか？　この、次はどのように飛び掛かろうか……なんてことを考えていそうなバカ女、甘樂おれの妹なんだぜ……。

日ひ之の守もり未み玖く。

彼女は俺……つまり、日之守甘樂からしたところの、たった一人の妹であり、同時に『蒼天に咲く徒花』における、メインヒロインの一人である。

今まで通りナンバリングをするのなら、ヒロインNo.04と言ったところだろうか。いや……そうなんだよね。

踏み台の妹がメインヒロインなんだよ。甘樂くん、そこまで悪いことしたかな……つてくらい、周りの女性を主人公に奪われる役回りなんだよね。

改めて言葉にすると、普通に可哀想になってくるというものである。

さて、そんな未玖であるのだが、俺との年齢はそこまで離れていない——という
か、一つしか離れていない。

だというのに、未だにアルティス魔法魔術学園に入学していないのは、偏に彼女が病
弱だからである。

……いや、ね。分かるよ、堂々と嘘言ってるじゃねえぞ、と言いたくなる気持ちは。

病弱な女の子はクラウチングスタートとか決めないもんな。

しかし、本当の本当に、未玖は病弱な女の子……だったのである。

そう、『だった』である。過去形だ。

未玖は特別、大きな病を抱えているという訳ではない。

ただ、未玖自身に全く釣り合わないほどの、膨大な魔力と、特殊な能力を持ち合わせ
て生まれてきてしまったが故に、未成熟な魔力神経が不調を起こし、それが身体全体に
悪影響を及ぼしていた。

つまり、成長と共に、それは解消される。そういった類のものであり、同時に成長で
しか解消されない病である、と言っても良い。

とはいえ、身体を蝕むほどのそれは、確かに目に見える形の、探しても見つからない
ほどの才能であり、だからこそ、甘楽を差し置いて未玖は、日之守家の次期当主とされ、
結果的に彼女と甘楽の仲は最悪を極めることになったのだが。

というか、甘樂おれの方が、一方的に未玖を敵視しており、原作ではこれが解消されそうな流れになってきたところで、甘樂おれは必ず殺されるのであった。

普通に後味が最悪であるのだが、最早原作と言えるような流れは壊滅しており、全く別の話になってきてしまっている以上、あまり意識するようなことではない。

それに、未玖をシンプルに戦力として数えるのならば、兄妹仲は改善して然るべきだ——という訳で、去年帰ってきた際に、ちよこちよこと絡んだのだが、何か……こうなつちやつたんだよな……。

もちろん、これまでの間に構築された俺達の関係というのは普通に最悪であり、傍から見てもドでかい溝のようなものがあつたのだが、上記の通り、これは一方的に、甘樂おれの方が作り上げたものである為、謝罪から始めれば、ぎこちなくはあるものの、まあまあ普通の兄妹っぽい関係にまで戻することは容易であつた。

少しずつ思い出せなくなつてはいるものの、いわゆる原作知識が俺にはあるのである。

お陰でこの辺の、デリケートな部分の会話でも地雷を上手く躲しながら、そこまではあつさりど辿り着くことが出来た。

ただ、その、何だろうな……。

お恥ずかしながら、俺は割と調子に乗りやすいタイプの間人である。

久し振りに思った通りの展開へと進み、万事が上手く行き始めたかと錯覚した俺は、つい未玖の身体の調子まで診てしまった訳だ。

そしたら何か……治っちゃったんだよな……。

ノリとしては「ちよつと出来る範囲で、魔力神経の調子を整えてやるか」くらいのものであったのだが、本当にそれだけで、未玖の不調は粗方改善されてしまったのだった。

いや……確かにこの辺の調整は、魔導を扱えるようになった時点で、ある程度上手になった自負はあったのだが……。

まさか治るなんて思わないだろ。

今でもちよつと手を加えただけなのにな……という感想が抜けきらないほど、大したことをした実感は無いのに、現実は随分と大した結果を齎してくれていた。

お陰でこれまで、ほとんど寝たきりであった未玖は、見る目を疑うような元氣澆刺スーパードール女へと変貌を遂げてしまったのであった。

おかしいな……『蒼天に咲く徒花』だと、常に車椅子に乗ってる系の、かなりミス터리アスで儂げな美少女だったんだけど……。

どこで何を間違ったら、これは確実に頭のネジが全部外れちゃってますね……みたいなた妹になってしまうのだろうか。

魔力神経以外にも、意識せずに頭まで弄り回しちやっただのかな、と不安になってきた今日この頃である。

俺がいない間、かなりリハビリに専念したんだろうな……というのが、言われなくても良く良く分かるアグレッシブっぷりだった。

帰ってきたくなかった理由の一つに、これを真つ当に相手にするのが面倒だった、というのがあったほどである。無論、それだけでは無いが。

というか、本当にこれだけだったら俺、嫌な兄すぎるだろ……。

物事はそう上手く行かないもんである、とソファへと座り、窓の向こうを眺めた。

そこに広がっているのは、転生前でも見慣れた雪景色である。

『蒼天に咲く徒花』の世界観は、現実の日本(こういう言い方は、正直かなり適していない気はするのだが)と同じサイクルで、一年が過ぎていく。

四月と言えば春だし、七月と言えば夏、十月と言えば秋だし、十二月と言えば冬……となっている訳だ。

そして今は、十二月と一月の境目——つまり、年末年始である。

こうして実家に帰ってきているのは、そういう理由であった。学園に残るといふ選択肢もあるのだが、どうしてもそれが選べない事情があったということは、言うまでも無いだろう。

さっさと学園に戻りたいなー、とか思っていれば、真横に腰を下ろした未玖が、やや落ち着いた様子で俺を見た。

「ふう、申し訳ありません、お兄様。実に一年ぶりでしたので、つい内なる情熱パッションが溢れ出てしまいました」

「そんな軽いノリでして良い暴走具合じゃなかったけどね。大丈夫？　今もかなり抑えられてないと思うんだけど」

「へ？　このくらいは許されませんか？」

「いや、好きな人にするなら良いと思うんだけどね。俺達、兄妹だから……」

「それなら問題ありませんね。何故なら未玖は、お兄様のことが大好きですので！」

言いながら、ピツタリと肩を寄せて来る未玖であった。

本当……何でこうなったかな……。

確かに彼女には、そういう側面が無かったとは言わないが、それでも君、もうちよつと控えめだったよね？　と思わざるを得ない。

いや、ゲームとは違い、相手が兄である俺であることから、良くも悪くも遠慮が抜け落ちているのか……？

だとするのならば、それはそれで本当に、良いとも悪いとも言えなかった。というか、どちらかと言ってしまえば、恐らく悪い。

これ、ただ懐いてるとかじゃなくて、半分依存なんだよな——というのも、彼女はゴリゴリの依存系メンヘラヒロインなのである。

作中で主人公の気を惹くために、自傷行為までしたのは、彼女だけだったのではなからうか？

用意されていた複数枚の、実にショッキングなスチルを含め、ここら辺の記憶はかなり強い。

今思い返してみても、中々尖った性癖の持ち主にしか刺さらなそうなヒロインである。

彼女の存在のせいで、ヤンデレとメンヘラの違い談議がヒートアップしたのも今となっては懐かしいものだ。

そんな未玖が「まあ、そんなことより」と俺を見る。

「本題に入るとしましうか、お兄様」

「……おお、意外と冷静だ」

「こういう面倒なことは、先に済ませた方が楽ですからね」

それに、酷く重要なことですから。と、未玖は言葉を切って、改めて俺の方へと身体を向けた。

先程までとは打って変わって、実に真剣な表情だ——そう、本題である。

これほどまでに、不平不満を内心で垂れ流し、これ以上はあまり親密にならない方が
良いと分かった上で、それでも帰ってきた理由の一つ。

それが、未玖の話を聞くこと……というよりは、《予知》を聞くことであつた。

《予知》……あるいはもつと正確に、《未来予知》と言つた方が、分かりやすく伝わる
だろうか。

いわゆる、未来の出来事を予め知ることが出来る能力、である。

尤も、未玖の場合、その全貌を知ることが出来ず、断片的にしか知り得ないらしいの
だが、そうだとしても、それは魔法魔術にすら該当しない特殊能力であり、だからこそ、
彼女は日之守家の次期当主として選ばれた。

そんな彼女が「お兄様の人生に大きく関わることです」という内容を、毎日長文で連
打してくるのだ。

ここまで不安を煽られてしまつては、無視するのは最早不可能と言うものだろう。

それに《予知》は、俺が未玖に戦力として、最も期待していた部分であるのだから――
俺が知っている限りではあるが、《予知》の的中率は100%である。

——流石に緊張するな、と喉を鳴らせば、未玖は静かに口を開いた。

「来年度、学園に通うとお兄様は死にます。ですので、休学して欲しいのですが……」

「……………マジでっ！」

元より、そこら辺は織り込み済みである。

確定的であろうがなかるうが、とにかく多くの情報が欲しかった。

それにほら、未玖からすれば死んだように見えても、俺からすればそうでも無かったりする場合もある訳だし。

腹に穴ぶち空けられたくらいであれば、即死しない自信くらいはあるからな、俺は。

回復系は得意では無いが、立華なんかは得意だし、誰かに頼ることが出来れば生き残るのは難しくないだろう。

つまり、少なくとも未玖よりかは、判断するまでの材料が多い自負があった。

「脚色抜きで、本当に見たまま話しますよ?」

「うん」

「お兄様は、女性の方に刺されて亡くなります」

「あれ!? そういう感じなんだ!」

「ええ、はい。こう……ぐっさりど、背中から急所を一撃のように見えましたね」

「超こええー!」

ていうか、全然七つの破滅とか関係なかった。滅茶苦茶個人の問題である。

いや、えっ? 本当に?

俺の死因、修羅場とかが発生した果てに訪れる感じのやつなのか……!?

二股とか平然とする感じの男にしか許されないやつ的な……？
流石に信じたくない話過ぎであった。

マジかよ。

未来で何があつたんだよ。

死ぬにしてももうちよつとあつただろ。

これでは、幾ら何でも不名誉過ぎというものである。

「……聞きづらいんだけど、その……女性の特徴とか、分かるか？」

「そこなんですけど、予知する度にシチュエーションは変わらないのに、女性は変わるんですよね……」

「俺、そんなに不特定多数の女子に恨まれてんの!？」

「お兄様、おモチになるのは良いですが、不誠実なのは良くないですよ?」

「喧しすぎる……:というか、不誠実も何も、誠実さを見せる相手すらいんだが……!？」

そもそも、誰かと付き合おうという意志すら、俺には無いのである。

勘違いしようが無いほどの好意を向けてくれている、ネフィリアムとアテナ先生だつて、お断りしているのだ。

言わば（ある意味、ではあるが）、誰に対しても誠実な状態なのである。

その俺が、刺される……？

何だろう、突然気が変わって、手当たり次第に手を出し始めたのだろうか。あまりにも想像したくない未来予想図過ぎだった。

「具体的に、何人とか分かったりするか……？」

「そうですね、未玖が見た範囲では、になりますか」

「問題ない」

「ええつと、金髪の方と……」

なるほど、滅茶苦茶心当たりがあるな。

「黒髪の方と……」

すげえな、これも心当たりがある。

「青髪の方と……」

ビックリするくらい心当たりがあるな……。

「赤髪の方と……」

俺の知り合いをコンプリートする気か？

「白髪の方……というよりは、ひかりさんと……」

「名前出しちゃうのかよ」

いや、まあ、白髪の時点で分かりはするのだが……。

「後は、紫髪の方ですね」

「いや知らない！ それはマジで誰なんだ!？」

本当に知らない人が出て来てビックリしてしまった。

ここまで来たらもう、俺の知り合いを本気でコンプリートする気なのかな、と一種のワクワク感すら持っていたので、かなり裏切られた気持ちである。

マジで誰なんだよ、その女子はよ。

クラスメイトにだって、そんな髪色の女子はいなかっただろ。

何でここで急に見知らぬ女子がエントリーして来るんだ。

新入生の女の子食い荒らしてる大学生だって、短期間にここまで拗れるような仲の女子を作るのは難しいだろ。

基本的に、コミュニケーション能力が上等という訳ではない俺に、一体何が起こるんだ……。

「そういう訳ですので、お兄様には休学して欲しいと思ひまして……」

「いやこれで休学するのは、俺への信用が無すぎるだろ……!？」

「でも、未玖の予知は絶対ですよ？」

「うっ……」

痛いところを突かれ、思わず唸ってしまった。

そう、予知は絶対だ。覆ることは無い。

とはいえ、こんなことで休むのは、流石に俺が可哀想すぎるといふものである。なに、ゲーム風に言えば、フラグを立てなければ良いんだろ？

余裕とは言わないが、気を付ければ幾らでもやりようはありそうだった。的中率100%という事実から目を背けながら、俺はフツと笑った。

上等だ、と。自分を鼓舞しながら、俺は言う。

「おまえの予知を覆したくなかった」

「……なんの Pakuri ですか？」

「そういうの分かっちゃうんだ」

ここまで来たら、いつそ元ネタまで看破してくれたら嬉しいのにな、と死んだ目で思いつつ、ため息を零した。

ひかりファイアンセ

「つてことがあつたんですよね」

「それ、わたしに言つてよかつたの……?」

「——つす……聞かなかつたことに出来ませんか?」

「本当に何か狙いがあつた訳じゃないんだ!? 今更無理だよ!」

甘楽くんは本当に、時々物凄い馬鹿だよな。という、ド辛辣な台詞を言っているとは思えないほど、柔らかい笑みを浮かべたのは、当然ながら月ヶ瀬先輩であつた。

元より遠慮など無かつたようにも思えるが、それにしたつて最近は、俺の扱いがテキトー過ぎるのではないか、と思わざるを得ない、あの月ヶ瀬先輩である。

ここらでそろそろ、優しく接してくれないと、その内グレルかもしれないということ、懇切丁寧に教えてあげた方が良いかもしれないなかつた。

「グレル勇氣なんて無い癖に、良く言うよ……」

「おつと追撃ですか? 容赦してくれないと俺は普通に泣きますからね」

「ふふつ、医務室でレアちゃんに泣かされてたもんね」

「何で月ヶ瀬先輩が知ってるの!？」

あつてはならない情報共有がされていることが発覚し、思わず叫んでしまう。

いや……ダメだろ……!

特別口止めた訳では無いが、これでは俺のプライベートが筒抜け過ぎである。

いや、プライベートというのなら、月ヶ瀬先輩ほど、俺のことを知っている人もいないだろうが……と思いつながら、ティーカップを傾けた。

時刻は午後三時。ちょうど、おやつの間。

俺は如何にも良いところのお坊ちゃんらしく、月ヶ瀬先輩と優雅なティータイムを過ごしていた。

何とも俺には似合わないというか、どこことなく居心地の悪い上品さがあるのだが、甘^お楽^れの記憶的に、これはかなり普通のことらしいので、文句を言える訳もない。

この辺で、変に怪しまれたりするのは、面倒過ぎるので避けたいところである——
—実家だと、こういうリスクが高いから、帰ってきたくなかったんだよね……。

まあ、残念ながら、そんな文句は今更にすぎるのだが。

帰って来なければいけない理由が、今回はあまりにも多すぎた。

「それが分かっているのなら、ギリギリまで駄々こねないで欲しかったけどね、わたしは……」

「最後の最後まで抵抗するのが俺のモットーなので……」

「言葉だけなら立派だなあ……」

あからさまにため息を吐かれる俺であった——というのも、ここで帰って来るまでに、それはそれは、俺は抵抗した方なのである。

未玖の《予知》だって、言ってしまったら別に、直接聞く必要はない。メッセージや電話だってあるし、顔が見たいのなら、画面通話に切り替えれば良い。

もちろん、未玖の狂気すら感じるメッセージの連打に打ち克つ必要はあるが……。

出来ないことではない。というか、そこに関しては実際に、そうするつもりであった。そこを半ば力ずくで連行したのが、他の誰でもない、月ヶ瀬先輩なのである。

幼馴染である彼女の家は、当然のように俺の実家のすぐ隣であった。

「もう、そうやって、わたしを悪者にしようとするのは、良くないと思うけどなー？」
「寝てる俺を簀巻きにして連行した女が良く言いますね……」

「アレはむしろ、起きなかつた甘楽くんに、わたしはビックリだったけどね……」
「いや、起きましたけど、あんなの普通夢だと思うでしょうが……！」

誰がふと目を覚ましたら簀巻きにされて、ふわふわ空中漂つてるような状況を現実だと思えるんだよ……！

久々にイカれた夢を見ているな、と思つて、無抵抗貫いちやっただらうが。

あと、意外にも寝心地が良かったし……。

そのまま意識落としちゃったよね。

そうしたら、気付けば乗り物に揺られていたし、隣には「あ、やつと起きたね、甘楽くん」と申し訳なさそうに、それでも可憐に笑う月ヶ瀬先輩がいた訳だ。

現実だったから、と流石に膝を打ってしまったというものだ。

「何だかんだ、甘楽くんってそういうところの割り切りは良い方だね」

「まあ……過ぎたことを悔やんでも仕方ないですからね」

「かつこよさげな台詞ばかり得意になつてくくなあ、甘楽くんは……ま、それじゃあいい加減、本題に入ろっか」

「ええー……」

「ここでも不満そうな顔をするんだ!? 全然未練たらたらじゃん!」

すっかりしてよー、と苦笑いする月ヶ瀬先輩に、俺もまた苦笑いを浮かべる。

いや、ね……。

未玖の時と同じで、こちらも重要な本題があるのだが、未玖の時とは逆で、あまり手早く本題に入りたくなかった。

というか、出来れば向こう五年くらい入りたくない。許されるのならばこのまま、なあなあとした感じで、自然消滅して欲しいまでであった。

まあ、なあなあにしたら、それはそれで最悪ではあるのだが……。

内心でため息を一つ。それから月ヶ瀬先輩の、藍色の瞳と目を合わせた。

「それじゃあ、話すとしましょうか。俺たち二人の未来について」

「意味深な言い方するなあ……」

「それとも、俺たちがいつ結婚するかって言った方が良かったですか？」

「……………」

「いや顔真つ赤にして黙り込むのやめましようね、俺まで恥ずかしくなつて来ちゃうんで……」

まあ、我ながら言い方が最悪ではあったな、と反省しながらも、俯いてしまった月ヶ瀬先輩を眺める。

それから「いや本当に、この先どうしていくべきなんだろう」と、外を眺めた。

『蒼天に咲く徒花』と第三章と言えば、これまでの章と比べても多くのイベントが起り、その先のストーリーにも関わって来る、大きな分岐点の一つではあるのだけでも、それをそうたらしめている一番大きな理由は、やはり『月ヶ瀬ひかり婚約イベント』だ

ろう。

そう、婚約。結婚の約束を誓うアレを、月ヶ瀬家の方から持ち掛けられるというイベントが、三章では発生するのだ。

とはいえ、月ヶ瀬先輩との親密度と、主人公のレベルが一定以上でなければ発生しないのだが、まあ、どちらも要求値が低いので、意図して調整しなければ必ず発生するイベントだ。俺でさえ、十回は見た気がするくらいには頻発する。

一章、二章で活躍した主人公が月ヶ瀬家の目に留まり、話を持ち掛けられて……と言うのが流れである。

ここで素直に婚約しておく、月ヶ瀬先輩のパラメータが急上昇し、彼女のルートに強制的に入ることになる。つまり、そこから先は、月ヶ瀬先輩を良く構ってやらないと即死するようになる、という訳だ。

無論、断ることも出来るのだが、その場合親密度が目に見えて減る。具体的には20ほど下がる（最大が1000なのでこれはかなり大きい）。

まあ、そうは言っても、そこから親密度を上げるのはまあまあ容易なので、普通に月ヶ瀬ルートに入ることは出来るのだが……。

婚約した時と、しなかつた時点でエンドがかなり違うので、やはり大きな分岐点と言うのは過言ではないだろう。

さて、ここまで聞けば分かる通り、これは誰でも発生するイベントという訳では無い。当然ながら、主人公にのみ発生するイベントだ。

まかり間違つても、踏み台である甘楽おれに、そんなイベントが起こりうるわけが無いのだが……。

まあ、何かね。出てきちゃったよね、そういう話が……。

さも当然みたいな感じで、俺と月ヶ瀬先輩を婚約者にしましょう！　みたいな話が、親の間で自然発生していた。

決め手は迷宮粉砕事件ダンジョン・ブレイキングである。

俺の親も、月ヶ瀬先輩の親も、「え？　何かあいつ、知らんうちにクソ強くなつてない……？　え？　どうなつてんの？」となつてしまい、芋づる式やらかしのように今までの活躍が引きずり出されてしまった結果だった。

ついでに言えば、未玖と交わした

「俺が身体を治したことは、秘密つてことで頼んだからな……！」

「はい、お任せください、お兄様！」

という約束も、流れに乗るかのようになぶち破られてしまい、急速に話は進んでしまったのである。未玖のやつ、かなり月ヶ瀬先輩のことが好きなんだよな……。

お陰で月ヶ瀬家の人間に、「何か……きみ、知らない内に性格矯正して、色んなこと出

来るようになってたんだね、へえ〜……」みたいな目で見られたであろうことは、想像に容易かった。

かなり実力主義なところあるんだよな、月ヶ瀬先輩の親は……。

と、まあ、そういう訳で、やたらと目立ってしまった俺に、月ヶ瀬先輩との婚約話が生まれてしまった、ということだった。

断るか断らないか、と言われれば、最早そんな段階の話ではない、と言うのが適切だろう。

そう、そうなのだ。

今回の話は正確に言うのなら、「婚約しない？」という問いかけではなく、「婚約させたいから」という事後報告だったのである。

原作とは違い、「親同士の間が良く、幼馴染である」という関係性が、馬鹿のシナジーを生み出していた。

そりゃビツクリし過ぎて実家に帰って来ちゃうというものであったし、月ヶ瀬先輩とも一度、ちゃんと話をしておかなければならない、というものである。

これがゲームだとしたら、選択肢をミスった瞬間死ぬだろ、みたいな展開だった。というか、現実も正しくその通りって感じである。

もし希望を見出すのなら、俺が主人公ではなく、また月ヶ瀬先輩も俺のことを、そ

ういう目では見ていないだろう、といった点だろうか。

「まあでも、婚約破棄イベントは、人生で一回は経験しておきたいところですからね……」

「あたかも当たり前みたいな顔で、そんなこと言う人初めて見たよ、わたし……」

「そうは言っても月ヶ瀬先輩だって、悪い女に騙された俺に『月ヶ瀬ひかり！ お前との婚約はこの場で破棄させてもらう！ 俺はこの、真実の愛を教えてくれた〇〇と結婚することにした！ 分かったのなら、さっさとこの場から出て行くと良い!!』とか言われないでしょうし、そんな滑稽な俺を見下しながら『ええ、構いませんよ？ 実はわたしも、そう考えていたところですよ』とか余裕綽々な台詞と共に、カツコイイ王子様と去って行きたくないですか？」

「流石にそんな邪悪な願望は持ち合わせてないよ?!」

「そんな……悪役令嬢が婚約破棄されて絶望するかと思いきや、実は悪役令嬢の方が何枚も上手でした！ みたいなのが、現代のマスコミでは無かったですか……?!」

「良く分からないけど、多分結構偏ってるよ、それ……」

かなり可哀想なものを見る目を向けて来る月ヶ瀬先輩だった。おかしいな、今の若者にはこれがバカウケだと思ってたんだけど。

ちよつとりサーチが足りなかったのかもしれない。

「そうだよな、婚約破棄されるのを逆手に取るんじゃないやなくて、自分から婚約破棄を告げるパターンだつてあるもんな……。」

「嘗め腐った言動をする俺に、パーティ会場で俺の悪行を並べたてながら、『あなたとの婚約は破棄させていただきます。それが、お互いにとつて一番良い決断だと思ひますの』とか告げて、『ふっ、ふざけるなあ！ そんな、そんなことが許されると思ひつてゐるのか?! 貴様は俺の、道具だろうがア……!』とかほざく俺を一笑に付しつつも、優雅に去つて行きたいですよね……。」

「それさつき言つてたことと、ほとんど同じじゃない？ ていうか、甘楽くんはそういう役がやりたいんだ……!?!」

「いや、婚約破棄イベントつて大体、男が悪いイメージじゃないですか」

「どう考えても、源流は破棄される女性側に問題がある方だと思ひうんだけど……。」
「む……。」

確かに、と思はず頷いてしまった。

「そもその主流があつて、その逆張りか次にウケて……というサイクルが世の常みたなところあるからな。」

「こつちの世界でもきつと同じなのだろう。」

「残念ながら、こちらでは娯楽に触れる機会が多くは無くなつてしまつたので、正確な

ことは言えないのだが。

「それじゃあ、俺が糾弾する方向でいきますか……?」

「よしよし、そろそろどっちかを糾弾する思考から離れよつか」

「そんな……! 穩便に婚約破棄したって面白くないじゃないですか……!?!」

「何でも楽しもうとするのは良いと思うけど、それやって楽しいの、多分わたしたちだけだからね?」

本当に雰囲気どころか、家同士の関係も最悪になっちゃうから……と諭される俺であつた。

ですよね……としか返しようが無い、完璧な正論である。

とはいえ、だ。

もう婚約を破棄する時点で、関係性は多少悪くなってしまうのだから、もうこれは仕方のないことだと、割り切るしかないのではなからうか?

「極端に走ることしか知らない猛獣過ぎるでしょ……」

「やるなら何でも全力で、ってアテナ先生に教えられましたからね」

「信じて良いのか微妙な名前出すのやめようよ……ていうか、婚約は破棄する前提なんだ?」

「まあ、そうですね—— ああ、いや、勘違いしないで欲しいんですけど、これは別に、

月ヶ瀬先輩のことが嫌いとか、好きじゃないとか、そういう段階の話ですら無いですかね？」

「……？ 理由って、聞いても良い感じなのかな」

「そんな大層な話では無いですよ。ただ、俺って多分、いつ死んでもおかしくはないでしょう？ だから、もしそうなった時のことを考えれば、あまり踏み込んだ関係の人は、作らない方が良くないだろうなーって思ってた」

既に友人を複数作っている時点で何を、とも思いかもしれないのだが、俺が思うに友人と、恋人……あるいは、そういった意味で深い仲の人間とでは、ちよつと枠が違う。

必要以上の悲しみも背負わせてしまうことになる——と、俺は思うのだ。恋人、ないしはそれに近い関係の人ともなれば。

そりゃあ、俺だって孤独でいたいわけではないし、出来れば色んな人と仲良くなりたいう気持ちはあるが、それでも一定のラインは引くべきだと、第二の破滅の件で強く感じざるを得なかった。

冗談抜きで、死にかけている。

第一の破滅の時は、何となくあなあで済ませた訳であるのだが、こうも連続して死にかけるとなれば、流石に話が違ってくる。

ていうか、俺以外のみんなも死ぬ可能性はあったのだし、そこを死守することも考慮

すれば、死ぬ可能性は濃厚ですらあるのだろう。

要するに、「恋とかしてる暇ないわ〜」ではなく、「そんな重たい関係性を結ぶ余裕とかないです……」になってしまっていた。

本当、転生するならただの恋愛ゲームが良かったな、と思うばかりである。

まあ、そうだとしたら、それはそれで、何の変哲もない日常を送ることになっていた気はするのだが……特に文句は無いが、退屈さは感じたかもしれない。

どういった感情なのかは良く分からないが、とにかく目をまん丸にした月ヶ瀬先輩を見る。

「だからまあ、婚約者も恋人も、端から作る気はない……って話です。もちろん、死ぬ気はさらさら無いですけどね」

「……甘楽くんは、本当に変わったねえ」

「そう、ですか？」

「うん。でも、悪い変化じゃなくて、とっても良い変化だと思うから、誇っても良いと思うよ」

「はあ、そうですか……ええっと、つまり、納得してくれたってことで良いですか？」

「納得はしたかな、理解もしたよ」

「！ 良かったです、それじゃあ——」

「だけど、だからこそ、婚約破棄は受け入れられないかなー」

「あれ!？」

完全に予想外の言葉が飛んできてしまい、驚愕がそのまま飛び出てしまった。

今のは同意してくれる流れだっただろ。

何でそんなトリッキーな答えが返ってくるんだよ。

「だって、甘楽くんは今一番必要なのは、いつでも死ぬる身軽さじゃなくて、『絶対に死ぬわけにはいかない』っていう、足枷だと思うから」

「足枷、ですか……」

「そう……例えば、甘楽くんが死んだら、枯れるまで涙を流して悲しんじゃう婚約者さん……とかね」

「いや、そうだとしたら、月ヶ瀬先輩は——」

当てはまらないでしょ、と笑いながら言った。否、言おうとした。喉元までは出て来ていた。

ただ、その言葉が外に出て行くことは無かった。

かと言って、俺の中で押し留められたという訳でも無い。

言葉はそのまま、月ヶ瀬先輩の中に溶け込んでいった——要するに、だ。

「ん^キん^スん^スん^サん^レん^ルん^ー!?!?」

端的に言つて、そういうことだった。

襟を掴まれ、強引にされたその蹂躪は、分単位で表すべき程度の時間続き、やがて口元だけ離れる。

すぐ目の前にいる月ヶ瀬先輩が、酷く妖艶に笑つて囁いた。

「ふふ、わたしは甘楽くんが死んだら、壊れるまで泣ける自信があるよ？　だから、婚約破棄は無し——わたしが甘楽くんの死ねない理由になつてあげる」

まあ、一先ずは形だけつてことでも、わたしは良いけどね、と。

それだけ言つて、俺の襟を離した。

何事もなく椅子に座り直した月ヶ瀬先輩とは対極に、呆けたまま椅子に腰かけた俺は、

（これ月ヶ瀬ひかりルート：ヤンデレバッドエンドの時に良く見る目だな……）
なんてことを、現実逃避気味に考えるのであつた。

あてなプロフェッサー

「やあ、お帰り。ご飯は出来てるし、お風呂も沸いてるよ……あつ、それとも、僕——いいや、私にする？」

「ソオイッ！」

「ぐわあーっ!？」

アルティス魔法魔術学園、赤ロツツ・フイニールチエの不死鳥寮。その一室。

事あるごとに飛び掛かって来る馬鹿妹の猛攻を退け、豹変しつつある月ヶ瀬先輩を上
手いこといなしながら、やっとの思いで迎えた三年目。

俺は新しく同室となった、とある少年——いや、少女と言うべきか？　もうこれ分かんねえな——に向かって魔力を放射した。

かなり痛そうな声を上げながら派手に吹き飛び、これまたド派手に壁にぶつかった金髪の少女は、「きゆう……」と短い声を上げ、クルクルと目を回す。

その様子ですら絵になっており、実に可愛らしくはあるのだが、それはただの少女ではない。

というか立華くんだった。

正確に言うのなら、立華ちゃんなのかもしれないのだが、まあ、とにかくそういうことである。

「いったたた……何をするんだ、急に」

「さも自分に非はないみたいいな面するのやめない？　ちよつと数秒前の自分の行動、思い返してみようか」

「やれやれ、ちよつと擲揄っただけでこれとは、参ったものだな」

「ここで肩を竦められるの、本気で納得がいかないな……ていうか、何で女モードなんだよ……」

「こっちの方が、身体の調子が良いんだ。いつだつてベストコンディションでいようと思うのは、誰だつてそうだろう？」

「戯言を……！」

がるるーつと睨む俺に、言葉以上に全身で「やれやれ、これだから童貞君は」みたいな雰囲気を出してくる立華くんだった。

クソツ、嘗めやがって……。

ていうか、女性体の方が調子いいんだ……。

何かもう、自分が元々は男性だつてことを忘れてそんな言い分である……そう考えて

みれば、性転換する度に女性らしさが上がっている気がするのも、あながち勘違いじゃないのかもしれないな、と思った。

まあ、シンプルにやめてほしいのだが。

普通に理性がぶっ壊れそうになる——と、ここまでのやり取りを見れば分かると思うのだが、立華くんの性別は可変になった。

さながらソシャゲの主人公である。

いや、これだと完全に人間をやめちゃったように思えてしまうので、ここは正直に、迷宮の影響が完全に消えなかったのだ、とはつきり明言しておくべきではあるのだが。

これはもう間違いなく、力ずくで迷宮をぶっ壊した弊害であると考えられるのだが、彼が患った性転換は、かなり複雑なものとして、立華くんの中に残った。

具体的に言えば、彼が魔力を扱えば、自動的に彼女になるようになったのである。

俺達魔法使い、ないしは魔術師にとって、魔力とは身近なものだ。軽い身体強化なら意識せずとも使えるくらいだし、魔法や魔術を使えば、否が応でも魔力は全身を駆け巡る。

そうなるのが当然、立華くんの身体は女性へと変化する訳だ。

つまるところ、魔法使いとして生きていく以上、立華くんはもうほぼ女性、みたいな意味不明な生命体へと変貌してしまった。

そういう関係性もあり、三年生から立華くんは、俺のルームメイトとなったのである。男性とも女性とも言い難い、酷く扱いに困る生き物になってしまったので、もうこれは仕方がないだろう。

問題児は問題児に押し付けておけ、というやつだ。

まあ、迷宮を粉々にしてしまった俺としても、申し訳なさは多大に感じていたところであり、同室になることに文句の一つも無かったのであるのだが……。

何か当の本人が、一ミリも不便さを感じておらず、むしろ積極的に性別を入れ替え、このような真似をしてくるので、罪悪感と言ったような感情は一瞬で消え失せたのであった。

お陰で学園に戻ってからも、毎日がスリルに満たされている。

学園と実家、どっちも安息の場所にはならないのは何なんだよ。

「仕方ないな、僕が日之守の安息の場所になってあげようか？」

「どの面フレレンズ!?!」と云うか、本当にその姿で言うのやめない？　コロツといきそうになっちゃうだろ」

「いつまで経っても慣れない君が悪いんだろう……全く、これで僕が悪女だったとしたら、君の人生は破滅していたぞ？」

「まあでも、死ぬほど好みの女性に人生終わらせられるのは、それはそれでアリだよな

……」

「君のその、たまに露見する業の深い性癖は何なんだ!？」

どこでそんなもの培ってきたんだ! と立華くんが叫ぶ。完全に現代に生まれたモンスターを見る目だった。

し、失礼過ぎる……。

人間なんだから、軽く十年も生きてれば、それなりの性癖は獲得してしまうというものだろう。

ただでさえ、ネットの海に気軽に飛び込めてしまう世代なのだ。

言わば俺は、時代に英才教育された、最先端の人間と言えるのではないだろうか？

「僕からすれば、魔物とは違うベクトルの化物に見えるんだが……」

「人間は未知を目の当たりにすると、理解できる形に何とか押し込もうとしちゃうからな。格が違い過ぎてすまない……」

「君は人を負けたような気分にする天才か!？」

再び叫ぶ立華くんだった。また一つ勝利を重ねてしまった俺は、フツと息を吐いてから時計を見やる。

時刻はほぼ五時。窓の外からは、当たり前前みたいに早朝特有の陽光が降り注いでいた。

如何にも俺が、残業でもしてきて帰ってきたところであるかのようなシチュエーションが練成されていたのだが、今は普通に朝だった。

それも、俺にしては大分どころか、かなり早い。

寝起きドツキリも良いところである。

目覚ましとしてはこれ以上ない衝撃であつたが、二度と同じことをしないで欲しいと強く思った。

ワンチャン止まるからね、心臓が。

「僕としてはハートを射抜くつもりだったんだけどな……」

「物理的な意味だとしても、精神的な意味だとしても、物騒極まりない発言するのはやめようか……洒落になつてないからね、マジで」

というか、普通に一緒に暮らしているだけで、その内絆されてしまうような気がしてならない。

やはり同室になつたのは間違いだつたか……と思う反面、そうでもないと思う自分がいるのが悔しいところだつた。

不都合なことばかりが増えた訳では無いしな。

例えば、ほら、こうして早朝に目が覚めてしまった時、暇潰しの相手をしてくれる人が出来たということでもあるんだし。

そういった利点は、仕返しも兼ねて、素直に活用させてもらうことにしよう。

「よし、そういう訳で、模擬戦でもするとしようか」

「どういう訳なんだ!? 文脈が繋がっていないぞ!」

「朝から刺激的な目覚ましをしてくれたので、そのお返しと思って……」

「き、君はこんな美少女を甚振るのが趣味なのか……!?!」

「まあ、傷ついて苦しむ美少女の姿に、興奮しないと云えば嘘になるけど……」

「へ、変態だ……」

「失礼の極みすぎない?」

ほら、行くよ。と手首を掴めば、顔を赤くしながら「い、嫌だー!」と抵抗する立華くんだった。

随分可愛らしい抵抗だな、と何となく思った。

「よおーし、せんせーも久し振りに、全力出しちやおつかなく!」

「は? おい待て、何だこれは……?」

模擬戦をするべく、勝手に決闘場を拝借したところ、俺の相手が立華くんからアテナ先生にすり替わっていた。

どう頭を回転させても意味が分からない。何で俺の知らないところで選手交代が発生してんだよ。

レベル50以下のバトルタワーではしゃいでいたら、突然レベル100に殴り込まれた気分である。

ふざけんな、それはルール違反だろうがよ……！

「いやあ、最近は目が覚めるのが早くてね。お散歩してたら少年たちを見かけたから……代わっちゃった」

「うわ……完全に老婆ちゃんの行動ルーティンだ……」

「うるさいぞ?! 年齢の話をするのはやめろ!」

全く、失礼な子だなあ、少年は。と、煙草の煙を蒸かしながらアテナ先生が言う。

というか、そういうことなら立華くんはどこにいるんだ、と思いいりを見回したら、当たり前前みたいな面で観客席にいた。

目を向ければ、満面の笑みで両手を振ってくる。それはそれで可愛らしいが、後で一発ビンタしよう……と心に誓った。

「余裕だね、少年。緊張しなくても良いのかい?」

「もう充分してますってば……アテナ先生の前にいる時は、いつだって」

「つまり、少年はセンサーに気がある……ってこと!？」

「ポジティブシンキングすぎるだろ……」

いや、確かにドキドキはしているが……。

恋愛的那それとはかけ離れている感情だった——というのは、流石に無理すぎる言い分か。

嘘か真か分からないが、それでも未来の俺は、アテナ先生と恋人関係であつたと言うのだ。

はつきりとそう言われてしまえば、そういうつもりは無くとも、意識しないのは無理というものだろう。

ただでさえ、中身を考慮せずに外見だけ見れば、アテナ先生は超の付く美人であるのだ。

「えへへ、照れちゃうなあ」

「中身が全て台無しにしてるって言ってるんですけど、通じてますか？」

「大丈夫だよ、その内こんなセンサーのことが、好きになるだろうから」

「出たな、恐怖すら覚える謎の自信……」

嫌という訳では無いので、そういう未来もあり得ることを加味すると、あながち笑え

なかった。

冗談では済まされない感じである。

やれやれ、とため息を一つ。スイツチを、切り替えた。

「アテナ先生が相手なら、加減とか考えませんが、良いんですよね？」

「んー？ ああ、そうだね。うん、本気でおいで。去年はあんまり見てあげられなかったし、一年分の努力、見せてもらおうじゃないか」

言つて、アテナ先生が軽く杖を振るえば、光点が一つ生み出され、鋭く空へと跳ね上がる。

瞬間、視線は交錯した。

互いの周りに存在する魔力に指向性が与えられる。互いの体内に存在する魔力が練り上げられる。

初手でどう出るかは脳内には置かない。取得できるありとあらゆる情報を精査するのに、総てのリソースを注ぎ込み、そこに反射を乗せる。

とはいえ、前提として、魔導は用意してはおくのだが。

詠唱はほぼ無意識状態で口遊む。決闘ならば許されないが、これは模擬戦だ。これくらい許されるだろう。

パ、パ、パ、と音が鳴る。遙か上空まで打ち上げられた光点が、規則的な音を連続し

て生み出し——そして。

派手な爆裂音が、鋭く木霊した。

「魔装展開——我が身に宿りし闇は《深淵》」

「展開——」第式装甲魔導：夢纏」

解き放たれた魔力の圧が、瞬時に決闘場を支配すべくせめぎ合った。

闇色と蒼色のそれは、数秒の拮抗を生み出してから弾き合う。

「ふふっ、良いね。思っていたより、ずっと成長してる！」

「——ッ！」

一瞬未満だった。瞬きすら置いていく早さで、懷まで踏み込まれた。

極至近距離で目が合つて、宙を裂くように出された手を、辛うじて回避した。

掠めた頬から血が噴き出て、冷や汗が背を伝う。

けれども、それは想定内だし、計算内だ。一番確率が高かった攻撃で、一番躲せる自信が無かった攻撃——そして、躲せた時の反撃が、一番入る攻撃！

踏み出していた足はそのままに、すれ違うのと同時に指を二本、アテナ先生の腹へと当てた。

「ふっ、飛ベツ！」

零距离砲撃。防御も回避も許さない速度で、圧縮していた砲撃魔導を撃ち放った。

視界を焼き切るような閃光。

発生する反動をそのままに、俺にだけ有利な距離を生み出した。

このまま得意な距離、得意な戦闘に――

consejina
「届け」

――持ち込めなかった。ふざけたことに、全くの無傷であるアテナ先生をつま先が、深々と腹に突き立った。一秒にも満たない硬直の後に、鋭く蹴り飛ばされて宙に浮く。え？ 何？ あれ防いだの？ ていうか、今のは高速移動……では無いよな。距離そのものを、無かったことにした？

ああ、もうこれだから、闇系の魔術は嫌いなんだよな！ 理屈が全く分かんねえ！

光系の魔術を、ただのどんでもパワー&スピードな攻撃として、素直に運用している今の日鞠を見習ってほしい。

brilliantemente magnificamente macchiato di sangue
「華々しく踊れ 麗しく舞え 血染めの婿よ」

「あああああ無理無理無理無理無理無理！」

詠唱は、抽象的になればなるほど質が高い。それは当然として厄介ではあるのだが、こうして相対することになれば、その詠唱からどういふ魔術が繰り出されるのかが、目にするまで全く読めないと言う方が、至極厄介であることに気付く。

もう訳分かんねえもんな。

多分360度、あらゆる方向から無数の銃撃が飛んできているのだが、困ったことに反撃に移れない。隙が無い。防御に徹することだけに、選択肢を削られる。

当然、そこまで追い詰められてしまえば、

agg r a p p a r s i
「縋り落とせ」

防御に有効な、第二の手を発動させることを許してしまうし、それを避けられない。直下から這い伸びてきた無数の手に、下半身を絡めとられた。

引きずり落とされる、アテナ先生が分かりやすく走り込んできている。今の距離のままでも圧倒できただろうに。

要するに——嘗められている！

だから、防御を捨てた。未だに降り注いでくる銃撃はそのままに、痛みで飛びそうになる意識を握り込んだ。

叩き落とされてバウンドした瞬間、足を振り抜いたアテナ先生と目が合った。

側頭に用意していた防御魔法と接触し、打ち破られる。けれども一瞬以下の余裕が出た。

「勇あるものよ 果て無き夢に 終わりを告げろ」

「なあっ——!?!」

この瞬間に、砲撃や銃撃を行使するのは不可能だ。それだと遅すぎる。発動してから

射出するまでに、アテナ先生キックで意識を刈り取られてしまう。

かといって、接近戦にもつれ込ませるのはダメだ。単純に俺の練度が低すぎて、もっと情けない感じにボコされる。

なので夢纏を解いた。というか、シンプルにパージして爆裂させた。

蒼色の爆発に、目を見開いたアテナ先生が呑み込まれる。

「づっ、ぐおあ……！」

まあ、そうは言っても、こんなもんは言わば自爆特攻なので、俺も被害に遭うのだが。当然みたいに巻き込まれ、互いに真逆の方向に吹っ飛んだ——吹っ飛びながら、砲撃魔法を用意した。

限界まで圧縮したのを、合計百門。

最初、お腹に触れた時に付けておいたマーカーを元に、一束にしたそれらを撃ち放った。

防御魔法が割れる時特有の破碎音が幾つか響き、爆風が再び生み出される。

「やっ……ふー……」

やったか!? と言いそうになったのを途中でやめたせいで、やたらとスローなマリオみたいになってしまった。

全然そんなご機嫌ではない。純粹に、これだけで倒せたとは思えないし……。

いやでも、これで終わって欲しいな〜……。

夢纏を再度形成しながらも、アテナ先生がぶつ倒れていることを祈る。

もう本当、全身が痛いし、疲労がドツと襲ってきている。

何で朝っぱらからこんな思いをしなきゃいけないんだよ……！

起きたばっかりだってのにもう寝たいんだけど。

すっかりご飯を食べて、ゆっくりベッドでぬくぬくしたかった。

「あつはつは！ いやあ、やるようになったね、少年！ 今のはちよつと痛かったなあ！」

巻き上がった爆炎の中から悠々と、アテナ先生は姿を現した。

台詞の通り、全くのノーダメージではないっぽいが、逆を言えば、ノーダメージではないってだけらしい。

パツと見で分かるの、手の甲にあるちよつとした傷だけでもんな。

マジかよ……と、そりやそうだよな……という感想を同時に抱いた。

「良いね、もうちよつとだけ、ギアを上げようか」

「まだ上がるんですか……？」

「そう硬くなることは無いさ。ここからは、授業の時間にするでしょう——
stella in manna
星はこの掌の中に」

アテナ先生が片手を握り込むと、太陽が消えた。

次いで、青空が黒々と塗りつぶされて、光が消え失せる。

直後に、大気中の魔力への干渉が出来なくなるのを感じた。感知が出来ない、どういった手段を用いたとしても、前が見えない。

上も下も、右も左も分からなくなるような黒。

自分が今、本当に立っているのかどうかすら不安になる闇の中で、ただ、アテナ先生の声が響いた。

「これまで多くの魔装を見てきたとは思うけれども、少年は多分、魔装の本質を、少しだけ見誤っている」

声が聞こえる。逆を言えば、声しか聞こえない。それ以外の音が、ほんの少しも鳴っていない。

異常とも言える空間だった。何せ、自身の息遣いすら、耳を澄ましても聞こえない。

いや、聞こえないどころか、感じることもすら出来ない。

今、俺、本当に生きてるか？

「魔術の出力を上げる、大規模な魔術を軽々と扱えるようになる。なるほど、それも確かに魔装の利点だ。これ以上なく映える、メリツトの一つ。だけどね」

近づいて来ている、気がする。

完全に勘だ。というか、勘にしか頼れない。

集中すればするほど、この気味の悪い空間に心を乱されるようだった。

ていうかもう泣きそう。あるいはもう泣いてるかもしれないが。それすらも分からない。

精神攻撃には普通に弱いので勘弁願いたかった。

「一番のメリットは、一定の領域を完全に支配した後には、その領域内でのみ、自身の属性そのものを引きずり出すことが出来る、という点だ———どうだい？ 少年。闇は

……深淵は怖いだろう？」

怖いどころじゃないんだけど。パニックを起こすのを通り越して、身体が自由を手離しそうになっていた。

息が乱れてる、んだと思う。心臓もきつと、激しく鳴っている。

「闇の中では人は動けない。闇の中では人は見えない。闇の中では人は聞こえない。闇の中では、人は生きていられない」

ギュツと胸を握った。何か恐怖が一周して段々イラついてきちゃったな。

何でこんな朝からポコポコにされ、泣きそうなくらい怖い授業を受けなきゃいけないんだ。

クソツ、絶対目にももの見せてやる……と、展開していた夢纏を圧縮した。

このまま砲撃として撃ち放つ。ぶっちゃけどこにいるかは分からないが、十中八九正面だろう。

そうでなかったとしても、この空間を破壊できればまあ、何かしら好転するだろう。

「——ツ!!」

だから、叫んだ。どうしても聞き取ることは出来なかったけれど、圧縮した砲撃魔導を解き放った感触だけが、掌に残って、

「そういう、使用者が思う概念をそのまま押し付けられる、非常識的な空間を生み出すのが、完成された魔装というやつだ。ま、せんせーほど完成度が高い魔装も、早々無いと思う——ってうわああああ!? ちょっと少年!? ごり押しで破ろうとするんじゃないーいー!」

アテナ先生の、驚愕交じりの絶叫が響いた。

魔装によつて編み上げられた空間に歪が生まれ、俺達の中心で、魔導と魔術の砲撃が拮抗しているのが見えた。というか、押されているのが見えた。

何で魔術で魔導に、力技で対抗できるんだよ……!

俺の周りは例外ばっかりか……!? と、じりじり眼前へと迫る闇に冷や汗を流せば、

「呪怨武装：c o d e 0 0 3 ——ぶつ破壊せ! 超級美少女百連ガチャスラー——ツシュ!!」

「ぎゃー！ なになになになになになになに!?!!」

かなりのソシヤゲプレイヤーと思われる発言が、闇をぶち割りながら降ってきた。

突如として戻った全身の感覚を、思わずフル稼働させながら絶叫すれば、ズドゴオン！ という激しい爆音と共に振るわれた、やたらとメカメカしい斧が、俺の魔導とアテナ先生の魔術を破壊して、地面にぶち込まれた。

それを握るのは、一人の少女。

「おつと悪いな。模擬戦じやれあいつつーことは見りや分かったが、これ以上は日ヒ之守ノクンが危険ヤバそうに見えたんでな、介入させてもらったぜ」

どつからどう見てもうちの学園の制服ではなく、修道女……かな？ と不安になってしまいうくらい、修道服をベースにした、露出の多い衣に身を包み。

濃い紫の髪をベースに、明るいピンク色も交じった長髪の彼女は、「平気か？」と俺に手を差し伸べた。

「オレの名前はミラッキュリオ・プリーモ。《ヴァルキュリア呪術騎士学校》から来た、テメーの護衛ラバだぜ」

《left》ご神託チャット▼《/left》

《left》

☆転生主人公

また変な女が増えたんだけど!!?

◇名無しの神様

反射で出ちゃったにしても最悪の感想すぎるだろ

◇名無しの神様

誰!?! とかじゃなくて完全に「何あの女?」の方向性なんだよな

◇名無しの神様

こわいよ

◇名無しの神様

無差別女威嚇女じゃんこんな

◇名無しの神様

女(男)(女)

◇名無しの神様

性別あやふや太郎花子がよ

◇名無しの神様

白黒つけろや

◇名無しの神様

まあ、ワイらとしても「誰!?!」なのです……

◇名無しの神様

急に異次元の戦い始まったと思ったらこれなんだもんな

◇名無しの神様

ヴァルキュリア呪術騎士学校って何だよ……

◇名無しの神様

初耳過ぎるんだが?

◇名無しの神様

この配信見ると俺のプレイ時間一万を超えたデータがゴミに思

えて来る

◇名無しの神様 草、元気出せよ

◇名無しの神様 こいつらがおかしいだけだぞ

◇イカした神様 隣で見てた上司ちゃんが泣いちゃった

◇名無しの神様 いやワロタ

◇名無しの神様 お前は平然とチャットやってんじやねえ！

◇名無しの神様 全ての元凶がこの態度なの、最悪過ぎ

◇名無しの神様 ちよつ、まつ、え？ いやいや、えっ……!!?

◇名無しの神様 なになに

◇名無しの神様 急にビツクリしまくるじゃん

◇名無しの神様 初見かア〜？

◇名無しの神様 いやつ、そうじゃなくて、え？ これ、今までのバグって、そうい

うことなのか？

◇名無しの神様 急に確信を得た感じの発言来たな

◇名無しの神様 恐れず言ってみろよ

◇イカした神様 つーか情報は欲しいからな、何か気付いたなら言ってくれ

◇名無しの神様 え？ お前から分かんない？ 何もピンとこない感じ？

◇名無しの神様 焦らすじゃん

◇名無しの神様 良いからはよ言えや

◇名無しの神様 いや、もしかしたら勘違いかもしれないんだけど……このミラつてやつ、『蒼天に咲く徒花2（仮称）』の開発映像で出てきて無かったか？

◇名無しの神様 えっ

◇名無しの神様 えっ

◇名無しの神様 えっ

◇名無しの神様 えっ

◇名無しの神様 ……………

◇名無しの神様 ワロタ

◇名無しの神様 は？ ガチじゃん

◇名無しの神様 うわー！ マジだ！ え!? 次回作のキャラなの!?

◇名無しの神様 どうなってますかねえ、これえ……

◇名無しの神様 拡張時に接続した世界は、次回作の世界だった……ってコト!?

◇イカした神様 んああああああおおおおおんんホントじゃんヤダもおおおお

お!!

《left》

《left》

【性別可変ボケナスと】蒼天に咲く徒花
バグキャラ日之守甘楽
攻略RTA【謎のシス
ター】

《left》

みらきゆりおラバー

時を改めお昼休み。

場所を改め食堂……ではなく、アルティス魔法魔術学園、屋上。

ほとんど人が訪れることのないそこで、俺はプリーモさんと再度顔合わせを行っていた。

食堂だと人が多すぎるし、騒がしいからな……。

あと、学年で席が離れているので、一々移動するのも手間だったし、かといって放課後まで待つのも、それはそれで時間の無駄だった。

プリーモさんお手製だという、サンドイッチをいただきながら向き合う。

「つつー訳でだ。今年いっぱい頼むだけ、日之守クン」

「うお……修道服、制服なんだ。スリットえぐ……目に悪すぎるだろ」

「思春期かよ……いや、そうだったな。それなら仕方ねえ、存分に見ることを許すぜ」
「最悪のルビ振りやめろ！」

たまらず絶叫しながらも、好意に与りガツチリ目を見開いたら、プリーモさんはニヤ

ニヤとした笑みを浮かべた。

何で俺の周りには、俺が童貞かどうか探ってくるやつが複数いるんだろうな。高校生男児同士でも確認とか早々しないからね？

いや、揶揄われているのは分かるんだけど……。

それでも腰くらいまでスリットがあつて、尚且つ網タイツなのはダメだろ。

本当に学生かよ、エロゲくらいでしか見たことない露出度過ぎる。

この学園が一番下で十三歳なの忘れたのか？ 最悪、この人で性に目覚める子とか出てきちゃうだろ。

風紀乱し過ぎである。

「ヴァルキュリア呪術騎士学校、恐ろしい学校だ……」

「流石に全員がこんな格好してる訳じゃあねーよ。エロゲのやり過ぎか？」

「エロゲの登場人物みたいな格好であることは自覚してるんだ！ メンタル強者すぎるな」

「ツ喧^せえな、オレだつて好き好んで肌見せてるんじゃないよ！ ただ、その、何だ……」

もごもごと口ごもりながら、頬を赤らめてそっぽを向くプリーモさんだった。

羞恥心があるタイプの露出狂つて、この世に存在するんだな……。

また一つ賢くなつてしまった、と深々と頷いてしまう。

粗暴風オレっ娘照れ屋シスター、か。

何があつたらそうなるんだろうか……と、思わずヴァルクユリア呪術騎士学校へと思いを馳せてしまった。

「単純に、呪術との噛み合いが良いんだよ……つつても、分かんねーか？　分かんねーよな」

「いや、分かりますよ」

「マジで？
驚愕!!」

「真実だよ」

おっと、つい口調が移ってしまった。

なるべく触れないようにしていたのだが、やっぱりこの人なんか変だよな？

ナチュラルに忍者か極道みたいな発音が混ざってきたら、それこそ本当に気になつてきた頃合いである。

どういう育ち方をしてきたのか、そろそろ本当に気になつてきた頃合いである。

ていうか、分からない訳ないだろう。監視がつくつて話から、相当の時間が経つてい
るのだ。これで呪術について、何も調べていなかったとしたら、流星に間抜けとか言う
レベルの話ではない。

「呪術を行使する際に必要になるのが呪力。で、その呪力は、使用者の負の感情を消費して生成される……だから、常に見せたくもない肌を見せて、不快感等を溜めてるって話

でしよう?」

「……衝撃パねえな。一目で分かったのか?」

「まあ……効率を考えるなら、それが一番手っ取り早いなどは思ったので」

かといつて、本当に実行に移すかどうかは、別問題であるとは思うのだが。

呪術騎士がみんなこうって訳でも無いらしいし、プリーモさんは例外であるのだろう

……多分。

いや、俺が知ってる呪術騎士って、ラウレストおじいちゃん先生と、プリーモさんしかいないから……。流石に断言できない。

ヴァルキュリア呪術騎士学校の生徒を他に見たことは無いし、色々調べ回っても結局、呪術騎士ですって人と会うことは、ついぞ叶わなかったのである。

と言つても、それは別段おかしなことではないのだが。何せ、そもそも呪術騎士自体、稀少な魔術師よりも、更に少ないのだから。

呪力と魔力は相容れないものらしい。つまり、魔力あるものは、呪術騎士にはなれない——裏を返せば、魔力を持って生まれなかった者のみ、呪術騎士になれるのである。

これを知った時は流石にひっくり返った。というのも、俺の知っている……言わば『設定』がぶち壊されたからだ。

この世界……『蒼天に咲く徒花』の人間は、誰しもが魔力を持つて生まれて来るはずだ。

つまり、それに準ずるのであれば、呪術騎士なんていう存在が生まれてくることはま
ず無い。有り得ない。

極東の島国から入ってきた技術だとか何とか、参考にさせてもらった資料には書かれていたが……。

もうこれ完全に別ゲーじゃん、という気持ちは拭えなかつた。

あと多分だけどそれ、確実にモデルが日本だよな？　って感じである。

ちなみに呪術は当時、魔術師への対抗策の一つとして有力視されたらしいが、上記の理由により、適合者があまりにも少なく、普通に廃れかけたらしい。当たり前すぎる。

だが、そこを何とか使える人が寄り集まり、今に至るまで細々と技術等の継承を行っている……それが『ヴァルキュリア呪術騎士学校』の大本であるらしい。

まあ、今では全国どこるか、全世界にまで網を張り、適合者を探しているので、学校の体を保つことに成功しているのだとか。

マンモス校なアルティス魔法魔術学園とは、対極みたいな学校と言つて良いだろう。ラウレストおじいちゃん先生、俺が思つていた一千倍くらい苦勞してるな……というのが率直な感想だった。

ただ、ここで一つ勘違いをしてはいけないのが、呪術騎士は決して凡才の証ではない、ということだ。魔法使いとは別で、どちらかと言えば、魔術師と同じ枠組みに入れるべきだろう。

魔力を保有しない人間は、その代わりとでも言うように、先天的に身体能力と五感の機能がずば抜けて高い。

それこそ、ただそれだけで、並の魔術師であれば相手取れる程に。

これについては正直なところ、半信半疑どころか「二次創作のオ리지？」とすら思っていたのだが、身の丈三倍くらいの戦斧を携えて現れたプリーモさんにより、それは本当であるということが証明されてしまった。

いや本当、良くあの細腕で、あんなゴツイもの振り回せるよな……。

俺だつて魔法で強化すれば同じことが出来るだろうが、素では無理である。当たり前だ。

その点を考えると、呪力自体は使い勝手が悪いよな……とは思う。

《呪術師》ではなく、《呪術騎士》と呼ばれている時点で、ある程度察しはつくだろうが、呪力は魔力と比べて、自由度が格段に低い。

強化魔法のように、身体能力を向上させることも出来なければ、砲撃や射撃にも転用できないし、盾を作り出すことも出来ない。

使い道は一つ。物に込める。ただ、それだけ——いわゆる『呪物』を作り出すことが、呪力に出来ることであり、それを扱うことで発生する現象を、『呪術』と言うんだとか。

呪いの剣とか、呪いの盾とかを振り回す訳だな。

今朝方のもそうなのだろうが、もう一度くらいは見させて欲しいものである。

ええっと、何だっけ？

「超級美少女百連ガチャスラッシュユな」

「なんて??？」

もう一回聞いても意味不明だった。ネーミングセンスが有るとか無いとかっていう話ですらないんだよね。

廃課金プレイヤーでもそんな名前前の技作らないよ。

「負の感情が高まった時の出来事をそのまま技名に転化することになってんだ、しゃーねーだろ」

「真正のマゾみみたいな制約ですな……」

「他にも格ゲー連敗台パンアタックとかもあるぜ」

「地獄の煮凝りみたいな技名！」

滅茶苦茶強そうではあるが、想像するだけでかなり可哀想な感じだった。

さっきの百連ガチャスラッシュも、それでマイナスだったってことは、確実に爆死してんじゃん。

お前もうゲームやめろ。

悲しいエピソード博覧会みたいになってんだよ。

相手してるだけで居た堪れなくなっちゃうじゃねえか。

「え？　というか、なに？　呪術騎士つて全員、そんな愉快的な攻撃しかないんですか……？」

「いや、流石にその辺は人それぞれだな。じじいなんてほら、孫に嫌われて泣きそうビームとか良く使うぜ」

「普通に可哀想なの出てきちゃったな……」

「因みに孫はオレだ」

「仲良くしてやれーッ！」

カラカラと楽し気に笑うプリーモさんだった。最悪過ぎる、もつとお爺ちゃん孝行してやって欲しい。

技に出来ちゃうくらいにはシヨック受けちゃってんじゃん。

ちゃんとした反抗期すぎるだろ。

というか、マジで？　真剣な殺し合いの場で、そんなこと叫ばれたら、流石に気が抜

けちやうんだけど。

「呪術騎士は羞恥心すら武器に出来つからな。特攻キメながら、次弾の装填が出来るつー訳だ」

「ええ……何かちゃんと合理的でビックリしました……」

システムとして完成され過ぎていて、普通に引いてしまった。

いや、まあ、多分、技名等を決める必要も、叫ぶ必要も無いのだろうが……。

そういう教えを当然として刷り込んでいる、ヴァルキュリア呪術騎士学校——ひいては、ラウレストおじいちゃん先生にドン引きしてしまった。

精神攻撃としても成り立っていて、割と文句のつけようがないのだが、そんな合理性とは引き換えに、色々と失いすぎだった。

魔力があつて良かった……。

「でも何か、結局微笑ましい感じのばつかりなんですな。ゲームといい、親子関係とい

い」
「強烈のだと幼馴染の彼女を先輩に寝取られたマスターとかもあつたけどな。これだけ

で学校一に君臨しちまったんだから、どれだけの悔しさを抱えたのかが分かるぜ」

「ガチで生々しくキツイのはやめろ」

薄い本でしか見ないやつじゃん。現実にそういうことつてあるんだ。

可哀想の一言に収められないくらいに居た堪れなさがあった。

そりやトツプまで辿り着けるだろうよ……と納得させられてしまう強烈さである。普通に向こう十数年はそのエピソード一本だけで戦っていけそうだった。

「他にもな——」

「いや良い、良いです、いらぬいらぬ。もうお腹いっぱいなので」

「ンだよ、まだまだ序の口だったつてのに」

「ひえ……」

ヴァルクリア呪術騎士学校は、思いの外怖いところらしいな、と心に刻み付けられた。印象が完全に、窓が常時割れてる田舎の治安最悪学校なんだよもう。

隣町の不良学校と戦争とかしてそうだな。

負の感情を消費するのだから、比較のお淑やかなのかなと思っていたのだが、見当違いも甚だしかったようである。

「いや、決闘コロシが合法ゆるされてる、お前らの方がよっぽど治安最悪とんでもねえと思うが……」

「いやあ、この玉子サンド美味しいですね！」

「……………」

あまりにも痛いところを突かれてしまったので、テキトーに流そうとしたら、プリーモさんに半目で睨まれた。

いやもう本当、反論の余地が無いんだよな。

勝てない戦いはしたくないし、そもそも俺はレスバが弱いので、無言で睨み合いながら、パクパクとサンドイッチを頬張った。

結構種類があつて、飽きないし美味しい。

「……日之守^{ヒノモリ}くん、失礼なやつつて結構言われねえか?」

「直近だと、プリーモさんのお爺ちゃんに言われたばかりですね」

「じじいとオレが、同じことを……!?!」

不覚! と背景に並んでそうな顔をして、愕然とするプリーモさんだった。ラウレストおじいちゃん先生のこと嫌いすぎじゃない?

確かに何かやらかしてないと、ここまでにはならないだろ……みたいな反抗のされ方だった。

「ま、口にあつたなら、何よりだけどな。こういうのはあんまり得意じゃねーからよ」
「あれ? そうなんですか?」

てつきり、腕に自信があるから、わざわざ作ってきてくれたのかと思っていた。

というか、それでもないと説明がつかないと思うのだが……。

これでは彼女が、新しく出来た彼氏の為に、お母さんに教わりながら弁当作ってきてくれました、みたいなシチュエーションになつてしまいかねない。

俺は別に構わないのだが、この見た目とは裏腹に、実に硬派そうなプリーモさんからすれば、あまり望ましくない状況なようにも思えた。

「何言ってるんだ？　むしろ、そう見られた方が好都合じゃねーか」

「……………」

「……………」

普通に意味不明だったので、疑問符を浮かべてみたところ、同じように疑問符を浮かべ、見つめ返してくるプリーモさんだった。

互いに首を傾げ合って、「こいつ何を分かかっていないんだ……………」と推理し合う時間に突入してしまう。

まあ、推理も何も、何かしらの認識が食い違っているだけなようには思えるのだが……………。

「オレはお前の恋人かんしだろ？」

「明らか振られているルビに適してない単語が出てきた！　どういふ経緯を辿ったらそうなるんだよ」

「いや、フツ順当にそうなるだろ……………」

頭おかしいのか？　みたいな目で見られる俺だった。え？　なにこれ、俺がおかしいのか？

関与できないところで婚約者を作られたかと思つたら、俺の知らないところで恋人まで出来ちゃつただけだ。

無から生えてきた自称元カノもいれば、愛人でも良いと迫つて来る同級生もいるし、パツと見かなりラノベの主人公っぽい境遇だった。

ここから発生する感情が恐怖じゃなかつたら良かったのにな、と他人事のように思う。

「オレの役目はお前の監視と護衛だ。流石に二十四時間とは言わねーが、四六時中傍に
いることになるんだぜ？　だから、そういう設定でいくのが自然だって、オレは聞いた
んだが……」

「すげえ、全部初耳だ……あつ、えっ？」

もしかして恋人の有無を確認した理由つてこれか!?　馬鹿みたいな作戦立てやがつて……。

恋人がいなかったとしても、俺に好きな子がいたらどうするつもりだったんだよ。

せめて俺にも話を通せ。ぶつつけ本番で来るんじゃない。絶対に「まあ、クソガキ
じゃつたし、雑に扱つてもええじゃろ……」みたいな思考で動いただろ。

毎度毎度、ドッキリを仕掛けられた気分になる俺の気持ちにもなつて欲しかった。

あのおじいちゃん先生が、孫に嫌われた理由の一端を理解してしまった瞬間である。

「まあ、そこそこ合理的ではあるんですけどね。何ですか？　呪術騎士って、そんなに合理性を重んじてるんです？」

「……言われてみりや、全体的にその気があるな。まあ、その中でもじじいは一番ぶつちぎりにそうだろうが」

「そうなんだ……」

お人好しみみたいな顔通りという訳では無いらしかった。まあ、相手も人間なのだし、そりやそうだろうと言われれば、そこまでであるのだが。

しかし、偽装恋人か……。

その単語にぶつちやけ、ちよつとだけワクワクしてしまう俺がいた。

いや、だって、偽装恋人だぞ……？

婚約破棄イベント並みに経験しておきたいイベントだろ。

とはいえ、そんなことをしたら本当に、サクツと刺されかねないのだが——いや、もしかしてこれか？

未玖が《予知》で見たやつの原因、これか！

滅茶苦茶分かりやすい月ほヶく瀬だ先輩が出てきたから、ここかなと思っていたのだが、まさかの二重トラップとはな……。

うっかり引つかかっちゃうところだったじゃねえか。危ない危ない。

「でも偽装恋人なんて、やろうと思つてやれることじゃないんだよな……」
「好奇心と自分の命を天秤にかけてんじやねえよ……狂^{イカレ}つてんのか？」

「わあ、失礼な目」

呆れたような、感心したような、何とも言えない眼差しを送つて来るプリーモさんだった。別に本当にやるなんて言つてないだろ……！

偽装恋人を上手く扱えれば、周りの人間との距離も作り直せそうだなー、とちよつと考えただけである。

死ねない理由は、同時に無茶できない理由にもなつてくるから。

本当に申し訳ないが、俺に足枷は必要ない。

だから、俺がもう少し器用であれば、採用していたことだろう。

あるいは、未玖の不穏な《予知》を聞いていなければ、安請け合^{ダチ}いしていたかもしれない。

「まあでも、普通に不誠実だと思ふし、回避できるところで火種は作りたくないんで……友人つてことで妥協しませんか？」

「んー……、オレは別に構わないぜ——ただ、そうだな。友^{ダチ}達つてんなら、オレをラストネームで呼ぶのはやめろ、嫌いなんだ」

それと敬語もな、と言いながら、プリーモさん……ミラは手を差し出した。

そういうことは先に言ってくんないかな、と思いつながら手を握れば、

「——でも、それだけじゃつまんねえよな？」

サンドイツチ分の代金だ、と。

グツと引き寄せられて、抱きしめられた。

すわ刺されるやつか!? と反射で身を引こうとするのと、ドササア! と背後で物を落とす音が聞こえたのは同時だった。

何だか嫌な予感して、身体ごと後ろへと向ければ、目に入ったのはアイラだった。

「……甘楽くん？」

「いや待て! 誤解だ誤解! 別に屋上で逢引きしてた訳じゃ無い! だから『その女が許されるなら私も許されるでしょ』みたいな感じで猛進してくるのはやめろーッ!」

「へえ……お前、変な女に好かれてるんだな」

「元凶が冷静な分析を口にするのもやめろ!」

ていうか全然離れない! 膂力が凄すぎる!

友達でいくつて言ったのに、これじゃあマジで恋人やつてるように見えちゃうだろうが! と叫ぶ間もなく、アイラは突撃してきた。

グイツ! と顔を両手で挟むように掴まれ、至近距離で目を合わせられる。

「これはちよつとした参考程度に聞きたいことなのだけれども……その初見の女が良く

て、私がダメな理由を聞かせてもらえるかしら？」

「誤解だつて言つてんだろ……」

ビツクリするくらいハイライトの無い目に射抜かれてしまい、思わず恐怖が先に出てしまった。

本当に、どう説明すればスマートに誤解を解けるんだろうな……。

一瞬も瞬きしないアイラに冷や汗を流しながら、俺はやたらと愉しそうなミラを睨んだ。

あいらセカンド

「修学旅行……？ 全然知らないイベントが発生したな」

「学生失格みたいな台詞が出てきたな……」

お前さんの為に学生してんの？ みたいな顔で、立華くんがため息を吐く。珍しく男性モードだった。

困ったことに、本気で思い出せないのだが、アルティス魔法魔術学園の三年生には修学旅行があるらしい。

というか、三年ごとにあるのだとか。

毎年、三年生と六年生が旅行に行く形になる訳だな。無論、行く先は違うらしいが。確実にこんなイベントは無かったはずなのだが、最近の俺の記憶はちよつと信用ならないので、断言できなかつた。

ていうか、絶対に事前から知らされていたはずなのだが、それすら記憶にない。

ああ、関係ないイベントね、と割り切つたか、あるいはマジで興味がなかつたかの二択だろう。

とはいえ俺は、修学旅行と聞けばもう、それだけでワクワク出来る人間なので、恐らく前者だと思われるのだが……。

「甘楽君、貴方、修学旅行の話が出た直後に荷造りし始めたじゃない……」

「存在しない記憶を溢れさせるのはやめろ……えっ、マジで？」

「一応言っておくが、班決めだつてとつくにしたからな」

「う、嘘だ……俺を騙そうとしている……」

授業をそつちのけに狼狽え始めた俺に、逆に二人が困惑し始めた。

「どうやら本当のことらしいな。」

左隣でいつも通り、すやすや眠りこける日鞠を起こしても、きつと同じ答えが返ってくるのだらう。

それに、今思い返してみれば、俺のベッドの隣に謎のリユックが佇んでいた気がしないでもない。

しかし、そうは言っても流石にこれを、忘れっぽいで片付けるのは無理があった。

何かしらの記憶障害が発生していると考えるべきだろう——やっぱり、魔導か？

気軽に扱えるようになったとはいえ、普通に脳への負担が大きいし、あまり多用しない方が良いのかもしれない。

「……本当に、覚えていないのか？」

「ん、いやいや、ちょっと忘れてただけ。ちゃんと思い出したよ。ここ最近では、色んな事が畳み掛けて来てたからな……少し抜けちゃっただけ」

監視役とかもついちゃったしな、と付け加えれば、立華くんは納得したように頷いた。アイラの方は未だにジト目を飛ばしてきているが、ここは敢えてスルーさせてもらう。

事情を話したところでどうしようもないし、そもそもそういう場面になったら、魔導は使わざるを得ない。

禁止にするなんて言語道断だ。普通に無理だろ。

出来れば日常的に使って、少しずつでも効率化したいまであるのだから、それもなおさらだ。

ただ、アテナ先生や校長辺りには、話しておいた方が良くかもしれないが……まあ、その程度である。

こういった秘密は出来れば抱えたくないのだが、余計な心配もかけさせたくなかった。

あと単純に、全力で戦うことを他人に憂われたくない。

俺、魔法とか魔導とか使うの、シンプルに好きなんだよ……。

「ところで、修学旅行っていつ？」

「はあ……明日よ」

……マジで？ 展開が早すぎない？

この前入学式やったばかりだったと思うんだけど、そんなに早い時期にやるんだとカレンダーを見れば、示されるのは五月の半ば。

ミラとアイラと一悶着があつたのが、四月の中旬だったと思うんだけど……。

そこからの記憶が丸ごと飛んでいる訳では無いし、穴抜けという訳でも無い——
単純に、修学旅行に関する記憶だけ抜けてるのか？

何でまたそういう、変なところを……と顎に手をやれば、「やつぱり覚えてないんじゃない」と、呆れたようにアイラがため息を吐いた。

取り敢えず部屋へと戻り、過去の俺が荷造りしたというリュックの中身を漁る。

出てきたのは幾つかの着替えと、下着、それから洗面用具くらいである。実にコンパクトで無駄のない荷造りだった。

ひゅ〜！ 旅慣れしてる人みたいでかつこい〜！ と自画自賛してやらなければ、ちよつと悲しくなるくらい最低限の荷物であつた。

携帯ゲーム機とまでは言わなくとも、トランプやお菓子の一つも入ってない辺り、

ガツツリ陰キャ氣質が全面に表れている。

まあ、そうは言っても、今時足りないものがあつたら、現地で買えたりしちゃうからな。

日之守家はまあまあ良いとこなので、お金に困ることも無いし。

これはこれで良いか、トリユックを放り、ベッドに寝転びながら旅のしおりを開く。すげえな。全く見覚えが無いのに、ちよくちよく俺のメモが書き込まれている。

記憶喪失者になつた気分である——いや、気分つて言うか、まんまその通りなのか？

「小説とか読んできると、ちよつと憧れたりもするけど、実際なつたら不便極まりないもんだな……」

「あら？ 何の話か、聞いても良いかしら？」

「んー？ だから、記憶喪失だよ。やつぱり記憶失くすのつて不便だし、精神的にも良くないな——つてはな、し、を……は？」

ちよつと待つて今の誰？

旅のしおりから目を外し、身体を起ここそうとしたら、上から人が——アイラが降つてきた。

長い黒髪を靡かせて、勢いよく。

ポフンツ！ とそこそこの重みを感じさせる音と共に。

俺に跨り、険しさを隠そうともしない、ブルーの瞳でガンガンに睨み付けてきながら。俺の頬へと、手を添える。

「今の話、詳しく聞かせてもらえるわよね？ か・ん・ら？」

「……………聞かなかつたことに出来ない？」

「嫌よ、言っておくけれど、聞かせてくれるまで離さないから」

もし力づくで退けようとするのなら、大声で叫ぶわよ、ときつちり脅迫までしてくるアイラだった。俺の尊厳に関わってきてしまうので、本当に勘弁してほしい。

お前が叫んじやったらこの絵面は、どう頑張つて好意的に解釈しても、女子を男子寮に連れ込んで、襲おうとしている男子の凶になっちゃうんだよ。

かなり言い逃れようがなかった。

ふー…………と小さく長いため息を吐きながら、幾つか言い訳を用意する。それから、全部無駄だな、とゴミ箱に投げ捨てた。

そもそも俺、あんまり口上手くないし…………。

聞き間違いないじゃない？ と白を切るには、あまりにも遅すぎであった。

「あー…………それじゃあ、言い方を変えよう。今は、聞かないでおいでくれないか？」

「…………つ、ダメよ。ダメ、流されないわ。私は確かに都合の良い女で良いけれども、それ

だけじゃないのよ？」

「だよなあ……」

一瞬いけそうだったんだけどな、無理だったかー、とひとりごちる。

特に期待はしていなかったが、失敗したとなれば、それはそれで残念だ。

というか、こうなった以上はもう全部言うしかない。

この場を丸く収められるほど、上手な嘘が吐けるほど器用じゃないし……。

黙秘権を行使することで、ギスるのは勘弁願いたいところだった。

やれやれ。

割り切るとするか。

「言葉通りだよ、記憶が無い。飛んでる……全部って訳じゃ無いし、本当に一部分だけだ。全然思い出せないことが増えてきた、それだけだ」

「それだけって……」

「何でアイラが泣きそうな顔してんの」

言うほど大事では無いよ、と頭を撫でる。

これでアイラの名前を忘れてる、とかであれば話は変わってくるが、そういう訳ではない。

全く問題ないとは、流石に口が裂けても言えないが、今すぐどうこうしないといけな

い、という話でも無いだろう。

本当に、魔導を使用していることが原因なのかどうかも、確定じゃないんだしな。

そうとは思いたくないが、単純に俺がド忘れしている可能性だって、まあ、無くも無い。

「だから、大丈夫。大切なことは全部覚えてるし、心配ないよ」

「そんなの……分らないじゃない。忘れるってことは、忘れたことさえ、分らないんでしょ？」

「そりゃそうだけど……」

俺自身のこと、周りの人間のことも、七つの破滅のことも覚えてる。思い出そうとして、変な欠落がある感じもしない。

それならまあ、大丈夫だろ。

取り敢えず、これさえ覚えてるのなら最低限、俺は使い物になる。

……近すぎるように思える距離感をどうにかするのなら、少しは忘れた方が良くいんだろうけれど。

それを願うのはあまりにも不義理だし、そもそもそれは、俺の方が寂しいので遠慮したかった。

どういった意味であれ、良く絡んでくれる人のことはみんな好きだから。

好きで忘れたいことなんて、早々は無い。

「ま、どうしようもないことってのは、往々にしてあるもんだろ。しばらくは必要経費に思って、割り切るよ」

「貴方のその、自分のことに対する妙な頓着の無さは、何なのかしら……見てるこつちが、やきもきするのだけれども」

「そんな人を、自己愛の無いやつみたいと言いたい方しなくても……」

驚くかもしれないが、俺は基本的に、俺のことが好きだ。大体の場合において、自分のことを肯定してやれるくらいには。

だからそんな、自分のことをどうでも良いとは思っていない。というか、そうじゃなかったら、死にたくないとか思わないだろ。

訳の分からんイレギュラーばかり起こっているが、そもそも俺の行動の軸には、「死にたくない」があるくらいなのだ。

「違うでしょう？ 自身の命が天秤に乗った時、貴方は『死にたくない』じゃなくて、『死にたくないけど……まあ、仕方ないか』で済ませられる人間じゃない。そこが怖い、不安だし……何よりイラつくわ」

「思ってたより色々出てきたな……」

ストレートなくせに、ごちゃ混ぜな感情表現だった。

何とか弁明したいところであつたが、しかし、どうにも言葉が思い浮かばない。

俺つて意外とそういう風に見られていたんだな、と的外れなことを考えてしまうほどであつた。

なにせ”足枷”を嵌められたばかりでもある。

「でも私、甘楽君のそういうところも、好きよ。好きだけど嫌い、嫌いだけど好き。出来れば改めて欲しいところだけれど、狂おしいほど愛おしい部分だわ」

「すげえ屈折した感情だ……」

「貴方がそうさせてるの、分かつてる？ ……なんて、言つても分からないでしょうね」
でも、それで良いわ。と、アイラが嘆息しながら言つた。何を言つても、無駄だろうから、と。

少々ムツとしてしまうような言われようであるのだが、特に反論が無いのでどうしようもなかった。

というか、正面から「好き」とか言われたら、普通に嬉しさの方が勝る。

「それに、そもそも貴方に、この辺の思考を身に着けることが、不可能であることくらい、私にも分かるもの——だから、考えたわ。私、甘楽君の後付け良心回路になろううて」

「……つまり？」

「私、甘楽君が死んだら後を追うことにするわ。それに、貴方が記憶を失う度に、泣きます」

「クソ重たい!! しかも大体間に合ってるし!」

「ちよつと待つて!! 間に合ってるってどういうことかしら!」

絶叫と絶叫が重なり合つて、「やべっ」と声を漏らした。

三年生としての生活が始まってもう、一か月以上経つが、婚約関係についてはまだ誰にも話していなかった。

月ヶ瀬先輩の言葉に甘えて、取り敢えず形式上、そういう関係性を維持してるだけの状態であるから、というのが一番の理由であるのだが、その他にも、無駄に人間関係をゴチャラせたくないからである。

ただでさえ、刺されるとかいう不穏な《予知》をされているのだ。情報開示にも、慎重になるというものだろう——まあ、それも、今この瞬間無駄になったのだが……。クソでかいたため息を一つ。それから、事情を端的に伝えれば、絶句したアイラが練成された。

人つて絶句する時こんな顔するんだな。

滅茶苦茶真顔で超怖いんだけど。これ俺、今刺されたりしないよね? ね? 未玖ちゃん? 大丈夫だよな?

「……しよせん、私は二番目の女って訊ね。ふふつ、ええ、分かっていたわよ」

「うわつ、自己肯定感がまた地に落ちてる！ げ、元気出しなよ……：餡ちゃんとか舐める？」

「甘樂君は私を、小学生か何かだと思ってないかしら？ そうね、今の私を元気にしたいなら、キスの一つでも用意して欲しいところだわ」

「……………」

「待ってちょうだい？ 何故急に気まずそうな顔で目を逸らすのかしら？ ねえ、甘樂君？ ちよつと、こつち見て？ 私の瞳を見なさい？」

ぎぎぎ……っ！ と俺の顔を自分に向けさせようとするアイラだった。

マジでやめて欲しい。反射で素直な反応をしてしまい、もう冷や汗でびしゃびしゃなのである。

ちよつと追及するのは勘弁してほしかった。

俺自身でさえ、忘れたいのに忘れられず、滅茶苦茶記憶に刻み込まれた瞬間であるのだ。

思い出すだけで、何だか思考が鈍くなってしまう……とか思っていたら、ガツチリと目を合わせられた。

「……一人ね。月ヶ瀬先輩……かしら」

「!?」

「あちらから強引にした形ね……」

「!!?」

「見ただけで分かんのか!? 相手からシチュエーションまで!?

「超すげえ!」

「魔法使いとか、魔術師よりよっぽどファンタジーじゃん!」

「どういう五感してるんだよ……いや、あるいは世界観に合わせた、近未来チックな技術だったりするのか……!?!」

「……いえ、違うわね。正確に言えば、もう一人」

「……? ……!!」

「もしかして未玖の分までカウントしたのか? こいつ……」

「家族まで含めるなよ。流石にノーカンだろ。」

「正確すぎてちよつと引く。」

「判定が厳しすぎだった。」

「まあ、相手が誰だとか、何人だとかは、正直そこまで気にはしないのだけれどもね」

「いや仮に、複数人相手がいたら俺、滅茶苦茶不義理なやつじゃない……?」

「互いが納得しているのなら、それで良いじゃない。周りの声なんて所詮ノイズに過ぎ

ないわ……そう、だからね、甘楽君」

薄っすらと微笑んだアイラが、耳元に口を近づけてきた。

これまで保っていた距離を零にして。

口づけするかのように、重なり合ってきたのだ。

「誰が本命かなんて、私、興味の欠片も無いの」

「ブレないな、お前は……」

ブレなさすぎて、ちよつと心配になるレベルだった。

普通はそこそそを、一番気にするものなんじゃないの？

生憎、まともに恋愛をしたことが無いから、何とも言えないが。

「だから、誰と付き合おうが、何人と結婚しようが、どうでも良いのだけれども——

私を傍に置いてくれないのなら、話は別。何番目だとしても、砂粒くらいの小ささだと

しても、本当の愛を与えてくれないのなら、私は私を、抑えられる自信が無いわ」

「……………」

かなり過激派な思考だった。

何かちよつとは丸くなったかなあ、とか思っていたのだが、全然そんなことは無かつ

たらしい。というか、俺が知ってるより、更に変な方向に重くなっていた。

え？ 怖い……怖すぎるんだけど……。

どうしてそっちの方向に進化してるんだ、愛人の席に固執するんじゃない。

水一滴くれれば一日生きていけるわよ、みたいなことを平然と言うのもやめろ！

こいつの未来が今から心配すぎだった。

自己愛が足りてなさすぎである。俺を見習ってほしい。

「良いのよ、私は。甘楽君が愛してくれるのなら、それで十分なもの」

「俺が愛する前提の人生になってる！ もうちよつとよく考えなよ、長いよ？ 人生」

「問題ないわ。貴方に愛されない人生なんて、私じゃないもの」

「他人に軽率に命をかけるのやめようよ……」

覚悟の決まり方が、常人のそれじゃ無さすぎだった。

はあ、とため息を一つ。

本当にこいつは、こういうやつだよな……。

今更その感情を向けてる先を、間違ってるだなんて到底言えないけれども、こういうところがあるから、距離を作りたいと思ったのも事実だった。

嫌とか嬉しいとかじゃなくて、アイラの場合、本気で後を追ってきそうなんだよ……。

マジでやめて欲しい。

あの世でバツタリ会うなんてことになったら、普通に俺が悲しかった。

「まあ、でも、分かったよ」

「何が分かったのか、140字以内で纏めてくれるかしら？」
「嫌な詰め方やめろよ……しかも140字って……」

ツイートさせる気か？ 得意技だから任せとけ。

「色々、気を付けるよ。俺が大切にしている俺ってよりかは、周りに大切にされてる俺を、大切にするように」

「ふうん……分かればいいのよ」

「ただ、記憶については黙っててもらえるか？ 実際のところ、話したところで解決しないし」

「ええ、それは勿論。元よりそのつもりよ——ふふ、二人だけの秘密って、燃えるわよね？」

「いや、この後アテナ先生には伝えるけどな」
「!!?」

再び絶句し、「どうして!？」という顔をしたアイラを無視し、アテナ先生へとメッセージを送る。

明日からは修学旅行だからな、今日中にさっさと話をつけておきたい。

爆速で返ってきた返信を確認しながら、「悪いな」と俺は笑うのだった。

まおうオマージュ

「記憶喪失ねえ……なるほど、良く分かったよ。せんせーにはどれだけ考えても答えの出せない意味不明な現象であるということが！」

「自信満々に言うこと？」

ちよつと本部の方で話そうか、というメッセージに従いやってきた第七秘匿機関本部、その一室。

完全に私室と化しているそこで、アテナ先生は「お手上げ〜」ってな感じに笑って言った。

肩をすくめて、少しだけ申し訳なきそうな顔をする。

「ま、ふざけてる訳じゃなくてね。実際、魔導の反動である可能性はあると思うけれど、やはり断言はできないといったところかな。少年が軽々と使うから身近に感じられるけれど、我々にとって魔導そのものは未知の技術だ。現状、唯一の使い手である少年に分からないのなら、せんせーに分かる道理はないさ」

「ま、そうですよね……」

半ば分かっていたことではあったが、やはりガツカリが先に来る。

どうにも俺はこの辺り、アテナ先生にはかなり期待していたところがあつたらしい。というか、単純に頼れる人カテゴリーに入れていたつぽい。

まあ、作中最大の天才である黒帝と混ざっていて、なおかつ俺を一方的に叩きのめせるだけの実力を誇っているのだから、それも仕方のないことであるような気はするが。

自身を実験台にして色々確かめていくしかないのだろう。都合の良いことに、俺には年齢とは釣り合わないだけの記憶がある。

記憶が飛び過ぎて廃人になったり……なんてことも早々起こりはしないはずだ。

「覚悟を決めるのが早すぎるだろう……どうしてこう、少年は自分を犠牲にする時だけ思い切りが良いんだ」

「そうは言っても、俺の問題ですし。一番頑張らなきゃいけないのは俺でしょう?」

「一理あるけれども、少年はまだ子供なんだ。そうする前に大人に頼りたまえ」

「頼った結果なんですけど……!?!」

アテナ先生に分からないのであればもう、世界中探したって分かる人はいないに決まっている。

校長先生ですら、魔法魔術に関する造詣の深さはこの人には敵わないほどであるのだ。

「嬉しいこと言ってくれるじゃないか……うん、概ねその認識は正解だ。けれども魔導

と破滅、どちらに關してもせんせーたちより詳しいやつが一人、いるだろう?」

ピツと指を立て、不敵に笑むアテナ先生だった。参ったな、全然分かんねえ。

レア先輩のことではないだろう……確かに彼女はその身で魔導を扱ってはいたが、飽くまでそれは第二の破滅に憑依されていたが故だ。

レア先輩本人が習得したという訳ではないし、魔王と違って残滓とやらが残っている訳でも——あ?

「あつ、そつか。魔王」

「はい、その通り。良く出来ました、せんせーポイント100点あげよう!」

「超いらねえ……ちなみに何に使えるんですか?」

「1点でハグ、10点でチュー、100点で結婚、かな……」

「アテナ先生しか得してねえ……」

滅茶苦茶肉食系な景品だった、絶対にいらぬ。

どうしてこう……隙あらば結婚! みたいな頭をしているんだこの人は。

そのくせ、いざれ俺を刺す可能性があるのだから、恐怖レベルが一段と上がっていた。大体、何でいきなり結婚なんだ。

せめて順序を踏んでくれ。

「えっ? それじゃあ……付き合っちゃおう?」

「嫌です。ほら、さっさと行きますよ」

「ああん、少年のそういう辛辣なところも、せんせー大好きだよ……」

「どういう性癖してんだよ……」

どこからか聞こえてきた気のする、

「オメーナーが言うんじゃねえよ!」

という声を見無視して俺達は部屋を出た。

「しつかにたないのう、そしたら余たち一つになっちゃおう?」

「なにになにないに、何の話?」

改めて訪れた魔王の私室——というか、魔王を収容している第七秘匿機関の本部、地下一階。

殺風景ながらも調度品は用意されており、その一つであるソファに寝転がった魔王が、頬を赤らめながらそう言った。

不覚にも一瞬、色気に近い何かを感じてしまったが、『無敵!』と書かれたぶかぶかの白TEEシャツがそれを台無しにしてくれていた。

あ、あつぶね……。

何千年生きているかは分からないにしろ、見た目十歳程度の少女に見惚れるとかギリ

ギリアウトなラインだからな。

気を抜かずに接していこう。

「は？ おいおい、聞き捨てならないな魔王。少年と一つになるのはせんせーの特権なんだが？」

「ちよつとアテナ先生は黙っててもらえますか？ 話が進まないのだから」

むんずと口を掴めば叱られた犬みたいな目で見て来るアテナ先生だった。おすわり！ と命じればそこで一生座って待つてそんな雰囲気である。

先日俺をボコボコに叩きのめした人間とは思えないし、原作におけるラスボスとも到底思えない体たらくだった。

まあ、そのラスボスの片割れである魔王も今では謎の少女と化しているのだが……。改めてそう認識するともう色々と滅茶苦茶だなと思った。

「何の話もなにも、魔導とその代償についての話じゃったろうが」

「いやっ、確かにそうなんだけど……え？ なに？ 本当に魔導の代償なの？」

「当ったり前じやろうが……何事も、大いなる力には大いなる代償が付きものじやろう。そういうことじゃ」

ふああと欠伸交じりに魔王は、至極当然のように言う。

ソファからぴよんつと跳ねるように降り、てちてちと歩み寄ってきた。

「大体のう、そのちっぽけな人の身の、これまたちっぽけな脳みそで魔導を演算すること自体が本来、不可能なんじゃ。それをお前様は成し遂げている。ノーリスクとはいくまいよ」

「ええ……俺、頭はそんなに悪くない方だと思つてただけど……」

「良し悪しの話はしとらんわ！　ちゅーかお前様は恐らく、人類史上最も効率よく脳を動かしてるじゃろうよ。でなきや魔導を使うのは不可能じゃ……じゃがな、そもそのスペックが足りておらんじゃよ。」

「じゃからこそ、魔導を使った後は意識を落とすとるんじゃ。身体だけでなく、脳もズタボロに酷使していたという訳じゃな。どうせ以前から、身に覚えはあつたんじゃろう？」

「むっ……」

言われてもみれば……というか、言われるまでもなくそうである。

初めて魔導を使った際は校長の存在が記憶から吹っ飛んでいたし、第二の破滅戦後はレア先輩の存在が頭から消えていた。

多分、あの瞬間はレア先輩以外のことも忘れていたのだと思う。

どちらも強制的とも見れる意識の落ち方をした直後のことだ。

修学旅行の件にしたって、その前に魔導を用いた模擬戦をしたばかりでもあるし、理

には適っていた。

「つまり俺は毎回、ガラケーで原神を無理矢理起動してたから、ガラケーが耐えきれなくて落ちてたってことになるのか……」

「何言つとるのかさっぱり分からんが、つまりはそういうことじゃな」

理解を完全に諦めた魔王だった。ただ納得したことは理解してくれたらしい。

理解のあるまおピッピで助かるな。

「今恐ろしく不快な呼び方をされた気がするんじゃないが？」

「気のせいだよ」

「気のせいかあ、それなら仕方ないのう」

「バシィー！ と俺の足を蹴りながら魔王が言う。全然仕方ないで済ませてくれないじゃん。」

見た目相応の威力しかないので全く痛くはないのだが、取り敢えず魔王の気は晴れたらしい。

肩で息をしながら俺を睨む。

「そこでじゃ、余から一つ提案があるという訳じゃよ」

「……さっきの、一つになるとかどうこうとかいう？」

「うむ、それじゃ。まあもつと具体的に言うならば、余と契約して欲しいという話になる

んじやがの」

「契約……？ 魔王が、少年とかい？」

怪訝そうに言葉を漏らしたのはアテナ先生だった。俺を引き寄せ、代わりに前に出る。

構図だけ見ると生徒を守ろうとする先生に見えなくもなかった。

問題は相手が力を失った幼女であり、アテナ先生も真つ当な先生とはギリギリ呼べるか呼べないかのラインにいることくらいだな。致命傷だろ。

「そう悪い話でもなからう——代償は余が引き受けてやると言っているんじや」

「へえ……それじゃあ、その引き換えに何を要求するんだい？」

「それも言うた通りじや。余を負かした主様と共にやることよ……まあ、言い換えるのならば一定の自由じやな」

「随分謙虚だなあ、とてもじやないが悪逆非道の限りを尽くした魔王様とは思えないや」

「そんなもん今更じやろうが……！」

「ふふつ、確かに。さて少年、せんせーは美味い話だと思ってるんだけど、どうだい？」

「いや、どうも何も話が全然見えないんですが……」

完全に俺だけ置いてけぼりな会話だったからね、今の。

そもそも契約って何？ と言うところから始めなければならぬ。

習った覚えもなければ、ゲーム内に出てきた記憶もない。完全に新出情報なんだよな。

いい加減、全く知らん情報を叩きつけられることには慣れてきたが、それはそれとして意味不明だった。

「文字通り、互いの合意を以って契りを交わすことじゃよ。ただ、用いるものが書類や口頭ではなく、血と魔力というだけじゃ」

「ええ……何か急に怪しい術感出てきた……」

「まあ、システム的には魔術的と言うよりは呪術的なものじゃからな。とうに廃れた古い術じゃし、それも仕方なからう」

曰く、契約とは今からも何百年も前に魔獣魔族と人類が共存する為に編み出されたものらしい。

今となつてはもう、互いの存在を認知した瞬間殺し合いに発展するような仲——いわば覆ることのない敵同士であるのだが、昔はそうでなかった時代があったということだ。

長い歴史から見れば瞬き一回分にも劣る、刹那的な時代であつたらしいが。

それでも互いが手を取り合い、上手く共存しようとする動きが大きかつた時代があつたのだという。

とはいえそうなる以前も当然殺し合っていた仲であり、ある日を境に「はい！ 今日からみんな友達！ 仲良くしようね〜！」と言われて「はい、分かりました」が出来るようなら、そもそも敵対なんてしていない。

魔獣魔族も人類も、剣は収めたが常に柄は握っている状態であった。

書面や口頭で幾ら約束を交わそうとも破られる可能性は常にあり、仮に破られた際の制裁を設けられようとも多発しては意味がないし、互いの不信は強まるばかりだ。

そしてそれは魔王にとつても、当時の人類のトップにとつても望ましいものではなかった——故にこそ、契約というシステムが確立されたのだという。

契約者同士の血と魔力に契約を染み込ませ、互いの身体に互いの血と魔力を分け合い馴染ませる。

これによつて契約を破ろうと考えただけで、血と魔力は契約を果たそうと自動的に動き出す——例えば、身体の自由が利かなくなったり、意識を強制的に落とされたり、果てには自死したりといったように。

少々過激ではあるが、このくらいでちょうど良かったのだという。

お陰で数年ほどは平和を保てたというのだから、効果自体はあったのだ。

「とはいえ、恨みや憎しみといった感情は個人それぞれに宿るものじゃし、制御できるものじゃないからのう。小さな火種があちこちに飛び火して、結局今の時代に繋がった訳

「じゃな」

「ふうん、だから契約システムは廃れたんだ。契約の存在自体が、魔獣魔族と人類が共存する象徴だったから」

「ま、そういうことになるの。結構頑張って作ったんじゃがなあ」

今や使えるのは余だけじゃ、と半笑いで言う魔王だった。その瞳には特段これといった感情は映されていない。

残念だとは思っているが、割り切ってもいるのだろう。

伊達に長生きしているという訳じゃないということだ。

あるいは時間がありすぎたが故に、諦めることが出来てしまった……なのかもしれないが。

そこまで踏み込む勇氣は俺に無かった。

「お前様が嫌だと言うのであれば余は強制しないが、どうじゃ？」

「俺は特に文句はないけど……さっきの通りの条件なら、ちよつとお前が不利すぎないか？ 俺だけ得してる気がするんだけど」

契約内容を簡潔に言ってしまうえば、俺に降りかかる魔導の代償を魔王が引き受ける代わりに、俺と魔王は行動を共にしなければならない、というものである。

ちよつと俺に課せられた条件が緩すぎるだろ。

ただでさえ魔導の代償は記憶を失うことなのだ。釣り合っていないにもほどがある。せめてこういうのは対等であるべきなんじゃないだろうか。

「クカカツ、それでもあるまいよ。余はこのままでは、未来永劫ここに閉じ込められかねんしのう。そう考えれば、お前様の元にいた方が余としては都合が良い」

「いやでもお前、アレだよ？ 下手したら……:……:というか確実に魔導は使いまくるから、記憶ゴリゴリなくなっていくよ？」

誰にだって、失くしたくない記憶はあるものだ。そこに例外はない——あつてはいけない。それが人ではない、魔獣魔族であつても。

だというのに魔王は目を細め、諦めたように、

「長生きしすぎるとのう、忘れてしまいたい記憶も増えてしまうもんじゃ。つまりこれはWin—Winって訳じゃな」

なんて言うものだから、条件を付け足さなければならなくなった。

やれやれ、仕方のない魔王様だな。

「じゃあ、お前が俺と契約している間の記憶は、絶対に忘れたくない最高の記憶にすることを俺は誓うよ」

「……お前様、そんなんだから誑しと言われるんじゃぞ」

「あれ!? 悪口が返ってきちゃったぞ!」

今のは素直に感謝されるところなんじゃないのか!? と思つたが、返つてきたのはただのジト目であつた。

何か悪いことしたかなあ……と反省したくなるような目である。

でも、これくらいじゃないと個人的に釣り合わないというか、これでも全然足りなくらいなんだよな。

「じゃが、悪くない。よろしく頼むぞ? お前様よ」

「ん、任せとけ」

差し出された小さな手を握る。瞬間、ナイフをドスツ! と鋭い勢いでぶつ刺された。背中にはない、握手した手にだ。

刃は俺と魔王の手を貫通していたし、そうしたのはアテナ先生——ではなく魔王だった。

「うおつ、攻撃態勢に入るのはやめんか!? どうどう、落ち着けお前様! 契約、契約じゃからこれ! 血と魔力が必要と言うたじやろがい!」

「だからつていきなりぶつ刺す馬鹿が何処にいるんだよ……!」

ダラダラと互いの血が混じり合いながら落ちて小さな血だまりを作っていく。

やつべー、超痛いわ。

普通に泣きそうになってきた。

「二度も死にかけておいて、今更この程度でうだうだ言うな。みつともないじやろうが」
「いや痛いもんは痛いに決まってるだろ。お婆ちゃん魔王と違って、俺の神経は若々しく活き活きしてんだよ……!」

「さらつとデイスるのはやめんか! 余は慣れてるだけだつっの」

全く……と小言を零しながら魔王は、もう片方の手で血だまりをなぞる。

早くナイフ抜いてくんねえかな……と思いつつ見つけていけば、血は少しずつ色を変え始めた。

というか多分、発光し始めた。ゲーミング血液かよ。

絶対に輸血されたくない……。

「問答無用で半分こじやがな。ほれ、多少痛むが我慢じゃぞ。我慢じゃからな? 良いか、気合で耐えるんじやぞ? 男の子じやろ? な?」

「なにになになになにに、何なのその熱心な確認は。怖すぎるんだけど、えっ、なに? そんなに痛いの?」

「……昔のことじやがな。お前様の倍ほどの体躯の大男が、痛みで失神しおったよ」

「いつ、嫌だー! そんなものを俺の中に入れるなッ!」

「時すでに遅しじやのう」

ズルリとナイフが抜かれ、代わりと言わんばかりにゲーミング血液は入り込んできた

——瞬間、視界がバツと白くなる。

ガクンと身体が崩れかけて、反射的に腕で支えた。
やっべー、今一瞬気絶したわ。

しかも気合で起きたとかではなく、あまりの痛みに気絶した瞬間、その痛みでまた起こされたと言った方が正しい。

これも拷問だろ。

流行らなかつた理由と廃れた理由をいつべんに理解した瞬間だった。

馬鹿なんじゃねーの？

内心で悪態をつきまくっていれば遂に血の注入は終わり、代わりにプレスレットのよ
うな文様が手首に刻み付けられた。

魔王の方にもそれは表れていて、満足そうに笑う。

「うむ、うむ、よく耐えたのう。これで契約は完了じゃ、どうじゃ？ 気分の方は」
「はあつ、はあつ……最悪以外にあると思うか？」

こういうことは先に言えよ、ハッ倒すぞ——とまで言いたかったのだが、疲労が先に
来て口が閉じてしまう。

そんな俺を見ながらカラカラと笑う魔王を視界に収め、後で一発全力でぶん殴ると誓
うのだった。

ひまりガール

修学旅行は飛空戦艦で行くとのことであつた。ただの飛行機ではなく飛空戦艦な辺り、ゲームっぽくてワクワクしてしまうのだが、それはそれとして戦艦はおかしくないか？

明らかに襲撃される前提の乗り物じゃねえか。

俺が知らなかっただけで、アルティス魔法魔術学園は目の敵にされがちなのかもしれな
ないと思つたが、魔王は無力化しても魔獣魔族そのものは未だ健在である。

この世界は基本的に魔獣vs人間という構図が描かれているからな。

お空をふわふわ飛んでいたら、魔獣に襲われるのも止む無しというものだった。

最近だと授業で『呪霊』とかいう存在も昔からいるんだよ〜ということ習い、目ん玉が飛び出そうになつたところであるのだが、呪術騎士とかいうのが存在するのだから有り得なくもない話である。

まあ、そうは言つても、その呪霊も今ではめつきり少なくなつてしまつたらしいのだが。

魔獣の方も呪霊よろしく駆逐されて欲しいものである。

ただのファンタジーとは違い、科学が発展しているのが特徴の一つとも言える『蒼天に咲く徒花』ではあるが、それを以てしてやっとな拮抗……どちらかと言えば人類有利かな、程度のラインを保っているのが現状だ。

魔獣は繁殖スピードが人間とはダンチなくせに、生まれたその瞬間から一定以上の知能と強さを保持しているのがズルいんだよな。

上位の魔獣……魔族ともなれば、普通に言葉を交わせるほどである。

スペックだけ見れば、人類より上位の生命体だった。

そうだと言うのに話し合いの一つも行われないのは、この敵対関係が連綿と続きすぎたからなのだろう。

あるいは、一度和解のタイミングを逃してしまったからか。

人も魔獣も互いの家族を殺し過ぎた。それはもう今更止まらないし、止められない。

仮に魔王が間に入ったとしても不可能だろう——そう考えさせられるほどのストーリーが原作ではあったんだけどな。

どこ行っちゃったんだろうねえ……いや、誰のせいかと言われれば、半分くらい俺のせいである気はするのだが。

それにしたって、三年生になったというのに、魔獣や魔族が全然絡んで来ないのは少

しだけ不穩だった。

いわゆる幹部ポジにいた魔族たちは今頃何やってんだろう……魔王が死んだと思ってお葬式とかやってんのかな。

遺体が無いお墓と言うのも可哀想だし、その内遺体にして持つて行ってあげても良いかもしれない。

「おつ、おとおおお前様はどうしてそんな残酷なことが言えるのじゃ!? 余、頑張ってるじゃろう!?!」

「あれ? 起きてたんだ。おはよ」

「ずーっと起きとつたわい! 余は朝六時には目覚めて夜八時には寝るタイプじゃぞ!?!」

「幼女ちゃんかよ」

飛行機ともヘリとも違う、実に快適な空の旅。早朝に出航した艦の外。

ビュツフエ形式だった朝食会場から抜けてきたら、魔王がぬるりと生えて睨みつけてきた。

ビツクリするくらい怖くなく、むしろ可愛らしさまで備えている。

実年齢を加味すればお婆ちゃんという言葉すら足りないほどだというのに、見た目は完璧な幼女なんだよな。

「つーかお前、俺の思考が読める訳？」

「読もうと思えば多少は、といった程度じゃがな。今や一心同体のようなものじゃし、当然じゃろ」

「全然当然ではないが……」

「そういうことは先に言えよ。えっ？　全然そういう話は昨晚してくれなかつたよね？」

「本当の本当に重要なこと以外の情報全部カットしてるじゃねえか。」

「一発ひっぱたいでも許される気がしてきたな……」

「まあまあ、そう殺気立つでない。この辺の権限は共有しとるからのう、その気になれば読ませんようにすることもできる」

「……つまり、俺もお前の思考を読んだりってことが出来る？」

「そういうことじゃな、余とお前様は契約上においては対等であるからの——まあ、行動の自由はお前様に縛られておるし、精神的な意味合いでも屈しておるから、実質主従関係ではあるのじゃが」

「主従って……」

「別に従えたつもりはないんだけど……」

「見た目十歳程度の幼女を従えている中高生ほどの男子とかもう、字面からしてちよっ

ときついでろ。

もうちよい歳重ねたらかなり事案んだけど。

そう思いながら魔王を……正確に言えば、魔王の上半身が生えている床へと目を落としました。

もちろん、飛空戦艦の床に穴が空いているという訳でも無いし、魔王が真つ二つにされてその上半身が床に置かれている訳でも無い。

魔王は今、俺の影から生えてきているのだった。

いや、なんか……俺と共にいるってこういうことだったらしいんだよな。

要するにあの契約は、封印の側面も持ち合わせていたということだ。

実質的に魔王は俺へと封じ込められ、互いの合意の下に、契約を破棄しなければ離れられなくなったという訳である。

まあ、魔導の代償を肩代わりするというのだから、否が応でも傍にいなければならぬとは思っていたのだが……。

それでもまさか、こんな形になるとは思わなかった。

原理的にはアイラの先天性魔術属性である《暗影》や《極夜》には近いのだろうが、イマイチ仕組みが分からない。

何かこいつ、影の中にベッドとかテレビ置いてるっぽいんだよな……。

完全に扱いがホテルのそれだった。

ちよつとエンジヨイしすぎだろ。

「クカカツ、中々快適じゃよ。お前様の中は」

「そいつは重畳、これで文句とか言われても困るからな」

「じゃが、これは良くないのう」

言いながら魔王が俺の手を取る。ちよつと契約した際に紋様を刻み込まれた方の右手には今、銀色のブレスレットが巻かれていた。

純銀で作られたそれは、紋様を隠すように手首で揺れている。

無論、貰い物である。こんなお洒落な小物を俺が用意できる訳ないからな。

では誰に貰ったのかと言えば、レア先輩にであった。

本部から寮に戻る最中にバツタリ会ったのである。

第二の破滅について形あるお礼をしたかったらしく、断るのも失礼だし素直に受け取った結果だった。

最近は何だか忙しい……というか、アテナ先生に調べ物を頼まれているらしく、あんまり話す機会が無かったから、ちよつと以上に喜んでしまった。

「余だから良かったものの、仮に他の女子であつたら一悶着起こること間違いなしじゃからね？ マジで気を付けた方が良くぞ、お前様」

「ええ、何かそんなに言われるようなことしたかな、俺……」

「今のお前様は余がつけたマーキングの上に、他の女子のマーキングを貼り付けたようなもんじゃからな？ 無自覚怖すぎじゃろ……」

「マーキングとか怖いこと言うなよ……」

お礼つてことで貰ったんだから、それ以上の意味はないだろ。ない……はずだよね？
これが例えば日鞠や月ヶ瀬先輩であれば、何かしらの含みがあると考えても良さそうなものであるのだが、相手はあのレア先輩なのである。

大丈夫だろ、ほぼ間違いなく。

「まあでも、ヤバいって言うなら外すか？ 左手に巻けば良いと思うし」

「んおおおおお！ マジで分かつたらん！ あのレアとか言う女子が手ずから！ 意図的に！ 契約紋を見てから右手に巻いたんじゃろうが！ 絶対にそのままにしておくんじゃぞ?!」

「お、おお、圧が凄いな」

かつてないほどの圧力を見せて来る魔王にたじろぎながら数回頷く。

女心つてのは難しいもんだ、魔王がいてくれたのはそういう意味でも良かったのかも
しれない。

「余もまさか、恋愛アドバイザーの真似事をするとは思っておらんかったがの……」

「別に俺も求めてないけどな」

「お前様の場合！ 下手したら刺されて死ぬから必須なんじゃっつーの！」

バシバシと足を蹴りながら叫ぶ魔王だった。

まあ、下手したら刺されるというか、最早刺されるのは確定の未来を予知されているのだが……。

何とか魔王パワーでどうにか出来ないだろうかと思った。無理だろうな。無理だね。それにしても、マーキングか……。

人に何かを身につけさせたり、あるいは契約のように跡を付けるという意味合いでその言葉を使うのであれば、俺に一番マーキングしてるのは破壊と言えるだろう。

もう全身傷跡塗れだからな。発展した科学の恩恵を全身に受けているお陰で五体満足ピンピンに生きてはいるが、どうしても深い傷は残る。

歴戦の戦士っぽくてちよつとかっこいいと思ってるのは秘密だ。

「……お前様、それを他の者に嬉し気に見せたりするなよ？ 絶対じゃぞ？」
「どういう角度の念押しなんだよ、しねえよ」

嫌だろ、嬉し気に裸体を見せてくるやつ。老若男女問わずに普通にホラーだよ。

露骨にホツとしてる魔王を見て、俺はこいつにどう思われているのか問いただしたくなかった。

「あは、かんかん見つけ〜！」

「……日鞠、一々抱き着いてくるな。ビックリする」

「日鞠に探させた、かんかんが悪いんだよ〜？」

「そうなるのか……」

責任転嫁の仕方が斜め上な日鞠だった。

背中に飛びついてくるものだからワンチャン刺されるのかと思いきったが、特にそんなことは無かったらしい。

よっこいせ、と背中にへばりついた日鞠を引き剥がして隣に並ぶ。

「こんなところで何してたの〜？」

「ん〜？ ちょっと風に当たりたくてな。お腹もそこそこ膨れたし、静かなところに行きたくて」

いつの間にやら魔王は影にすっこんだらしい。別に隠すことではないが、魔王がそうしたというのならわざわざ伝えることもないだろう。

どうせ旅行先に着いたらいつものメンバーで集団移動する訳だしな。

その時に纏めて話した方が効率も良いだろう。

「ふうん……？ まあいつか。それよりね、かんかにちよつとお願い事があるんだけど、聞いてくれる〜？」

「良いよ、俺に出来ることなら」

「日鞠に魔導を教えて欲しいな」

「無理」

「即答し!?!」

何で!?! と俺を揺さぶる日鞠であったが、これだけは聞けない頼みだった。

シンプルにデメリットが大きすぎる。俺、日鞠に忘れられたら泣く自信あるからね？
それにそもそも、魔導は説明したからと言って扱えるものではない。

感覚的な話にはなってしまうが、魔導とはそれそのものが人知の外側にあるものだ。
破滅がどうしてるのかは知らないが、少なくとも俺はそれを自分の理解できる範囲に
落とし込んでいくに過ぎない。

俺が基本的に砲撃しか使用していないのはそういう訳である——理解出来ていない
部分は、取り敢えず放出しておけば形になるからな。

もう少し理解できる範囲が広がれば色々と応用が利くはずなのだが、これがまた難し
い。

「力を求めるのは悪くないと思うけど、日鞠の場合は魔法魔術極めた方が手っ取り早い
よ。根源魔術が使えるのなら、魔装だって使えるはずだしな」

「でもでも、それじゃあ破滅相手には一步届かないんだよ」

「そうでもないだろ。事実としてアイラは魔導と拮抗した訳だし、アテナ先生に至っては俺をボコしてる——ああ、そっか。何だ日鞠、伸び悩んでるのか」

「……むう〜」

凶星を突かれたのか、頬を膨らませる日鞠だった。あまりにも珍しくて思わず笑ってしまう。

敢えてハッキリ言うのだが、日鞠の成長速度は異常だ。原作でさえ、ただ呼吸しているだけで経験値を得ている様な存在であったのに、今となつては成長曲線が八十度くらいの角度で伸び続けているのである。

ただその周りのアイラだったりアテナ先生が完全に特異点になっており、その成長が霞んでいるのだった。

そこは完全なイレギュラーなので比べてはいけないのだが、なまじ身近な人間であるだけにどうしようもないのだろう。

故にこそ焦る。故にこそ足りなさを必要以上に自覚する。

日鞠は常軌を逸する天才であるからこそ、その足りなさを正確に測ること出来ているのだろうし、同時にこれほどまでに後れを取ることなかったのだから、焦燥感が高まる一方でしかない。

焦燥感は視野を狭め、狭まった視野は短絡的な答えを求めてしまう。

日鞠の場合、それが魔導だったのだろう。であるのなら、そこを修正してやるのが俺の役目とも言えた。

未だに膨らんだままの日鞠の頬を、むにむにと揉む。

「たまに……ってどうか、最近は結構考えることがある。これから先、俺単独で破滅を抑えるのは難しいって。みんなにも援護じゃなくて、同じ土俵で戦ってもらわないといけなくなる時が来るって」

第二の破滅でさえ、皆の協力がなければ倒せなかった。まだあと五体も控えていると、いうのである。

アテナ先生かナタリア校長が常に傍にいてくれるのであれば憂うことも無いが、そうもいかないのが現実だ。

基本的に俺達は学生という単位で動くことが多いし、第一第二と返り討ちにしたことから第三の破滅に狙われる確率は高い。

というか多分、確実にぶつかると。魔王のカスのドラゴンリーダーが反応しない内は多少安心できるが、反応し始めたら覚悟を決めるしかないだろう。

もしそうなった時、仮に俺が万全の状態であっても、一騎打ちは避けたかった。

第二の破滅がレア先輩を利用したように、やつらは何を利用するのかも分からないのだし。

「そう考えた時に、やっぱり一番最初に隣に来てくれるのは日鞠しか考えられないんだよな。だから、その……なんていうかさ」

ぽやんとした表情の日鞠の手を握る。小さくて白くて温かい。

俺のイメージよりずっと少女らしく、これだけでは弱々しそうな印象すら受けそうだった。

とても戦いに身を投じてるようには思えなくて、それでも伝えなければならなかった。

「俺は多分、日鞠を一番信頼してるんだよ。才能も性格も思考も戦力も何もかもひつくるめて、隣に並んでくれるのは日鞠だって」

「——っ」

「俺が保証するよ、日鞠は焦らなくて良いって。今はただ、順調に積み重ねていく時なんだ。日鞠はんおっ!？」

ドッ！ と勢いよく胸元に日鞠が飛び込んでくる。衝撃に負けて下がろうとすれば、回された腕にガツチリ動きを止められた。

我ながらかなり良いことを言ってるつもりだったのに……。

無様な遮られ方をしてしまい、そこはかとなない残念感を覚えてしまう。

そんな俺にグリグリと日鞠は顔を擦りつけてくる。

あんまりそうされると段々ドキドキしてきちやうからやめて欲しかった。鼓動にブーストがかかり始める。

一度は背中から抱きしめたことがあるものの、あれは不可抗力だったわけだし……。

「かんかんは、本当に欲しい言葉をくれるよね」

「俺が計算高いやつみたいない方やめない？ 思ってること素直に言ってるだけだから……」

「あは、知ってる〜！」

一際強く抱きしめられた後、パツと離れた日鞠が俺を見る。

頬をほんのり朱色に染めた日鞠は、太陽をバックにするようにして笑った。

「甘楽のそういうところ、日鞠好き」

「……お前ね、冗談でもそういうこと言うなよな」

勘違いしちゃうだろ、と付け足す前に踊るような足取りで日鞠は屋内へと消えて行った。多分今の俺の返答、頭っから聞いてないな、アレ。

レア先輩と言ひ、日鞠と言ひ、俺を惑わす女性が多すぎる……。

アイラとアテナ先生と月ヶ瀬先輩？ あれは例外だろ。

アイラは恋と呼ぶには求めるものが少なすぎるし、アテナ先生に至ってはもうただの変人だ。月ヶ瀬先輩も何かしらの使命感に駆られているようにしか見えない。

「ん？ ていうか今、名前呼びされたか？」

俺の勘違いでなければそんな気がしないでもない。ふむ……と少しばかり考えたが、勘違いと割り切ることにした。

名前呼び捨てとか固有ルートに入らないと有り得ないからな。

俺のちよつとした願望が混ざり過ぎたのだろう。こういうところも気を付けて行かないと。

いつ刺されるか分かったもんじゃない。

「お前様、そういうところじゃぞ……」

うんうん、と頷いていたら再びぬるりと生えてきた魔王が、滅茶苦茶蔑むような目でそう言った。

どういうところだよと問い質す前に、旅先へと着いたアナウンスが響き渡った。

ひろいんずアピール

修学旅行先は日之和ヒノワと呼ばれる、極東の島国であった。

呪術が生まれた土地であり、呪霊の発祥地とされているところ。

そして何をどう考えても日本をモチーフにしましたね、みたいな国である。

いや、ね。分かるよ、極東の島国とかもうそのまんまって感じだし。

何より街並みは如何にも和風といった雰囲気であるし、ちよつと視野を広げてみれば天守閣とか見えるもん。疑いようがないほどに日本である。

しかし当然ながら、『蒼天に咲く徒花』には登場しなかった国である。その為ここでは何が盛んで、どういった人たちが住んでおり、どのようなイベントが発生するのかはさっぱりわからない。

色んな意味で未知の土地である。

ただ、『ヴァルキュリア呪術騎士学校』が存在する国であるという一点だけで、まあ何かしらのイベントが発生しちゃうんだろうな……という確信だけは得ていた。

流石に俺の影響でポツと突然現れた国という訳でもあるまいし、俺の知り得ないイベ

ントが起こる……あるいはこの修学旅行自体がイベントの一環である可能性は非常に高い。

つか絶対何かしらのアクシデントが起こる。

数多のイベントやイレギュラーに巻き込まれまくる二年間を過ごしてきた俺の本能は、冷静にそう理解していた。

何ならワンチャン、第三の破滅とか来ちゃつてもおかしくはない。

魔王の察知能力も大して役に立つもんでもないからな。

しかし、だからと言って四六時中警戒なんてしていたら身が持たないだろう。

そう考えるのであれば、まあ、今くらいは遊びに全振りしても良いのかもしれないな
と思つた。

「……いや、流石にはつちやけすぎじやろ。ワンパク小僧か？」

「まあ年齢的にはギリ許されるんじゃないか？　今年で十五だし、俺」

さつさと飛空戦艦から降り、パパツと今日泊まる旅館に荷物を置いてきた俺は、旅館の外でパーティーのみんなを待つていた。と言つても、いつものメンバーではあるのだが。

アルティス魔法魔術学園の修学旅行は何と初日から自由行動である。それともう、何を修学するんだよって感じではあるのだが、まあゲームだしな……。

特におかしいというほどのことでも無いし、学生の身からしてみたら文句の一つもない。むしろ気分としては最高に近いんじゃないだろうか？

集団でただ旅行に來ただけみたいなもんだからな。

「それにしても、大分時間かかっているな。荷物置くのにそんなにかかるもんか？」

「女子には準備に相応の時間が必要なんじゃよ」

「そういうものか……」

そうと言われてしまえば、女子ではない俺には頷くことしかできない……いやつ、待て！ 立華君は女の子判定しても良いのか？

確かに最近は女性体でいることが多かったが……。

身体が女性だからお前は女性！ と決めつけるのは、今の時代的にちよつとリスクーな気がしないでもなかった。もちろん、その逆も然りであるが。

ただでさえ魔法魔術界は精神性だったり、魂だったりの存在が重んじられがちなのだ。

でもなあ……立華君、女性体の方が気に入ってる説が濃厚なんだよなあ。

まあ、彼（あるいは彼女）自身がその内決めるだろうし、それまではノータッチとしておこう。

ぶつちやけ、あまり踏み込みたくもないし……。

変に俺の言動から影響を受けて欲しくなかった。触らぬ神に祟りなしってな。

「ヘタレじゃのう」

「喧しいな、これ以上責任とか負いたくないんだよ……」

責任を負わせたり、責任を負ったりするというのは、それだけで深く重い関係性を作ってしまうものだ。

そう考えるのであれば、やはりそういったものは出来るだけなくした方が良好だろ
う。

周りの人の為にも、自分自身の為にも。

「あら、珍しく難しい顔をしているのね。待たせ過ぎてしまったかしら？」

「や、ちよつと考え事を——」

してただけだよ、と紡ごうとした言葉はしかし、形にはならなかった。

刺されたという訳ではないし、もちろん致命傷になるような攻撃を受けた訳でもない
——いや、いいや。

ある意味では致命傷級の攻撃を受けたと言うべきだろう。

何故ならば——

「着物姿、だと……!?!」

「ふふつ、どうかしら？ 似合ってる？」

黒地に花柄をあしらわれた着物に身を包んだアイラは、いつもと比べて幾らか大人っぽく見えた。

元より長い黒髪と着物と言うのは相性が良いのだろう。普段から着ても違和感がないほどのピッタリ具合で、シンプルに見惚れてしまった。

ザ・大和撫子と言わざるを得ない。

雑に言えば美人のお姉さんって感じだ、ハッキリと言えばかなり好きである。

それなりのシチュエーションで出会っていたら一目惚れしていたかもしれない。危ないところだった。

「似合ってる、凄い綺麗だ」

「そ、そうやってストレートに褒められると照れるわね。ありがとう、甘楽」

少しだけ頬を染めながらはにかむアイラ。すげえな、こうやって見るとアイラが正統派清楚系美少女みたいだ。

とてもではないが俺の愛人ポジに固執している異常者には見えない。

「甘楽は制服のままなのね、着物は好きじゃなかった？」

「いや、そもそもそういうサービスしてたことすら知らなかったから……」

知っていたら、いの一に着替えさせてもらっていた自信があった。

流石に今から向かうのは時間を食い過ぎるだろうし、残念だが今回は見送りだな。

くっ、俺としたことが……!

「あは、お待たせ〜!」

「おっ、と」

背後から近づいてくる音で察して振り向けば、日鞠が飛び込んできた。

反射で受け止めて抱える。

「おお、ナイスキャッチ、かんかん〜!」

「日鞠は何着ても自由だな……」

戦闘用の衣装という訳でもあるまいし、あんまり飛んだり跳ねたり走ったりしたら着崩れちゃうんじゃないの? という心配があった。

もしそうだったら俺、直してやれないぞ……。

ついでに言えば、アイラも立華君も無理そうである。ていうか、こつちの人じゃないと無理だろ。

しかし日鞠はそんな俺の懸念を意にも介さず、纏った着物を見せつけてくるのだつた。

こちらはクリーム色がベースとなっており、金色の帯が締められている。

何というか、全体的に派手だった。けれども嫌らしさはなく、日鞠独特のふわふわとした雰囲気とマッチして、良く纏まっている。

どちらかと言えば、美女というよりは美少女と言うべきだろうか。

元より彼女が持ち合わせていた少女性が強く押し出されているようで、端的に言えばすっげー可愛かった。

「むん……」

「ちよつと？ 甘楽？ 私の時とちよつと反応が違い過ぎないかしら？ 顔に『安易に

感想を言いたくない、語彙をちよつと練らせて欲しい』って書いてあるのだけれども？」
私を前座みたいに扱うのはやめてくれないかしら！ と叫ぶアイラだった。お陰でハッ、と正気に戻る。

あ、あつぶね……。

感想考えてるうちにかなり見惚れちゃってたんだけど。

あまりにも身近なので、ここ最近ほとんど意識もしなくなってしまうたが、それでも日鞠はとんでもない美少女だ。

珍しい装いも相まって、改めて『ヒロイン』であることを思い知らされる。

無論、一度そういう目で見てしまえば、アイラでさえ直視しづらかった。

「まあ、何だ。可愛いよ」

「えへへ、ありがと」

結局端的な一言に纏めることになってしまったのだが、色々感情が詰め込まれている

ことは伝わってくれたのだろう。

何か二人して照れてしまったせいで、付き合いたてのカップルみたいな雰囲気を作り出されてしまった。何なんだよこれは。

「童貞処女カップルみたいな雰囲気を形成するのはやめてくれないかしら……」

「いや言い方、言い方が最悪過ぎるでしょう？　もうちよつとこう、オブラートに包もうか」

「でも、間違つてはいないでしょう？」

「正しすぎるのが問題なんだよなあ」

何かちよつと深そうなセリフになってしまったが、全然深くなかった。ピチャピチャ水遊びできるくらいには浅い。

まあでも、正論つてよく人を傷つけるし、逆説的に虚実というのは、人を癒してくれるものなのではなからうか。

そんなアホみたいなことを考えていれば、ちよんちよんと肩をつつかれる。

「待たせたな……に、似合うか？」

振り返ればそこには女神がいた。

見慣れていたはずの金の長髪は神々しさを増しており、不安げに揺れた蒼空色の瞳には、思わず引きずり込まれそうだった。

そして何より、白をベースにし、青色で装飾された着物は彼女と完全にマッチしている。

外見年齢が少々引き上げられながらも少女性は保っており、同時に神秘性が底上げされていた。

端的に言つて、崇拜してしまいかねないほどだった。現代の巫女か？

「クソツ、これ以上なく似合ってるよ！ けど何で女性体なんだよ……！」

「ふふん、こっちの方が似合うかなって思ったんだ」

かつてないほど正しい判断だった。やっぱり正しきこそが本当の美しさを見せてくれるんだなって。虚実とかその辺に捨てておけ。

「ここまで露骨に別格の反応されると嫉妬する気にもならないわね……！」

「むうう〜っ」

「いや痛い痛い、結構勢い付けてから蹴るのはやめろ。大丈夫だ、日鞠も可愛いから」

「私は？」

「言つたら、綺麗だって……いやなんかその、別に格付けとかしてる訳じゃないんだよ」

三人とも美人で可愛い。それで良くないか？

今となつてはもう、そういう関係の人間を作るつもりは一ミリたりともないが、それを加味した上で、うっかり惚れてしまいそうなくらいなのである。

全員、絶世の美少女ですとお出しされてもおかしくはないことを自覚して欲しかった。

何かもう、ここだけ周りからガッツリ距離を取られて数多の視線を受けちゃってるからね？

もつと言えば俺だけ「お前邪魔だから消えろ」という意志をガンガンにぶつけられているのである。

まあ、俺も逆の立場だったら、そう思っていただろうし、こればかりは仕方ないな。ちよつとだけ耳を傾けてみるか。

「百合の花束に薔薇が一輪混ざってんじゃねえぞ……!」

「つーか何だよあのオツドアイ、厨二病か？」

「バツカお前、あれ日之守さんだぞ」

「あつ、あの性癖爆発甘楽さん……!?!」

「違う、異常性癖爆発英雄甘楽さんだ」

ちよつと待てッ!

嫉妬が一瞬で終了したのは良いが、代わりに俺の二つ名がとんでもないことになってるぞ?!

滅茶苦茶漢字が多いし、良く吟味してみたらただの悪口じゃねえか……!!

俺の性癖を悪く言うんじゃないやねえ！ と叫びそうになったが気合で堪えた。人には得手不得手があるからな。

許容量の少ない愚かな人類にキレても意味はないだろう……と荒ぶる心を落ち着かせた。

「貴方って性癖の話になると途端に別人のようになるわよね……」

「気のせいだろ、いつだってこんな感じだよ、俺は」

それより、そろそろ行こうかと声をかける。

あまりここで時間を潰しても仕方がない、折角旅行に来たのだから、やはり名所を巡るのが醍醐味だろう。

予定等は立てていたのだろうが、残念ながら俺の頭がすっかりとその辺を忘れ去っている。

いつの間にかリーダーのようなポジションについているアイラに感謝の念を送りながら、付いていくように歩き始めた。

で、その後。

あちこち名所を回り、やっぱこれ日本だな……という感想を毎度引き出しながらも楽しみ、夕方も近くなってきた頃合い。

人っ子一人いない道のど真ん中で、俺は呆然と一人で突っ立っていた。

まあ、何か……アレだ。

「はぐれた上に迷ったな」

「お前様方向音痴すぎるじやろ……」

「それは魔王もじゃん！」

「いやあ、こんなはずじゃなかったんじやがのう」

てへペろを決めた魔王は影にすっこんだ。いや、ね。そうなんだよ。

アルティス魔法魔術学園で幾度も作り直され、その度に改造を施され、今ではワンオフとなった俺の杖は酷く優秀であり、かなり分かりやすく道を示してくれているのだが、何か迷っちゃうんだよな。

ついでに言えば、「しっかたないのう、余に任せておけ」と自信満々に出てきた魔王も実は方向音痴であったことが発覚したため、かなり詰みの雰囲気か漂っている。

本当にどこなんだよこは。誰かに聞こうにも、聞く人が見当たらないんだけど？

気分の問題なのかは知らないが、妙に具合も悪いしよ……。

あーあ、飛べれば一発なんだけどなあ。

残念ながらこの国では禁止されている……というか、魔法使いや魔術師の権威がかなり弱い。

完全に呪術騎士の国と言った感じだ。

まあ、そうでもなくとも無暗な魔法魔術の使用は厳禁であるのだが。

学園の保有している土地で過ごすことがほとんどだから、この辺の意識が抜け落ち気味だ。

「とはいえ、どうしたもんかなあ。手を叩いたら忍者とか現れて、道案内してくんないかな。日本だし」

「やってみたらどうじゃ?」

「ふむ……」

パンパンツ、と手を打ち鳴らす。

シュバツ! と一つの影が傍らに現れた。

「うつ、うわあああああー!?!」

「ツ喧^せえな、お前が呼んだんだろうが」

「いやまさか本当に出てくるとか思わないだろ……ていうか、ミラ? 何でここに?」

そんな俺の質問にミラは呆れたような、げんなりしたような顔を見せ、やれやれと言わんばかりに肩を竦めた。

「オレの役目は、日之守クンの監視・護衛だつて言つたろ。今回も朝から同行してたぜ」
「嘘だろ……全然気付かなかつた」

「ハツ、隠密は得意分野なんでな。まあ、日之守クン相手だと、本気で隠密んなきやならなかつたから、つい迷い都に入るのを止められなかつたんだが」

「迷い都？」

かなり不穏な名前の街だつた。ゲームだつたらダンジョン扱いされてるタイプの名前だろこれ。

「別名：呪術騎士の街だ。ここらに住んでるやつらは全員呪術騎士でな、濃い呪力がここら一帯を包んでるんだよ。呪力に耐性の無い人間が入つたら方向感覚が壊れて出れなくなる呪いの街だな」

「超怖えー！ マジで入る前に止めろよ!？」

「いや、入るにも作法が必要だからよ。普通は入れねえんだ、日之守クンがおかしいって訳だな」

「何もしてないのに変なやつ扱いされる要素だけ増えていくの何なんだよ……」

今回に限つてはただただ歩いてただけなんだが……。それでも厄介事に巻き込まれるのもう、才能飛び越して呪いの領域だろ。

俺は悪くない。悪くない、よね？

こんなこと考えた時は、大体自業自得の面が大きいのでつい不安になる俺であった。

「ま、今回ばかりは日之守クンのせいじゃねえっばいけどな」

「と言うと？」

「迷い都に呪術騎士以外が迷い込むことはまず有り得ねえ……つまり、招待された可能性が高いって訳だ——ま、安心しろよ。オレが守るからさ」

「……自衛くらいは出来るっての。過保護か」

軽いやり取りをしながら臨戦態勢へと入る、空気が少しヒリついたような気がした。あるいは、自分がそうさせているのかもしれないが。

杖を片手に、思考をフルで回転させ——

「ツ——」

上空から飛来した砲撃にピッタリ合わせて砲撃魔法を撃ち放った。中空で拮抗し、互いに霧散する。

そして、それを切り払うように落ちてくる、一つの閃光。

あ、やばい。これ無理だ——魔法だけじゃ対処しきれない。

一目でわかる、アレは第二の破滅より強い。

「悪い、魔王。使う」

「気にするでない、ほれ、早う使わんか。詠唱はもうこつちでおるぞ」

「展開——」第式装甲魔導：夢纏」

瞬間、蒼の衣は俺とミラを隠し。

赤と黒に彩られた合計五つの砲撃が降り注いできた。

それを受け止め、払う。

「ああ!?! めっちゃ重っ」

「ちよっ、日之守^{ヒノノミ}クン待て——」

「待つてる暇とかない!」

とにかく一撃入れる。

ミラの腰を掴んで引き寄せ、鋭く下がりがりながら夢纏を一点に集中した。

これで倒せるなら御の字だ。倒せなくとも、時間が稼げればその間に退散できる。

同時、謎の襲撃者と目が合った。

灰色の髪の男だった。俺よりは年上だろう、少しだけ大人びた様子で。

けれども瞳は鋭く細められている。

その手にあるのは一丁のライフルだった。その周りには四つのビットが浮遊して、同じように砲撃準備へと入っている。

「ええ、何それカッコイイ……」

「ハハッ、そうだろ? 俺もそう思う。良い趣味してるな」

直後、互いの砲撃は撃ち放たれた。

ちようどど真ん中でぶつかり合ったそれらは、先程と同じく互いを霧散させて終わる——そう、それは分かっていた。

それは恐らく、あっちの男も。

そうでもなければ、この瞬間に至近距離で目は合っていない。

穿つように飛び出てきた右手を紙一重で躲し、その額に指を当てた。

「——ッ」

「遅い」

夢纏は使い切りの魔導ではない。俺の身体への負担を考えなければ、永久的に発動し続けていられる魔導である。

放出した魔力が大きければ大きいほど、補充した際の負担は大きいが、一撃程度の補充であればすぐだ。

詠唱無しで発動した砲撃魔導が、灰髪の男を射抜——けない。

「つぶねえく。良いねえ、盛り上がってきた」

「どっから出てきたんだよ、それ……」

砲撃魔導を耐えきった巨大な盾を構えた男が、ニヤリと笑って銃声を撃ち鳴らす。それを回避するルートを潰すように、ビットは起動していた。

だから壊す。放たれた砲撃を迎え撃ちながら、そのまま掴んで爆発させる。
一基、二基、三基、四基。ついでにライフルの半分を消し飛ばしてみせた。

「おいおい、好い気になるなよな。呪術騎士の本領は、接近戦だぜ？」
「だから、近づかせないんだっての」

大盾を片手に、「灰髪の男が笑う。

つられるように、笑みが浮かんだ。

これは長期戦になるだろう。

護衛なのだから、ミラにも手伝って欲しい——という気持ちと、この男とは二人で戦いたいという気持ちとが、内心でぶつかり合った。

「そこまでだー！」

直後、そんな心境をぶつ壊すように、ミラがどこからか出現させた斧を道に振り落とした。

ズガアン！ とけたたましい轟音と共に、俺達の間を破壊する。

「先輩、何やってんだ。アンタ……」

「おいおいミラ、男同士の対決だぞ？ 水を差すなよ」

「オレの護衛対象だつてのも理解わかつてんだろ、これ以上やるんなら、オレだつて動くぜ」

ミラの言葉に「はあく、やれやれ」と嘆息しながら男は銃を収めた。ついでにドロ―

ンみたいなのも収納する。

え？ 何？ 何なの？ 兄貴って何？ ミラのお兄ちゃんなの？

意味不明過ぎて疑問符を撒き散らかしていれば、灰色の男がツカツカと歩み寄ってきた。

「俺はリオン・デイ・ライズ。ミラの先輩だ。悪いな、破滅を二つ倒したっていう坊主の力を見てみたかったんだ」

「やり方が強引過ぎるだろ……」

「こうでもしなくっちゃ機会なんて作れないだろう？ それに、楽しいと感じたんじゃないか？ 君も」

「むっ」

差し出された手を握り返しながら、凶星を突かれる。

あまり認めたくない事実だったので黙って睨めば、ライズさんは快活に笑った。

「そう睨むな、俺だってそう思ったんだからお互い様だ——それに、そう思うのも当然だと思っぜ？」

「当然？」

「ああ、何せ俺は第三の破滅を討伐した男だからな。ヴァルキュリア呪術騎士学校最強とは俺のことだ」

なんて、クソデカ情報を滅茶苦茶圧縮しましたみたいな一言をライズさんが言うものだから、一瞬脳がエラーを吐き出して停止する。

そして、少しの時間をかけて、ようやく再起動した頭は一つの答えを導き出した。

「……つまり、幼馴染の彼女を先輩に寝取られた人!？」

「……No.2だ!」

りおんフレンド

「いやっ、だからさあ、あれは違うんだって！ あいつ、俺が昼寝してる間に仕掛けてきたんだぜ!? そうじゃなかったら一撃で返り討ちにしてたんだって！」

「ほおーん」

「んおおおお信じられてない！」

「ここの団子美味しいですな」

「そもそも話すら聞いてなかった感じか!?!」

信じてくれよオ！ と叫びながらのたうち回るのは、先程までキメ顔で握手を求めてきていたリオン・デイ・ライズであった。

あの後、『旅行中に悪かったな、お詫びくらはさせてくれよ』とのことで高級団子屋に連れてかれ、二人並んで団子に舌鼓を打っていた。

因みにミラは『ジジイに呼ばれちゃったからよ、行ってくる』と言い残して去って行った。それで良いのか、護衛……。

まあ、状況的に見れば護衛・監視役をライズさんに代わってもらった、という形にな

るのだろうか。

ヴァルキュリア呪術騎士学校、色々ガバガバ過ぎるだろ。

「でも再戦を挑んでないってことは、勝てないって思ったからじゃないんですか？」

「おいおい、あまり痛いところ突くなよ。泣いちゃうぞ？」

「凶星なのかよ……」

こんな軽口に屈しないで欲しかった。さつきまで纏つてた如何にも兄貴分ですみたいなオーラは何処に落としちゃったんだよ。

今すぐ探して拾ってこい、絶対に必要だから。

「ていうか、そう。ミラの……お兄さん、なんですか？」

「まさか、ただの先輩後輩関係だよ。まあ、普通の……って言うにはちよつとばかり親密かもしれないが。ミラの言葉遣いに変なのは、流石にもう分かってるだろ？」

「ああ、やっぱりアレはそっちでも変なんですな」

「呪術騎士が全員あんなだったら、俺は呪術騎士やめてるって」

どのような人が見ても不快感を与えなさそうな、実に清涼感溢れるイケメンらしい笑みを浮かべるライズさんだった。

客観的に見て腹が立たないくらいにイケメンを見るのは久し振りだな、と思った。それこそ立華くん以来じゃないだろうか？

まあ、その立華くんは今や、ほとんど男性体の姿を忘れつつあるのだが……。

「それより、敬語はやめにしないか？ ついでに『さん』付けも、俺はあまり好きじゃないな。リオンで良い、俺もきみのことは、甘楽って呼ばせてもらうからさ」

「……ミラみたいなこと言うんだな、リオンは」

「逆だ逆。ミラのやつが、俺を真似してるんだ」

呪術騎士は内向的なやつが多いからな、と少し懐かしむように言うリオンだった。確かにこれは、ただの先輩後輩関係という訳でもなさそうである。

どっちかかっていうと幼馴染とかの方が近いのかもしれない。

直接出会ったことのある呪術騎士がラウレストおじいちゃん先生とミラだけだったので、てつきり呪術騎士つてのは距離を強引にでも縮めてくる人種が多いのかと思っていたのだが、そうでもないらしい。

「上澄みともなればまた話は別だがな。呪術騎士つて存在である以上、一周回って弾けるやつは多いよ」

「リオンはそうは見えないけど」

「そう見えるよう努力してるからな、俺はじいさん——うちの校長の方針には反対派なんだ」

「ああ、あの技名叫ぶやつ……」

一応反対派もいることに、心のどこかで安堵する俺がいた。同時に、反対派でありながらもトップを維持しているリオンに、少しだけ底知れないものを覚える。

何故ならそれは、どれだけ消費してもなくならない負の感情が、腹の底ではこうこうと燃え続けていることの証左であるのだから。

人をこういう見方はしたくないのだが、どうしても呪術の構造上そう見えてしまう自分がちよつと嫌だった。

「それより、だ。もつと聞きたいことがあるんじゃないのか？ 例えば——」

「第三の破滅について？ ぶっちゃけ、聞かなくても良いかなと思ってる」

「あれ!? 何でだ!?!」

「何でも何も、リオンも第七秘匿機関の一員だろ。見れば分かる。それなら帰ったあと、報告書読んだ方が手っ取り早いってどうか……」

「おいおい、ドライなやつだなあ。報告書だけじゃ分からないことだってあるだろう？ な!?!」

聞いてくれよと全身でアピールしてくるリオンだった。精神年齢が高いのか低いのかイマイチ分からない人だな……。

正直なところ、今聞くと超長話になりそうだから嫌だつてもあるのだが……何せ、未だにアイラ達と俺は連絡が取れていないのだ。

ミラは濃い呪力のせいで方向感覚が狂うとは言っていたが、恐らくそれだけではない。

多分、電子機器も軒並み不具合を起こしている。そう考えれば、ナビが上手く機能しなかったのも納得というものだった。

魔力でも似たような現象は起こるから、力という側面で見ればかなり近似の存在なんだろうな。

とはいえ似ているだけであり、同一視はしてはいけないのだろうが。

魔力対策はされている杖が不具合を起こしている訳だしな。

しかし、まあ、リオンの言うことにも一理ある。

より多くのことを聞くのならば、やはり口頭で聞くのが一番情報を得られるのは間違いないだろう。

この先関わることは少ないだろうとは言え、友好的な関係を作るのはマイナスにもならないし。

でも俺、今日は遊びに来てるんだよなあ……。

修学旅行に来てまでする話じゃないだろう——いや、あるいはこのために、わざわざ旅行先を日乃和にしたのか？

だとしたら一発くらいは校長をピンタしても良さそうなものであった。いや、する前

に打ちのめされる気はするのだが……。

しゃーない、切り替えるか。

ふー、と長めのため息をこれ見よがしに吐き、それから団子を頬張った。

ゴクリと喉を鳴らして茶を啜る。

「……俺、まず第三の破滅が出たって話すら聞いてないんだけど。それに、そもそも第二の破滅からの出現インターバルが短すぎないか？ 一年も経ってないぞ。いや、それは第二の破滅の時もそうだったけど……魔王のセンサーにも反応しなかったし、大体何で日之和に出現したんだ？ 定石通りなら、アルティス魔法魔術学園を狙うだろ。第一、第二はこっちで撃退してるんだから、第三だつて俺達を第一の標的に据えるべきじゃないか？ そもそも——」

「うおおおっ!!」 振り切つたと思つたら質問塗れじゃないか、落ち着け落ち着け。情報の濁流で攻撃して悪かったよ。一つずつ解説するからクールダウンしようぜ、な？」

暢気に串団子をもぐつきながら、リオンが苦笑いと共に言う。

参つたな、かなりきつめの自制をしていただけに、ちよつと解放したら物凄い早口になつてしまった。

でも、仕方なくないか？ 第三の破滅撃退とか軽く流していたが、普通に大事件だろ。

何なら一年分のタスクはもう終了しましたよと言われたに等しいレベルである。

それ自体は有難いことこの上ないのだが、詳細はどうしても気になるというものだった。

「こちらら婚約者（暫定）に、『俺って多分、いつ死んでもおかしくないでしょう？』とか超真顔で言っちゃったばかりなんですけど！」

「まず一つ目なんだがな、第三の破滅を撃退とは言ったが、正確にはそうじゃないんだ」「は？　じゃあ、何？　封印とか……いや、違うな。憑依させたまま拘束してるのか？」「……ハハッ、こいつあびるな。察しが良いどころじゃないぞ、甘楽。ほぼ大正解だ、どういう頭の回し方すれば、一瞬でそこに行きつくんだ？」

「え？　マジなの？　うわっ、人権を何だと思ってるんだ……」

日之和ってその辺の法律とか良識が無いのだろうか……。

普通に怯えてちよっと距離を取ってしまった。呪術騎士、超怖いんだけど。

……いや、でも仮にレア先輩から第二の破滅を引き剥がせなかつたら、俺でも拘束するで妥協していたかもしれないな。

「待て待て！　誤解だ！　流石に言葉通りのような真似はしていない！」

「他の解答が無いように思えるんだけど……」

「いやっ、それはそうなんだが……その、だなあ。つまりこういうことなんだよ」

スルリとリオンがアームカバーを外す。露になったのは、純白に染まった右腕だっ

た。

そうとしか形容できなかつたが、当然ながら言葉通りそのままという訳では無い。

その白は異質の証明だつた。塗られた訳でも無く、染められた訳でも無く、敢えて言うのであれば、取り憑かれている言うべきか。

あるいは、そこに住まわれていると言つても良いだろう——白色の何か、リオンの右腕で脈を打っていた。

「第三の破滅を憑依させっぱなし……つていうのは、少しだけ違う。正確に言えば、俺はこいつに憑依されて、強引に調伏したんだ」

「なんて？」

「だから、調伏したんだよ。こう、気合でグツ！ とな。激闘の末に、呪力で右腕に押し固めてやったんだ。呪術騎士にメンタル勝負で勝とうとか、百億年早いんだよな」

「ちよつと意味わかんないですね……」

こいつ何言つてんだ？

ちよつと想像の百倍くらい意味不明だつた。破滅つて調伏とかできるものなのかよ。

確かに憑依系の魔術はメンタルの強靱さである程度抵抗できるものではあるが、それにしたつて些か無法過ぎる。

レア先輩が憑依されたんだぞ？ 作中最大最強のメンタルを持っているとされる、レ

ア先輩がだ。

あー、それじゃあ抵抗するって無理なんだなって思うじゃん。

だから、憑依された際の選択肢として挙げることにすら馬鹿馬鹿しいとすら思っていたのだが……。

出来ちゃうんだ。

呪術騎士つてすげえ〜！

素で心底から感心してしまった。

「これがちょうど二日前のことだ」

「すげえ直近の出来事！ え？ 嘘でしょ……!?!」

「残念ながらマジなんだなあ、だから情報がまだ行き渡ってなかった訳だ。こつちの方でも、報告を纏めるのに手間取ってるしな」

だろうな、としか言いようがなかった。

第一、第二と続けざまに戦い、恐らく誰よりも破滅のことが分かっているであろう俺ですら、ちよつと意味わかんないですね……となつて居るのだから、それも当然だろう。

こんなを一日二日で報告書にまとめ上げろとか言う方が無理である。俺なら絶対にやりたくない。

「てか、たった二日前のことなのにピンピンしてるのか……頑丈だな」

「取り柄の一つだからな。それに、甘楽と違つて直接的な命のやり取りをした訳じゃない。精神的な引きずり合いだったから、丸一日寝ればそこそこに回復するさ」

「そういうもんなのか……?」

「そういうもんさ。起きた時に腕がこんなんになつていたのは、我ながら驚いたけどな」
もうちよつとスマートに押し固めたつもりだったんだけどな、と屈託なくリオンは笑つた。

まあ、どう鼻肩目に見てもキモいからな……。

何ならキモい以外の感想を捻出できないまであるキモさ。

いやもう本当に気持ち悪いんだつて。右腕だけ別の生き物みたいに胎動しているし、不快感を煽るようなゴムつぼい白色だし。

逆にこれがキモくないのなら、何がキモいんだよという話ですらあつた。

「キモいキモい言い過ぎだろ!?! もう少しオブラートに包めよ……!」

「あつ、気にしてたんだ。何かごめん」

「まあアームカバーとか付けてると、封印された右腕を隠してるみたいでドキドキするんだけどな」

「う、うわあ……」

厨二病が見え隠れしていた。俺がやっても微妙に痛いのに、二つ年上のリオンがやる

のは結構なきつきがあるな……。

でも言いたいことはちよつと分かるので、それ以上の追及が出来なかつた。

仕方ないよ、男の子なんでもん。

「それで、その右腕どう使うつもりなんだ？ まさかずつとそのままつて訳にもいかないだろーし、かといつて何にも使えないなら斬り落とすしかないと思うんだけど」

「ああ、それなんだけどな、俺とじいさんはこれを触媒に出来ないかつて考えている。どうだ？ 甘楽」

「触媒つて……つまり、第四の破滅を召喚するつて言いたいのか？ ああ、だから俺なのね……」

召喚とは、ざつくりと言つてしまえば空間転移の魔法魔術である。仕組みとしては、学園から第七秘匿機関本部に飛ばしてくれるアレと大体同じと言つて良いだろう。

原作にはない癖に技術自体は広く知られてるのは何なんだろうな……。

まあ、校長クラスでもないと思えないからほとんどどうでも良かったのだが、第三の破滅を触媒に第四の破滅を召喚するとなれば、それも言つていられない。

触媒とは、自身とは無関係な物だったり生物を、強制的に呼び出す時に使う代物だ。

竜の鱗があればどつかの竜を引っ張り出すし、上級魔獣の血を使えば同じ血が流れてる手ごろな上級魔獣が呼び起こされる。

とはいえそこに、契約等や上下関係というものは一切存在しない。

文字通り、その場に召喚するだけである。言い換えれば、空間転移させるだけな訳だからな。当然だ。

で、今回は『第三の破滅』という超級の触媒と、俺の魔導を用いた召喚によって、第四の破滅を無理矢理引きずり出したい、という訳だ。

七つの破滅は既存の魔法魔術や呪術に当てはまらないが、魔導に関してはそうじゃないっほいからな……。

「出来そうか？」

「出来ると思うけど、幾つか問題があるな」

細々と数えればそれこそキリがないほどにはあるのだが、その辺は周りが解決してくれるだろう。

だから、要点だけを告げる。

「二つ目、第四の破滅の憑依先がない。生半可なものじゃ多分憑依させられないし、それは自動的に召喚の失敗を意味する」

「大丈夫だ、そこは既に目星をつけている」

「二つ目、準備は万端にしても普通に失敗する可能性がある。そうなったら多分俺は死ぬし、二度と誰も召喚出来なくなってしまう」

「し、死ぬのか……?」

「当たり前だろ、ただでさえ魔導はハイリスクな代物なんだぞ……」

魔導で召喚するということは、イコールで俺が一人で七つの破滅と精神的な接触を行うということと同義だ。

イメージとしては触媒がナビで、俺はそれを元に運転するドライバーってところか。で、車が魔導。

車に召喚する対象を紐づけして帰ってくる感じだ。

だから、失敗をするなら紐づけするタイミングであり、そこで失敗するなら逆に俺が破滅に持つていかれることを意味する。だから死ぬ、精神的な意味合いにはなるが。

「植物状態になるんじゃないかな、まあそうなったら解剖やら何やらして役立てて欲しいところだ」

「自分の生死にかかわってくるってのに、随分ドライなんだな。甘楽は」

「や、そりゃ生きていたいとは思うけど、どうしようもない時ってあるだろ?」

とか何とか言っているのを聞かれたら、それこそ月ヶ瀬先輩に監禁されそうなものだな……と身を震わせた。

大前提なので特に語ることはないが、俺は死にたい訳じゃないし、むしろ生きたいと思っっている方ではあるんだけどな。

「で、三つ目。単純に第四の破滅に勝てない可能性がある。第二の破滅ですら俺は真つ当に死にかけたし、第三の破滅についてだって——」

「——直接戦闘をした訳じゃないからな、戦闘力が測れないってか」

「そういうこと。ぶつちやけ俺は一对一で勝てる気はしない……」

「なあに、俺がいるさ。俺たちは主人公だろ？ そんな俺と、甘楽が組めば勝てるだろ」

「何なのその謎の自信は……」

いや、確かにリオンの実力が相当上なのはもう、先程ので充分に分かったのだが。

リオンの俺に対する信頼は何なんだろうな。

それに主人公というのなら、それは立華くん（ちゃん）なわけだし……。

不安は拭えない——多分、どれだけ戦力を集めても拭えないんだろうな、と思った。

分からないという事実がもう怖い。誰だって、そういうものだ。

「でも、この問題点と釣り合うくらいにはメリットもあると思ってる」

事実、こちらで場所を決められ、タイミングも定められ、戦力も十全に備えることが出来るのは、これ以上ないメリットだ。

俺としてはやらない手が無いと言って良いほどには。

中々無いどころか、これをやらなかつたら、こんな好条件で戦えることなんてまず無いだろう。

「だからまあ、校長の説得は俺がやるよ」

「? いや、そこに話はもう通してある」

「は?」

「だからこれは、甘楽に対するただの事前確認だ。そっちの校長が、本人が了承しないのならばこの話はなしって言うからさ」

「は???」

「つまり、決行日はすぐそこってことだ。具体的に言うなら二日後だな」

「修学旅行最終日じゃねえかそれは……!!」

「ハハッ、悪いねえ」

帰るまでが修学旅行って言葉を知らねえのかよ！俺にもまったり最後まで楽しませろよ！ 帰りの飛空戦艦内で思い出を語らったりさせろ！

クソッ、ここまで全部大人共の掌の上だったのかと思うと猛烈に反発したくなってきた。

「わざと植物状態になって滅茶苦茶に曇らせてやろうか……?」

「それはマジでやめろ」

マジのガチな顔で言うりオンだった。

「ご、ごめんってばよ……」。

はめつクレーム

《left》ご神託チャット▼《/left》

《left》

◇名無しの神様 修学旅行イベが始まったと思ったら推定2の舞台に行くし、当然みたいに破滅戦始まってワロタ

◇名無しの神様 そもそも修学旅行イベすら未知のイベントなんだよなあ……

◇名無しの神様 イベントつつーか、本来はプチ要素なただけだな

◇名無しの神様 極々稀に「修学旅行に行ってきたよ！ ステータスがちよこつとアップ！」みたいなのが出てくんだよ

◇名無しの神様 普通にレベル5くらい上がるからRTAでは必須だぞ

◇名無しの神様 はえ、そうなんか

◇名無しの神様 まあ百回やったら一回出るくらいの確率だからな。知らん方が普通や

◇名無しの神様 転生させるとこの辺確定で見れるのは有難いな

◇名無しの神様 まあそれも明らかにぶっ壊れているのですが……

◇名無しの神様 日乃和って何ですか……

◇名無しの神様 呪術騎士また増えちゃったよ

◇名無しの神様 明らかに2と絡み始めちゃってんだよなあ

◇名無しの神様 第三の破滅が行間で処理されてるの面白すぎ

◇名無しの神様 しかもこれから第四の破滅戦だし

◇名無しの神様 灰髪の男は暫定2の主人公だし

◇名無しの神様 ポケナスもヒロイン、sも、ついでにワイラも日之守の説明で絶句

したもんな

◇名無しの神様 バグカス「もしミスったら確定で死ぬから、そうなたたらあとよろ

しく（へらへら）」

◇名無しの神様 その場にいた全員「……………?」

◇名無しの神様 ついでにワイラ「何やこいつの精神性、気持ち悪っ…………」

◇名無しの神様 これ一度転生してるから死への重みが薄まっちゃってるんじゃない

……

◇名無しの神様 いや普通一回死を経験してたら、より怖くなるだろ死ぬの

◇名無しの神様 大体の転生者はそうだよな

◇名無しの神様 —— しかし例外がここにある

◇名無しの神様 本当にあるのやめろ

◇名無しの神様 あー、与太話してたらもう始まるやん、第四の破滅戦

《left》

《left》

【はてさて】蒼天に咲く徒花 バグキャラ日之守甘楽 攻略RTA 【攻略できるかな】

《left》

やってきてしまった修学旅行最終日。

朝から自由行動ではあるのだが、キヤイキヤイと楽し気な他の生徒とは対照的に、普通にテンションが低い俺だった。

ちっ、もうちよい遊びたかったな——なんて文句を今更言える訳も無いので、大人しく指定の場所へと集合する。

そこには既に多くの……多分、呪術騎士が揃っており、先頭にはラウレストおじいちゃん先生とリオン、それからミラがいた。

アルティス魔法魔術学園からの増援は無いらしい。まあ、遠いしな。

ワンチャン、アテナ先生はいるかと思ったが……いないのならば仕方ない。

多少の違和感はあるが、呑み込める程度のものだ。

「ごめんなさい、遅くなりましたか?」

「いや、早いくらいじゃよ……うむ、ちゃんと他のメンバーも来てくれたようじゃの」
「大分苦労しましたけどね」

意図せず、疲れ切った声を出してしまう——というのも、立華くんとアイラは、この作戦に反対だったからだ。

アレだけ言ったのに、全然自分のことを大切にしていない! とガチな説教を懇々とされてしまった。

普通に申し訳なくはあるのだが、何とか今回ばかりは仕方ない、ということでも予を収めてもらった次第である。

唯一そうではなかった日鞠も、俺が決めたことなら今更反対しても意味はない、という事でスタンスに過ぎなかった上に、今は自分のことで手いっぱいといった様子だった。

旅行中もずっと、自身の実力と向き合っていたらしい。

ストイックだな……と思うのは、少し違うか。

足りないことが分かっていて、それを放置できるような少女ではない。

自身を高めるといった行為は日鞠にとって、呼吸するのと同じようなことなのだと思

う。

いつかとんでもない実を結びそうで、ちよつとだけ怖かった。

「それで、これが第四の破滅の器ですか……ええつと、九尾の狐でしたっけ？」

「正確には九尾の狐の半死体、だな」

もつと詳しく言えば、九割五分くらいは死んでいるんだが。と答えてくれたリオンが軽く笑う。

「昔々の大昔に、この国で暴れた超級の大呪霊。その成れの果てさ。俺達のご先祖様が叩きのめして、石に変えることで封じ込めた」

「何で殺さなかったんだ？ そうできなかった訳じゃないだろう？」

「いいや、そうできなかったのさ。あまりにも高い生命力を誇っていたこいつを、俺達のご先祖殿は殺すことが出来なかったから、石に変えて少しずつ殺すことにしたんだ」

「それで、今になってやつと殺せる段階まで来たってことか……」

なるほど、と頷いた。

確かにそれほどの存在であれば、破滅の受け皿にはなれるだろう。ついでに言えば、倒しやすさもグツと上がる。

第一の破滅が不完全な魔王に憑依したせいで、十分な実力を発揮できなかったように、これに取り憑いてしまえば、第四の破滅と言えど、万全とは程遠い力しか振るえな

いのは間違いない。

耐久力も相当低いはずだ。下手な魔法でも通りそうなものである。

「器は一級品、戦力も十分。それじゃあ後は俺次第か……」

普通に嫌だな……と思った。プレッシャーがデカすぎるんだよ。

ミスったら俺は倒れるし、第四の破滅は出てこないし、空気も何もかも最悪になることは間違いない。

「ひっ、日之守っ」

まあでも、やるつきやないよなあと意識を切り替えていれば、立華くんの手を掴まれた。

スカイブルーの瞳が、不安げに揺れている。

「……何で俺より、立華くんが緊張してんの」

「しない訳ないだろう!! 絶対、絶対成功させるんだぞ!!」

「分かっているって、大丈夫。何度も言うようだけど、俺だって、出来れば生きたいって思ってるんだから」

きつと成功させるよ、戦闘では頼りにしてる。そんなことを、頭をポンポンと叩きながら言う。

小さく頷いた立華くんは、俺も小さく頷いてから、九尾の狐へと歩み寄った。

「ハハッ、モテるじゃないか、甘楽」

「う、うざっ……そういうんじゃないっての」

リオンの軽口に淡泊な返答をしながら、石と化した九尾の狐を見上げた。

全長はどれほどあるのだろうか。正直ちよつと見当がつかないくらいにデカイ。

それでも近くに寄って観察すれば、小さく静かに脈動していることが分かった。

なるほど、確かにこれは五分ほど生きている。

あるいは、九割五分死んでいる。

「これでも生きてるってのが凄いな……」

「最後にして最大の大呪霊って話だからな。軽く数千年以上はこうらしいぜ？」

「凄いな……それじゃまるで魔王だ」

というか、文字通り呪霊からしたところの、魔王的存在であるのだろうか。

最盛期はそれはそれは恐ろしい存在だったのだろう——死にかけの今でさえ、プレッ

シャーは一級品だ。

昔の人は、良くこんなもんを封印できたな……。

「えーつと、すまん。俺はどうすれば良い？」

「九尾の狐の鼻面に、憑依させてる方の手で触れてくれ。後は俺の方でやる」

了解ッ、と威勢良く言ったりリオンが、そつと九尾の狐へと手を触れた。

その掌の上に、俺の手を重ねる。

「準備は良いか？」

「ああ、いつでも。頼んだぜ、甘楽」

相変わらず緊張の一つも感じさせないリオンの一言に、合わせるようにして息を抜く。

ほどほどにリラックスをしてから、目を閉じた。

意識を集中させると同時に、言葉に乗せて切り離す。

「——久遠より、彼方へ声を」

——声が聞こえた。

それは絶望だった。あるいは希望だった。

それは肯定だった。あるいは否定だった。

それは悲壮だった。あるいは樂觀だった。

それは正義だった。あるいは不義だった。

過去から未来に渡り、無数に広がるあらゆる世界を見つめ、繰り返されるそれらに、つ

いにどこかの誰かは諦めの吐息を吐いた。

いつそ無くなつてしまつた方が良いと。

こゝなつてしまつたのならば、ゼロからやり直した方が良いと。

諦観から生まれた、次なる希望を見つめる声とも言えた。

「君たちは間違えた。いいや、君自身が間違いなんだ」

気付けば多くの声は止み、俺はただ一人、光の一つもない真つ黒な空間に放り出されていた。

何も見えない——いや、正確に言えば、一つだけ見える。

暗闇しかない空間の真つ只中で、一つだけしつかりとした輪郭を持つ誰かが、静かに声を紡いでいる。

「間違いは伝播する。伝播した間違いは、やがて世界を覆い、破壊する。それが、分からないという訳ではないだろう?」

声は力を増し、その輪郭は徐々にハッキリと描かれていき、やがて人の形を象つた。けれどもそれは、本来の形という訳ではないようだった。

ただ、対話するのにちょうど良い形だった。あるいは、対話ではなく、主張かもしれないが。

とにかくそれ——第四の破滅は、此処まで来た俺に、言葉を投げかけてくる。

「僕たちは、この世界の仕組みそのものだ。僕たちがいるからこそ世界は成り立つし、世界が在るからこそ、僕たちは成り立つ。であれば、そう。僕らは絶対的な正義であるとも、言えるのに。どうして君たちは、君は抗うんだ」

「……昔から、正義は自称した時点で正義じゃなくなるって、相場が決まってるだろ。つまりは、そういうことなんじゃないの」

「戯言だな。言葉遊びをしたいんじゃないんだよ、僕は。僕たちは」

文字通り、のつべらぼうである第四の破滅は、小さく溜息を吐く。

相互理解は不可能であることを悟ったように。

もしくはそうであることを、再認識したように。

力を交わし、言葉を交わしても、なお理解には程遠い。

決して相容れない存在であることを、言葉以上に肌で感じ取っていた。

「君の存在は、世界そのものに傷をつける。ただ生きているだけで、星に消えない痕を残せてしまう、厄介なバグだ」

「随分失礼な物言いだな……ていうか、別に俺だって、望んでこうしてる訳じゃないし……」

気付けば日之守甘楽^こだった。今更それに文句をつける気はないが、こうも真つ向からボコボコに罵倒されれば、幾ら俺でも傷つくというものである。

というか、普通に俺のアンチなんだよな……。

人気者にアンチは付き物とは言うが、それならもつと俺にもファンが付いていて然るべきだろ。

このままじゃアンチしかいない配信者みたいな図になつてしまう。泣くぞ、俺が。

「けれども、今の君があるのは、君だからこそ——バグだからこそだ。許されない、許されてはいけない間違いだからこそ、君はここまで辿り着けている」

「いや、俺を悪し様に言い過ぎだろ……傷ついちゃうからね？ だいたい、そんな存在から否定されても、困る。俺が何したってんだよ……」

能動的に何かした記憶があんまりないんだけど……。大体的場合において、起こった事件の対処に回つてばかりなイメージがある。

仮に第一、第二の破滅を倒したことについて言われているのであれば、それこそお門違いというものだ。

そつちが襲つて来た、だから叩きのめした。

シンプルかつ正当性のある理論だ。ひっくり返されることはない。

「ただそこにいる、それだけさ。間違いそのものがイコールで君なのだから、当然いるだけで訂正されるべきだ。そうだろう？」

「それで納得できるほど、俺は自分に関心がない訳じゃないんだけど……とんでも理論

でこり押すのはやめろ」

「世界と自身を天秤にかけて、迷わず自分を取れるのか。天晴れだな、ここまで来れば」
「そっちの言い分が自分勝手すぎるだけだろ。上から目線でマウント取ってくるのはやめろよ」

ハッキリと言って、対話のようで対話になっていなかった。

とにかく俺を否定したい第四の破滅くんと、気合で肯定する俺って感じである。
どのような言葉であつても、その一片も伝わる気がしない。

互いの言葉や意志というものが一方通行で、ただ通り過ぎていくだけだった。

このままでは、ただ俺のメンタルが削られるだけで終わってしまう気がしたので、問答無用で肩を掴んだ。

この世界は、ザックリと言つてしまえば精神世界——のような場所である。

この辺はどう定義するかによつて、コロナと変動しそうなものであるのだが、とにかく気持ちを強く保っていないければならない世界だと思えば、間違いはない。

気持ちで負けた時点で、召喚は失敗して、俺は実質的な死を迎える。

そして、口喧嘩になったら勝てる気がしなかった。だから、さつさと力づくで引きずり出す。

つまり——

「ごちやごちやめんどくさいな……良いからもう、殴り合いに移行しろよ……!」

「急に理性をかなぐり捨てたな、特異点。しかし、ああ、そうだ、そういう在り方の方がらしくて僕たちとしても、気が楽だよ」

「今更になつて哀れみの類を向けようとしたことを開示するのはやめない？ 遅すぎるんだけど……」

後悔してももう遅い系の、長文ラノベタイトルみたいなのを口走ってしまった。てか、やっぱり第四の破滅、感情あるよな？

第一の破滅みたいなのがデフォルトで、第二の破滅みたいに、情緒豊かなのがイレギュラーなのかと思っていたのだが、どうにも違うらしい——いや、いいや。そうじゃないのか。

第二の破滅が感情を取得したから、それがそのまま他の破滅にも適用されたと考えた方が、辻褄が合いそうだ。

まあ、初めに聞いた声も踏まえてみれば、取得したのではなく、思い出したの方が近いのかもしれないが。

その辺りは考察しても仕方がない。今はただ、こいつを召喚する為に、全力を尽くすべき時だ。

「……傲慢だな。僕たちから僕を切り離し、なおかつ持っていけると、本当に思っている

のか？」

「思つてなきや来ないし、その可能性がないなら、お前がこうやって姿を現すことはなかっただろ」

「僕の、僕らの中身というものを、まるで理解していないな。しかし、ああ、そうだ。望むのであれば、見ていくと良い。その先に理解があることを、願つているよ」

言いながら第四の破滅が、俺の手を外して握る。

冷たくも、温かくも無かつた。そこには一切の熱はなく、ただ“何も無い”と握手させられているようだった。

そしてその困惑が、次々と塗りつぶされていく。

苛烈なまでの精神の引つ張り合いが起こっている——訳ではない。その段階は、握手した瞬間を通りすぎた。

第四の破滅は、やれるものならやってみると言わんばかりに、全てを俺に委ねた。

だから、第四の破滅は今や俺の全身に……全魂に、そのまま寄り掛かっている状態だ。必然、その中身、その精神性、全てが詳らかに共有される。

声はなく、音はなく、言葉はなく、文はなく、文字はない。

あらゆる表現を飛び越えたその先で、ただ、間違いがあつた——俺があつた。それが過去か、現在か、あるいは未来なのかは分からないが。

俺があることで、全てが終わっていた。

誰かが傷ついているだとか、苦しんでいるだとか、死んでいるだとか、そういうことではなく。

ただ、そこには終わりがあって。

それこそが、俺自身だった。

「なるほど、全然分からん」

いやもう、本当に分からなかったので、そう言うしかなかった。

言葉にすると全部比喩表現みたいになっちゃうんだけど。

何だよ、俺自身が終わりって。

最後の月牙天衝か何かか？

そうだとしたら、ちよつとカッコイイなと思ってしまった俺がいた。

「え!? 全然違う! 君のせいで星が、世界が終わると言っているんだ! 僕は!」

「知らねーよ。てか俺、あんなことしないし。したくもないし……」

そもそも世界をリセットしようとしているのは破滅側であり、俺はそれを食い止める側だ。

立場が逆転しているし、俺にそうするだけの理由がない。

とんでも幻覚見せるのはやめろよ……普通に落ち込むだろ。

「だつ、だから、何度も言っているだろう!? 君の存在そのものが許されないんだ! それはずつと、君の意志は関係ないってことだ。故にバグであり、特異点なんだよ、君は……! ああもうつ、全然分かってない顔するんじゃない……! くそつ……!」

それが、第四の破滅の最後の言葉だった。

元より引つ張り合いではなく、背負っていたような形である。

精神の共有を行われてなお、正気を保てた時点で俺の勝ち……なんだと思う。

魂が自身の身体へと戻る感覚に、第四の破滅が付随して来るのを感じる。

此処に来た時とは真逆で、真っ白に染まった光に、視界は完全に覆われた。

りおんバディ

何かこれ、もしかしたらミスって死んだのかもしれないな。

ふと、そんなことを思った。

思うと同時に、どかーんっ！ と勢いのあるキックが俺の頭を捉える。

「おつまつえつままはーッ！ いつまで寝とるんじや！ 起きんかい、ほれ！ ほれえ
！」

「いつつてえ……え？ なに？ なに?!」

あまりにもクリティカルヒットしてしまったのか、グワングワンと揺れる頭を押さえると、最近聞き慣れた声が響いた。

魔王である。

いつも通り、「完全！」と書かれた白ティーシャツ一枚だけという低防御力な格好で、

魔王が仁王立ちしていた。

場所は……分らない。

真つ白な空間だった。さつきとは真逆だな。やっぱり死んだか？

「死んどらん、死んどらん。ここは……そうさのう、お前様の精神世界とでも呼ぶのが、一番適してるじゃろうな」

「また精神世界かよ……」

「あるいは夢の世界と言っても良いかもしれんがの。ま、要するにお前様は今、寝ておるつちゆうことじゃ。はよ起きんか」

「無茶言うなつて。いや、言いたいことは分かるけど……」

「だいたい、夢の世界とか言われてもこれ、明晰夢とかですらないんだろ？」

「どうしろつてんだよ、マジで。」

「定番的なことを言えば、頬を掴るとかすれば良いのかもしれないが、先程魔王にかなり良い蹴りを貰ったばかりである。」

「痛みで起きないことは実証済みだった。」

「そこはこう……気合で何とかならんか？」

「むしろそれで、どうして何とかなると思っただよ。つつか、入って来れるなら、出て行くことも出来んだろ。連れてけよ」

「……………!!」

「その手があつたか！ みたいな顔をする魔王だった。何なのこいつ……。と言つても、これが完全な他人であれば出来ないのだとは思うが。」

況を理解する。

戦闘が開始されている——誰と？ 考えるまでもない。

第四の破滅と、だ。

少し離れたところで、激しい戦闘を繰り広げる九尾とリオン達の姿が見える。

また、破滅が降臨したせいとか、あるいは九尾の復活に反応したのか、謎の化物——恐らくは呪霊——が群れを成して混戦を作り出していった。

立華くんや日鞠が、それぞれ大暴れしているのが見える。

で、俺はと言えば、そのど真ん中ですよやすや寝ていたらしい。

細かい傷に塗れたミラが、ジト目で俺を見た。

「英雄は遅れてくるっつーけどよお、遅すぎんぜ、日之守クン」

「……悪い、どんくらい寝てた？」

「二十分か、三十分つとこだな。急に倒れるから、マジ愕然ぜ。本当に逝ったんじゃねえかって、騒ぎになった瞬間アレが目覚めて、呪霊が湧いてきた」

「おっけ。じゃあ俺は九尾——じゃなくて、破滅担当つてことで良いか？」

「そーだな、任せたぜ？」

「んっ、ありがとな」

互いの拳を打ち合わせてから飛翔する。

九尾の狐の半死体に憑依した第四の破滅は、姿形自体はそこまで大きく変わっていないようだった。

ただひたすらに巨大かつ、黄金の毛並みを靡かせる、九本の尾がある狐。

唯一、その眼が純粋な青に染まっているくらいで、想像通りの九尾と思つて良いだろう。

いや、まあ、何かビームとか出してんだけど……それはそれ。

『M a g i a d e i g u a r d i a n i : D i s t r i b u z i o n e d u p l i c a t a 』

狙い撃ちにされていたアイラを横抱きにして、守護魔法を重複展開させる。

黒色の光線が守護魔法と拮抗する——このくらいなら問題なさそうだと思えたのは、俺が成長したからなのか、あるいは第四の破滅が弱り切っているからなのか。

無論、全力を出していないだけという可能性が高いのだが。

「選交代だ。心配かけさせたな、ありがとう」

「……本当よ。本当に、死んじやったかと思つたんだから」

「悪かつたつて。お詫びなら後で、幾らでもするから」

ともすれば軽薄にも聞こえてしまう俺の言葉に、アイラがボロボロと涙をこぼす。

意外と良く泣いちゃうやつなんだ、こいつ。

良し良しと頭を撫でてやる。赤子にそうするように。

「約束よ、絶対に生きて戻って、私の言いなりになってもらおうから」

「ええ……俺に出来る範囲でな」

そこはかかない不安はあったものの、グツと涙を拭ったアイラは、影に溶けるようにして消えた。

ミラたちの加勢に行つたのだろう——それに倣うように、九尾を囲むようにしていた呪術騎士たちも散開していく。

……え？ 何で!?

「邪魔になるからに決まつてるだろ——待つてたぜ、相棒」

「誰が相棒だ、誰が」

「つれないねえ……甘楽について行けるのは俺だけだし、俺についてこれるのも甘楽だけ。それなら俺達は、相棒って呼ぶしかなくないか?」

「だいぶ論理の飛躍があつたぞ今の……」

こいつ、ちよつと俺のことが好きすぎるだろ。男女問わず、距離を強引に縮めてくるやつばかりな気がするな……という思考を振り払う。

実際のところ、リオンと俺の実力が同程度であるというのは否定しようがない。

もつと言え、リオンは俺より強いかもしれないのだ。

ほとんど同年代であることを考えれば、唯一と言つても良いだろう。

「じゃあ、こうしよう。俺たち二人でアレを仕留められたら、晴れて相棒つてことで！」

「……ま、倒せたらな」

「良しつ、言質取つたぜ！」

第四の破滅が、再度放つた一撃を弾き合うように躲し、杖を振るう。

使うのは魔法——ではない。

第二の破滅戦と言い、リオン戦と言い、流石の俺も考えるところがあつた。

というか、考えるまでもなく、俺は手札が少なすぎるんだよな。

仕方なくはあるのだが、基本的に魔導は砲撃しか使えないのは致命傷すぎる。

無焰も一応は使えるが、相性が悪いのか使つてると疲れやすいんだよな。出力も安定しないし。

多分、魔術属性ありきな魔導なんだと思う——と、そこまで考えてから、俺は思った。

そういや『魔法』も、元は『魔力』と『魔術』を解析し、分かつた範囲だけを独自解釈して、新たにテンプレート化したものなんだよなあ、と。

強力かつ純粹に魔力を業へと変換できる魔術に対し、魔法は魔力を多彩な形に変換することで対抗してみせた。

……その発想は、使えるよな。

本質から変えるのではなく、形だけを整える。それだけで、十全に対応できることは魔法が示している。

砲撃と言う形を、その場その場で自由自在に変換するだけの器用さや余裕さは、俺自身にはまだ備わっていないが、その機能自体は、杖に組み込まれている。

ただその部分だけの演算であるのなら、杖は多少以上に機能するはずだ。

まあ、なんだ。

つまりはそういうことだよな。

既に魔王に詠唱してもらっていた魔導を纏い、杖に通す。

『Ragione trascendentale: ver. ditiro』

急造、粗雑にもほどがあるが、魔導に合わせて自ら手を加えた杖が、ノイズ交じりの声を吐き出す。

長くは保たないだろう——けれども、それで良い。

元よりこっちは短期決着しか考えていないんだ。

魔法のそれよりずっと複雑な魔法陣（あるいは、魔導陣とも呼んだ方が良いかもしれないが）が九つ展開されて、

『Sparrare!』

超圧縮されたことで生み出された、射撃魔導が空を裂く。

音すら置き去りにした蒼色の閃光は、しかし、撃ち出された光線に迎撃された。

「僕を、嘗めるなあ！ 特異点ツ！」

「ええーッ！？」 声怖えーッ！？」

やつと喋ったかと思つたら、如何にも妖怪ですよみたいな声で叫ぶ九尾……もとい第四の破滅だった。夜中に聞いたら普通に寝れなくなりそう。

精神世界で会つた時はよく耳に馴染むソプラノボイスだっただけに、何があつたんだよと勘繰つてしまう。

俺、こいつの声帯だけ引つ張つてこれなかつたんかな……。

今日一ごめんなさいな気分になつてしまった。

「ありや、九尾の身体だから、だつっーのお！」

「ギャンツ」

迎撃することで生まれた隙に、すかさず赤と黒の一撃が捻じ込まれる。

リオンの装備は初めて会つた時とは少しだけ変わつていて、パワードスーツにも近い軽装甲を纏い、身の丈以上ある巨大な盾を背負っている他に、両手には剣の形をした呪力が噴き出る、灰色のグリップが握られていた。どう見ても完全にビームサーベルなんだよな。かつこよすぎる。

しかしあれも全部、呪物であるらしい。もちろん、初見時に使っていた銃やビットも。

リオンが身に着けている物は、全て呪物であるのだとか。

呪術とかいう単語は古めかしいのに、やってることは近未来チックなんだよな。

しかし、そうか。

器がもう死にかけの狐だったんだもん。そりゃ喉も上手く機能しないだろう。

「聞いているだけで呪われそうな声してるし、出来れば二度と口開いて欲しくないな……」
「おつ、鋭いな。大正解、九尾はその声一つだけで、人を呪える。だからこいつの相手は、基本的に俺達呪術騎士だったつー訳だ。あのお嬢ちゃんには、みんなの回避を頼んでいたんだよ」

「ええ……じゃあもうお前らだけでやれよ……」

「馬鹿言うなよ、甘楽なら呪われないだろ？」

「どういう角度の信頼?？」

俺を化物か何かだと思ってる節があるリオンだった。全然呪われるに決まってるだろ。

というか、九尾の狐、下手すりゃ魔王よりずっと怖い類の化物なんだけど……。

第四の破滅が取り憑いているとは言え、ちよつと押せば死んじやいそうだった九尾が、今ではこれなのである。

厄災として、障害としての、ポテンシャルが高すぎだった。

人類を滅ぼす為に生まれてきました感じが強い——というか、喋るだけで呪われると
いうのなら。

不快どうこうといった問題すら超えて、この先、一言も漏らさせるべきではないのだ
ろう。

まあ、こいつとはもう対話は済ませたしな……いや、対話とは言い難いところでは
あつたが。

言葉を聞く必要は、既に無い。

言葉を伝える必要も、また同じだ。

「今すぐ、仕留める。出し惜しみはしない」

「良いね、賛成だ。トドメは甘楽で良いよな？」

「俺は、構わないけど……合わせてくれるのか？」

「ハッ、当然。全身全霊で援護してやるさ……そもそもこれは、お前の為に用意したもの
だしな！」

リオンが威勢良くそう言つて、ダンツ！ と勢いよく盾を地面に打ち付ける。

瞬間、それはバラリと二十の欠片ピットに分離した。

それぞれが意思を持つように、リオンの周りを巡る。

「これが俺のとおつておき。あらゆる逆境を跳ね返す、絶対防御。甘楽に傷は一つも付け

させやしねえよ」

「リオンお前、そんなもんをあの時使おうとしてたのかよ……」

「このくらいししないと、渡り合えないと思った俺の判断を褒めて欲しいくらいだがな。さ、行けよ、主人公殿」

「主人公って何!?!」

脈絡もなく意味不明なことを言うな! と叫びながら宙を翔ける。

背中を預けることに、自分でも信じられないくらい不安を抱くが、それを気合で片隅に追いやり、第四の破滅に意識を向けた。

傷は多いが、致命傷に至りそうなものは一つも確認できない。先ほどのやり取りで、耐久力がそれなりに高いのも理解した。

それに比べて、攻撃の方は一つ一つが致命傷級だ。加えて、手数が異様に多い——あの尻尾、どう考えても独立して動いてんだよな……。

全リソースを攻撃に振り切った一撃を、クリティカルヒットさせないと殺せない気がするのだが、単独ではどう足掻いても一撃を練り上げることが出来ないどころか、近寄ることすら出来なさそうだった。

なので本当に怖い。リオンがミスれば、その瞬間俺は死ぬ——けれども、その上で、保険をかける必要はないと覚悟を決めた。

「無謀だな……そしてやはり、傲慢だ」

「マジで耳に悪いから二度と喋らないでくれない？」

返答は攻撃で返ってきた。九つの尾から放たれる、幾条もの光が高速飛行する俺を完全に捉える——が、触れる直前で、ビットが弾く。弾く、弾く、弾く！

縦横無尽に駆け巡る二十のビットが、その十倍は放たれている光線を全て防ぎ落す。

『Raggione trascendentale: ver. di lancia』

俺の意思に応じて、杖が悲鳴にも近い声を上げる。無秩序に押し固めていた砲撃魔導杖が、杖を通されることで槍状に形成されていく。

その規模を、質を、俺の方で際限なく押し上げる。ただ、それだけを考える。

眼前の化物を討つ為の一撃を練り上げることにて全てを懸けて、それ以外の全て預ける。

第四の破滅が叫ぶ。全身から弾け出たような何百条もの光線は、やはりこの身には届かなかった。

『attributo: penetrazione』

射撃魔法のオプシオンを、そのまま槍に適用する。セットする弾種——属性は、最も使い慣れた『貫通』。

頭のとっぺんから尾まで、一撃で抉り抜く巨大槍。

鋭く膨れ上がったいく魔導の槍が、ついには俺の右腕を覆った。

第四の破滅が、ガパリと顎を開く。魔力……あるいは呪力が渦巻き、一瞬のタメの後、放たれた。

それで傷つくどころか、衝撃すら伝わってこない。

放出された呪力同士で繋がった盾が、俺の身を守る。

カバーするように走った光線も、各ビットが放つ砲撃で迎撃された。

「はっ、ははっ。良いね、最高だ」

それが、ひたすらに心地良くて、思わず笑みが零れた。

欲しいところで、欲しい援護が決まる。

自分だけであれば、自分でしていた最低限の対処が、考え得る限り最大の対処として、現実化されていく。

拓かれた道に、リオンから受け取れる信頼がある。

俺の動きの意図を、考えを、言葉にせずとも完璧に汲んだ連携が、夢のように当てはまっていく。

誰かに任せること出来る、誰かに託すことが出来る。

己が特別過ぎないことの証明が為されていく。

ああ、その何て、気持ちの良いことだろうか。

「ぐっ、があああああああああ！」

「させねえ……よっ！」

苦し紛れにも近い、振り下ろされた第四の破滅の巨大な掌が、連結して元に戻った一つの盾を振るうリオンによって防がれる。

眼前で生じた、数秒の拮抗。後に、互いが弾き合った——決定的な隙が、出来上がる。吹き飛びリオンとすれ違った際に、一瞬だけ目が合う。

ニヤリと笑った彼に、俺は自然と笑みを返すことが出来た。

「いやはや参ったな……想像以上だ」

呪術騎士とは、魔力を持って生まれなかつたが故に、生まれながらにして、常人のそれより遥かに高い身体能力に恵まれた者たちの集りだ。

その中でも——学園内とはいえ——最強に近い座にいるリオンの視力は、呪術騎士内でも群を抜いている。

その彼が、目で追うのがやつとの速度で、日之守甘楽は飛翔していた。

軽くのけぞった第四の破滅。その真正面で、甘楽は鋭く弓引いた。

「目標捕捉——3、2、1」

『assaulto!』

莫大な演算量、常識外の魔力、理外の理である魔導に限界を迎えた杖は、しかし最後に役目を果たす。

解き放たれた魔導の槍は、あらゆる悪を、魔を、呪を穿ち貫く清浄の一撃。

あるいは、この世の理を全否定する、間違いそのもの。

世界をあるべき形に整え、全ての在り方を正すものへと向けられたそれは、容易く全てを穿ち抜いた。

「流石は主人公殿つてところだな。ハハッ、本当に、お見事としか言えない……。妬けるにしても一周回って、憧れちまいかねないほどだ」

甘楽の光は眩しすぎる、とリオンは笑う。

これで当の本人には自覚が無いのだから、全く恐ろしい——と、独り言ちたリオンは立ち上がった。

その周りには、無茶をし過ぎたせいで完全に機能を停止した、リオンのとっておき——二十のビットで作成された大盾が散らばっていた。

呪力を流し込むことで作成される呪物のクオリティは、元の道具のスペックと、呪

力を込めた年数、総量によって決まる。

これは、リオンが十年かけて製造した呪物だ。第四の破滅が、如何に強敵だったかが良く分かる。

だからこそ、ここで倒せて良かった。

ここで得られた全てが自身を高め、彼と——甘樂と同じステージに立つことに、繋が
るのだから。

「必ず超えるぜ。何せ俺が、俺こそが、主人公なんだからな」

超えるべき壁を前にするようにして、リオンはまだ氣づく。

それが、少しだけ間違っていることに、リオンはまだ氣づかない。

甘樂が唯一、意識してのものではないとしても、自身と同じ次元にいるのだと、心の底から認めた人間が、リオンであることに、リオンはまだ氣付かない。

——それが、大いなる過ち。致命的な、最後の一步であることにも、氣付かずに。

じゅじゅつビトレイアー

——真昼の空を、一条の蒼い彗星が切り裂き落ちる。

九尾の狐に第四の破滅が乗り移り、覚醒してから約数十分。誰も決定打の一つも入れられないままであったそれを、ただその一撃が穿ち貫いた。

そうしたのが誰なのかは、考えずとも分かる。

日鞠は、第四の破滅によって召喚された呪霊が自壊していくのを横目に、ただその光景を眺めていた。

かつてないほどに、安定した破滅戦だった。それは良い、彼が——甘楽が傷つかないのならば、それに越したことはない。

けれども、ああ、何故だ？

何故、あそこに自分はいない？

何故、甘楽の戦いを援護したのが自分ではない？

何故、甘楽の隣に立つことが出来ていない？

何故、全力を出し切った甘楽に肩を貸しているのが、自分ではない？

日々を丁寧に、出来る限りの努力を以て、積み上げてきた。

けれどもそこに、『甘楽は特別だから』という思いがなかったのかと言われれば、否定できない自分自身がいた。

それは、甘えだったのではないだろうか。

日鞠は自身に問いかける。問いかけ続ける。

甘楽は確かに、「ゆつくりと成長すれば良い」と、そんなことを言ってくれた。

その一言は間違いなく日鞠の精神に安定を齎したし、余裕を持たせてくれた——けれどもそれは、それこそが大間違いだったのだ。

本当であれば、そんなことを言わせてはならなかった。甘楽を、待たせてはいけなかった。待たせてしまうことに安心してしまうのは、それ自体がもう、甘えでしかない。甘えは自分を弱くする。甘えは自身を弛ませる。甘えは己をなまけさせる。その結果が、これなのだろう。

甘楽は特別ではない——いや、いいや。違う、特別にしてはいけなかった。誰よりも隔絶した力を持つ人間は、往々にして孤独になるということを、日鞠は知っているのだから。

そういった意味では、救われたと言っても良い日鞠には、誰よりもそれが分かっているのだから。

だから、本当は、足踏みしている暇なんてなかったはずなのに。

その差が、リオン・デイ・ライズという男の登場によつて、ハッキリと視覚化されてしまった。

彼はきつと、恐ろしいほどの研鑽を積んできたのだろう。

戦闘中のリオンは、甘楽をサポートするリオンは、徹底的に甘楽に合わせることに注力していた。

ともすれば、校長やアテナですら付いて行けない時のある甘楽の思考速度にピッタリと合わせ、求められているアクションを、求められた形で、求められた以上の精度で出し続けていた。

言葉にすることは容易い。けれども行うにあたって、これほど難易度の高いことを、日鞠は知らない。

——そして、それを一番初めに行うのは、やはり自分であると、日鞠は考えていた。だからこれは、眼前に焼き付けられている光景は、日鞠にとって初めての敗北であった。

「——ッ」

握りしめた両拳から、血がポツリと落ちる。

声を上げることはなく、静かに日鞠は涙を流していた。

とめどなく溢れてくるそれを、しかし拭うことはしない。

これは嫉妬であり、後悔であり、羨望であり、そして、決意だ。

二度とこのような思いはしないという、日鞠の決意。

そこは、甘楽の隣は、必ず自分のものにしてみせるという、日鞠の覚悟。熱を失いかけていた日鞠の奥底で、再びそれが燃え上がる。

憧憬によつて潰されていた瞳が光を取り戻す。

日鞠は天才だ。

この世界に生まれた誰よりも、才能に愛されて生まれきた少女である。

歩み続ければ、どこまでも辿り着くことが出来る、天性の女。

遠すぎる頂を見据えてしまったことで、迷いそうになっていた彼女は、ようやく自身の道を見定めた。

もう迷うことはない、減速することはない、下を見ることも、上を見過ぎることも無い。

ただ駆ける、駆け抜ける。最短の距離を、最大の速度で。揺れることのない意思と決意を携えて。

そして、それを彼女の持つすべての才能は、歓迎するだろう。

日鞠の意思が、決意が、全て噛み合うことを待っていた才能たちが、日鞠にこれ以上

ないほどの祝福を授けるだろう。

葛籠織日鞠という少女が、この世界の産んだ最大の天才であることが証明されるまで、幾許も無い。

世界は待っている。

星々は待っている。

極光は待っている。

光の果てへと進むべき、ただ一人の少女のことを。

恒例の気絶タイムが発生するかと思ったが、意外とそんなことはなかった。

もちろん、限界まで引っ張り出した全力全開だったので、身体はフラフラとしているのだが。

魔導の代償を魔王に肩代わりしてもらっていたり、今回は杖を使ってみたりと、色々
と試行錯誤した結果が出たということだろう。

とはいえ、一番の理由はやはり、リオンの存在なのだろうが。

あまりにもサポートが完璧すぎて、俺がもう一人いるのか？　って感じの快適感だったもんな。

初めて戦った時もそうであるが、リオンとは相当息が合うらしい——あるいは、リオンが合わせてくれているだけなのかもしれないが。

そうだったとしても、酷く新鮮な気分だった。

振り返ってみれば、初めて戦った時ですら、リオンには思うところがあつた。

自身の限界に、ちょうど同じくらしいのステージに立っている人間。

実力が拮抗していることに対する高揚、読み合いも含めて、同じ位置に視線があることへの期待感。

隣に立っていて欲しくなる。これから先も、共に歩んで欲しくなる。

これまでの人生で——転生する前も含めて——こんな感情を抱いたのは、初めてかもしれなかった。

だからこそ、フラつきながらもリオンと顔を合わせた時、自然と笑みが零れ落ちた。

歩み寄ろうとして躓いたが、転ぶことはなく支えられた。

「おいおい、大丈夫か？　無理はしないで、寝転がってても良いんだぜ？」

「平気だ……これまでは問答無用で気絶してたからな。それと比べれば、随分調子は良い方だよ」

「それは比較対象に問題があるんじゃないか……？」

疑問符を浮かべながら、苦笑したりオンに肩を貸してもらおう。正直なところリオンの方が背が高いので、若干歩きづらかった。

まあ、文句を言うほどではないのだが……、

俺も成長した方ではあると思うんだけど、やっぱり低い寄りの普通なんだよな。

ま、まあ？ 甘樂はここからが成長期だし？

「それにしても、本当に一撃で仕留めちゃうとはな。正直、目を疑ったぜ」

「俺も、あんなに上手くいくとは思ってなかったけどな。リオンのお陰で全部込められたから、実質リオンの手柄だ」

「何だそりゃ。そんなこと言ったら、手柄は二人で等分だろ」

ニヤリと笑ったりオンが、握り拳を見せる。その意図を遅まきながら理解して、拳を出した。

コツンとぶつけ合えば、途端に力が抜けたように二人で座り込んだ。

いや、ね。やっぱ無理。

気絶しなかったのは大きな成果ではあるが、言ってしまうえばそれは、ギリギリそうならなかっただけだ。

第四の破滅を引つ張ってきた、いわば精神的疲労も残っている気がするし。

それに、リオンだって相当無理をしたことだろう。

俺より先に戦っていただけのみならず、触媒はリオンの片腕でもあったのである。負担が無い訳ない。

むしろ座り込みたかったのは、俺よりもリオンの方がもしれなかった。

「いや、圧倒的に甘樂の方が疲れ切ってるだろ。座り込むと同時に寝転びやがって……」

「仕方ないだろ……何かもう、口以外まともに動かせないんだよ……！」

「ハハッ、意外と体力ないよな、甘樂は」

「これでも体力は付いてきた方なんだが……」

肉体の成長と共に自動的に、とも言えるが。まあ、頻繁に戦う羽目にはなっているの
で、同年代と比べればそこそこ飛び抜けている自覚はある。

それでも足りないのだから、やはり魔導は色んな意味でリスクが高い。

そしてそれに頼らないと、決め手に欠ける現状はシンプルにヤバかった。

もつと魔導を改良するか、さっさと成長するしかない。

第四の破壊は討伐できたが、あと三つも残っていることを思えば大分憂鬱だった。

というか、今回は本当の本当に根回しが完璧だったからこそ、ある意味あっさりとも
言える勝利を手に来た訳だしな。

次からはそうはいかないだろう。

「ま、それよりだ。約束は覚えてるか？ 甘楽」

「約束？ ……ああ、相棒がどうかというやつ」

「そうそう。俺は、合格点だったか？」

珍しく、少々不安げに瞳を揺らすリオンだった。それがあんまりにも面白くて、思わず声を出して笑ってしまった。

あんまりにも今更過ぎる。ていうか、不安になる要素無いし。

結果が全てだと言うのなら、正しくこの結果こそが、全てを表していた。

「合格点も何も、戦つてて分からなかったか？ 俺はリオンに、途中から全幅の信頼を置いてただけだな」

「——ハハッ、だよな。そうだよな！ いやあ、俺の勘違いじゃなくて良かったぜ……つつつても、それが分かったからこそ、余計に緊張したんだけどな、俺は」

「何でだよ、リオンが望んだことだろ……」

「ばっかお前、いきなり命をポンと預けられて動揺せずにはいられるか！ そのせいで最後の最後でミスって、わざわざ飛び込む羽目になったんだからな！」

お陰で全身が未だに痺れてんだぞ……と死んだ目をするリオン。テンション上がり過ぎて突っ込んできたのかと思っただが、もっと切実な理由だったらしい。

まあ、あそこで守ってもらってなかったら、俺の全身ぐちゃぐちゃになってたからな。

全リソースを魔導に注ぎ込んでいたせいで、回避も防御もまともに出来なかったこと間違いなしである。

「でも、完璧だった。助かったよ、相棒」

「おお……随分とあっさりデレてくれるな、甘楽」

「喧しいな……良いんだよ。それくらい、嬉しかったから」

全く同じ次元で、肩を並べて、背中を預けて、戦えたことが。

酷く傲慢な考えであることは承知で、そう思う。

その余韻が、今も俺の心を綺麗に頭の先まで浸らせていた。

「そんなリオンより強いらしい、寝取られ先輩とも会っておきたいところだな……」

「ばっ、だからっ！ あれは不意を打たれただけで！ 俺の方が強いんだっての！」

「勝ち星拾ってから言えよな、そういうことは」

「くっ、クソツ……!! 俺の相棒の座が、取られる……!? これが寝取られ……!?!」

「連想の仕方が気持ち悪いなお前……」

寝取られ先輩が寝取り先輩になることを危惧してんじやないよ。というか、俺が寝取られるみたいない方をするのはやめろ！

まるで俺があちこちで寝てる不埒なやつだと思われちゃうだろうが。

誰とも付き合っつてすらいない、ピュアピュアな少年だというのに……。

「でも甘楽、婚約者はいるし、いつつも女の子に囲まれてるよな？」

「お前どこからそんな情報得て……あつ、ミラか!？」

「御名答。あいつからの報告書は俺も目を通してるからな」

「何で一生徒のリオンが見てんだよ……」

情報管理がガバガバじゃねえかと思つたものの、そう言えばリオンも第七秘匿機関の一員であつた。

そりや見るわな……いや、見るか？ まあ良い。

しかし、冷静に考えてもみれば、ミラは俺のことを調べ過ぎである。

探偵もかくやって感じの調査力なんだけど？

あいつ、マジで何なんだよ……。

「ああ見えて、真面目なやつなんだ。護衛の件についてだつて、かなり前向きだつたら
？」

「前向きすぎて暴走してたも同然だつたけどな……」

恋人とか言い出すものだから、最悪の修羅場が発生するところだつた。後輩の教育は
ちゃんとしておいて欲しいものである。

いや、まあ、俺からすればミラは先輩であるのだが……。

ただそれはそれとして、何だかんだと助けられた場面は多い。流石に忍者みたいに出

てきた時はドン引きしてしまっただが。

「おいおい、何だ？ オレの悪口大会か？」

「いや、甘楽にミラが滅茶苦茶美人で困るって相談をされてただけだ」

「!!？」

「なあっ!!？」

息をするように嘘を吐くな！ と叫びそうになったが、頬を赤く染めたミラによって声を呑み込んでしまった。

何でそんな真つ当な反応をするんだ……。

俺まで恥ずかしくなってくるからやめて欲しかった。

「面白いだろ？ 意外とピュアなんだよ、ミラは。こうやって褒められると、すぐ真つ赤になっちゃうくらいにはな」

「つうう、おい、先輩！^{アニキ}」

「悪かった悪かった、そう怒るな。で、もう撤収か？」

「ああ。あの死体はジジイの方で片付けておくから、さっさと帰って休めだど。特に、アルティス組はな」

くたびれた様子でミラが言う。ただ戦っただけではなく、俺が爆睡してる間、守っていてくれたのだから、他と比べても一段と疲労が溜まっているのだろう。

申し訳なさりと有難さが入り混じる。

けれども流石に気が抜けたのか、ぐったりとすることしか出来なかった。

「ンだよ情けねえな……つてのは違うか。ご苦労さん、日ヒ之守くん」

「そつちもな……悪いんだけど、負ぶつてくれない？ もう身体を起こすことすら出来ないんだよね」

「満身創痍ガタガタかよ、見たとおりでな。つっ—かオレも疲れてんだけどな……」

とか何とか、文句を言いつつも負ぶつてくれるミラだった。その隣で、軽くふらつきながらリオンも立ち上がる。

いや、すげーな。もう立てるのかよ。

「じゃあ、またな。俺もすぐ近い内にそつちに行くから、その時はよろしく」

「その時は、今度は俺の方から襲撃してやるよ」

「なっ、根に持つなあ……悪かったって。勘弁してくれ」

困ったように笑ったりリオンと別れを告げて、ミラの背に身体を預ける。

特段窮地に陥ることはなく、珍しく万事上手くいったお陰か、達成感に満ち満ちていた。

珍しいというか、初めての気分だ——初めて、戦闘が楽しいと思えた。

これを収穫と言って良いのかは分からないが、悪い気分ではない。

ただそれはそれとして、修学旅行中にこんなイベントぶち込んできてんじゃねえよ、と校長には愚痴ってやろうと思った。

「……は？ なんやそれ、聞いてへんで」

「えっ？」

アルテイス魔法魔術学園、校長室。

あれから無事帰って来た俺は、たつぷり三日ほどの休息をとってから、報告を兼ねた愚痴を叩きに来たところ、本当に意味不明なんだけど？ みたいな顔を向けられていた。

「そやさかい、そないな話聞いてへんって。そもそも、第三の破滅の報告かて来てへんし。その上、第四の破滅？ いやいやいやいや、情報共有がされてなさ過ぎやろ」

「ええ……？ いやでも、ラウレストおじいちゃん先生の方で話は通してるって」

「知らへんな。だいたい、仮に話来とつたとしても、許可出す訳あらへんやろ。修学旅行云々以前に、甘楽にそないなりスキーなことはさせられんし、させるならもつと時間を

かけるのが道理や。

ついでに言うたら、戦うにしたって、こつちからも援軍出して、もつと盤石の態勢を敷くやろ、普通。その一件、なんもかもが性急すぎる——甘楽、あんた気付かんかったんか？」

「や、流石に違和感はあるなど思いましたけど、疑うほどではないかなって……」

——そう、違和感があった。

何もかもが都合良く事が運んでいたことにも、あの戦場に、魔法魔術組が俺たちしかいなかったことも。

おかしくはあったが、しかし、自己解釈で呑み込める程度のことではあった。

それに、そもそも疑うこと自体するべきではないと、そう思っていたというのものもある。

「ええ、じゃあこれって……」

「一杯食わされたな。チツ、そやさかい、あのジジイとはつるみとうなかつたんや。ガキンチョの頃から、ずううつと小狡い奴なんや、あいつ」

「ガキンチョって、アンタの方が歳下だろ……」

「はあ？　うちの方が上やで。気付いてへんかつたんか？　良う見い、この耳。うちはエルフや。基本的に公式年齢×10がうちの歳やで」

「は???!
!!」

突然明かされた衝撃の事実には絶叫してしまう。は!? エルフ!? 知らん知らん!

デザイン上、ちよつと区別付けるために耳を尖らせてたとかじゃないんだ!?

そんな設定出てきたことないだろ! いい加減にしろ!

謎多きキャラなのはそうだが、こんなところでポロつとそういうことを言うのはやめて欲しかった。

真面目な話題と衝撃が混ざり合うんだよ。

今俺、どんな顔すれば良いのか分かってないからね?

「ガキンチョの頃のジジイと会って、暫く遊び相手やってから、魔法魔術を学んで今に至るって経緯なんや。秘密やで? エルフはもう、うちの他にほとんどおらへんのやし」

「おお、少年の初恋とか人生とか滅茶苦茶にするタイプの人外仕草だ……」

「喧しいわ。ちちゅーか、今の話がほんまなら——」

拙いかもな、という一言と。

校長室が爆炎に吞まれたのは、全く同時のことだった。

刹那に展開された守護魔法が無ければ、今頃丸焦げになっていただろう。

「よっ、遊びに来たぜ」

頑強に造られた上に、魔力でコーティングされた一室は綺麗に消し飛んでいて、開かれた空には見慣れた灰髪の男が不敵に笑っていた。

片腕は真つ白なまま、もう片腕は見慣れない、奇妙な黒色に染まっている。数秒、思考が止まった。次いで、意図的に回し始める。

あー、そつか。そうなるのか。そうなっちやうのかー。

……何だよ、それ。バツカみてえ。

「ふむ、流石にこれで仕留めるのは不可能じゃったか。やはり小僧も、良い腕しておるの——いや、むしろ小僧に助けられたか？ ナタリア」

「人ん家訪ねる時はまずアポを取れって、大昔に教えてやったはずやけどなあ。もう忘れたか？ ガキンチヨ」

「もうガキと言うほどの歳でもないわい——じゃが、夢はまだ見れたらしい。ここで死ぬ、ナタリア。世界と共に」

言葉と共に、呪術騎士が軒並み現れる。先日、戦場で見た数とは桁違いだ。

校舎のあちこちで爆音が響き渡っている。

そして、何よりも——。

「何で九尾がまだいるんだよ……」

第四の破滅として殺したはずの九尾の狐が、明らかに完全な状態へと復旧した姿で、こちらを睨んでいた。

この前見た時より、数倍はデカいんだけど……。あれ、第四の破滅が取り憑いてた時

より強いだろ。

じわりと嫌な汗が流れ落ちる。

逃げるにしたって、ここは学園だ。下手に逃げ回ればその分だけ被害は拡大し続ける。

尤も、アルテイス魔法魔術学園の教員は優秀だから、既に生徒を退避させつつも臨戦態勢に入っているだろうが。

「おい、ジジイ。何だ、これは……？ 返答次第じゃ、ぶった斬るぞ」

さてどうするか、という思考を回していれば、呆然としたようにミラが姿を現した。傍にはいなくとも、近くにはいたのだろう。

これだけの騒ぎだ、駆け付けてくるのはおかしくない。

少なくともミラは、リオン側ではないらしいのが、その反応から良く分かった。

「そういえば、まだ命令中だったのう。良いぞ、フリーモ一号。第一命令は終了じゃ、第二命令に移れ」

「あん？ 何言ってるんだって、オレは聞いて——」

「お前様ツ！」

「えっ？」

実に間抜けな一音を発してしまったのは、やはり俺だった。

若干の怒りを滲ませたミラが、カツカツと歩いて来て、そのまま当たり前のようによく自然に俺を刺したのだから、それも仕方のないことだろう。

確実に急所だった。完全に油断していた、背後からの一撃。せり上がった血が、勢いよく吐き出される。

いち早く気付いた魔王が、舌打ちと共にミラの手を蹴り飛ばせば、カランと小刀が落ちた。

見て取れる程の呪力が込められている、上級の呪物。

「うむ、うむ。全く、我ながら都合の良い、良く出来た道具じゃよ、一号は。文字通り、使い勝手が良い。儂の呪力も良く馴染む」

「——は？ どう、ぐ？ 何、で、オレ。ちがつ、身体が、勝手に！」

「は、あ？ 何言つて、ああ、くそつ、一番怠い、やつ……」

ガクンと身体が崩れ落ちる。刺されただけならまだ良かったが、全身を異物が駆け巡っている様な不快感が、四肢から力を奪っていた。

これ、呪力が入ってきてるのか？ 全身の魔力と喧嘩して、魔力神経が暴走してる。

あー、やばい、無理。立てない。目が回る、吐き気がする、思考が、緩やかになつていく。

『M a g i a d e l l a s c h i a v i t : D i s t r i b u z i o n e q u

intuplicata』

瞬間、ミラの全身が束縛魔法で拘束された。橙色の魔法色は、校長のものだ。

「ごめんなあ、うちも動揺してるみたいや。止められへんかった……一先ずこれ、飲んで
き」

取り出した小瓶から液体を流し込まれる。味は最悪だったが、それだけで身体の不快感がマシになっていくのを感じられた。

それでも万全とは言い難いが、自分で息は出来るようになる。

「魔王、甘楽を医務室へ。それから本部の方にいるアテナ、呼んで来い——全面戦争や。身の程つちゅーもんも教えたるわ」

魔力が跳ね上がる。橙色の魔力が噴き出るようにして、場を支配せんとしていた呪力を押し返した。

ナタリア・ステラスオーノ。名実ともに、魔法魔術界最強の女が、静かに吼える。

「まとめてかかってこいや、田舎もん共が。ここでテメエらの血筋、全部途絶えさせた
る」

爆発的に膨れ上がっていた魔力が、不意に存在感を失う。

しかし、ただ消えた訳ではない。この場で渦巻いていた呪力ごと消えていて、圧がさっぱりと消えていた。

風のように、静かな空間が出来上がる。

その中で、静かにナタリア校長は口を開いた。

「根源魔装五重展開——《五塵の相》」

りつかヒロイン

《left》ご神託チャット▼《left》

《left》

☆転生主人公 なに!? なに!? えっ、本当に何!? 怖い怖い怖い怖い

◇名無しの神様 お、おとおおちおちおちおち

◇名無しの神様 おちけつ!

◇名無しの神様 何でワイらまで慌ててんだよ

◇名無しの神様 ド派手な爆発音したな、こんなイベントあったか?

◇名無しの神様 ある訳ないだろ! いい加減にしろ!

◇名無しの神様 存在しないイベントしか起こらないことに定評があるRTAだぞ

これは

◇名無しの神様 もうRTA名乗るのやめろ

◇名無しの神様 ひ、ヒロインレースとしては善戦してるから……

◇名無しの神様 ほんとお？

◇名無しの神様 とにかく状況把握が優先だろ。ボケナスに死なれても困る

◇名無しの神様 うくん、響き渡る悲鳴と怒声。それから連鎖する爆発音。これは

……一体!?

◇名無しの神様 明らか襲撃されてんだよなあ……

◇名無しの神様 まあ安牌なところでいけば堕ち人か？

☆転生主人公 ……いや、これ呪術騎士だな

◇名無しの神様 ワロタ

◇名無しの神様 全然ワロエんくてワロタ

◇名無しの神様 ちよつと前にお手々繋いで仲良く破滅撃退戦とかしてたのに……

△名無しの爺様 へえ、こんなところあつたんじやのう。なるほど、神との談笑場

所、か

◇名無しの神様 は？ おい、誰だこいつ

◇イカした神様 これ……アクセス先すぐそこなのに、特定がでкин。は？マジで誰

? 分からん分からん!

◇名無しの神様 日之守ってわけじゃないよな!?

◇名無しの神様 無い無い、そもそも日之守には弾かれるって話だろ

◇名無しの神様　じゃ、じゃあ誰なんすか、こいつは……

◇イカした神様　し、しりやん……転生者は二人しかいれとらんし……

◇名無しの神様　アテナせんせーと同類っぽいなこりや

◇名無しの神様　こつちを認識したのみならず、干渉までする現地人って何だよ……

◇名無しの神様　こ、こええ……

◇名無しの神様　ボケナス、マジで頼むぞ。最悪逃げてでも生き残れ

☆転生主人公　こ、こええ……ブルっっちゃったよ

◇名無しの神様　お前もしかして結構余裕じゃない？

☆転生主人公　いや全然、よゆうなわ

《left》

《left》

【魔法魔術VS呪術】蒼天に咲く徒花　バグキャラ日之守甘楽　攻略RTA【VSダーク
ライ】

《left》

「日之守!?!」

運ばれた医務室でぐったりとしていれば、飛び込んできた立華くんが悲痛な声を上げた。

女性らしい、高い声で、少しだけ音が耳に残る。

こいつ、本当にデフォルトで女性モードじゃん……と思ったが、この緊急事態に魔力神経を稼働させていなかったら、自殺志願者も良いところである。

魔力を使えば性転換してしまう体質である以上、それは当然と言えば当然だった。

「あー……うつす、元氣してた？」

「暢気なこと言うな！ どうしたんだ、君ともあろうものか！」

「や、俺を何だと思ってるの……不意を打たれちゃってな。まあ平気だよ、取り敢えず傷口塞いでもらったから、少し休めば戦える」

とは言え、体内を駆け巡ってるらしい呪力は完全に消えた訳ではないので、万全とはほど遠いのは事実であるのだが……。

そうだとしても、戦うことは可能だ。無理を通せば道理は引つ込むからな。

アドレナリンをドバドバに出せばまあ、何とかなるだろ。

「呪力、か……なあ、日之守。僕に一つ、考えがあるんだけど」

「考え？ 戦いには行かせないとか、そういう系の話じゃなきゃ何でも聞くけど」

「うん、そこは分かっている。だからちよつと、目を瞑ってくれないか？」

色んな意味で目が死んで来たのだが、そこでふと気付く。

身体が有り得ないくらい楽になっていることに。立ち上がるだけで眩暈を引き起こしてたほどの呪力が、霧散していくのを感じる。

これ——”勇者の力”か！ 『悪性への特攻』属性、そのまま呪力に刺さるんだ……。いや……凄いな、マジで。主人公の名に全く恥じない万能能力である。

ぶつちやけ、未玖の予知を思い出していたから、これが原因で死ぬんかなと覚悟は決めていたのだが……。

二度、三度と繰り返された口づけが、ようやく終わる。

「———どう？ 調子は」

「ぜ、絶好調……だけど、良かったのか？」

「……」ミリでも良くなかったら、こんなことしてないっ。察しろ馬鹿！」

ベシベシと足を蹴ってくる立華ちゃん(くん)であった。まあ、嫌だったとしても、直接言う訳にはいかなかったよな……。

普通に申し訳なくなつてしまい、ヘラツと笑う。

「や、そういうことじゃないんだけど……まあ良いや。それよりほら、行くんだろ。僕も行く」

「うん、サポート頼む」

「頼まれたっ」

コンコンと拳をぶつけ合い、医務室を出ると同時に駆けだした。

その中で、手の甲に残る感触に、小さくため息を吐く。

相棒だって、言っただけだなあ……。

まずは、優先順位をつけるべきだろう。

現状、俺が把握できているだけで厄介な敵は、ラウレスト、リオン、九尾。この三つだ。他の呪術騎士はまあ、先生方が相手してくれはるはずだし。

この内、ラウレストについては恐らく、考えなくて良い。何故ならあの場にはナタリア校長がいるのだから。

校長同士、よろしくやってくれらるだろう——正直なことを言えば、ナタリア校長にはもう少し頑張つて欲しいところではあるのだが……。

口振りのに、ラウレストの目的自体は、ナタリア校長にあるように思えた。であれば、対策等は練つてきていることだろう。

そうでなくとも、無策は有り得ない。ナタリア校長は魔法魔術界最強の女だ。

あそこまで堂々と攻め込んでおいて無策だったら、逆に称賛したいレベルである。

となればやはり、俺たちが戦うべき相手はリオンと九尾。この二つがメインになるのは間違いないだろう。

ミラについては……一旦保留にしたい。敵とは言いたくない。けれども、味方ではないとは言うべきだろう。

『Sparrare!』

「ぐおあ!?!」

「がつ、ああ!?!」

作り直してもらった杖が、元気良く音声を発する。瞬間、飛び出た幾重もの射撃魔法が、校舎内に入り込んでいた呪術騎士達を、問答無用で弾き飛ばしていった。

いや、数がすごいな。見積もっていた数を遥かに超えている。

もしかしてこれ、呪術騎士を根こそぎ連れてきたのか？ ヴァルクリア呪術騎士学校の生徒だけじゃなくて、全然おっさんとかいるんだけど。

学校同士の戦いとかいうスケールを超えて、完全に構図が魔法魔術VS呪術になってきた。

何？ ラウレスト、魔法魔術に恨みでもあるのか……？

「くっ、流石に多くなってきたな……どうする!? 日之守!」

「飛ぶ! 屋根ぶち抜いて!」

「了解!」

立華ちゃん(くん)が杖を振るった瞬間、廊下の天井を極太の砲撃が貫いた。

空で待機していたらしい呪術騎士も呑み込むそれを見ながら、床を踏み込んで飛ぶ。

「——ッ、守護魔法：重複展開!!」

『Magia dei guardiani: Distribuzione duplicata』

迫り落ちてきたのは、巨大な獣の掌。鋭く尖った爪には恐ろしいほどの呪力が込められている。

生きた厄災——九尾の狐。

その一撃は、先日見たその比では無かった。

瞬間的に展開した十枚の防壁が、半紙のように破られる。

「*Lo scudo di Dio. qui* 神の盾は此処に在り」

刹那、顕現した光の盾が、その一撃を受け止めた。

炸裂音が響き渡るが、盾には罅の一つも入らない。

「あは、ギリギリセーフ。平気? かんかん、りっちゃん」

「な、ナイスタイミング」

「ありがと、ひーちゃん」

いつの間にかあだ名呼びになって二人と共に、校舎を鷲掴みにして破壊する九尾と対面する。

瞳が真っ赤に染まっていて、対峙した際の圧が、先日とは大違いだった。

「とうかこれ、別物じゃないか？」

「ははア、魔法魔術師つても中々やるじゃねエか。俺様の一撃が止められるたアな……俺様の前身を破壊しただけのことはある」

「うわつ、喋ったし声が聞き取りやすい！」

マジで別人（獣？）じゃねーかこいつ！ と叫べば、九尾は鋭い牙を剥き出しにして笑った。

「呪霊は転身する——要するに、呪霊は呪術でしか祓えねエ。あるいは、呪術で後始末をしなくちゃならねえが、呪術騎士はそうしなかった」

「は？ おい、マジかよ。全部計画だったんじゃない」

「日鞠たち、すっかり利用されちゃったってことだ〜」

「ひーちゃんは何嬉しそうに言ってるの……」

日鞠が口を開くだけでほんわかとしてしまいそうになるのだが、この場を支配するビ

リビリとした緊張感がそうはさせてくれなかった。

「そして、そうしない代わりに俺様は、この戦いでのみ力を貸す契約をした——つまりお前らはここで死ぬつつわーけだ」

「良く吼える狐ちゃんだな、今度は首輪付けて飼ってやろうか？」

「お前様、そのすぐ喧嘩買う癖、本当に直した方が良いぞ……」

魔王の小言バックアップを受けながら、静かに魔導を起動する。が、それを放つ前に二人が俺の前に出た。

二人の金髪の少女は、覚悟を決めた瞳で杖を構える。

「ここは〜日鞠たちに任せて〜？」

「君には戦うべき相手がいるだろう、ここは僕たちがやる」

ダメだ。

そう言うはずであったが、しかし言葉にはできなかった。というよりは、横合いから突然出てきた手に、強引に口を抑えられたと言った方が良いだろう。

眉を顰めながら見れば、月ヶ瀬先輩が微笑みを携えながらそこにいた。

「大丈夫、わたしも戦うから。それに甘楽くんは、いい加減わたし達を信じるってことを、覚えなきゃいけない頃だと思おうよ？ わたし達は、君が思うほど弱くないんだから」

「……でも」

「でも何もないのつ。道は作るから、ね？ それともわたし達は、甘楽くんにとって守る対象でしかない？」

「――」

そんなことを言われてしまえば、俺にはもう、返す言葉がなかった。

ハッキリ、「信用できない」と、「託すことは出来ない」と、そう言うのは違うように思える。

多分……というか、不安なのだ。

傷一つすら作って欲しくないという——ある種の、余計な過保護に近い感情が、俺にはあるのだと思う。

そんな感情を抱くこと自体が、信賴していないという証左なのかもしれないが。

少しの間だけ、前の二人と目を合わせる。

それから、小さく頷いた。

「ふー……信じる。九尾は丸ごと、託すからな」

「えへへ、おっけー」

「ああ、託された。任せとけ」

「それじゃ行こつか、二人とも」

ふわりと月ヶ瀬先輩が前に出て、三人が並ぶ。不遜な面の九尾を前にして、日鞠が謡

うように紡いだ。

Aurora dail' altra parte
「彼方より極光を」

日鞠の《根源魔術》は、少々異質だ。

そもそもゲームでの彼女が使うのは《魔装》であり、《根源魔術》ではないということろから妙ではあるのだが、引き出している力が、微妙に不合理な動きをしているという点が最も目につく。

とはいえそれは、感覚だけで魔術を使っているからなのかと思っていたのだが、それが違うということをも、今まさに、目の前で日鞠は証明していた。

Lamenta i celi che cadono.
「堕ち行く天に嘆きを」

詠唱を重ねるごとに、その違和感は肥大化し、視覚化されていく。

これ、魔術じゃない——正確に言えば、純粹な魔術ではない。

最初は魔法のシステムをベースにしているのかと思っていたのだが、それもまた違うようだった。

Desideri qui
「願いを此処に」

そう、だからアレは、もつと特別な、異質な法則。理外の理、常識の外にある法則——

——魔導。

日鞠は多分、単独でその法則を、自身の裡から編み出し、それに魔術を載せている。

「光の雫は 全てを赦すだろう」
Goce diluce Perdona tutto

あらゆる物事において例外なく、過程が美しく整理されていけば、効率よく組まれていけば、その分だけ結果は洗練されたものとなる。

例えば魔術であれば、それは火力の上昇であつたり、発動速度であつたりといった形で結果が出るだろう。

「我が身に宿りし光は 《天光》」
Laluce che abita in me Aurora

つまるところ、その魔術は——あるいは、半魔導とでも呼ぶべきその光は、既に《根源魔術》の次元を遥かに飛び越えていた。

ただでさえ、触れた全てを浄化し滅し尽くす天上の輝きが、世界を超えた先から降り落ちる。

「天の意思は此処に在り」
Lavolontà delcielo qui

——正しくそれは、神々の意思。それそのもの。

色別すら出来ない天光が、あらゆる呪いを跳ねのけて押し通る。

言つてしまえば、ただそれだけだ。凝縮された異次元の光が、九尾ほどの巨躯すら呑み込む波のようにして撃ち放たれる。

正直なことを言えば、ここまで出来るとは思つていなかった。嘗めていた。

「ぼおつとしていないで、行け！ 日之守！」

声と同時に宙を蹴る。未だに世界を灼き尽くした輝きは散っていて、雪の中を翔けているようにすらあつた。

その中で、身体をグラつかせた日鞠が目に入ったが、それでも前に進むのはやめなかつた。

月ヶ瀬先輩が支えているはずだ。託すと決めたなら、貫き通すのが筋というものだ。

任せても良いはずだ。

託しても大丈夫なはずだ。

だって彼女らは、強いのだから。

一方、下級生たちの避難を誘導していたアイラは、一人の男と対峙していた——正確に言うのなら、その男以外にも十数人の呪術騎士はいたのだが、その全てが今や、意識を失い地に伏している。

「素晴らしいですね、お見事と言わざるを得ない。これでも彼らは、ボクが手ずから選んだ精鋭たちなんですが」

「そう？　であれば貴方もその程度ということなのでしょうね。良かったわ、そう苦労

しなさそうで」

気負うことなく、アイラは杖を構える。そこに一切の油断はなく、慢心もない。言葉とは裏腹に、アイラの本能は、眼前の男を脅威であると理解していた。

そこまで大きな体軀ではない。甘く見積もっても170cmはないだろう。

これまで見てきた呪術騎士のように、目立った装備もしていないように見えた。

ヴァルクユリア呪術騎士学校の上級生であることを示す制服を纏い、その腕と足のみに、真つ白な鎧が装着されている。

特段構えている訳ではないし、何かを仕込んでいるようにも見えない。

ただ、そこに立っているだけ。

それだけだというのに、息が詰まるほどの不安感を擡げさせる。

「ふふふ、良いですね。そういう強気な女性、ボクは好きですよ。どうでしょう、一曲踊りませんか？」

「生憎、私には心に決めた人がいるの。だから、お断り。こうして話していることすら、彼への裏切りのように思えるくらいなの。さっさと消えてくれるかしら？」

「身持ちが固い女性ですか、良いですね——けれども、そういう女性に限って、信用ならぬ」

これまで落ち着いていた声音に、棘が交じる。それは呪いの発露。

呪術騎士がその裡に秘める呪力が、言葉に帯びて外に出る——それこそが、既に並の呪術騎士を超えている証左に他ならなかった。

純白の鎧が、呪力を帯びて怪しい黒に染まっていく。

『私には貴方だけよ』『ちよつと今週末は忙しくて』『あー、その日は友達の誕生日なんだ』『何で？ 別に何でもないよ?』『この人は友達だよ』『私のこと、疑ってるの?』そんなことばかり、言うようになるのでしょうか?」

「ええっ!?! 急に何!?! 貴方、何の話しているのかしら!?! 完全にただの実体験な私怨じゃない!!」

「そして! それを! 信じた果てにイ! ボクの彼女は寝取られたア!」

「あー……」

噂の寝取られ先輩かあ……とアイラは独り言ちた。

噂の寝取られ先輩は一人でヒートアップし続ける。

「故にこそ、ボクはそういう女性が大好きです。心に決めた一人だけを愛し、愛される。人とはそういう風にいるべきだと、ボクは思いますから」

「——狭量ね。貴方こそ、本当に彼女が好きであるのなら、たとえ裏切られようとも、愛せば良かったのに」

端的に言つて、アイラ・ル・リル・ラ・ネフィリアムという少女の価値観は壊れてい

る。

誰かを愛し、愛することにかけて、彼女ほど極端な在り方を持つ少女は他に早々い
い。

ただ、自分が一番に愛している人から、欠片のような愛さえもらえればそれで良い。
自分が一番でなくても良い。

ほんの少しだけ、気まぐれ程度の愛だったとしても。

一滴だけの、情けのような愛だったとしても。

与えられればそれだけで満たされると、心の底から言える少女——故にこそ。

彼と彼女は、あまりにも相容れない。

「ボクの名前は、ネルラ・レト。名を聞こうか、恐ろしき少女」

「アイラ・ル・リル・ラ・ネフィリアム。貴方とは、愛や想いについて語り合いたくない
わね」

ネルラはブルリと身体を震わせた。目の前の少女——アイラという、自身の地雷のみ
で構成されたかのような存在に。

アイラは小さく吐息を吐く。目の前の青年——レトの、あまりにも情けない姿に。

「幼馴染の彼女を先輩に寝取られたバスタアアアアアアアアアア！」

「ああ、砂粒ほどの愛を。今此処に」
dovresticredere neituo stresso amore

どちらの在り方が正しいのかを決める戦いが、幕を開ける。

なたりあストロンゲスト

時は少しだけ遡る。

リオン・デイ・ライズは、眼前で展開された《根源魔装》に、少しだけ眉を顰めた。
「根源魔装……？」

ポツリと湧き上がった疑問を、リオンは訝し気に口に出す。

《根源魔装》とは、《根源魔術》と《魔装》の両方を習得した魔術師のみが至ることを許される、魔術師最大の秘奥である。

これまでの歴史を鑑みても、そこに到達したのはかの黒帝と、目の前の女。ナタリア・ステラスオーノだけとされていた。

呪術騎士であるリオンでも、そのくらいのことには知っている。

あるいは、魔力を持たぬ者であるが故にこそ、と言つても過言ではないが。

超大規模魔術である根源魔術と、属性そのものを鎧のように纏い、一定の領域を自身の世界で塗り潰す魔装。

あらゆる道理を弾き、無理を通すことが出来る——無理を道理に変換できてしまう、

超常現象。

そのような業を、五つ重複展開させているのだ。

本来であれば、この場で意識を保つことすらリオンには難しい。

だからこそ、おかしい。

眼前で展開された五重の根源魔装に、しかしリオンは何も感じなかった。

圧も、魔力も、脅威ですらも。

ただ、少しだけ風変わりなローブを纏っただけのように見えるそれは、リオンの目にはあまりにも脆弱に映った。

これなら、俺一人でも充分であると、そう思ってしまったくらいには。

「甘く見るでない、リオン。《五塵の相》は、木・火・土・金・水。五つの属性を一つの形に作り替え、五属性分の超大規模魔術を一工程で行使できるようにした火力特化の魔術。アレを以て彼奴は、百鬼夜行を単独で殲滅しおった——何も感じられぬということは、次元が違うことと知れ」

「ああ、そういうたら昔にいつペン、見たことあったっけなあ。ほな、どうや。あの頃と全くおんなじか、その身で試さしたるか」

ゆるりと杖が振るわれる。それより早く、ラウレストは防御用の呪物を起動していた。

第四の破滅戦に、リオンが使用していた大盾の呪物。それに類似した呪物が合計十枚飛び出し、ラウレストの全周囲を覆った。

刹那、極太の大樹の幹が、それにぶつかった。

「——ッ!?!」

否、正確に言えばその大樹は、盾を素通りしてラウレストを貫いた。けれどもそこに、痛みはない。

貫かれた傷も無ければ、血も出ていない。精神的なダメージですら皆無。

ただ、ラウレストを突き抜けていくのみ。

(幻覚……?) いや、有り得ぬ。五塵の相は全てが物理攻撃。幻覚の類は一切ないはず——であれば、魔法? いや、魔法による幻覚はまだ発展途上。儂が騙される道理はない!)

ラウレストが展開している盾は、五塵の相を相手にするために生成された呪物である。

並の魔法魔術であれば欠片一つで弾くことができ、三枚も重ねれば根源魔術にだって耐えうる、ラウレストの傑作が一つ。

だからこそ、ラウレストは混乱する。これは本当に、五塵の相か? と。

無論、五塵の相に木属性の魔術は、確かに備わっている。

《五塵の相・青：青龍》。これにより、かつてナタリアは数百の敵を、刹那の内に無力化した。

「考えとるなあ……そやけど、ええんか？ そないにチンタラしとつたら、手遅れになつてまうで？」

「なに、を……?!？」

刹那、ラウレストの視界はブラックアウトした。一寸たりとも光の映らない闇の中に、前触れもなく放り込まれ——

「否！ ナタリア、貴様、儂の視力を……?!？」

「御名答。言うたやろ？ あの頃と全くおんなじか、その身で試させたるつて——」

五塵の相——青：聳弧しやうこ

物理的な攻撃力を零にまで落とすし、その代わりに新たな価値——視力の削ぎ落とすしを付加させた、対人戦争を想定した根源魔装。

殲滅ではなく、制圧することを中心に組み上げられた、新たな根源魔装。

実体を無くしたそれは、あらゆる障害を素通りにして、障害だけを残す。

「無差別に木い生やさんし、根え生やしてじわじわ命吸つたりもせん。代わりに五感の一つ、永久に削ぎ落とす」

「——その程度で好い気なるか、甘くなったのう。その辺の雑兵ならまだしも、儂が視力

を失つたくらいで、止まるものかッ！」

カイウス・ラウレストは、世界最高峰の呪術騎士である。目が見えなくとも、呪力の流れは分かる。

自身の周りを旋回させている盾から呪力を飛ばし、それによる反響で周囲を把握する。

反響定位の呪力版、と言えば分かりやすいだろうか。

元より、常人を遥かに超えた身体スペックを誇る呪術騎士だ。

この程度ではハンデにもならないと、ラウレストは刀を抜いた。

「おい、もう忘れたか？ 五塵や言うてるやろ。相変わらんと、焦ると思考疎かになるなあ」

「な、あ………？」

見えない焔が、ラウレストの全身を包む。無論、そこに痛みはない。

焼ける苦しみも、焼けていく感覚も、何もかもが絶無。

ただ、するりと手から刀が落ちた。ラウレストが作成した特級呪物が一つ。

数十年以上呪力を練り込まれた刀が、振るわれることもなく。

「五塵の相——赤・炎駒えんくま」

次は触覚や。とナタリアが薄く笑う。

五塵の相とは即ち、五感の永久剥奪を可能とした魔装である。

とはいえそれは、ナタリアが新たな魔術属性を獲得したという訳ではない。

これはナタリアが先天的に保有していた、魔術属性の延長線上にある能力だ。

木・火・土・金・水。一般的に五行と呼ばれる属性を保有していたナタリアは、その解釈を概念的 direction に深めた。

五行とは即ち、色・触・味・香・声の五塵である、と。

それを司るのだから、当然与えるのも、奪うのも自由自在である、と。

その思考の自由さが、ナタリアを世界最高峰の魔法魔術師たらしめていると言っても良いだろう。

あるいは、真つ当な解釈では黒帝には遠く及ばなかったからこそ、別方向に進んだと言えなくも無いが。

「折角や、全部見ていけばええ……つと、そういうたらもう目はあらへんのやったな。かんにんかんにん」

「う、おおおおおおおおお！」

「せやさかい、遅いつて。そうするんやったら、最初からせんかい」

五塵の相——黄：麒麟きりん

実体を持たない土の柱が、ラウレストを貫く。

同時、ラウレストからは声^{こゑ}が失われた。

パクパクと数回口を開くが、音の一つも発せられることはない。

「触と味。舌と口。二つ失くせば音は失く……どや？ 今の気分は」

「――！」

「あははつ、何言いたいのかも分からんわ。五塵の相——黒：角端^{かくたん}」

津波の如く現れた真黒の水を、ラウレストが回避する術はない。

ただ呆然と呑まれ、また一つ感覚を削ぎ落される。

ラウレストの世界から、音が無くなった。

ここまでか、とナタリアは小さく息を吐く。

「さて、と。あんまり虐めるのに時間かけてもアレやしなあ。秘策もなんも無さそうやし、そろそろ殺しとくかあ」

ま、これも聞こえてへんやろうけど。と言葉を零しながらナタリアは飛び上がる。

杖を取め、掌を広げ。

カチリと、意識を切り替えた——元より五塵の相とは、ラウレストが知つての通り火力特化の魔術である。

意識の切り替えで、解釈の方向は変えられる。

概念的な根源魔装から、物理的な根源魔装へと。

制圧から、殲滅へと。

「五塵の相——白：白虎」

掌を握りしめた瞬間、ラウレストにはまるで、猛獣に食い破られかのような傷が出来上がった。

左半身を丸々消し飛ばされたように皮は破れ、肉は抉れ、骨は砕かれ、遅れて血が噴き出る。

浮遊していた盾の呪物は、手繰り手を失い落ちて行き、それに倣うように、ラウレストもまた地面へと落ちた。

グシヤリと呆気ない音と共に、ラウレストは絶命した。

その身体を数回足で小突いてから、ナタリアは笑う。

「ん、こないなところか。大口叩いた割には、なんてことなかったなあ。ま、ええけど。さーてと、ちやつちやと雑魚狩りしてまうかあ……あ？」

「うむ、うむ。人は敵を倒した直後が一番油断する——じやつたかな？ ふおつふおつふお、教えは覚えておくもんじやのう、ナタリア？」

「がつ、ああ……!? てめ、ジジイ、何で……!?」

ゴボリとナタリアは吐血する。その腹には拳大の風穴が一つ、強引に空けられていた。

下手人は言うまでもない。

先程までボロ雑巾のようにくたばっていたラウレストが、その手ずから空けたのである。

不思議なことに、その身体に傷は一つもなく。

奪われた五感は正常に戻っているようだった。

「——白虎ッ！」

「むっ」

ナタリアの判断は的確かつ、迅速だった。

自身の腹を貫いている腕を引きちぎり、もう片方の手で手繰る白虎で、振り返りざまにラウレストの上半身を裂き消す。

五塵の相——白：白虎。

それは《金》の魔術属性から生まれた、根源魔装が一つ。

己の四肢に白虎を模した、無色透明かつ貫けぬもののない巨大な牙と爪を付随させ、視界に入る任意の場所に出現させる、破壊の魔術。

たった一人に向けて圧縮させたそれは、空間ごと引き裂いてしまうほどの威力を誇っていた。

ラウレストの上半身は塵も残らない——しかし、致命打にはならなかった。

何故ならば、その場に残った下半身が後を追うように消え。

そしてまるで、幻のように五体満足のラウレストはその場に現れたのだから。

対呪力の秘薬を飲み干し、回り始めた呪力を相殺しながらナタリアは舌打ちをする。

「再生、やないな。何や、それ……転生。いや、転身か？」

「ほう、一目で見抜くとは。流石は、一時とは言え、農の師であっただけのことはある」

《根源魔装》や《魔装》といった深奥が魔術にあるように。

呪術にも、深奥と呼ばれる極致が存在するとされている。

無論、机上の空論だ。

これまでの歴史上、そこまで辿り着いた人間はいなかった。

それが今、覆される。

「窮^{きゆう}厭^{おうえん}呪怨——並行輪廻無限転身体」

吹きあがっていた呪力が、ラウレストの全身へと巻き付いていく。

たった今までこの場を制圧していたナタリアの魔力が、ラウレストの呪力に押し返さ

れ始める。

拮抗——を少し超え、呪力が圧を増した。

「捻った名前にはならんかったがのう……じゃが、分かりやすいじゃろう？ あらゆる

並行世界から、無事な農の肉体だけを呼び寄せ、自らの魂を載せることができる。今の

儂は、実質的な不死と思え、ナタリア」

「……人の身を捨てたか、カイウス」

「呪いの道は、人の身で歩みきるには時が足りなすぎたのじゃよ」

転身とは、元より呪霊の本分だ。呪いより出でたそれは、呪い以外の術で器を失うと、新たな肉体を世界の方から提供される。

それを、人の身で再現するのは不可能だ。されども、呪霊を喰らった人間であれば？ 呪霊の魂を呪術で抽出し、自身の魂と混ぜ合わせれば、肉体が熱を失った時、世界の方から肉体が提供されるようになるのではないか？

そのような考えの下にラウレストは呪霊と一体化し、結果として呪術の深奥に至り、並行世界の自身と接続するにまで至った。

「不老にまでは至れんかったがのう。戦うのであれば、十分に過ぎる」

「……醜いったらありやしないなあ」

「何百年と生きるエルフと比べれば、そう見えても仕方がないじやろうな」
「チツ、死ねや」

無造作に振るわれた白虎の爪が、しかし防がれた。盾ではない。ただの片腕で、ラウレストはその一撃を防いでいた。

多少の傷は入ったものの、致命傷には程遠い。

瞠目したナタリアに、ラウレストはため息を吐く。

「呪術騎士とは、呪術とは。負の感情を薪とする術じゃ。のう、ナタリア。優に四百年も生きるお主には、二度も殺された人間の恩讐は、どれほどのものか、分かるのかのう？」

「ハッ、面倒になってきたなあ……ああ!？」

全身で未だに暴れる呪力に吐血したナタリアに、砲撃が降り注ぐ。甘楽の魔導とすらまともに撃ち合えるそれは、ナタリアへと火傷に近い傷を残した。

リオン・デイ・ライズ。

魔法魔術の頂点と、呪術の頂点に立つ両者の戦いの渦中におかれ、しかし傷の一つも負わず、気を失いもしなかった。

それは偏に、リオンが実力者であるというのもあるが、それ以上に、リオンが選ばれし人間であったから、としか言いようがないだろう。

圧倒的な呪力と魔力をその身に浴び、頂上決戦の一幕をその目に焼き付けたリオンは、既にステージを一つ上がっていた。

今やリオンは、致命傷に近い傷を負っているとはいえ、ナタリアの存在感をしっかりと把握することが出来ていた。

「ふー、良し、良し。良いねえ、見えてきた。助かったよ、爺さん。お陰で俺も、呪術について理解ってきたぜ」

「であれば、成果を見せてみよ。ナタリアを潰し、魔法魔術界も、世界も丸ごと終わらせてのう」

「ハハッ、物騒だなあ。でも、りよーかい。リオン・デイ・ライズ。いくぜ——」

『R a g i o n e t r a s c e n d e n t a l e : v e r . d e l b o m b a r d a m e n t o 』

一筋の閃光が空を裂く。反射的に防御に回った大盾が、一枚、二枚と破り貫かれた。

パラパラと細かい欠片と化した盾が、呪力を霧散させながら地へと落ちる。

それを踏みしめるようにして、少年は戦場へと現れた。

「弱いものはイジメは良くないって、学校で教えないのかよ。ヴァルキュリア呪術騎士学校つてのはよ」

「いや誰が弱いものやねん……！　ちやつかりうちを弱者扱いすな！」

「あれ!?　今のは颯爽と現れた俺に感謝を告げるところなのでは!?!」

「うっさいわ！　キメ台詞にしたつてもうちよつとあつたやろ！」

「うおー！　俺の台詞センスに言及するのはやめてください！」

血反吐を巻き散らかす校長が見えたものだから、焦って思わず砲撃をぶちかましたところ、普通にガードされたし校長からは文句を言われる俺であった。

ちくしょう……！ 何もかも上手くいってねえ……！

唯一上手くいったのが、校長が死ぬ前に辿り着けたということくらいである。いや、そもそも校長がこんなにもボコボコにされてること自体がもう、予想外ではあるのだが……。

何なら俺が行く前に片付けておいてくれるかなーという、淡い期待をしていたくらいであるのだが、真逆の現象が発生していた。

ここは素直に、ラウレストとリオンを称賛しておくべきところなのだろう。

絶対にしないが。

出来れば殴らせて欲しいな、とかは思う。

「……甘樂は、そっちのガキ共を頼む。うちはあのジジイの相手してやらなあかんっばいさかいな」

「大丈夫なんですか？ フラッフフラですけど」

「無問題や。むしろ、ハンデとしてちようどええくらいや」

言つて、ナタリア校長は飛び上がる。既に腹の傷は塞いだらしい。同時に動き出したラウレストと、熾烈な合戦を始めて遠退いていく。

そうすれば必然、俺たちだけがその場に残ることになった。

「おいおい、そう睨むなよ、甘樂。騙したことについちゃ、悪いと思ってるけどさ。相棒だつて言つたのは心の底からの、素直な気持ちだつたんだぜ？」

「いや、だとしたら尚更ダメだろ……どうすんだよ。俺、今普通に傷ついてるからね？百発殴つてもまだ足りないから」

「——殺したいとは、言わないんだな」

「ただの喧嘩で、そこまで物騒なこと言い出すほど、俺は野蛮人じゃないんだが……」
「だいたい、リオンを殺したところで俺に得が無い。騙された、裏切られたと言つても、命のやり取りをする程では無いというのが正直なところである。」

喧嘩は喧嘩だろ。

これで仮に、周りの人間が誰か殺されました、というのであれば話は別だろうが……。
そういう訳でも無い。何なら多分、今一番こいつに傷つけられているのは俺である。
であれば、そう。

俺は、俺の為に、誰かを殺したいとは思わない。

「それに、そういう恨み辛みつてのは、連鎖するものだろ。俺で途切れさせられるなら、その方が良い」

「……甘樂のそういう、如何にも主人公らしいところ、死ぬほど嫌いだぜ」

「どういふベクトルの僻みなんだよ、それは……」

というか別に、主人公らしいこと言っていないし……。

一般的なことを言っただけでこれなのだから、リオンの主人公判定はかなりガバガバだった。

ただ、それはそれとして。

「そういう嫌悪は言い訳にしてやらないから」

「良いねえ、そのくらいじゃないと盛り上がらない——なあ？ ミラ」

「っ！」

「悪いな、日之守クン」

刹那、申し訳なきに彩られた声がした。それに重なるように、呪力の込められた戦斧が鋭く閃き、

「あらあら、行儀が悪いですわね、ミラ様。騙し討ちなんて、はしたないですわよ？」
焰の盾に防がれた。

数秒の拮抗の後に、弾かれたようにミラがリオンの傍に立ち。

俺の隣に、レア先輩が並ぶ。

これで二対二だ。あるいは一対一が二つ、と言っても良いだろうが。

「ふ〜……間一髪でしたわね。ぶっちゃけ、間に合わないかと思いましたが」

「いや、あの、ちよつと？ そんなギリギリだったんですか？ 今になって心臓バクバクしてきちやつたんですけど……」

「ふふつ、もちろん冗談ですわよ」

ふわりと微笑んだレア先輩が、胸を撫で下ろす。えつ、本当？ 本当に冗談だった？
ねえ……。

軽く問い詰めたくはあつたが、残念ながらそんな暇はなかった。

斧を携えたミラを、じつと見つめる。

「随分顔が青いな、ミラ。もうやめたら？」

「そうはいかねえ……オレは、道具だからな。マスターじじいの命令は絶対順守。ゼッテ道具つてのは、

そういうもんだろ」

「とても本心とは思えない顔だけど？ それに、その身体……」

「……うるせえ、黙れ」

少しのやり取りだけで、説得するのは不可能であることを察する。

というか俺自身、大して口が上手くないどころか、むしろ下手なまであるから……。

ミラについては任せた方が、きつと良い方向に転がる。

「ええ、ミラ様はわたくしにお任せください」

「ありがとうございます、レア先輩。ミラを、頼みます」

デカくはなったが、俺専用に作り直してもらった杖を握り直して、息を整える。魔力神経に問題はない。身体の方は、若干血が足りない気もするが、その程度。つまりはフルコンディション。

相手は初めて一緒に戦っていたかと思えた、運命のような男。ガツツリ信頼した瞬間に、思いつき裏切ってきたとんでもない男。しかも多分、私怨だ。

何か複雑な事情はあるかもしれないが、それはそれとして、多分に私怨が含まれているであろうことが、言葉にされずとも分かる。

正しく、何か知らんところで知らんやつに恨まれていた状態なのは明白だった。

だから、まあ、何ていうか……アレだよな。

「普通にイラつく、今すぐ落ちろボケ」

「ハハッ、これを見ても、そんな暢気なことが言えるか!? 甘楽——起きろ! 第

三、第四の破滅! 俺の身体を、貸してやるツ!!」

「は!!?」

俺が絶叫するのと、リオンの全身が破滅に吞まれるのは同時だった。

あまりにも覚えがある、身の毛がよだつ感覚が肌を撫ぜる。

「あ、あ………生命の、幕を引く時が来た」

ざらりと空気が変わる、世界が歪む。

第三、第四の破滅。両方の同時完全顕現。

最高の器を以てそれは今、成し遂げられた。

「わたし、ボク——俺は、第三、第四の破滅。終焉を連れるもの」

其処に在る。ただそれだけで、世界が悲鳴を上げる。

呪力が、魔力が吹き荒れる。

リオンの全身は今や、魔力と呪力に。黒と白に彩られていた。

肌には幾何学模様が刻まれ、それでも瞳は青の輝きを閉じ込めている。

「破滅の未来を此処に——汝らの終焉は、今定められごぶおああ!!? ちよつ、えつ

!!?»

「あのさあ……!!」

それがあんまりにも腹立たしくて、ベラベラ喋ってる間に一発、拳をぶち込んでしまった。

顎をかちあげられたリオン——破滅が、驚愕したまま身体を硬直させている。

殺し合いじゃなくて喧嘩だって、何回言えば分かるんだよこいつ。

ああ、クツソ。勢いで動きすぎちゃったから拳が痛い!

「一対一の喧嘩に部外者連れて来てんじゃね————よッ! 今時バブちゃんでも

「パパママ抜きで喧嘩くらいできんぞ?!」

「なっ、え、ええ……?!」

「一回ぶち殺して常識叩き込んでやるよクソ童貞野郎ーっ!」

「お、お前さつきと言ってることが違うぞ!? 滅茶苦茶すぎる!」

「殺すのか殺さないのかどっちだよ! あと童貞じゃない! と叫んだ破滅兼リオンの口には、問答無用で杖を叩きこむ。

ちっ、うっせーな。喧嘩の仕方知らない男は黙つてろよ。

ガリガリと歯を削っているのを感じながら、渾身の魔導を杖に流し込んだ。

「その邪魔虫、今消してやる」

『Raggi one t r a s c e n d e n t a l e : v e r . d e l b o m b a r d a m e n t o 』

蒼の閃光が解き放たれる。

遠慮なし、容赦も一切抜きで放ったそれは、易々と破滅兼リオンの全身を?み込み、地表へと叩きつけた。

さながら悪霊が抜けていくように、リオンの全身から塵となった第三、第四の破滅が抜けて、ほとんどを散らせながらもリオンの右腕に収束していく。

顕現したばかりだったから耐久力が低かったんかなとか、まあ憑依状態じゃないな

ら良いかとか、そんな事を思う。

まあ、俺も魔王に代償は肩代わりしてもらってる訳だしな。

すぐ近くに降り立って、リオンが立ち上がるのを待つ。

さほどダメージはなさそうではあるが、それでもふらついた様子のリオンを、ハッと鼻で笑った。

「ちゃんとした喧嘩の仕方ってのを教えてやるよ。来い、相棒」

「ハハッ、うざりたいな……主人公ってのはさあ！」

れあコネクター

「あらあら、日之守様方はド派手にやり始めましたわね。でしたら、こちらも始めましょうか。ね、ミラ様」

「……そこを退け、リスタリア。オレの標的は日之守^{ヒノノ}クンだけだ。テメエと戦う理由はねえ」

「残念ですが、それがもう、わたくしにとつては、戦う最大の理由になるんですよ」
目には見えない、けれども確かにそこにある魔力と呪力がせめぎ合う。

ミラキキュリオ・プリーモは、接近戦を主体とした、実に模範的かつスタンダードな呪術騎士だ。

そして、それは同時に、魔術師にとつては相性の悪い敵ということも意味する。

魔術師の本領は基本的に、中々遠距離。

徹底して近づかせないレアと、半歩ずつでも近寄るミラの熾烈な攻防が幕を開けた。

「呪怨武装：code003——ぶつ破壊せ！ 超級^{SSR}美少女百連ガチャスラッシュ

f o s c h i a d i c a l o r e f o n t a n a f i n a l e q u a n t o s i a v e r o o f a l s o
 「陽炎の道果ての泉は真か偽か」

呪力を解放した一撃が捉えたレアが、ブワリと解けて消えていく。

超高精度の幻覚——それでいて、ただの目くらましかではなく、揺らめく炎が掠めるように、ミラの肌に火傷を残して消えた。

(クソツ、視界が嫌に歪みやがる。炎の影響か、あるいは精神干渉系か……!?)

軽く舌打ちをしたミラが、戦斧を床に突き立てる。

中々遠距離に徹するレアに、ただ愚直に接近するのは悪手でしかない。

ガチャリとレバーを入れて、コマンドを叩いて叫べば、それは巨大な銃の形へと変形した。

「呪怨武装：c o d e 0 0 2——蜂ぶちまけろの巣ねにしろ！クソリプ炎上マシンガンツ！」

「貴女様、それ本当に口に出して辛くなったりしませんの!？」

「なるから！強えんだろうがよおツ！」

呪力の弾丸が、増え続ける幻覚を根こそぎ消し飛ばす。

呪怨武装——カイウス・ラウレストが作成した呪物の一つでありながら、ミラの専用ワンオフ

武装。

一から十までの形態が存在するそれを、ミラはコンマ数秒も要せず切り替え、巧みに手繰る。

オーソドックスな呪術騎士でありながら、最も新しい形の呪術騎士。

それが、ミラキキュリオ・プリーモと名付けられた女である——それを相手するレアは、稀代の天才魔術師でもあるが。

「狙い^{non rimuovere}過^{luce della vita}たず^{spegnere} ろうそくの火を 吹き消さん」

「つ危^ぶね! チツ、精度^{ねらい}が良すぎんだろ……躲^{かく}しきれねえ」

焰で編まれた弾丸が、さながら雨粒のように降り注ぐ中をミラは駆け抜ける。

呪怨武装はcode005。剣に近い形になったそれを、片手に踊るように舞う。

じりじりと、互いの距離は縮まっていた。

厚くなる弾幕の前に、それでもミラは止まらない。

(……速すぎますわね、止められない——ミラ様には、止まる気が無い……? いえ、いえ。ミラ様にも止まれないと見た方が、良さそうですね)

レアは既に、《神焰》の魔装を展開している。操る炎は一万度を優に超えている。太陽の表面温度が約六千度であることを考えれば、ほぼ必殺であると考えても問題ないだろう。

直撃すれば火傷程度では済まない——一撃一撃が致命に繋がる。

その中を怯むことなく、防御に徹することもなく、ただ駆け抜けるミラは、明らかに異様だった。

これほどの熱を浴びながら、回避しきれずに焼けて行きながらも、止まるどころか、足を鈍らせずらしい。

悠々と突き進むその様子は、痛みを知らない獣のようですらあった。

常人では有り得ない——異常者代表の日之守やリオンとは別ベクトルで、ミラはおかしい。おかしくなっている。

(ハッ、何も感じねー。壊れる前に殺るか、殺る前に壊れるかの二択しかねーってか。益々道具らしい——あーあ、オレは何やってんだかな)

剣を振るいながら、ミラはどこか冷めた様子でレアを追い回す——ミラにも止まれなという、レアの予測は的を射ていた。

今、ミラの身体を突き動かしているのは、ミラ本人の強い意思ではない。

全身の血管を走っているかのように感じる呪力——ミラの呪力ではなく、ラウレストの呪力が、ミラの一挙手一投足をコントロールしていた。

日之守を後ろから刺したその瞬間から、ミラは自由を奪われている。痛みも感じず、恐怖すら感じず。

ただ、作り手の意思に従い、命令をこなす人形。

それが、ミラⅡキュリオ・プリーモという、呪術騎士だった。

「——ええ、ええ！ 知っています。分かっておりますわ。だからこそ！ わたくしが

此処にいるのです！」

されども、レアが焦ることはない。このような事態は、レアにとって、想定内であつて欲しくなかつた、想定内であつた。

少なくとも、ミラがこうして敵対することを、ミラがこのように戦うであろうことを、レアは最初から予想できていた。

正確に言うのであれば、レアの他にも、もう一人いるが。

故にこそ、準備は出来ていた。恐らくは、誰よりも。

「少しだけ、ギャンブルになりますわよ。覚悟してくださいませ……」
散らしていた魔力を、炎を自身に集中させる。

イメージするのは、一年前の自分自身——正確に言うのであれば、第二の破滅。レアを器とした第二の破滅の戦い方は、魔法魔術師のものではなかつた。

けれどもそれが、それこそが、レアの意識に革命を起こす切っ掛けとなつたと言つて良いだろう。

中々遠距離戦以外は避けるべきという、魔法魔術師にとつての前提を破壊する為の。

苦手意識は気合で乗り越えるのが、レア・ヴァナルガンド・リスタリアという少女のモットーだ。

収斂された炎と、限界を超えて一体化する。

ドレスは近接に向いた、より動きやすいものへ。

露出した肌は、薄く伸ばしながらも硬質な焰で覆い。

懐まで踏み込みながら放たれたミラの一閃を、レアは一点集中させた焰を纏う拳で受け止めた。

「く、うう……流石に重たいですわね……!？」

「……は？　ウッッ 夢だろ、ありえねえ……!」

「ふふ、有り得ないなんてことは、有り得ませんのよう？　ミラ様」

誰もが知る由も無いが、レアはかの黒帝——ノエル・ヴァルトリク・リスタリアの遺伝子を、もつと言えば才能を、最も色濃く受け継いだ、ただ一人の魔法魔術師である。

しかし、これまでレアは、理論を突き詰めるタイプのノエルとは違い、感覚で魔術を手繰ってきた。

それが第二の破滅に憑依され、器となったことで、第二の破滅が持ちうる理論が強制的に共有された。

レアがこれまで積み上げてきた努力と、感性だけで魔装へと至った才能。

そこに突き詰められた理論を、ポイと渡されればどうなるか。

当然、それらは相乗する。

これ以上ないほどに、それらは噛み合う。

魔術を超え、魔法を超え、その先へと指先を届かせるほどに。

「焼き尽くしなさい——スルト審判の焰」

その魔導ほのおが顕現したのは、ほんの瞬きにも劣る刹那の間だけだった。

媒体を一つも使用しない、レア自身の脳だけでは、それが限界であった——けれども、それだけで十分でもあった。

あらゆるものを焼き尽くし、絶無へと還す焰は、しかし手繰り手の意思に従い、邪なるもののみを焼き焦がす。

「——ッ!?!」

故に、再び振るわれていたミラの剣は一瞬にして焦げ落ちた。跡形も無く舐め尽くす焰は、ミラの全身すら絡めとる。

煌々と燃ゆる焰は、しかしミラに傷を残すことはなく、呪いだけは焼き祓った。

呆然と立ち尽くしたミラの額に指を当てたレアが、小さく笑う。

「勝負あり、ですわね。ミラ様」

「なっ……オレは、まだ——」

「いいえ、終わりです。武器を失った呪術騎士は、正直言って怖くありませんわ——それに、戦う理由はもう、無くなったでしょう?」

「——嘘だろ、ジジイの呪力を、焼き切ったのかよ」

有り得ない——と、再び零しそうにあなつた言葉を、ミラは呑み込んだ。

いかに認めずとも、事実ミラの身体は自由を得ている。抑え込まれていた痛覚も仕事をし始めたようで、あちこちが訴えてくる痛みに、ミラは顔を顰めた。

「ミラ様に一つ、聞きたいことがございます」

「……良いぜ。勝者の特権だ、それは」

「もしかしたら、話しづらいことかもしれませんが……転身体の製造計画について、と聞けば、ミラ様には分かるでしょうか？」

「——つ、な、んで、それを、知ってる!？」

展開していた魔装を解きながら、レアは小さく息を吐く。

ミラがこの学校にやってきてから、レアがアテナに依頼されていた調べもの。

それは、呪術騎士学校校長：カイウス・ラウレストについてであった。

『根拠とかはないんだけど、あのお爺ちゃん、どーにもきな臭いんだよねえ……そういう訳で、せんせー的にはちよつと調べて欲しいって訳。頼んだよ、レア』

そのような、実に軽い口調によるお願いであったが、これも第七秘匿機関の任務としてレアは承諾し、ありとあらゆる手段でこれに迫った。

結果的にレアは、ラウレストの迷惑には辿り着くことは出来なかつたが、代わりに、かつてラウレストが極秘裏に行っていた、『転身体の製造計画』という実験の存在を知つ

た。

「まだ、触り程度しか調べられていませんが……ミラ様は、その実験で作られた人工生命。そうですね？」

「……良く調べてんな。隠しても仕方ねえ——ああ、大正解だぜ」

はったりでも何でもないことを確信したミラが、パタリと仰向けに倒れる。

戦う意志はなかった。いいや、元よりそんなもの、ミラには無かつたと言つて良いだろう。

この場において、ミラだけが、自身の裡から生まれた戦う理由が存在しなかつた——あるいは、失くしてしまった。

「良いぜ、教える——ジジイの思想と、オレの存在は切つても切り離せねえだろうしな」
それからミラは、訥々と語り始める。

自身の出自を含めた、カイウス・ラウレストのことを。

「さて、おはよう、^{ブリーモ}一号。調子はどうかのう？」

今から数えてきつかり六年前。ミラⅡキュリオ・ブリーモは、カイウス・ラウレストと、それに協力する技術者たちの手によって、この世に生まれ落ちた。

一般的な生み出され方ではなく、技術を駆使した末に作り上げられた、人工生命体。彼女の名に『一番』^{プリモ}が与えられたのは、偏にミラが、一番最初に作り出された人工生命体であり、数多に生み出された人工生命体の中でも、最も成功作に近かったからである——そう、成功に近かった。

端的に言つて、ミラッキュリオ・プリーモは失敗作だ。

転身体製造計画——Project—Eternit・と名付けられていたその目的は、文字通り『人工的に転身体を生み出すこと』である。

人の手による『不老不死』を実現する為に、カイウス・ラウレストとそれに協力した呪術騎士・研究者が、いつか見た夢のお話。

その過程で生み出されたのが——カイウス・ラウレストの転身体として造られたのが、ミラッキュリオ・プリーモだ。

作り上げられた肉体に欠損はなく、不具合はなく、脳は正常に稼働し、内臓も問題なく、魔力は保有せず、戦闘センスに恵まれ、そして何より、ラウレストの呪力に適合した、ほとんど完璧な人工生命体。

けれども、決定的に誰かの魂を受け容れることは出来ない、誰かの次の器になり得ない、致命的な欠陥品であった。

ミラは、普通の手段で生み出されなかったが、しかし、その在り方は通常の間人と遜

色なすぎた。

故にこそ失敗作。けれどもそれ以降、ミラほど完璧な肉体は、一つたりとも生まれなかった。

「……潮時じゃな。転身体を人の手で作り上げるのは、現時点では不可能と考えるべきじゃろう。これ以上を追求するには、また果てしない時間がかかる……儂にはもう、そこまでの時間は残されておらん」

ラウレストが溜息交じりにそう断じたのは、ミラが生み出されてから約二年後のことである。

この時、ミラの肉体年齢は六歳——飽くまで実験体であるミラの肉体成長速度は、常人の三倍に設定されていた。

一年の内に、ミラは三つ歳をとる。

とはいえ、ラウレストを含む研究員に、徹底された教育を受けていたミラの頭脳は肉体相応であった——精神年齢は別であったが。

「のう、プリーモ。儂のことは好きか？」

「んー？ ま、そうだな！ じじいのことは嫌いじゃねえぜ！」

「うむ、うむ。であれば、プリーモ。儂の剣になつてくれんかのう？」

いつも通りの優しげな声で、そう告げられた日のことを、ミラは良く覚えている。

ほんの、三年ほど前のことだ。

これを快諾したミラはその日から、呪術騎士としての鍛錬が一日の大半を占めるようになった。

狂ったように武器を振るった。

寝る間も惜しんで呪力を使い込んだ。

血反吐を吐いても鍛錬は終わらなかつた。

「いや？ やめたいとかは思わねーよ。じじいに毎日毎日半殺しシバかれするのは辛いツレけどさ、オレはじじいの為に戦うって、約束しちまつたしな！」

いつか、誰かに「もうやめたいとは思わないのか」と聞かれた時、ミラは屈託のない笑顔と共に、そう返したことを覚えている。

それほどまでに、ミラにとってラウレストは本当に、親であり、祖父であり、家族であつた。

ラウレストはとうの昔に道徳に背いた人間ではあつたが、かといって、何もかもが破綻している人間ではなかつた。

計画を進めるにあたり、多くの命を身勝手に費やしてきたが、それでもラウレストを裏切った人間が一人もいなかったことが、その証左だろう。

自身が特別な出自であることを理解した上で、それでもラウレストに付き従つたミラ

のように。

ラウレストの周りにいた誰しもが、ラウレストを嫌悪することはなかった。

カイウス・ラウレストは、度し難い人格者であった。

もしくは人の心を容易く手懐けることが出来てしまう、狂人だったのかもしれないが——いや、いや。

事実、狂人ではあったのだろう。あるいは悪人か。

どちらにせよ、ただならぬ人間であり、罪を重ねた人間であり、許されてはならない人間であるのは間違いないことだった。

——それでも、ミラにとつて、カイウス・ラウレストという男は、これ以上のない、ただ一人の家族であったのだ。

悪人であろうと、狂人であろうと、罪人であろうとも、子供が親を信じたいという気持ちには、間違っているだろうか？

子供が親の為に力になりたいと、そう思う気持ちは間違っているだろうか？

間違っている訳が無い。

間違いであつて良いはずがない——だからこそ、ミラの幼い心に傷は残った。

ミラがラウレストのことを家族として見ていた一方、ラウレストは飽くまで、ミラのことを一号としてしか見ていなかったのだから。

だから、間違いだというのであれば。

ミラキキュリオ・プリーモという少女が、カイウス・ラウレストという男のことを、家族として愛してしまったこと。

そこからもう、間違いであったと、そう言うべきなのだろう。

「——なんてな。ま、勝手に家族だつて勘違いした、玩具の戯言だ。悪いーな、大したこと知らなくてよ」

「いえ、いえ。良くありませんわね。決めつけるのは、早計だと思いますわよ？」

長く深くため息を吐いたミラは、そつと手を握ったレアに、力強く引つ張り起こされた。

半ば抱きかかえられる形で、ミラは立ち上がる。

ミラの震える背中を、レアが優しく叩いた。

「どれだけ親しい人であろうとも、人間である以上、齟齬無き相互理解は不可能ですもの。たつた一つや二つの言葉で言い表せられるほど、誰かが誰かを思う気持ちは単純ではありませんわ。共に過ごした時が、積み重なれば積み重なるほど、想いというのは複雑になるものなんですから」

だから、直接会つて聞きましょう。問い質しましょう。話し合ひましょう。腹を割りましょう——と、レアは言う。

それは恐ろしい行為であると、ミラには分かる。いいや、レアにだって分かっている。それで本当に、改めて、心の底から否定されてしまったら？

ミラにはどうすればいいのかも、あるいは自身がどうなってしまうのかすらも、分からない。

けれども分からないまま、碌に言葉を交わすこともなく、ただ投げやりに放られた言葉だけを真に受けて終わることも、また恐ろしい。

どちらを選ぼうとも恐怖しかなかった。

どちらに進もうとも正解とは思えずに、ミラはレアにしがみつく。

「大丈夫。怖いのなら、わたくしも一緒にいきますわ。嘗めたことを言うようなら、わたくしがグーで分かせて差し上げましょう」

「……何だ、そりゃ。そもそも、何でリスタリアがオレに、そこまでするんだよ。オレ、一応敵だぜ？」

「敵も味方もありませんわよ——だって、ミラ様。貴女ずつと、泣いているんですよ？」

そう言われて初めてミラは、頬が濡れていることに気が付いた。

歪む視界はレアの魔術によるものではなく、自身の涙であったことに、ようやく気付く。

気付くと同時に、歯止めは利かなくなつた。

ボロボロと、嗚咽と共に涙は零れ落ちる。

そんなミラを、レアは優しく抱きしめた。

「だから、力をお貸しします。わたくしが、ミラ様の助けになりますわ。わたくしがミラ様を救うことは出来ないかもしれませんが、ミラ様が一人で立てるまでの、お力添えくらいは出来るでしょうから」

人は、人に繋がれたものを、次の誰かに繋げるものだ。

かつてレアが、一人の少年に救われたように。

次はレアが、一人の少女に救いの手を差し伸べる。

繋げるもの次第で、世界は変わるものだから。

繋がれたもの次第で、人は変わるものだから。

それを知っているからこそ、この小さな少女を、レアはうんと強く抱きしめた。

あいらペネトレイター

「おや、プリーモさんが負けましたか。まあ、元より彼女に、そこまでの戦果は期待していませんでしたので、足止めご苦労様でした……と言ったところなのでしょうが。感じられた魔力も桁違いでしたし、仕方がないでしょう」

アルティス魔法魔術学園、地下階段前。通常時であれば、幻覚によって秘匿されているそこは、既に露出していた。

つまりは異常事態。だというのに、そこは痛いほどの静寂に包まれている。

「……少しだけ、ボク達について教えてあげましょうか。ああ、どうか遠慮はなさらずに。これからの大仕事に向けた、休息も兼ねたいので」

真つ白な軽鎧を身に着けた男が一人、その場に腰を下ろす。

それからぐったりとしたように壁に背を預け、「どこから話したのですかね」と小さく笑う。

「初めに言っておくとですね、ボク達は何も、アルティス魔法魔術学園を……延いては魔法魔術を、恨んでいるという訳じゃないんです。メンバー内にはむしろ、好きな子だっ

ているでしょうし、憧れている子だっているでしょう。ほら、最近だと日之守さんだとかは有名ですしね。ボクらの学校にも、ファンクラブに近い何かがあるくらいですよ。まあ、彼はうちの校舎を破壊したから、その点では恨んでる子もいるでしょうが……」

だからと言って、敵対するほどではないし、ましてや殺すほどでもない。と、至極当たり前のことを、当たり前ではない状況下で、彼は言う。

何かしらの含みがある語りでは無かった。

彼は淡々と事実を語っている。きつとそれは、脚色すらされていない。

「では何故こんなことを？ と問われれば、それは当然、目的があるからです。大それた目標無くして、人は集まらない。優秀な指導者無くして、人は統一されない。常識ですね。基本的に、そこに例外はない」

例えば、第七秘匿機関の長がナタリア・ステラスオーノであり、その目的が七つの破壊を撃退することであるように。

例えば、魔獣魔族たちの長が魔王であり、その目的が人類の絶滅であったように。

ヴァルキュリア呪術騎士学校の長はカイウス・ラウレストであり――

「その目的は、世界の変革――世界の再創造。

ボクたちは、呪術騎士^{ボクたち}があぶれていない世界が欲しい。

子供じみた目的に見えるでしょうか？ だけど、ボクたちにとってそれは、例えば争

いの無い世界だとか、病の無い世界だとかが欲しいってレベルのモチベーションに並ぶんです。

それに、ラウレスト校長がそう望むんだから、ボクらもそれを願うのは、当然でしょう？」

呪術騎士は、世界的に見ても稀少な存在であり、年々その数は減少の傾向にある。

そのような環境下で、魔力を持たずに生まれて来た彼ら彼女らがしてきた苦労は、およそ他人に推し量れるものではない。

差別があり、排斥があった。

誰にも理解されず、誰のことも理解できない苦悩があった。

そんな彼らに手を差し伸べたのは、例外なくカイウス・ラウレストであったのだ。

多くの呪術騎士にとって彼は、文字通りの救世主であると言っても良いだろう。

自身を救ってくれた人が、世界を変えたいと願っている。

そして、世界が変わって欲しいと思うのは、彼がいなくとも、誰もが思っていることでもあった——例えば、レトはあぶれない世界に加えて、裏切りのない世界が欲しい。と言ったように。

「七つの破滅は、世界のリセットが目的だと聞いています。それはつまり、一旦は世界を白紙に出来るということでしょう？」

それならば、撃退より利用した方が都合が良いと考えるのは道理です。そして、ボクらは既に、三と四を手に入れた。

目的の達成はすぐそこ。だから、その前に邪魔を消しに来たんですよ」
ゆるりと彼……レトは立ち上がる。

一步、二歩と、静かにレトは歩み寄る——倒れ伏した、アイラの下に。

それは勝者の余裕。

それは勝者の特権。

「どうですか？ 合理的でしょう——なんて、もう聞こえてすらいなかもしれません
が」

「……あら、失礼ね。私は意外と、人の話は、良く、聞く方なのよ」

「おや、まだ意識があつたんですか。実にタフですね、素晴らしい……諦めの悪さだけは、一流と言ったところでしょうか」

「——っ」

這いつくばつたまま、アイラは奥歯を噛みしめる。けれども、立ち上がることが出来ない——とはいえ、それは別に、毒や呪いを受けた結果という訳ではなかった。

単純に、受けたダメージが大きすぎた。

攻防は数十回に渡り、その内のたった一撃が、アイラの防御を直撃した。

そしてそれだけで、勝敗は決した。

ネルラ・レト。彼の呪力放出は、カイウス・ラウレストすら上回る。

自身の裡から生み出す莫大な呪力を全て、物理ダメージへと変換した彼の拳と蹴りは、たとえガード越しであっても、あらゆるものを砕く。

だからこの場合、むしろ立ち上がることが出来ない程度で済んでいる、アイラの方を称賛するべきではあるのだろう。

無論、敗北した時点で、それも意味のないことではあるのだが。

「さようなら、頭のおかしい女。次生まれた時は、もう少しまともな脳だったら良いですね」

至極真つ当に、レトは足を振り上げる。渾身の一撃ではない。人の頭を踏み砕くのに、彼はそこまでの力を必要としない。

だから、実にゆつくりとした時間だった。

油断というよりは、事実として余裕である状況による、緩慢な呪力操作と動作。

それでも振り落とされた一撃は、鋼ですら突き破る——当たれば、の話ではあるが。

「沈Laveみなさい！」

「無駄だ——幼馴染の彼女を先輩に寝取られたシヨオオオット！」

瞬間的に身体を沈ませたアイラを、そのまま構うことなく追うように、レトは足を振

り切った——アイラが得意とする、影に出入りする魔術は、確かに便利ではあるが、入りに制限がある訳では無い。

直撃はしなくとも、呪力によつて形を得た衝撃が、影の中で強かに、アイラの背中を打ち付けた。

「がつ、ぐ、ううう……！」

そして、影を行き来する魔術は、緻密な演算を必要とする魔術である。あまりの痛みに一瞬だけ意識を飛ばしたアイラは、強制的に近くの影から排出された。

それでも倒れることはなく、すぐさま影へと戻ることと距離を取ったのは、流石と言ったところか。

戦況は未だ劣勢であることに変わりはないが、一旦の仕切り直しにはなった。

「本当に、タフですね。無防備な背中にクリーンヒットして、まだ動けますか」

「……ふふ、そうですね。あまりにも芸が無さすぎて、身体が慣れてきたのかも、しれないわね」

「強がるのなら、もう少し取り繕ってみては、如何です、かあ！」

「ダンッ！」という踏み鳴らしが聞こえた時には既に、アイラは回避行動に入っていた。思考を挟まない、反射の行動。

美しく伸ばされたレトの足先が、アイラの鼻先を掠め、それによつて生まれた衝撃波

が、学園の壁に罅を入れた。

直撃すれば、今度こそ命を落としかねない威力。

それでもアイラは、訝し気に眉をひそめた。

（見えてきた……いいえ、遅くなっている？ 癩だけでも、満身創痕の私が躲せている時点で、それは間違いはない。であれば、出力が低下している？）

振るわれる拳を、蹴りを、辛うじての反応でアイラは回避し続ける。

超至近距離での高速近接戦闘に、アイラがこうも付いて行けているのは、元よりインファイターの気質があるからだろう。

そして、同時にアイラには、これほどの距離で、一撃喰らえば即死に繋がるような攻撃を、恐れることなく観察できる胆力があり、冷静さがあつた。

全てを紙一重で躲し、一撃の重さを、早さを、後に残す影響を、何もかもを視界に焼き付け頭を回す。

何度も何度も何度も何度も。

レトの絶叫を聞き流しながら、数百を超えるそれを、アイラは躲し続ける。

（遅くなっているだけじゃない、威力も目に見えて落ちていく。思ってもみれば、直撃した時だって、本来なら背骨が砕けてもおかしくはなかったはずよ。最大防御の上からでもこれだったのに、無防備状態でこの程度というのは、幾ら何でもおかしい。何か仕掛

「けが——」

「——ああ、なるほど。そう、そういうことなのね」

「考え事ですか？ 余裕ですね……それとも、考えていたのは遺言でしたか？」

「口だけ達者な男は嫌われるわよ？ ああ、だから奪われたのね。ごめんなさい」

「——幼馴染の彼女を」

「それ、もう聞き飽きたわ——punizione per i rebugie 偽りに は 罰を」

「そんなもの、今更！」

ビタリと、不意にレトは動きを止めた。止められた。

自身の影から這い出たかのような腕が、全身を握りしめるようにして拘束している。

当然のようにレトはそれを破壊しようとして、けれども振りほどけなかった。

この短い攻防の間に、幾度も壊したそれを。

降り抜こうとしていた拳は微動だにせず、レトにとって最大の呪力を生み出す台詞を

吐いても、それは変わらなかつた。

「ボク、に、何を、した……!?!」

「何も。何もしていないわよ。強いて言うのなら、貴方が勝手に自滅した、と言うべきでしょうね」

はあ、と小さくため息を吐いたアイラは、あろうことか杖をしまい、気楽な様子でカ

ツカツと歩み寄る。

レトは青筋を立てたが、それでも指先一つ、まともに動かすことは叶わなかった。

一分の隙もなく、全身が縛り上げられている。

「貴方、想いを安売りしすぎたのよ。あるいは貴方にとって、それは大した想いではなくなつてしまった、ということかもしれないけれど」

「話が、見えないですね、何を言いたいんですか？」

「私の魔術が強くなつた訳ではない、ということよ」

つまり、レトが弱体化している。

出力の低下は、呪力の低下とイコールだ。

そして呪力が低下しているということは、即ち、レトの負の意味が、弱く小さなものになつているということの意味していた。

呪術とは、呪力を消費するものだ。

——そう、消費する。

そこに確かにあつたものを、貪り無くしてしまう。

それが良くない想いであつたとしても、大切な想いであつたとしても。

力にした時点でそれは、想いではなくなつてしまう。

言葉を、想いを、感情を、ただの力と変えてしまう。

故にこそ、呪いなのである。

「……そんな、馬鹿な。有り得ない！」

「有り得ないかどうかは、貴方自身が一番、分かっていることだと思うけれど」

バツサリと切つて捨てた言い方をするアイラに、レトは押し黙る他なかった。

あるいは、現状が何よりも雄弁に語っていたのだから、言葉を重ねる意味が無かつたとも言えるかもしれないが。

「気付かなかつた……いいえ、気付かない振りをし続けたのが、貴方の敗因ね。執着したかつたのなら、利用しなければ良かったのに」

「知つたような口を……！ キミのような異常者に——そうでなくとも、ボクの気持ち分かるものか！ 消費しなければ、無かつたことにしなければ、やっていけなかつた！」

「だからこそ、大切にすべきだったのでしよう？ 誰にも分からない、自分だけの気持ちだから。貴方は尚更、消費してはいけなかつたのよ」

アイラはただ真つ直ぐに、レトの瞳を見据える。諭すように、あるいは思い出させるように。アイラはゆつたりと言葉を紡ぐ。

「想いは消費するものではなくて、昇華するものなのだから。あるいは最後まで貫くか、かしらね」

「……簡単に言いますね」

「簡単なことなんだもの、当然でしょう?」

むしろ苦惱しているレトが不思議であるかのように、アイラは首を傾げながら言う。煽っている訳ではない。本当の本当に、アイラにはそれが容易いことであるのだ。

己の愛が届けばそれで良いと思っっている女。

見返りを必要としたことがない女。

一番でなくとも良いと思っっている女。

それがアイラ・ル・リル・ラ・ネフィリアムという女なのだから。

あるいは、そのように育ってしまった女なのだから。

そのことを理解したレトは、脱力と共に降参を示した。

「なるほど、勝てない訳です。キミの在り方は、歪んでいるように見えるくらい、真っ直ぐに貫いている」

「そうかしら……きつと、貴方も間違っってははいかないのよ。私と貴方、どちらが正しいという話ではなく、貴方がただ、その使い方を間違えただけ」

拳を交える前から変わらない強さを持つ声のまま、瞳のまま言ったアイラに、レトは目を見開いた。

アイラの在り方は確かに、常人のそれとはかけ離れているのかもしれないが、それで

も他人と相容れない訳ではない——相互理解が不可能な女という訳ではない。

相手の在り方を、基本的には理解はしているし、納得もしているのだ。

ただ、それに同調はしない。

それが、アイラ・ル・リル・ラ・ネフィリアムという少女なのである。

「どういう形であつたとしても、振り切れたなら、おめでどうと言わせてもらいましょ。次こそは、上手くいくと良いわね」

「……ふつ、そうですね。どうです？ やっぱりボクと、一曲踊ってくれたりしませんか？」

「お断りよ——それより、歯を食いしばりなさい」

「え？」

なんて？ と疑問符を浮かべたレトに、アイラは拳を引き絞り、魔力を集中させる。

さながら、先程までレトが振りかざしていた一撃必殺のように。

「いやつ、ちよ、ちよつと待ってくれませんか!? 勝負はついたでしょう!?! ボク、殴る蹴るとか必要ないと思うな——!!!」

「嫌よ、さつきから身体が痛くてイライラしてるんだから。やったらやり返されるのが

世の常よ?」

「ひ、ひえ——」

「Gloria ai coraggiosi
addio a uno sciocco」
「先行く者には栄光を 外れた愚者には餞を」

紡がれた詠唱が、影という形を得てアイラの拳に纏わりつく。直後、踏み鳴らされる音が鋭く響き渡った。

お手本のように腰を回転させ、体重を乗せた右ストレートが、丁寧にレトの顔面ど真ん中を捉えてぶち抜いた。

「消し飛べー！」

咆哮だけで発生させられる衝撃波が、校舎の外壁を剥ぎ取り、至近距離にいるあらゆるものを根こそぎ吹き飛ばす。

呪力の乗せられた言葉——呪言であるそれは、呪力によって言葉の通りの現象を呪い、捻じ曲げる。ただその声一つで、命を容易く奪ってしまうことが出来る兵器そのものだった。

対抗するように放たれていた魔法が、魔術がかき消される——これが九尾か、と立華は小さく舌打ちをした。

「凄まじいな……生半可な魔法魔術だと、傷の一つさえ負わせられない」

「温い、温すぎるぞお！ 威勢が良かったのは最初だけかア！」

何百メートルにもなるであろう巨軀でありながら、信じられないほどの速さで掌は振り落とされる。

全てが一撃必殺。防御は不可能であることは、既に九尾と戦っていたアルティス魔法魔術学園の教師陣が、自らの身体を以て証明していた。

生徒を守るために展開された防衛系の魔法魔術は容易く粉碎され、彼らは撃墜された——それでも、生徒に被害を出さなかつたのだから、もし攻撃のみに集中できていれば、多少の被害とは引き換えに九尾は既に沈黙していたかもしれない。

辛うじて回避した立華は、ひかりと日鞠の両名と背中を突き合わせる。

「ひーちゃん、もう大丈夫なのか？」

「うん、平気。休ませてくれたから、お荷物にはならないよ」

にこやかに日鞠はそう答えたが、その顔色から疲労が依然として重くのしかかっているであろうことは、誰が見ても容易に分かることではあった。

先程、日鞠が放った根源魔術は九尾に致命傷を与えることは出来なかつたものの、九尾の体力を大幅に削ったのは確かであった。

未だに九尾の全身には、光に灼かれた痕が残り、片眼は潰れている。

禍々しく揺れていた九本の尾は、その内三本が、力を失ったように垂れて引きずられていた。

「本当は休ませてあげたいけど、今は頑張ってもらおうしかないからね……前には私と立華ちゃんが出るから、日鞠ちゃんは援護を頼める？」

「お任せ、二人は日鞠が守るよ」

「あはは、頼りにしてるっ」

瞬間、呪力による光線が雨のように降り注いだ。本来であれば砲撃にも匹敵するそれらは一本一本が、面制圧を捨て、貫通力を引き上げるために収束された一撃。

基本的に防御が意味を成さないという事実が、九尾という大呪霊の格を表していた。

それらを三者三様に回避し、弾けるようにひかりと立華は飛び出した。

「砲撃魔法：拡大展開！」

『Magia del bombardamento: Distribuzione espansione』

「射撃魔法：重複展開！」

『Magia di tiro: Distribuzione duplicata』

互いが魔法を唱えたのは同時のことであった。

ひかりが展開した砲撃魔法と、立華が展開した射撃魔法——彼女らのそれは、既に教

師陣のそれを上回るほどの完成度を誇っている。

これまでの戦いによって、二人のレベルはそれほどまでに引き上げられていた。

相対するのが甘楽やナタリアであろうとも、ともに受けるのは悪手だと判断せざるを得ないほどの破壊力。

「汝、目を背ける勿れ。此れなるは神の瞬き。その輝きであれば」
g u a r d a q u e s t o l a m p e g g i o d i d i o g r a n d e b r i l l i a n t e z z a

刹那、九尾の眼前で光は弾けて輝いた。片方だけ残った目を真っ白に染め潰す閃光が世界を呑み、同時に二人の魔法は放たれた。

五つ開かれた、五重の砲撃魔法。

百以上展開された、全方位を直撃する射撃魔法。

それらは全て、身動きすら出来なかつた九尾へとクリーンヒットした。

「ハッ、ハハッ、ハハハハハハハッ！ 気持ちいいシャワーじゃねえか、何だ、ご機嫌取りか？」

——それでいて、なお九尾は健在。

彼女らの戦いに、未だ終わりの兆しは見えなかつた。

《left》ご神託チャット▼《left》

《left》

☆転生主人公 えっ？ これ無理じゃない？

◇名無しの神様 お前がそういうこと言うんじゃねーよッ！

◇名無しの神様 不安になる不安になる！

◇名無しの神様 ワイらしか言うのが許されないことを言うんじゃねえ！

◇名無しの神様 早い早い

◇名無しの神様 諦めるのが早いよオ！

◇名無しの神様 まあ実際、見てるワイらでさえ絶望マシマシだからな

◇名無しの神様 日鞠の一撃入った時はイケイケ押せ押せ雰囲気だったんだけどな

◇名無しの神様 そっから決定打が……入りません！

◇名無しの神様 何ならアレ以降ずっと無傷なの草

◇名無しの神様 草じゃないが……

◇名無しの神様 これが……大呪霊九尾！

◇名無しの神様 大呪霊も九尾も全然知らんから全員「何なんだよこいつ……」に

なってるの面白すぎ

◇名無しの神様 破滅より強いのもうダメだよ、バグだバグ！

◇名無しの神様 バグしかねえぞこのゲーム!?

◇名無しの神様 まさか2と接続したと思つたらこうなるとは思わんやん

◇名無しの神様 開発者が見てたら有り得んくらいキレそうな光景

◇イカした神様 こ、こうなつたのも日之守つてやつのせいなんすよ！

◇名無しの神様 シレッと責任擦り付けにいつたなこいつ……

◇名無しの神様 死んでくれ……

◇名無しの神様 まあ……何とかなるっしょ。何とかなるよね？

◇名無しの神様 ……

◇名無しの神様 ……

◇名無しの神様 日之守さんがいてくれれば……！

◇名無しの神様 まあボケナス、月ヶ瀬、日鞠に頑張つてもらうしかないだろ

◇名無しの神様 何とか……なるんですかね……

◇名無しの神様 さあ……？

◇名無しの神様 因みにこれボケナスが死んだらどうなんの？

◇イカした神様 失敗扱いになってこの世界終了

◇名無しの神様 つまり？

◇イカした神様 ワイらが見てるこの世界、丸ごと取り潰しってワケ

◇名無しの神様 まあシナリオ中に殺された場合の話だけだな

◇名無しの神様 シレッと世界の危機でワロタ

◇名無しの神様 ワロタじゃないが!?

《left》

《left》

【VS九尾戦】蒼天に咲く徒花 バグキャラ日之守甘楽 攻略RTA【開幕！】

《left》

ひまりアウェイキング

生まれながらにして主人公。

世界は自分が活躍する為に用意された舞台。

単なる思い込みや妄想ではなく、純然たる事実として、リオン・デイ・ライズという少年は、それをある日突然理解した。

予兆や前兆は全くなかった。とある日の朝、まるで稲妻にでも打たれたような衝撃と共に、リオンはそれを、脳を超えた魂レベルで理解した。

無論、唐突に気が狂った訳ではない。過剰なストレスによって激しい思い違いをしている訳でもなく、何らかの呪術、あるいは魔法魔術によって錯乱させられた訳でもない。

客観的な事実として、リオンはそれを知ったのである。

きつかけは何かと言われれば、間違いなく、この世界に二人の転生者が放り込まれたことだろう。

二人の転生者——とりわけ、その片割れは悉く原作を破壊しているが、そういった行為とは関係なく、ただ転生者が二人放り込まれ、世界が歪んでしまった。

その影響が、『蒼天に咲く徒花2（仮称）』の主人公である、リオンには諸に出てしまつたという話であつた。

つまり、どういふことなのかと言えば。

「ここはゲームの世界で、俺が主人公？ ハハッ、冗談だろ……」

リオンは正確に、別次元の視点——分かりやすく言えば、転生前の甘楽に近い視点で、その事実を理解・把握した。

そして同時にこれが、否定したくとも出来ない事実である、ということも。

物証はなくとも、脳に焼き刻まれたかのように主張する、この世界についての知識……あるいは、『蒼天に咲く徒花』という概念がそれを肯定していた。

それを頭ごなしに否定するほどリオンは愚かではなく、それを事実として受け入れる方に舵を切れる程度には、賢い少年だつた。

それが今から約三年前のこと。即ち、日之守甘楽という少年が、転生者として覚醒した日のことである。

原作知識くを持うたじないう転り生か者。

原作知識ひを持りつかないち転ら生ち者。

この二人に加え、この世界には『原作知識を持つ現地主人公』という存在すら生まれ
ていたという訳だ。

そりや世界も壊れるというものである——あるいは、彼こそが最も、世界が壊れた被害を分かりやすく受けた、最初の一人とも出来るだろうが。

ただ、少なくともリオンからしてみれば、これは被害と言うよりは、恩恵と言った方が近かったのは、確かなことであつた。

リオンはそれから、ひたすらに“理想の主人公像”を体現することに注力するようになった。

その“理想”は客観的なものであり、同時に主観的なものでもあつたと言ふべきだろう。

自身の思う主人公と、誰かが『リオン・デイ・ライズ』というキャラクターに求める主人公性を掛け合わせたものを理想と呼び、かくあるべしと積み上げてきた。何故ならリオンは主人公であるのだから。

ただの思い込みや妄想ではなく、純然たる事実としてそうなのだから、それに応えるべきだとリオンは考えた——と言うのは、装飾するにしても殊勝すぎるか。

リオン・デイ・ライズは特別な存在であり、それは主人公であるからこそである、リオンはそう理解したと言つた方が正しい。

「なにせ俺は、主人公だからな」

だから、そんな言葉がリオンの口癖になるのに、幾許もかからなかつた。

見ず知らずの後輩を助けた時も、謎の転入生とコンビを組むことになった時も、突然の決闘に応じることになった時も、大きな事件に巻き込まれた時も。

リオンはその言葉一つで全てを受け容れ、全てを解決に導いた。

当たり前だ、知っているのだから。備えてきたのだから。研鑽してきたのだから。先手を打ってきたのだから。

時を重ね、交友を重ね、事件を重ね、その度に称賛を浴びた。

実に主人公らしく、実に物語らしく、実に、作り物らしく。

誰もが偽物に見えた。何もかもが偽物に見えた。自分一人だけが、本物なのだ思った。

そう考えるようになった時、既にリオンの目には、世界は作り物に見えていた。

それでも折れることがなかったのは、狂ってしまうことがなかったのは、やはり彼が『主人公』であつたからに他ならない。

あるいは、『主人公であろうとした者』だから、とも言えるだろうが。

何にせよ、原作との乖離はなかった。これからも無いはずだった——あの日、一発の砲撃が校舎に降ってくるまでは。

「おいおい……マジかよ、何だ？ 何が起こってる!？」

幸い、破壊されたのは誰も使っていない旧校舎であつた為、怪我人の一人も出なかつ

たが、それはそれとしてリオンは驚いた。

いやもうマジでビックリしすぎてリオンは腰を抜かした。

彼はこの世界で唯一、『蒼天に咲く徒花2（仮称）』のシナリオを知っている人間である。

だからこそ全てを予定調和に導けた。

それが当たり前だった。

それが日常で、だからこそ嘘くさかった日常が、その一撃で滅茶苦茶に消し飛ばされた。

その日から、リオンの日常は非日常と化した——嬉しかった。

初めに胸に去来した感情は、喜びだった。

自分の知らないことが起こることを。

自身の知らない物語があることを。

この世界は作り物では無いことを教えてくれたようなそれに、リオンは心の底から感謝した。

けれども、次いで訪れたのは絶望だった。

知らないということは、主人公ではないということだ。

知らないということは、自分の物語ではないということだ。

この世界が作り物ではないということは、この世界はリオン・デイ・ライズの世界ではないということだ。

いつからか、リオンは主人公であることを嫌悪しながらも、主人公であること自体がアイデンティティとなっていた。

自身の存在価値を主人公であることとしていたりリオンにとって、日之守甘楽という存在そのものが、福音でありながら、凶報だった。

愛おしくも憎たらしい。

そこにいて欲しくもあれば、今すぐ消えて欲しくもある。

生きていて欲しいし、死んでほしい。

もつと物語を紡いで欲しい反面、その座を寄越せと叫びたくもなる。

だからリオンは、主人公が好きだった。

だからリオンは、日之守甘楽が大嫌いだった。

「——だから！ だからさあ！ お前が、甘楽が！ 俺の前で、主人公らしくするなよ

！」

「しっ、らねーよ！ 何の話してんだ！」

砲撃と砲撃がぶつかり合う。その間に数多の射撃が行われ、その全てが途中で道を阻まれる。

一度地に叩きつけてから、改めて再開したりオンとの戦闘は、一進一退の攻防に陥っていた。

互いのベストが同地点にある。故にこそ、中々勝負が決まらない。

アルティス魔法魔術学園の遙か上空を高速飛行しながら、それでも手を止めることはなかった。

「……このままでは埒が明かなくて、お前様よ」

「分かっている……けど、打開策がない。一応、さつきから全力だからね？」 俺

「分かるとる分かるとる。じゃがな、長期戦になればお前様の方が不利じゃということ、しっかり理解しておけよ」

魔王からの忠告に、僅かに顔を顰める。全く以てその通りだから、反論の一つもしようがない。

呪術騎士の戦闘は基本的に呪物を介したものであり、だからこそ、戦闘のコスパが良い。

自身の呪力のみならず、呪物に籠った呪力も使えるのだから当然である。

それに比べて俺は、魔力は全て自前だし、演算だつて多少は杖に任せられるように

なつたとは言え、ほとんど自身の脳みそでやっている。

このまま戦っていれば、先に限界が来るのはどちらなのかは目に見えていた。その前に、この状況を打破しなければならぬ。

「いざとなつたら、余も手を貸すからな」

「勘弁してくれよ……大丈夫。何とかするのが、俺の役目だから」

それに、全くの無策で誤りじゃない。リオンは初見の敵じゃない。

初対面時にも襲われていて、対破滅戦ではコンビを組んだ。

それならば当然、動きは読める、思考は読める。

俺の思考を先読みしているだろうリオンの思考くらい、更に読むことくらいは可能であるはずだ。

『R a g i o n e t r a s c e n d e n t a l e : v e r , d i l a n c i a 』

「ハ、ハハッ、呪術騎士相手に近接戦闘か!? 大きく出たな、甘楽ア!」

杖を槍状に魔導でコーティングすれば、リオンはビームサーベルを抜き放つ。

一瞬にも満たない睨み合いの末に、中央で互いの獲物はぶつかり合——わない。嘗めんよ。

それは先日見た。耐久性も記憶している。であれば、それをぶつた切れるくらいにまで瞬間的に出力を上げるくらい、造作もねえんだよ。

「おいおい、嘘だろ!？」

「お前、俺を嘗めすぎ」

リオンの驚愕を聞き流しながら、穂先をリオンの肩に叩き込んだ。装備している軽装にぶつかり合つて、火花を上げながらも叩き斬る。

超上空から大地へと、一直線に空間を断ち切るように、リオンを叩き落とした。

派手な衝撃と爆風。

『R a g i o n e t r a s c e n d e n t a l e : v e r . d e l b o m b a r d a m e n t o 』

それでも構うことはなかった。あの程度じゃ気絶すらしないことは分かっている。やるなら徹底的に。

開いた数十の、砲撃魔導の砲門が墜落したリオンをターゲットして撃ち放たれた。

それと並行するように、トップスピードで接近する。

「お、おお、おおあああああ! 嘗めてるのは、そっちだろ!？」

砲撃が大盾に防がれる。間を縫うように飛ぶ俺に、数多のビットからの光線が追い絶つてくる。

すべてを夢纏で受けていたら、こつちが先にガス欠を起こす。

されども、回避に時間をかけすぎていたら先手を取られる。

「だから、トップスピードで突っ込む！ 受け止めてみせろお！」

「ああ!! クツソ、馬鹿なんじゃねえのか!! 戦ってる時だけ威勢が良いのは、何なんだよ……ッ！」

渾身の一撃。上乘せさせられるだけの加速をした状態で、槍をただ突き出した。

数多の光線が身体の端を掠めるように貫いていく。だが致命傷じゃない。掠り傷の範疇。それなら、止まる理由にはなり得ない。

一枚、三枚、五枚、十枚。

道を阻む盾状のビットを斬り裂いて、リオンと再びぶつかり合った。

「あー、流石に出力足りないか……」

「随分力任せな戦いだな、らしくないんじゃないか？」

「でも、やりづらいだろ？」

返答は舌打ちだった。次いで鏑迫り合っていた槍が弾かれ、高速で放たれた刺突の群れが眼前を支配する。

や、やっべー。

やっぱり接近戦で呪術騎士に敵う道理はないわ。単純にスキルが、テクニクが違う。う。

まともに打ち合うことすら許さない、洗練された動きだ。付いて行ける訳が無い。

だから、土俵には乗らない。

『Ragione trascendentale: ver. di tiro』

槍状に押し固めていた部分をそのまま弾丸へと変化することで、射撃魔導の高速展開を可能とさせる。

リオンの刺突は、甘く見積もっても秒間十発は放たれている。おまけに呪力を残しているのか、刺突が衝撃となって向かってきていた。

けれども、コンマ数秒すらかからずに展開できたのは計八十四の魔法陣。

刺突の中で、目を見開いたりオンが見えた。

「悪いな、俺は打ち合いより撃ち合いが専門なんだ」

『Sparrare!』

刺突の群れを、射撃の群れが喰い破る。

ビームサーベルは鋭く弾かれ宙を舞い、身に着けた軽装は加速度的に剥がれ、ついにはリオンを嵐の如く巻き込む。

質と量。どちらも上回った自信があるそれは、過たずリオンの全身を穿った。

弾丸と弾丸がぶつかり合い、呪力と魔導がぶつかり合って、爆風が巻き起こる。

……これ、俺演算速度上がってるな。魔王の介入は感じないし、魔導が身体に……脳に馴染んできたか？

いつもより良く視えてきたし、今ならもつと速く戦えそうだな。

「だから、早く出て来いよ。見えてるって、無事なのは」

「ハハッ、厄介だなあ……本当に。主人公は伊達じゃないってか」

「お前の主人公定義、どうなってるの……？」

こんな如何にも踏み台ですみたくない面の、実際に踏み台だった甘^{おれ}楽に見出してるとんだよ。

初対面の時からそうだったが、俺に何らかの期待をし過ぎなんだよな……。

あんまり得意じゃないんだよ、期待されるのとか。

勘弁してほしい限りである。

「大体、今は主人公がどうか関係ないだろ……どういうスケールで物語ってるんだよ」

「そりゃあ、世界スケールでだろ？ この世界はお前の……いや、俺の為に……そうだよ、俺の、俺の為に！ 用意された舞台なんだからさあ！」

錯乱したかのような絶叫と共に、リオンは盾を地に叩きつけた。大盾は見慣れたビツトへと変わり、同時にリオンは右手を天高く掲げた。

その掌の中にあるのは、板……スマホ？ のようなもの。

え？ 何あれ？ 急にどうした？

「着・装！」

「おあ!? え!? 何!? 何なの!」

ピカーン! と推定スマホは眩い輝きを放ち、リオンとその周囲を明るく包み込んだ。

パツと見ふぎけた光景であるのだが、俺の本能が全力で「やばい」と叫んでいる。

反射的に、残っていた射撃魔導を発射して、その全てが弾かれる——リオンの振り払いによって。

その様相は、先程とはガラリと変わっていた。

まず制服姿ではない。ボロボロにした軽装もすっかり姿を消して、リオンの全身を包むのは純白の装甲だった。

かといって、中世の鎧のようなものではない。もつと機械的な——近未来的な。

言わばパワードスーツとも言えるような、あるいは小さなロボットとも言えるような。

ゴテゴテとはしておらず、スマートでありながらも強固さを感じる装甲。

その背には翼……のようなものが取り付けられている。呪力をそのまま推力としているのか、翼状に呪力が広がっている。

両手には、見たことのないライフルが二挺。

ガチャリと音を立てながら、頭部の装甲を被ったリオンが、鋭く俺を見た。

のかすら、一瞬分からなくなる。

大丈夫、生きてる、生きてる。死んでない。

ワンチャン、全身が消し飛んだかと思つたが、運良く胸に風穴が空くだけで済んだらしい。

不幸中の幸いだ。今ので決着がついてもおかしくはなかった。

これならまだ、数分くらいは生きていられる。

「おっと、悪いな。これの加減、難しくつてきあ……次は、一撃で消してやる」

「はっ、ラッキーパンチでそんなに喜ぶな、よー」

『R a g i o n e t r a s c e n d e n t a l e : v e r . d i t i r o 』

数十の射撃魔導が一斉に放たれる。ほぼゼロ距離、回避は不可能。三百六十度全方位から迫るそれを、リオンは防ぐことすらしなかった。

純白の装甲に、射撃魔導は弾かれていく。まるで雨粒みたいに軽々と。

えー……いや、そうか、ノーダメか……。

シヨックを受けるより先に、そのギミックを理解する。

これ、鎧に流してる呪力で射撃を一旦受け止めた後、片手に封じ込めてる破滅×2に演算させて魔導を無効化してるな……。

ズルくね……？ いや、それもリオンの武器の一つと言われてしまえば、それまで

あるのだが。

さつきと違って主導権を渡してる訳でもあるまいし。

ちよつと勝てないかもな、と思った。

弱気になった自分を、しかし叱咤できなかつた。

絶望したというか、冷静に勝ち目が見えない。

かつてないほどに俺の思考は回っていて、その上でまともにやり合える可能性が絶無である、俺の頭は至極冷静に判断していた。

「まさか、もう終わりじゃないだろ？　なあ、主人公かんら。それとも、やっぱりこの世界は、俺のものか？」

「……お前、さつきから、言ってること、滅茶苦茶だぞ……」

自分が主人公だつて言ったり、俺が主人公だつて言ったり、どつちなのかハッキリしろよ——いや、あるいは、どちらであつても欲しくないのかもしれないが。

リオンにとって主人公というのは、酷く大切な物でありながら、誰かに押し付けたいものであるのだろう。

まあ、元々リオンのものでも無ければ、俺のものでもないんだが……。

主人公は一人だけ。決まってる。

でも、あー、まずい。目が霞んできてる。明らかに失血しすぎてる。ダメージがデカ

すぎて、思考が散発になってきてる。

というか冷静に考えて、動ける怪我じゃない。流石に心臓からはズラしたけど、肺とか吹き飛んだろ。

今、呼吸出来てるか？ 分からない。

ちゃんと立ち上がれてるか？ 分からない。

まだ戦えるか？ 分からない……いや、無——

「……!!?」

『Raggione trascendentale: ver. del bombardamento』

反射的に砲撃魔導を撃ち放っていた。標的はリオン——ではない。その先に見えた、巨大な獣の掌。

鋭く振るわれたそれを押し留めるように砲撃は空を駆け、そのままリオンをスルーして地を蹴った。

空へと飛び出る。空を蹴る。

砲撃魔導が減衰するのと同じ、叩き潰されそうだった日鞠を抱きかかえた。

反転、跳躍、飛翔。

紙一重で九尾の一撃を躲し、一息吐いた。ついでにせり上がってきた血が意志に反し

て零れ落ちる。

「……………へい、きか？　日鞠……………怪我は、ない？」

満身創痍を超えて、死に体の甘楽に抱えられた日鞠は、すぐさまポジションを逆転させ、甘楽を抱き抱えた形で距離を取った。

やった。やらかした。やってしまった！

九尾に押されるあまり、日鞠たちは甘楽とリオンの戦闘領域にまで押し込まれていた。

これほどまでの怪我を負ってなお、自身を守るために動いた甘楽は、ギリギリ意識があるかないかといった様子。

呼吸は浅く、胸に空いた穴からはとめどなく血が零れている。

このままでは、甘楽は死ぬだろう。間違いない、それほどの時間も必要とせずに。

「かんかん!!　しっかりして、ねえ、甘楽！」

即座に回復魔法を発動させるものの、あまりの傷の深さにほとんど意味を成さない。

この場で最も回復に長けているのは立華だ。

そう判断するより早く立華を見つけ、日鞠は甘楽を押し付けるように預けた。

「治療！ 早く！」

「——っ、了解！」

正確に言えば、立華は回復を得意としている訳ではない。

立華や甘楽を含め、誰もがまだ気づいてはいないことではあるが、立華がその身に宿した勇者の力……『悪性への特攻』の本質が、ここに作用していた。

悪性への特攻、その本質——即ちそれは、使用者が悪だと断じたものへの特攻。

それは概念にも、事象にも作用する、この世界における最大最強の力。

立華がそれを悪だと断じれば、それは悪となる。

悪に対する特攻とは、それに行うムーブによって決まる。

立華がその傷を悪だと断じれば、それに行われる立華の回復は、桁違いの効果を発揮する。

この世界であろうとも、有り得ない速度で傷が塞がれていく。それを一瞥した日鞠は、小さく息を吐きながら、ひかりと共に杖を構え直した。

「へえ……九尾だけでも手こずってたつてのに、俺も含めて相手してくれるのかい？」

「そりゃ嬉しいが……力不足だと思っぜ」

「小僧、邪魔だア！ この小娘らは、俺様の獲物だぞオ！」

「そう言うなって、共同戦線つてのも悪くはないだろう?」

じつとりと、嫌な汗が流れ落ちる。並んだ一人と一匹に、濃厚な死の気配を日鞠は感じていた。

勝てない。そのことが、ただの事実として分かる。

——恐ろしい。

本能のままに一步引きそうになった日鞠の肩を、誰かがポンと叩いて前に出た。

「良いな、それ。どつちもまとめて叩き潰せて、都合が良い」

甘楽だった。傷口はまだ塞がり切っていない。あちこちの傷はそのまま、胸からはとめどなく血が滴っていた。

だというのに、その声は力強く。

霞み切っていた瞳は、今や強い輝きを取り戻していた。

「……何だよ、何でまだ、立ち上がるんだよ。何で立ち上がれるんだ! お前は、俺には勝てない! 分かるだろう!」

「勝てる勝てないの戦いじゃないだろ、勝つ。その為の戦いだ」

「——そういうところが! 癪に障るんだ! いい加減、黙って死ねよ!」

放たれた攻撃を、甘楽は紙一重で躲し、防ぎ、弾き返す。

先程まで、全くと言って良いほど反応できていなかったリオンの速度に、甘楽は既に

追いついていた。

火事場の馬鹿力とでも言うべきなのか、彼の演算速度は追い詰められれば追い詰められるほどに加速する。

目で追えずとも、半ば未来予測をしているかの如く、リオンの遠近交えた攻撃をほとんど完璧に捌いていた。

一対一のままであれば、あるいは勝機はあったかもしれない。

けれども敵は今、明確にもう一ついた。

「落ちろ」

軽やかに空を舞う甘楽が、不意に重力を思い出す。ガクンと不自然に落ちながら、それでもリオンの一撃を辛うじて回避していた。

危うい戦況でありながらも、決して堕ちることはない。

こちらに流れ弾一つも寄越せないその背中にはまるで、「後は全部任せて」と言っているようだった。

気が抜けそうになる、全てを任せそうになる——そう思ってしまう自分が、日鞠は心底許せなかった。

違う、こんなのは間違っている。

自分がいるべきなのは、甘楽の後ろじゃない。

「自分がいるべきなのは、甘楽の隣であるべきだ。

一方的に、守られる対象であってはいけない。

互いに守り合えるようにならないといけない。

退くな。

任せるな。

託すな。

甘えるな。

背負え。

前を向け。

戦え！

今、彼の隣に立たずに、いつ立てる!?

一人の少女は、静かに一步踏み出した。

臆することはない。

怯えることはない。

ただ、自身の信念の為に。自身の理想の為に。

葛籠織日鞠という少女は、憧れた彼の隣に、ようやく並び立つ。

「甘楽の隣は日鞠のもの。ね、そうでしょ〜?」

「や、今は下がってて——うおっ」

「そうだって、言って欲しいな」

「……ああ、そうだよ。あの時言った言葉に、嘘はない。俺の隣に並んでくれるのは、日鞠だ」

言葉には力が宿る。

大きな言葉には、相応の力が秘められている。

その力はきつと、全てを照らす光にも、全てを覆う暗闇になり得るものだ。

人が、環境が、想いが、それを決定するのだろう。

であれば。

だとするのならば。

その一言はきつと、日鞠にとってはかけがえない輝きで。

背中をそつと押してくれる、優しい力なのだった。

世界が待ちわびていた瞬間が来る。

星々が待ち続けていた瞬間が来る。

極光が心待ちにしてた瞬間が来る。

物語が一つ、道を踏み外す音がした。

運命が、切り替わる音がした。

光の果てへと、少女は一步踏み込んだ。

「アクセス接続——セレスティア・アグライア極光満ちる星天の姫」

日鞠の全身が、輝きに彩られていく。極光による衣服が、星々による宝飾が仕立てられていく。

純白のドレスに、淡い光のベール。

彼女に手向けられた光は、世界を塗り潰した。

かんらフラート

その光を、その輝きを、九尾は——九尾だけは知っていた。

優に数千年という時を生きてきた、歴史上最も強力とされた大呪霊九尾のみが、それをその目で見たことがあった。

故にこそ、誰よりも早く九尾は諦めた。

何をと言えば、生存することを。

「あの小娘が接続者だったとはなア。チツ、一目で分からねエとは、俺様も落ちたもんだ……いや、あるいは今、覚醒したか？」

浄化の輝き。

裁きの光。

呼び方はどうあれ、それはありとあらゆるものを滅却する光だった。

かつて——昔々の大昔。まだ、呪霊がこの国を超え、世界中に溢れかえっていた時代。人と魔と呪が三つ巴の関係を維持していた頃。

当時の呪霊の王を含め、大半の呪霊がこの光によって跡形も無く滅却された。

無論、呪術ではないのだから、転身するはずであった。

時間はかかろうとも、必ずその肉体は再構築されるはずであったにも拘らず、その光によつて消された呪霊は二度と再生することはなかったのである——そも、魔導とはそういうものなのだから、それも当然ではあるのだが。

この世界に在りながら、この世界の外にある法則。

理外の理、そのもの。

それが魔導と呼ばれる業であり、世界に敷かれ法則ケルを全て無視して消し去ることが出来る、埒外の理。

完成された魔導は、どのような設定、法則、規則であろうとも粉々に打ち砕く。

第四の破滅と融合した九尾を討伐した甘楽の一撃によつて、それでも九尾が完全に生命活動を停止しなかったのは、甘楽の練度不足と破滅というイレギュラーが混ざっていたが故であり、本来正しく魔導が運用されていれば、あの時点で九尾はこの世から消えて去っていた。

そのことが分かっていたからこそ、九尾は甘楽と戦うことを避けた。道を阻むことは可能であったが、先に行きたがる甘楽を素通りさせた。

九尾は、魔導の真の恐ろしさを誰よりも知っていたが故に——あるいは、そこで安堵してしまつたから、葛籠織日鞠という天才を……接続者を、見落としてしまつたのかも

しれないが。

「つたく、まさかこの時代、このタイミングに居合わせるとはな。俺様もつくづく運がねエ……あの特異点に引き寄せられた可能性も、無くはねえだろうがなア」

いつの世も、力ある者の下に、力は集まるものだ。

九尾自身が、かつてはそうであつたように。九尾自身が、その目で見てきた歴史が証明する通りに。

接続者——極々稀に、この世界に産み落とされる、星の愛し子。極光に望まれ、才能に祝福された、選ばれし者。

魔導に接続することを世界に許された、星の最高傑作にして、最大戦力。

その恩寵は、過去から未来へ受け継がれるものではなく、虹のように時折現れ、はかなく消えるもの。

ただ、特異点——日之守甘楽とかいう、自力で魔導に辿り着き、許しも資格もなく、力づくで魔導を引きずり出している、蛮族とかいうか、ただの異常者がいるのだから、接続者もいておかしくはないか、と九尾は領いた。

それに、この光に消されるのであれば、かつてただ逃げた身としては、来るべき時が来たという気持ちにもなる。

「ただ、それはそれとして、黙ってやられるのは面白くねえよなア……!？」

眼前の極光は、確かに九尾の記憶を想起させる輝きを誇つてはいたが、同時にあの時ほどの練度は無いということも、九尾には理解出来ていた——その上で、死は避けられないことも悟りはしたのだが。

初覚醒であるが故に、長時間は保たない。もって数分が良いところだろう。

であれば、抵抗できなくはない、爪痕を残すことは可能だ。

事象を捻じ曲げるということは、九尾にとつても十八番であるのだから。

ガパリと、九尾は顎を開く。その先で渦巻いた呪力が、高密度に圧縮されて解き放たれた。

昏い色の呪力が、浄化の白と激しくせめぎ合い、爆散する。

「あは、キツネコンコン九尾さん、頑張るね」

「小娘——凶に、乗るなア！」

大呪霊たる九尾の呪力はほぼ無尽蔵と言つても過言ではない。それらを湯水の如く消費した数多の光線を、日鞠は腕一つで振り払う。

編み上げられた光のドレスの前では呪力は霞み、払われた波動だけで九尾は苦悶に奥歯を噛みしめた。

「ぶっ飛べ！」

「それ、日鞠やだ」

放たれた呪言が、現実を改竄する前に、振るわれた光とぶつかり合って霧散する。

散った呪力の欠片を丁寧^に消し去りながら、剣の形に整えられた極光は、鋭く九尾の尾を斬り落とした。

傷口から止めようがないほどの呪力が溢れて落ちる。

「んゝ、何だかとてもいい調子ゝ。今の日鞠、無敵かもゝ？」

「——ッ！ おおおおおオオ!!」

余波だけで小規模な町なら消し飛ぶ咆哮。衝撃波だけで山にさえ罅を入れる掌は、やはり届かない。

そも、日鞠が手繰る光をかくぐつたとしても、九尾の攻撃は一つも日鞠の肌を掠めすらしなかつた。

セレスティア・アグライア
極光満ちる星天の姫。

それは、先天性魔術属性《天光》を元に、理外へと接続した者にのみ与えられる専用魔導。

莫大な魔力と体力の消耗を引き換えに、星々に演算を代行させ、事象を上書く光を纏い手繰る、完成された業。

展開時間が極端に短い代わりに、圧倒的な殲滅力を備えた対終末魔導。

たかだか大呪霊一匹、相手になる訳がなかつた——それがたとえ、数千年生きた九尾

であろうとも。

「早く終わらせちゃおつかう、キツネさん〜！」

「やってみせろ、小娘エ！」

絶叫した九尾と向かい合う日鞠の瞳は爛々と輝いている。

臆することはなく、怯えることはなく、ただ九尾を見据える彼女は、まるで英雄のようだった。

制限時間付きの絶殺の光と、数千年重ねられてきた呪い。

その決着が、もうすぐつこうとしていた。

「えっ、ちよっ、あれ魔導、え、ええ……？」

ちやんと死にかけてたり治つたり、気合入れて前に出たりしていたら、いきなり覚醒した日鞠が九尾をボコボコにし始めていた。

どうするんだよアレ、一周回って九尾の方が可哀想になつてきちゃったんだけど？

もう満身創痍じゃん。さっきまでの俺かよ——なんてことを考えていれば、鋭い殺意が一つ、真つ直ぐと向けられる。

ヴヴン、と光の剣が軽く鳴いた。

「いい加減、俺たちも終わらせるとしよう——なあ、甘楽」

「……そうだな。リオンのその滅茶苦茶な情緒も、一回キツチリ落としどころ付けてやった方が、良さそうだし」

「随分と上からだな。それともなんだ、俺を救うとでも言いたいのか?」

「は? そんな殊勝なこと考えたことねーよ……ただ、そろそろ俺も、八つ当たりされてばっかで、イラついてきたんだっつーの!」

互いの砲撃が、ど真ん中でぶつかり合った。火力は互角——否、リオンの方が少しだけ上回っている。

無論、それは火力だけではない。基本的に全てのスペックが、今のリオンは俺より上だった。

「ぜああああああ!」

「ぐつ、う、それ、マジでただのチートだろ……!?」

「ハハッ、主人公にはピツタリだと、そうは思わないか!」

残像すら残す速度でリオンは空を翔ける。正直なことを言ってしまうえば、最早まともに目で追うことは不可能だった。

だから、予測する。

これまでのリオンの動きや思考を元に、これから取り得るであろう全てのアクションを計算し、最も高い可能性に全賭けして対処する。

言うまでもなく、リスクだ。ミスればサクツと死ぬかもしれない。

だけどもあ、いけるっしょ。

気楽にもそう思ってしまう、根拠のない自信が俺の内には溢れていた。

それを投げやりになっているのかどうかは、ぶっちゃけ俺にも分からない。

分からない——けれども。

「視えるんだから、しようがないよな」

「何を、ごちゃごちゃと!」

真上から響く絶叫。流星の如く加速するリオン。その姿が、瞬時に試行したシミュレーションと重なった。

見るより早く、身体を捻る。前提に置いた思考と結論にただ従う。

信じる、自分の計算を。予測を、可能性を。

大丈夫、問題ない——

「——ほら、全部計算通りだ」

「は、あ……?」

鋭く放たれた数十の刺突を紙一重で躲し、数瞬の間隙を縫うようにリオンの頭に杖を

当てた。

コツン、と間の抜けた音がする。

頭部装甲の、ガラスのようになっていた部分から透けて見える、リオンの瞳が見開かれた。

「俺、ゴリ押し以外の戦い方、初めてしてるかもしれないな……」

『Ragione trascendentale: ver. di tiro』

超圧縮された砲撃魔導が、杖を通した射撃へと変換される。

展開から放出まで、コンマ一秒すら必要としないそれは、過たずリオンの顔面へと撃ち放たれた。

頭部の装甲が罅割れ、砕ける音が響く。

パラパラと破片が舞う中、頭から血を流すリオンが、苛立たし気に舌打ちをした。

「俺の動きを先読みしてるのか……？ハハッ、冗談は止せよ。俺は、俺が！今ここで、お前を倒さないとダメなんだ！そうじゃないと、俺は、俺は！」

「主人公にはなれないってか？」

「違う！主人公はたった一人で、きつとそれは、甘楽のもので！それは認めるべきこと———だけど！」

持ち替えたライフルの引鉄が引かれる。圧倒的速度のそれを、半歩ズレることで回避

した。同時に砲撃速度を更新し、再度演算を走らせる。

瞬間的に再現した未来予測をなぞるように、リオンは空を蹴った。

「だけど、それなら俺はどうすれば良い!? どうすれば良かった!? 俺は——俺は一体、何者だってんだよ!? 誰になら、俺はなれた!?」

「はあ? お前はお前だろ、リオン!」

「違う——違う! 俺はリオン・デイ・ライズじゃない! もう違う、もつと不純な混ざりものなんだ! ああ、クソ、クソツ、こんなことなら、知りたくはなかった!!」

感情のままにリオンは叫んでいるようだった。そのほとんどが俺には理解できなくて、それでもその全てが、リオン・デイ・ライズという男の内実を、そのまま表しているようだった。

整理なんてちつともされていない、ごちゃ混ぜのままの感情。複雑に絡み合って歪んでしまっている思考。

表面上は取り繕えているだけに、一枚剥がせばおどろおどろしい程に奇怪になったりオンの心の発露。

「なあ、俺の非日常! 俺の物語せかいを壊した主人公! 教えてくれよ、俺は、俺は誰だ!? 俺はお前の世界の、何て名前の、どういう役割のキャラクターだ!?!」

「——つ、お前は、俺にその辺の脇役だって言われたら、納得するのかよ!?!」

「する訳ねー！ー！ーだろ!!」

じゃあ聞くなよ! と絶叫に絶叫を返しながら、魔力と呪力が互いに散って宙を舞う。

時間を追うごとに情報量と質を更新し、それでも時折計算から漏れる攻撃に奥歯を噛みしめた。

盾とは違う、攻撃用のビットが十門、リオンの背後で動きを止めて、俺を捉える。

「それともまだ、俺が主人公なのか!? それならこの世界は、物語は何なんだ!? 俺は知らない——知らないってことは、そうじゃないってことだろう!」

「何言ってるんだお前……! だいたい、俺もリオンも、それぞれ自分の人生の主人公だろうが!」

「そんなおためごかしを聞きたい訳じゃねえ!」

瞬間、リオンの両翼は鋭く開かれた。呪力が爆発的に膨れ上がり、直後にその全てを以て、一斉射撃は行われた。

両手のライフル二挺。展開された十のビット。計十二の射撃を、躲しきれない。

読み切れなかった分を槍状にコーティングした杖で弾き、その上で逃した一撃が、肩を鋭く貫いた。

「つづううう!」

「俺は、俺は、俺は——！」

両翼を担う呪力の出力を引き上げ、リオンが超加速した。音すら超えるそれは、計算を数瞬超える。

視界が閃く衝撃と共に、腹には銃口が宛がわれた。トリガーを引く音が、嫌に耳朵を打つ——まるで、スローモーションのようだった。

決着がつく、その瞬間であることを本能的に理解する。

あ、これ死ぬわ。流石にこれ以上の大ダメージは耐えられん。と理性的な部分が断言していた——いや待て。

俺が死ぬ時って刺される時じゃないの？ や、確かにミラに刺されはしたが、結局生き残ったし……。

未玖の予知は百発百中、絶対だ。外れることはない。

俺は女性に刺されて死ぬ。であれば、ここで死ぬことはないんじゃないか？

まさかここでリオンが、脈絡もなくTSする訳でもあるまいし……。

それなら俺がここで死んじやダメだよな？

予知を覆すとは言ったが、こんな形で覆すことは想定していない。

というか絶対に嫌だ！ 俺は抗うぞ!?

道理なんて蹴っ飛ばせ！ 無理だけ押し通して我儘を爆発させろ——そもそもさあ

!

「どうせ死ぬなら、美女に殺されたいに決まってるだろ!!?」

『R a g i : : : o n e t r a s : : : c e n d e n t a l e : v : : : e r . : : : A l t e : : : r a z i o n : : : e d : : : e l l a r e : : : a l t .』

信じられないくらい火花を散らしながら、ノイズ混じりに杖が音を奏でる。

直後。一瞬と一瞬の、隙間のような時間。蒼い光がパツと閃いた。

同時にトリガーの、カチンと無機質な音が響いた。けれども、ただそれだけだった。

銃声はせず、あれほど高められていた呪力は、綺麗さっぱり霧散していた。

「……………?? ン? え? 何!? 何をした!?!」

「え??、わ、わからん……………」

「は???!」

「ご!!?ごめんで……………そう叫ぶなよ。本当に分かんないんだってば」

「くつ、クソツ、俺は本気で殺す気で——あああああ! 畜生、そういうところも嫌なんだ! いつもいつも、想定外ばかりで、自分が中心に回ってるような主人公が——甘樂が! 本当に!」

「もうそれはただの悪口なんだけど!?!」

完全に特定個人に対する罵倒だった。俺が何したってんだよ——いや、何かやつ

ちやつたつばいんだけど。

何かというか、まあ……多分、日鞠と同じ類の魔導になるのだろうが。

じっくり見て分かったが、日鞠の手繰るあの魔導——極光満ちる^{セレスティア・アグラリア}星天の姫の本質は「事象の上書き」である。

もつと正確に言うのであれば、「消滅」だったり「破壊」といった類の方向性で、事象を上書く魔導。

そこに如何な盾が有ろうとも、如何な剣が有ろうとも、「消し飛ばした」「破壊した」という事象だけを残して通り過ぎる、絶対権能。

だから、真似は出来ると思っただよな。

土壇場だったから意識していたのかすら、自分では曖昧であるのだが、現実がこうなっているのだから、意識していたし上手くいったのだろう。

まあ、何だ。

つまるところ——

「——事象の拒絶、か？ 敢えて言うなら」

「……それは反則だろ!? 普通に！」

「うるさいぞ！ リオンのそれだって反則みたいなもんだろ！ 何なんだよその鎧はよ

！」

「これは、れつきとした俺の、装備だつっーのお！」

「ズルいんだよおー！ツ！俺もそういうの欲しい！」

再形成した魔導の槍と、光の剣がぶつかり合う。その度に魔力と呪力が散つて、俺たちの周りを鮮やかに彩っていた。

リオンの動きに、最初ほどのキレはなかった。

頭に一発叩き込んだのが相当キタらしい。今もダラダラと血を垂れ流していて、息切れが酷い。

まあ、それは俺もなのだが。

見栄を張って全快してもらわなかったせいで、胸の傷はもうがつつり開いていたし、これも拒絶出来ないものかと思つたが、どうも上手いかなかった。

多分、さっきのが奇跡の一回だった。あとは何度も検証してものにするしかない。

ついでに言えば杖がもう壊れそう。

刻一刻と、自分の身体が死に近づいているのが分かる——けれども、それを上回る興奮が、全身を支配していた。

何度目かの拮抗。

互いの獲物が火花を散らし、至近距離で目が合う。

「何だつてんだよ……本当に！俺は、甘樂は、俺たちは！主人公なはずだろう!!」

かすれた声で、それでも絶叫だった。

泣きそうな瞳で、それでも怒っていた。

あるいはそれは、俺に手を引いてもらおうとする、迷子の少年のようにも見えた。だから。

だから、俺は。

俺が、取るべき選択は。

「うっさいなあ……!! だいたい！ さつきから言ってるそれ、解釈違いなんだよ!!」

「かつ、解釈違い!! 何のだよ!!」

槍と剣が弾き合って。

間を埋めるように射撃が飛び交って。

叩きのめすように砲撃がぶつかって。

それでも互いに止まらない、超高速ドッグファイトの中で、俺たちは叫び合う。

「俺が主人公だとか！ リオンが主人公だとか！ 嘗めたこと言ってるじゃねえぞ!!」

「嘗めたこと!! 違う！ 実際に——」

「違うない!!」

槍をハンマー状に変形させ、動揺したりオンの腹を鋭く殴り上げる。

硬質な音がして、鎧の破片が散った。

最後のチャンスだ。逃さない、手は止めない、思考は回し続ける。

「だから、教えてやる！ 蒼天こにの咲く世徒花界の、主人公様はあ——!!!」

今、振り絞れる最大限の魔力を叩きこむ。

脳みそを使い潰す感覚を味わいながら、魔導の演算処理をする。

杖がみるみるうちに砕け落ちていく。

「立華君に決まってるんだろおおお?!」

『R a g i o n e t r a s c e n d e n t a l e : v e r . d e l b o m b a r d a m e n t o — d u p l i c a z i o n e 』

重複展開した砲撃魔導を一つに重ね、収束して撃ち放つ。

俺の絶叫すらかき消す咆哮を響かせながら、蒼の閃光はリオンの全身を呑み込んだ。

自壊していた杖が粉微塵になり、数十秒続いたそれが消えた時、地面に転がるのは装

甲のほとんどを失い、浅く息をするりオンだった。

呪力はほとんど感じない——というより、死なない為に全てを使い果たしたようだった。

その横に、フラフラッと着地する。

「………最後」

「？」

「最後、聞き取れなかった……けど、良い。やつぱり、主人公は、甘楽だ」
「違う。何で分からない、リオン」

両膝ついて、リオンの額に指を当てた。

リオンの珍しい、琥珀色の瞳を覗き込むようにしながら、息を吐いた。

「何者なのか。誰なのか。誰になら、なれたのか。簡潔な答えが、一つあるだろ」
「簡潔な、答え……？」

「リオンは俺の、相棒だろ。何だよ、今更不満だつてのか？」

「——ハハッ、おいおい、まさか、本気でそんなこと言ってるのかよ？」

リオンが乱れた呼吸のまま、ゆるりと動かした手で、目元を隠す。

ほんの数秒の後に、「そうか」とリオンが言葉を零した。

「なるほど、確かに、反論の余地がない。ハハッ、相棒。相棒ね……悪くない。いいや、最高だ。そっか、俺は、甘楽の相棒の、リオン・デイ・ライズか」

「元より、リオンが言い出したことなだけども……リオンには、俺に並んでもらわな
きやならないんだよ」

「光栄だな、本当に……」

憑き物が落ちたように、リオンが笑う。

その姿にほっと息を吐いて。

安堵すると同時に気を抜いて。

スツと音もなく、刃が胸を貫いた。

「あ？ あー……」

リオンでもなければ、魔王でもない。

むしろリオンが目を真ん丸に見開いていて、魔王は影から飛び出すと同時に、信じられないものを見たように動きを止めた。

多分、俺だけだった。

俺だけが、彼女の真意を言葉を要せず理解した。

だから、一言だけ口にした。

口に来たのが、一言だけだった。

「ごめんな、日鞠」

衝動的なものだったのか、混乱の色に瞳を染めた日鞠にそう言って。

意識は滑るよう落ちた。

どうして、こうなってしまったのだろうか。

何故、こんなことをしてしまったのだろうか。

彼を貫いていた剣は光の剣。事象を上書く魔導の剣。

死ぬ、だろう。

殺してしまったことに、なるだろう。

後悔をしているかと言われれば、していない訳がなかった。

けれども、一抹の快感があったのも、また事実だった。

九尾を撃滅し、ふと目で甘楽を探した。

戦闘が終わったのを察して、駆け寄った。

二人の会話が風に乗って耳朶を打った。

——裏切りだと、そう思った。

だって、隣に並ぶのは日鞠以外に有り得ないと、そう言っただけなのに。

今こうして、やっと、これだけの力を手に入れたのに。

どうして、敵の手を取るのだと。

そう思った時にはもう、身体は動いていた。

瞬間的に、本能が理性を上回った。

抑えられなかった……抑えなかった。

「甘楽の隣は、日鞠のだって、言ったのに……」

掠れた声が届くべき相手は、もういない。